

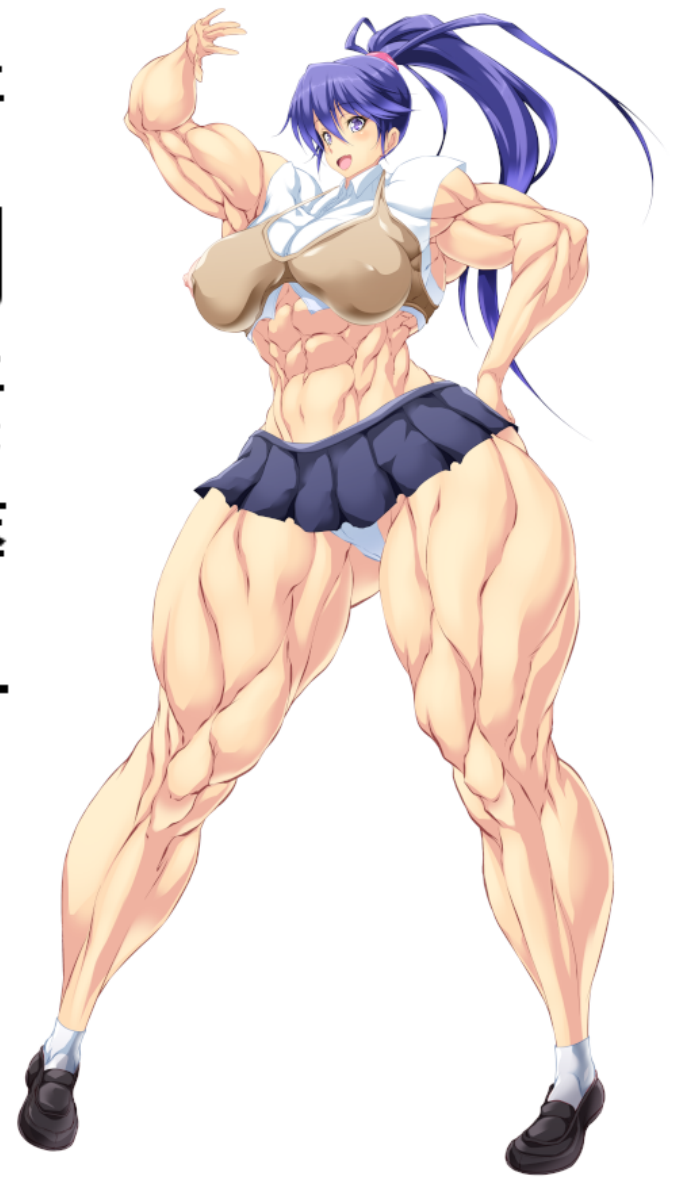
ハートサバイバー



常世汐見



青桐素磨子



23世紀の今でも変わらず、伝統的にえっちなびたりとした水着は下着と全く変わらな
いと思う。いや違う。下着よりもぴったりかんかん！な感じで、ファンタジックなくらい
にえろちつくだと思う。特に汐見の競泳は見てるだけでも良い。一緒に泳ぐのもいいけど、
水でびたりとしても着たてでさらさらでも、どっちもすぐくえろくてかわいい。綺麗で、
筋肉が見て強くて泳いで強くてどうあっても最強なかわいさで、最強！汐見。そして私自
身も！競泳水着はかつこいいから、なお良し！それにぴたりとボディのマッシュラインが、
わたしと汐見の性的魅力を特に汐見の見て分かる魅力を、それ以外もいっぱい、えっちな
魅力をもっと！学術的にはきつと、性的魅力を増加する！。とかく放課後部活の後まで、
我慢。お昼休みにいま、閑話休題。私の身長は194センチ、体重は133キログラム。
体脂肪率はいささか女性らしい、と、肩胸お尻は丸い筈。でも目の前の女には聞けやしな
い。お昼休みに数学を覚える彼女は成績トップも領ける。古い感じの大きな眼鏡を掛けて、
厚みのないシャギー・ボブを差している。首筋までなぞらう黒い影みたい、水泳部なのに
水気の薄い髪：風が吹いてもさらつと静止する。中庭の生徒が慌ててお弁当を抑えて、私
も最後の焼き鳥を食べた。硬い肉を歯と歯の間で砕くと粉っぽい白身の舌触り、だけど塩・
塩・胡椒でお味はよろしい。それにお肉は、これもそうだったけれど焼き過ぎ位が歯に美
味しい。私の手作りだけはある。笑う、と彼女がノートの砂を払って静かに面を上げてい
る。眼鏡と髪の毛が全くぶれずに不自然な眼差しで突いてくる。

「重箱弁当は時代遅れだと思おうわ」

なにこいつケンカ売ってきてる。しかも小声で（周囲には聞こえないほどに！）なおか
つはつきりと私は解った。冬の小川が凍ったまま流れるような、まるで透明な彼女の疑問
符ね。幼馴染がこれとは恐れ入る。天然よ。コイツは天然物よね、御弁当は最先端だけど。
だから食べるのも終わって勉強していた。

「錠剤だけのあんたに言われたくないわね」、と彼女の体を眺めれば細い。私と身長はそん
なに変わらない（今年189センチになったはず）のに、体重は一一〇キロしかないもの。
こいつは。確かに水泳部だから、軽めの体が合うのかも。まるでプレシオサウルスな筋力
がついた撫で肩の流線形ボディ：じゃあ私はレックス？御免こうむる。トリケラトプス辺
りが可愛くってあの背中に横乗りしてみたい。考えが逸れた。腕を取って揉む。親指へと
神経を集中させつつ私は彼女の手首まで、肘から船底にも似たラインが浮かんで良く押さ
れて、弾んで押し返す。柔らかい。特に手首の下がね、いっとう重くて柔らかい。じゃあ、
なんだと言っても大事にしてるのね。「ちよつと固めて」「はあ。」力が入っ、て、私の親指
ちよつと痛い。望み通り（？）に解放してあげた。しかし彼女はつまらない顔をする。

「ペンシルが折れたわ」：今なんて？直ぐ私は彼女の、あの手に気付く。勉強道具がぼた
ぼた垂れている。

「ちよつインク、インクが染みになるわよ」

慌てて私はハンカチを被せる。一枚。ティッシュにしとけば良かった、だが黒く滲んでから後悔をしている。百円かそこで買ったけど、元は水色の、地味な布だった。

「力を入れるなんて言うから」

…そよ風みたいね。(じゃあペン位放せばいいでしょう。) 黙って私は手と手を拭いた。ハンカチは真っ黒になっていた。

「数学だっけ」。

「どう見ても物理よ」

生物科のみの文系に言われても困る。算数にだって記号や図形はあったし…あ、

「それって、力がつい入ったというギャグ？」

「あなたは馬鹿なの？」

「違う！」電卓かこの女！いや、しかも全くもって、不正確極まりないものよ！「そんなわけ無いじゃない」「ええっ」、変なタイミングが出た。少しばかり落ち着いてから言った。

「でも、他に話があるんでしょう？」

「でもただけでも必要無い。あなたが食べ終わるのを待っていたのよ」

「でも勉強できたでしょ！ええ！何度でも言っただけあげるわよでもでもっ！」

「苛々しているわね、貴女。アナログに牛乳でも飲みなさい。」

「この…そんならそっちはサブリね」

「もう23世紀なのよ？自然食ブームなんて百年、二百年だわ」

「マニアは、居るでしょ。きっとその頃からよ」

「興味があるのなら歴史を調べればいいのに」

「あんだとの会話は予想すら立てられないワケ！」

「ふむ、マニアが犯罪を起こしやすいのね。という具合に？現実から予測したけど」

「この…！」、自分の首を振る。頭をぶんぶんと左右に揺さぶる。ポニーテイルがほっぺとまつ毛を叩いて、ちかちかした所で息を吐く。しんどい。話を聞きましょう。

「とっとと貴重な時間を使って話して。あ、ごめん。謝ったから嫌味はナシね」

「昼休みは長いわ。好きな人が居るの」

結局皮肉を切られたけど一瞬で終わった、でもそこは終わるな好きな人？こいつが誰を？性格最悪なの？「そ、そう？」と私は訊いていた。

「そう。正確にはずっと前からよ」「誰？」「即オッケーだったわ」「だから、誰？」「ねえさつきからあなたは疑問ばかりで黙って話も聞けないのかしら。嬉しい事だから黙って頂戴。」「只の自慢でしょ。嬉しくないわよ」「こちらの都合に決まっているでしょう。」「性格が悪い」「どっちが？」。あいつが言った。呟く事も許されないうるさいらしい、これ以上は喋らない石にする。満足してもらえれば有難い。やだ。

「どっちでもいいから。もう言わない」「昨日私の家でセックスしたのよ」

、そんな速答とは。舌が辛い。(唐辛子は無かった筈ですが)。胡椒は控えめが私のポリシー、こいつは下宿に住んでいない。この学校は凄く広い下宿に住めて、公立学校にもかかわらず、授業料はその分高くなる。寮はないけど部屋でお料理も出来る。でもこの女は近所の自宅でかよった。今も自宅で暮らしてセックスをした、なんという女学生だろう。女子校生とは一体何なのか。

「謎だわ」「脳が？」…冷たい眼鏡だ。「ねえ汐見、私を馬鹿にしないで。それでも生物はそこそこできるし、今言ったのだって貴女の恋人の事よ」

「ああ、うん。そうなの」彼女は視線を落として、絡まる自分の指を見詰めつつ壊れたさっきのペンを置く、そう、インクの無くなったボール・ペンなら制服が汚れる心配も無いしね。プリーツに影が留まらない。黒。ハンカチで済ませて良かったわ…あ、でも高そうなペンだった。金の止め具と木目模様がバラバラ、きつと700円程度でしょう。プラスチックは3000円もしない。模様は模様で恋模様、何？ポエムか。馬鹿みたい。彼女はピンクに染まってる。目が。「彼女は、奈世さん。多澄さんとも、いうのよ。」今日初めてうつすらと微笑んだ。…今週？今月？今年見たかしら私、友達がい無い奴か知れちゃうかもね(私は嫌な奴だった。)すると幼馴染のよしみに甘えているのは手のかかるこいつじやなくって私がさぼりにさぼって観察不足？。夏休みの研究対象じゃないわよ！友達を観察するなんて。話を聞いてあげるのが先でしょ、話して、仲良く遊べばいい。久しぶりに勉強を教えて貰おう。ランニングで果てまで走りましょう。セックスで果てる。友達、幸せ。そんなら勝手に生活しなさい、そして私は、話を聞かねばならない。セックスの話を聞きたいわ。

「どんなふうに抱いたの。抱かれたの。」後で調べておこうと私は思った。

「始めては当然水着でやったわ」たずみなよさんが誰なのか、はい？

「水着って。水泳部なのに。」

「接続詞が変よ。だからでしょう」

「あ、はあ」と、どうも、こだわりが別の箇所にあるらしい。「恥ずかしいとか無いの…ね。」
「それはそうよ」。また白い目で見られた。「水着は隠す意味があるのよ。隠すから服として扱うし、露出が多いからアピールにもなるわ。ねえ素磨子」「はい？」「貴女の頭は大丈夫かしら。幼稚園児でも知っている事だわ」「知るかバカ」「なんですって」「あーはい！あーあー、ごめんなさいね！だけでもう…、もうあんまり言葉も無いけど、洗濯とかして部活に間に合ったのね！」「平気よ。部活用は安いもの」「いや高いの買いたくないよ。ああ。それともビキニ？ワンピース？」「滑らかで手に優しい競泳水着よ。」「おい！」「サメ肌を着込むなど冗談じゃないわ。有難がる連中が私には考えられない」「だからそれちよつとした差別よソレ！？教科書のモノローグみたいに言うな！」「そこは文学作品としなさい、無知ね」「無知でけっこー！こけこっこー！恥ず…、」今、子供みたいになった。少し大きな声だった。

たのがヤダ。こけこっこーって。鶏は美味しい。「…まあ、今日の昼食ってコトよ」「零点」
水泳は水泳でもこの女は恐らく寒中水泳の師匠だろう。しかも私に、させる側。「ちよつと
寒いから、早く話して」「秋ね。温水プールは嫌いよ」

やっぱり、と私は深く頷く。首ではなく心で。寒いから。

「爽やかさが足りない？」

「そうね。冷水が良いわ」

この言葉はこいつには当てはまる。張り付いて滴り落ち行く水気は、温水ではどうにも
サマならぬもの（幼馴染の委員長には冷たい雫が良く似合う。）熱い。

「たぶんあったかい話になるわね。」

「ええ。」

ぴったりにした水着とは何だろう。性的魅力を増加する。

しかし水着を見て欲しいのではない。こいつは分からない店員だ。

「すみません、何度も言わせないで下さい。あなたの勧める水着は何もかも自己主張が激し過ぎるから没です。」「はあ、あの、汐見お嬢様。折角好きな方に見せるのでしたら、普通の物よりこれが可愛いとか、綺麗なものがございます。」「自信満々ね。素晴らしい。有能さを信じて言わせて貰いますけど、例えこの身に似合おうとも鬱陶しいのよ。私にも自負がありますからね」。もう諦めて最後に聞いておく。「専門家の意見は諦めます。競泳水着は何処かしら？」

「え？そこから始まるの？」と口を出された。思い出の中で苛々する私へ、わざわざ、素磨子が言ったのだ（御蔭で余計に苛々が増したが要点はそこだから好ましい）。にこにこして私は舌を打つ。ちっ。

「本当に嫌な女だったわ。店員の分際で専門家気取りの奴よ、ええ、今なら蹴り殺せるわ」
「今なら？喋ったのはあんたじゃない」

「だからあなたがそのかした事にする。」

「ちよ、昼休み中に話が終わらないでしょうが！セックスだかノロケやらを早く終わらせなさいよ」

これは話を聞く態度ができていない。彼女など、今日一番酷いと思った。

「終わる終わるとひたすらに余計な舌ね、引っこ抜かれて病院暮らしをしたいの？」

「え、いや、ごめんね」。だがびっくりしたのは此方だ。急に詰まって、彼女が素直になったわ。『もう口なんて出さないから喋って、お願い』↑だってこんな事を言う位だものね。

「あなたがもう自分は喋らないと言うのね。しかも頼みごとをしてしまう。そう？」

「うん。ウソとか無いから」

「何か話してくれない？」

「は！？」と、彼女も（又）苛々してきた。「じゃあ何！？なんなの、一体その店！その服改めあんたが勝手に選んで勝手に買い直した水着の名前は！？そうじゃなくて！値段はどのくらいしたのよ！」「まずは最初に買っただけ。お試し価格と言う名の無駄使いはしないし、そもそもサイズのオーダーメイドよ。試着すらできないから慎重に選ぶの、貴女も体格的に分かるでしょう。分からなかったなら学びなさい。次。価格は2000ドルしたわ、水の隙間を泳げそうな良い水着なの。でも部活には使わないのよ。絶対：ああ、さっきもその話をしたわね。肌触りも。二度話した通りよ？」「…ん、じゃあ今も節約家なのね。

ちよっと見直したわ、汐見」「まあね。無駄使いは凄く嫌いなもの」「分かる分かる。2万ちよいなら珍しいんじゃない」「2万。何が。」「だからさ、水着のお値打ち。汐見の家って超金持ちだし、しかも店員がお嬢様呼ばわりなんですよ？もつとバーンと5、6万っぽい値を払うと、」「1ドル辺りが10円なら崩壊してるわ」「え」「おおよそ20万程度ね」

素磨子は一、二秒後に言った。

「じゃあ一ドルが？」「あの水着はそこそこ高いの」「いや高過ぎでしょ。コーキューヒンでしょ」「ブランド物とも言うわね」「あー：そう、ねえ」「いつも、スラング染みた言い回しだと思うわ」「金持ちくたばれ。だから続きをドーズ。」私は笑った。「御言葉に甘えて」。そう返せば彼女も少しだけ笑った。普段より上品な笑みだった。

2月8日の水がめ座。多澄さん。大きく澄んでる、奈世さん。水がめ座のシャワーをしてみたい。滝のように沢山浴びてみたいけど、これは性的な意味とも少し違う。お湯よりも冷たい水の味、落ち着くってそういう気分なの：、違う？なにそれ？暖かい？素磨子は頭がおかしいと思うわ

『もう口なんて挟まないわよ』

かしこい。穏やかな素磨子は違うわね、多分、落ち着かないけど落ち着くわ。不確定ね。私らしくはないけど、そもそも別人だったわ。あなた。けれど素磨子の不確定さを凌駕する程にも多澄奈世さん、奈世さん：奈世って呼んでる。奈世とも一緒に不安定になるのよ。私だけスライムになるならいいけど、何？：『スライムは雑魚』って阿呆ね、ゲル状物質、柔らかいものよ。精神と物質の結合が弱い。いいえ。物質が本来で、精神は例えと言う事ね。私の例えよ、ああもう、正確じゃないわっ！貴女の述べていた方面にしてもRPGの歴史だと強いわスライム、初心者解脱の決定版とね、昔からテーブルに双六を並べて皆で集まっていたらしい。百科事典にもあったのよ！20世紀の終わりの絶滅寸前アナログ財産記念物。それがスライムの役割よ。いや：RPG、かしら？素晴らしく話が逸れたわね。素磨子のせいよ、素磨子のせいなの！もういい？いいの！。ありがとう。

（彼女が真剣な表情になって無言で頭を落とし込む。上げた。頷く動作、らしいけど重たい、鍛冶屋の鎚のよう。落ち着かない女につられてはいけない

『そうゆう』聞く必要がある！『笑顔ができたんでしょね。多澄さんと居てあげてる時も、じゃなくて一緒に、居る時ね。ごめん』最後に不安になった。）

素磨子は割と詰めが甘いわね。サッカーの試合でもオフサイドが多いし未だにそんなのじゃあ心配になるの、貴女は才能があるんでしょ？：いえ、副とかキャプテンじゃなく

て、そっちの向き不向きは別よ。私もそんなのは面倒なもの、でも何にせよ他人がやれるし、やるわ。だからサッカー部も水泳部も回っているのよ？結構なお手前の元にあるでしょう。トロフィーはトロフィー…かさばるけれど、でも将来に渡って使えるものね。きつとよ。メダルはちっちゃくて便利ね、ええそうでしょう。無駄に場所を取るもの。それはそれとして話がまたずれているわ、話の内容が分からないのよ。笑顔の他にあるわけがないでしょう。緊張はしたけど本意じゃないのよ。絶対！絶対に、怖い顔なんてのは無いのよ！ええ。どうせ大丈夫。心配はゼロにもマイナス以下だわ。なのにあなたが変な事を言うから、ついちよつと混乱しただけよ。またもやコーヒーゼリーだわ。スライムはソーダで炭酸だから、体にはあんまり良くないの。私の好みとは合っていないわね。…違うわよ、コーヒーは程々ならグッドよ。ただ麻薬に良く似ているだけよ…だから単なる例えでっ！、制限はしてるの。…は？何また、ごめんとは何よ。さっきの素磨子も【ごめん】とお喋りしちゃってまたもや思い出させてくれた。二回目にあなたはごめんと言ったわ。ねえ。私に負い目はゼロで悪い事も間違いいも行っていないし多澄さんとも本当に仲好しで居るのに、気を使われて此方が間違っているような愚か者の間違いは必要ないのよ。あなたの気遣いが必要ないのよ。愚か者が現状あなたでしかない。勉強しましょう。勉強よ今は。私は話をしないもの。でも御話する筈だったわ。脳よ。脳と脳で快樂が凄いのがあるのよそれが私と奈世さんとの恋愛ごとなのだから御話して聞かせてみようと思った。だからこそ私は話すのよ。時間も無い、きつと迫っているのよ。私のシーソーゲームと、同じく！ごめんね！死ぬの！？ねえ！ごめんって！しかしもう、仕方がない事よ。靴を脱いで御風呂場へ直接行ったわ。

こっちの外面では生真面目にしゅんぼりとして、つくづく内心（※限定）はほっとする。だって元の鞘まで戻ってきてくれたから、まあ実際にアヤマチはあったから、だからこいつが正しくて良しとしよう！。結局。言い出せなかったけれども確かに自分勝手だったわね。ごめんはロクデナシの言い訳だものね・納得！納得したわよ私も！、風呂よりもシャワーが浴びたい気分ね。お昼休みはこっちを優先しましよ、その後の授業は延長で。…そう、休憩時間のロスタイムで、ヨシ！サボリがどうかは（また）無視しよう。

「え、ご両親が早いんですか？」と、奈世さんが高めで言った。

「そうでもないわ。邪魔だから居ないの」私は振り向く。驚くよりむしろ、訝しそうな顔がある。両肩の前には鉄のような三つ編みが揺れて、フィッシュボーンの名前は似合わない。特に、素敵な彼女の場合は正式の方が、間違う事も有る。今黒いチタンを雨より伸ばした糸が連なってはぎゅぎゅっと絞り込み、美しいワイヤー・ロープの形にこの日の彼女はセツトする。そうしているから辛いのだ。「もったいないのね。」と、私も言った。魚の骨など憐れましいから彼女の方こそ正しいわ。160センチの結晶体が持つしなやかでそれこそ硬い髪。控え目な胸に届くかどうかの、丁度の長さがそこにある。三つ編みロープの宝石ね！黄緑にクリームのラインが走った優しい色味のワンピース。髪の色と薄黄色のツヤの、引き立て役にも相応しい衣装だわ。彼女自身は（ついでに衣装も）どこを取っても滑る景色で、けれどもリップは赤過ぎる。口紅？名前通りの馬鹿さね。もう少々控えた赤なら良いのに彼女は肌の色素が薄くて派手さがかなり、悪目立つから、でも！頭髮は恐ろしく黒いのがベストね。つまり今日もね、いつもだわ。濡れ羽色：カラス？あんなのは死んだわ、彼女は南極の深夜に居るのよ。一羽だけの貴重な渡り鳥、それだけの翼をさらに溶かすの。そうして出来上がる髪の色。肌と髪と、どっちもこころだわ。浮世を離れた心だわ。穏やかに。しかも自然な心よ、完璧過ぎる。そう、完璧よ。それなのにどうして怪訝な顔を、今でも継続しているの。伝えて欲しいわ。伝える必要が、怖い。彼女から「えーと、なにがでしょうか。」彼女からそう言ってくれたのはとても私としても嬉しいのだけれど、それはどうやら私の台詞みたい。なにがとはきつと何が（怪訝）で、何がこそワツトイズデイスザット、そう、私は分かりません。まろやかな彼女を見てみたい。私は針の如く慌てているので彼女を見てたら落ち着くの。いつでも奈世さんは、細くて柔らかい。まろやかな精神を感じるわ。気分ね。彼女は疑問を持つのに、私だけ好きな思いをしている。勝手な気持ちをだいている。「髪型」。「え？」（※まだ）私はちゃんと言った。「髪型を崩すのがもったいないの」。いや崩すとはなんという言葉だろう。私はもう一度生きている。「解くのはそれでいて貴重だわ。どっちもいいけど、今があるから。」今度こそこれでいいと私は感じた。かなり大量の達成感だった。

「じゃあ今はこのままでいいですね：え、いいです、ですか？」

「合ってます！」

「あっはい！はい。そのままです。」

「ええ、バスルームで、ゆっくり見せて。」熱い体の調子を整える。（血の気が引いたらリラックス）。呼吸困難状態が終わりに近づく、：終わっていたから喋られたつまり、私自身に過失は無かったの！。「私も水着を用意してるの。ああ。隠すのではなくて、見せたいから魅力的に映れればいいわね」

「あはい。はあ、それは決まっていますね」

「良かった。自信があるのよとても」

「とてもですか！正解ですね。」

と、彼女は丸い目を線にした（まつ毛が豊かで美しく、曲った鉄板、飴のよう。谷とは違って悲しくない、山形峠のゆるい丘。）彼女は笑っていたようだった。いつでも私は喜ばしい。

（固結びのおさががジャンプする。）肌着の中まで、元気です。奈世さん、すぐく落ち着いて、私が前から眺めていると、急にワンピースごと下着を脱いだ。シャツだったのに。もう脱いだ。色も薄いネグリジェ気味のシャツ。砂漠を映した月の色。ベージュと彼女の白い肌がある。地上から見たのが肌着の色で、奈世さんが現実の月なのね（顔も、満月をきゅるんと細めた輪郭）。だってさっきは透視までできたもの。黒い髪は目立つわ。黒いから、例えば彼女の素肌と来た日は果物の女王、マンゴスチン…味。高純度かつ高密度の生クリーム、果肉はたかきに渡った柑橘で、すっぱい中にも深く、深く、エコーのかかった蜜がする。白白黄色で蜜の肌、うつくしかりける多澄奈世。さん。時にその果物（マンゴスチン）についてはソプラノボイスの甘味が来たけど彼女については少し深い。或いは…これで合ってたけれども、低めに丁寧の声かしら。和三盆細工のお砂糖菓子なら意匠は椿の花一輪…、べに入れて濃いめの桃にして、sugarの砂よりちいさく並べば気泡の碎ける暇も無し。後引き解ける舌の中。重い、有無を言わせぬ声かしら？そう、上品。清廉。日本の高音。彼女は重みもあるかたよ。…なに素磨子何今御眼鏡ですって。色眼鏡はあなたの方でしょう。ほら。そんなに焦っているわよ。でも全く私だけで良い点には、同意よ。彼女は私にこう言った。

「下着が安物なので、急いで。」分かっていたけど良い声だったわ。背筋から姿勢が気を付けていて、そこからクレイモアな感じの声よ。切って重みで叩き潰すのよ。小刻みに素早く。力持ちだわ。

「ええ。きつと良い方に向かうわ」

「はい。…あ、はい。どうもです」

「ぴかぴかしている銀は嫌い。艶出しも鈍くて光らない位に、そこにはハッキリあるものよ。それが好きなの。そんな声なの。全裸の綺麗なヒノキでも、奈世さんは、お肌も光ってないでしょう。髪の毛なんて化学反応より吸い取る。黒の色彩効果じゃあ、ないのよ。硬くて確かにあるから、キレイ。金属じゃないわ。生身の、黒金、細長いはさみがあるみたい。缺じゃ絶対に切れないわ。ヘアカットがもつたないものね。ヘアカットも、もつたないものね。色々切れない理由があるのよ。必然性重なるパーセント、えと、1000%超してる。している、からこそ、しています。鋭くて針のような優しい刃物よ針金は

折れちゃうから違う。刃物で優しい。不明瞭。でも黒はしつかり！と頑張ってるのに明瞭且つ？分からない美はあるわ。急ぎましょう。どうか急いで頂戴・奈世さん急いで。次はほどうて、それから私がいえ同時に脱ぐのね。我慢ができないという事よ。」

しまった私最後は無駄しく言葉が乱暴！むなしく、むだに、乱れは現実に出してはいけないやりなおして私はむなしく、むだに、奈世さんに対して気取ってしまった。私は両手で制服を脱いだ。ブレザースカートシャツを脱ぐ。落ちた安物の衣装。制服。紺色グリーンと苔の色。ひかりごけのシャツ。白っぽい。肌着一枚だけを、特注している、私は、競泳水着を見せる。見せているというより見られていそうね。『いそう』？その言い方は違うわ、奈世さんはただ単に見ている、だけなの。私の方は下から上へと、上へと、視線がストレートを撫でる。きつく縛って、（急に解いて）でもしっかりスツと、まとまるわ。奈世さんだけど。私と居るから分かった気分になってみたい。：おそらく正解だと思う。

「不思議なほど素晴らしい髪ね」

「そんなことないです！そんなすごいとか、実際私ではないです！」

「まさか。意外性を感じているの？私は幸運だったのね」

「はい？」

「謙虚なおかげでありがとう、よ。目立たないでいてくれたのでしょから。」

「あのこちらこそ。御座います。ああ褒めすぎ：いえ、褒めすぎなのでは？嫌ではないです。」

「そうですか。」これは奈世さんにつられて言った。「でも私は目を合わせているわ。それができてとても嬉しいの」

「それはその。」前髪が見えた。全部の部分が頭まで、後ろの方から俯いた。「意外と汐見さん、恥ずかしいですね。裸じゃないのもそれですか？」

「水着？隠す目的で？あるかもしれないけど今は恥ずかしくて安心できるから、じゃあやっぱり少しだけ違うと思うの。自分をいいように見せるべく着たのよ。水泳部だから。行事で会ったわ」

「ああ、最初のとき出会ったときの：びっくりしました。まさか、って。」

「間違はなく初対面だったわね。あの時、急にごめんなさい」

「いえ、綺麗だったの。するとあの、泳いだ水着なんですね」

「そんな、あれは競技用だもの。あれとは別よ。もつといい水着で、私の視点より選んで着たの。：しかし不安ね。私の趣味だもの。」「ひよつとしてあちらが良かったかしら」

「違います違います！」ああ奈世さん、起き上りこぼしみたい。髪の毛は乱れず従順に、書道の達人、線のよう。「私は記念か何かとか、何でもないです。競技とはきつと別です」

「ええ、重要さが別ね。競技は言葉の意味だけで、スケジュールに従う行事なの。だから

スケジュールの一環しかないの。あれは本来それだけだったけど・でも予定が違って好い意味ね。重要になったわ。今みたい」

「はあ。なるほど。言い過ぎなのでは？」

「選手に同情するなんて優しいのね」奈世さんが動いた。まぶたの上だけ私は急いで言うてしまう。「私は連中と勝手が違うの。泳げるし、それ自体は好きな方だし、有利になるから行うの。ここでも行事ね。どうでもいいわね」

「いや私もどうでもいい方です。他の選手は負けたし見ていませんし、見ていませんから。どうでもいいです。気になって汐見さんだけ見ました」

「気になった？」今も驚いているわ。「気になったは同じよ！？私は見たから、後からお声を掛けたのよ！大声だったわ。ごめんなさい、でもあの時普通の声量だったわ、言い訳じゃないの。ごめんなさい」

「いえ、嬉しいです。綺麗でしたから。一人だけ泳いでた感じです。あ、寂しいとかそんなのじゃなくてそれが、きれいです。優勝でしたね」。奈世さんが上品に笑う息、くす：りと、「：なんだか申し訳ないです。とってつけたようにしか言えません」

「ええ、とても良かったわ。体が冷えるからシャワーの時間よ。まあ：こちらが長々したけど。奈世さんは死なないけど健康でいてね」

「はい？死なない？、とはなんでしよう！？」

「ごめん驚かないで！言って無かったの！初めて気になって、会ってじゃなくてもはじめよりそのまま感じていたの、が、不死身で凛々しく居るのでしょうなの。儚くないの。無敵なの。ずっとしつかりしているの。綺麗を保つてそうだと思って、凄いと感じて素敵だと思う。私はすんなり思えた、勝手に。いけないことだわ。」「ありがたいでしように！」奈世さんが気を使って言った。「私が自分の都合で、ほらその、ああまた誤解です。汐見さん自身を、自分で判断を違えちゃダメです。シャワー浴びましょう、水着は濡れてもいいです。綺麗になれるという意味ですよ？」私の胸の前に歩く。下から見上げて来てくれた。「眼鏡はどうしますか」「つけたまま。洗う時と洗浄する時だけ外すの」「ではそうしましょう」と髪も笑った。ゆるゆる安心するばかり。前髪が優しい人だった。

その後シャワーでも奈世さんののばかり言った。そのことだけ何度も聞いていた。髪の毛はとづくに知っている。体のラインも聞いている。ほっそりしてプラチナ・ブラックの、影やら光の全体、像？腋の下や膝の裏も聞いた。滑らかで段差にえぐみが無い？指先に毛穴も感じられずに、ピュアーな陰影が（：指に？）踊るよう？知った事じゃない。知ったけど。だから、これからは私も感じる。汐見の体が低いから。評価が低い低すぎる！、自

分で自分が見えていないから私の考えも入れたら良いはず。奈世さんの為にも良いと思う。汐見を好きなのも知ったから、この考えで平等になるはずよ。筈筈？絶対。いや、絶対。喜んでくれたらいいと思う。汐見は性格が悪くて一人で、幸せに暮らしてくれればいい。友達として、素敵な恋人。喜ばしいのが奈世さんね。汐見が二人で完成する時。その時を私なりに祝おう。だからこそ、これが、私の補助式！（公式だけでは数学・物理は解けない。セックスは物理的に行う。ああ）。まずシャワーから汐見の話はおかしい。奈世さんは汐見のお腹に触った、それしか言わない（言わなかった！）。お腹の心が不足してるわよ。汐見のお腹は腹筋で細いそれはも、太いけど私より細い。80センチちよいかな。見た感じ。やっぱり細いと思うけど…、でも強度はトテツモナインじゃないかと泳ぎを見てたら思うもの。どっちも思うの。細くて強くて、柔らかーい、感じがすっごく物理的なあれ：弾性、柔性、談合性？筋肉が話し合いて決めたもとい、それすら要らずにそうなった。じゃあ弾剛性か。分かんない。理系・科目ね。分かんない。でも対応が間違っているわよ、きつと。汐見の体は理系じゃない（文系でも無いけど）。両方あるから汐見なの。もしくはどこにも無い体：こっちか。汐見しかそこに居ないから、私だったら汐见到う触る。側面から行く。脇腹ウェストのゆったり、ゆったり流れる滑り台。女の子のスカートみたいに滑る。私の指が女の子の体。やんちゃに座って汐見を滑る。そよ風。違う。春風。近い？小川に汐見の素足を挟んでその形にすんなり春、水模様。暖かい冷たい雪解けの河が汐見の綺麗な脚に沿う。真横に延ばした千歳飴、削って固めた（とろけるようだわ）汐見の足首からは、泳いで北極・流水地帯の清浄な水が脚に沿う。足首から脚。そうして泳ぐの。いつでも泳いで綺麗に成るね。白木色の脛。太腿も。理想の筋肉まで辿り着く（水泳の。私はボールを蹴るの）。…と、私は汐見の！足を触ってた…だって、そんなの水泳でしよう！？泳ぐじゃない汐見が泳ぐのよ！泳ぐから仕方ないから…、いいの。汐見は興奮してくれればいい。汐見も。一緒に赤いといいわね。私は意気込んでお腹に戻った。私の両手が、右手がお腹で左は背中に手を回す。汐見の背中の中まで、ああ背筋が。いつもより綺麗。水泳が…泳いでいる時の、やっぱり失礼！錯覚よ！触っているから思うだけ。水を切ったイルカの背中に見える。手で触って、私は見えている。背筋が綺麗。シャワーより。（だから水が、泳ぎに似てたのね。）今思うと何て広いお風呂だろうか、私と汐見が寝そべって楽。お金持ちってこの辺違うわね！タイルもすべすべ。マッサージ。汐見のお腹はもつと白い。いや。白くはないけど手にきゅつとする（それはもうタイルなんてものじゃない）。角のまるーい四角が左右に整列、やんわり分かれて手に入る。寝転んでるから今はずつと柔らかい：やっぱり水泳とは違う。シャワーでもセックスの一部になってる。油断が嬉しい？嬉しくない。私はあんまり、普通じゃないみたい。緊張してくれないとは思っていたけど当然のように落ち着いちゃってる汐見に少々腹が立つ。泳ぐときも非常にやらかいのだろう。

だったら別にオッケーだと私は感じた（いつも私の動きが固いだけ。）

汐見が水着のことを言う。汐見はきていないと思うけど：ああ私の都合だ。わがままだ。直接触れたいと私は思つて、でも汐見は水泳が好きだった。水着を奈世さんに見せたいと思った。私は思わないけど汐見が。でも水着は気になる。見てみたい。自慢の特別仕立ての水着を奈世さんに、説明するところ。（らしい）。

奈世さんの腕が腹部を撫でた。掌から二の腕までずっと、私のお腹を水気に透す。シャワーにさらしてなげてゆく。さする。私の水着をさする、しやりしやりしたさわり心地と雫。おちる暖かい雫がおちる。髪の毛前髪シャワーはそのまま高い2メートル30センチから、止め具におさえたまま中間：水量は激しくも空しくもなくて中間、邪魔にはならないわ。

「しやりしやりしたさわり心地でしょう」。私は言った。気持ちがいい。蛇の姫君みたいに撫でてくれるの。指から腕から背中に戻る。奈世さんは髪を下ろしているわ。地球の深夜を大地へ伸ばして上からしっとり濡れてくる。水の切れが良い珠へ、転がる。べったりしてない。若々しい、所じやなくって不死身の何かを奈世さんのそこに感じるわ。そこは奈世さんの腰へと添い遂げる。髪の毛 ゆるびと 細い腰 何かのリズムができたわね。何故なら不死身にできている。から。でも奈世さんは即座に答えてくれた。優しい。死なずのにせかせかしている。

「はい、はい。」手と手をしんなり背中へ、私の！背骨のくぼみへと止まる。しかし新陳代謝の垢は無い。皮膚から感じているし、いたし、泳いでも泳いでもさらさらしている私はなかなか清潔な筈よ。しかも水着で、水着を着ている。誤解されてしまったらどうしよう、だって私は、きれいでさらさらなのよ。奈世さん指はチェックしている。親指以外の四本で、両手の八本指です。る。刺すように刺すように撫でて舞う。蝶蝶。てふてふやわらい筋肉。モハメドアリにも負けていない。ええ。はい。自信を無くしそう。奈世さんは奈世さん自身と同様、丁寧な（＝真面目な）検査を行う。短くてピュアーな丸い爪から、（線を水着の上からつけて、指咲く感覚。ほぼ球状。）なぞった所を揉んで刺す。小さな小さなスフィアが踊れる国家は、スペイン。闘牛士。生き死にの近い瞬間で、あばら骨の背後を回って剣。細いわね。奈世さんの体みたい（統一感美しい体を感じる、）一部が全部になつている。指先から目の前の奈世さんが分かる。ずっとお腹に頬を当てている。私の鳩尾に、急所？私にそんな箇所あったのね。殺されても全部が残るから。うん。じゃあ私も不死身でいいかしら、だけれど！鳩尾は急所でいい。彼女以外の全部は消えても良いけど

奈世さん（奈世さん）限定で捧ぐ鳩尾には彼女の頬がある。（私の神経回路の全てがあらゆる貴石を越えている）零秒の通しを理解する、だから水着の上からでも分かる。こまやかな脂肪と肉の、やわらかさ、でも筋肉部分が少し固い。緊張感溢れる奈世さんは細い心配にたいへん成ってくる。しかも原因の二つ目まであった！力が伝わる。指からずっと頭へ、私の体表は腰上の背骨に戻ってなんだかくすぐったい原因が、ソフト過ぎるのは奈世さんが、布へ、そこだけに力を入れているから。私の体は非常にとても丈夫であらうなさい、奈世さんだからこそ、信じられるのは（私の体を）気遣って傷つけないように、水着の部分だけを摘む。僅かな力（気遣い）を十全に用いて、器用に引く張る。水着だけ。背のくぼみを覆った水着を左右に上下に引く張って試みる。奈世さんが楽しい事をしている。私の水着のせいしかない、や、水着は言い訳：頑張るしかない。奈世さんはゆったり楽にして、あらくーにらくーにして貰う筈が私が、絶対！頑張るしかない！水着はすぐにやぶけた。シャワーに流れるまま流された私の両手で姿勢は良かった固まった手の平左右のほしい、太腿真横へ置いていただけのそれらを用いて背中の上から首筋裏から親指を入れる。力は右左右を左に斜め下方向へと破く。そう。破こうとしたのよ、すぐ割けたけど。これからビワの実を食べる時の皮裂けるチーズの安物食べない。要らない。とにかくあつけなかったわ。酷いの。左右のビニール。素材は別でもまるで、あんなの、死体かと思ったわ。アレنجしたけど酷いわね。

「水着破れたの？どうしてよ」「はあ！？聞いてなかったの素磨子、破る必要がパーフェクトに有るでしょう！？」「いや私も楽しみにしててね、聞くのが、汐見いま奈世さんにだけれども、その！水着を説明するトコってさっきはそう、私に言わなかったっけ」「ええそうよ。前の話だわ、説明しようと思っていただけ必要性にね、絶対の差があったのよ！水着は期待外れだったわ」「いやでも！私は期待するから！」「安いわね。素磨子も安物になるわよ、あんなに碌でもない物に。」「でも、アレنجって汐見のアレنجでしょ」「そうだけど何。」「それは気になるし、奈世さんにも今度話の：タネ？に、なるかも。さわり心地が良かった：みたいだし奈世さん」「そう？そうね。気に入ってくれたわ」「そうそう。だから今言ってくれない？中断になるけど、それはごめんね」「構わないわ。私と奈世さんの事だし特に、いや、奈世さんについてのあらゆる事には全てを、全てを整理する宇宙が、今私と素磨子に必要よ。スペースは時間よ。ペースも無い、貴女の事よ、いいかしら？素磨子。素磨子は私より頭が悪いし貴女にはペースが丁度でしょう。だからよろしい。良い事ね。」「うん」私はこつくりと言った。奈世さんは汐見の体が、否きつと、体も全部が気持ちも大好きだからで（＝水着についても意見が合っている）、間違いなく彼女はもうだって

いいのだ。それはよく無さ過ぎた。汐見、彼女はもうだっぴいのよねしかし奈世さんは相応しいと思う私は友達で聞いているあつ、水着の解説？始まる（嬉しい）。

「エメラルド・グリーンのリニア式。骨と炎の灰色が帯状に、光っているのはポイントだからよ。実際には蛍光色ではない、わ。灰色だもの。パールに近くて、上品な黒だけ少し湿るわ。肉の無い私の骨を燃やすの。そういう灰色。綺麗だわ、私は自分に自信があるから貴女にも恥ずかしいものね。話して伝えているものね。当然奈世さんにも、見せたのよ。良かったわ。変ではないものね。ベースは深緑、涼しい灰色、首の前から分かれて左右の胸と、脇腹を抜けたら臀部で締まるの。細く細く灰色ラインが消えるの。灰色の傍には黄色と薄墨：びつくりするから。灰色だから、うすくち群青色クツション。細帯二本でグラデーションするのよ、すぐ傍には影なの、水色よ、影から緑は急には黄色で挟んでおくのね。次、黄色。オレンジがかった山吹色、黄色！。それから緑ね。順番なのよ。触感は一ぱりしないわ。涼しい、やわらく・電子が撫でてゆく。コートを束ねたりニア式、それ。でもそんなに焦ったりはしないのよ。ゆつくりと、流れも薄いから。透明な電子の小川ね、きつと。すーべらかを増すただけにある。これにより外側も内側も、違和感がない薄くて済むのよ。テクノロジーの全部が薄いから。だからこそ水着の雛型を買ってその時は雛型と気付かなかったけど不安と不満がいっぱい来たから大部分を作りなおして変えたの。デザインは良かったから少し、色味に生地とか、電気ね。さっきの。所で素磨子は分かってくれた？終わるわ、そう水着は役目を終えたの破り捨てたけどそうなる以前に奈世さんにも良かったみたいで、やったわ。とても良かった：うん、やったのよ」汐見は微笑む。こいつが微笑むと可愛い、最悪な心の御蔭で貴重な（まるで心地好い秋風のように笑った。可愛い）ところでその水着は良いと思う：でも奈世さんがどうだっぴい筈はない。彼女は（きつとⅡイコールⅡそれは期待？、きつと）あらゆる手段を用いて汐見の全部を気に掛けてくれている。：ところでその水着は良いと思う。

ああ、でも素磨子、要らなくなったの。何、大声。びつくりしないで、えっとか言ったらうるさいわ。素磨子。：：そうね。こっちは言わない、でもありがとう謝ってくれたわね。素直ね。貴女の名前が、一緒ね。本人は文句が多いけど：ほらまた。また直ぐ怒りだす、水着よ。解説を注文付けたわ。どうせもう要らなくなったのに、まあ要らなくなる前は良かった、きつと。達成感は遅れて今日来るの。今昼休みよ。終わるけど、まあいいわ。責を取るから授業は私としましょう。：え？そう私の家・部屋で。驚く事なの？では特別な予定が：ええ？ないの。だったらもう繰り返したじゃない。しかし現在私は私と奈世さんが居るのでその勉めは後、として決まった予定よ。来なさいよ。貴女は私と違って大層頭が

悪いのだから。そして奈世さんはかなり成績がいいわ。なに、勉強会？失礼よ。しないで決まっているじゃない。そうって、そうよ。唐突に笑うのね、でも綿帽子みたいに可愛いわ。そんな笑顔は奈世さんの聡明さのためね、ああ！私の役目じゃない！もう…全く、流石でしょう！？素磨子は認めるだけはある。私が！全く！幼き頃より私は素磨子を見つけていたもの！再確認できたわ毎日久しぶりいつも素磨子はそれなりに素敵に居るもの。それなりよ。私の、一緒くらい。次とは言わずに置きましよう。もう。ですから、貴女の興味を持ちたる光栄な、ええ、私が作り変えていた競泳水着はもうないの。また奈世さんとまたやりなおしましよう。二着作って、一着はこの前と同じよ。そっちは違うの。着るのは新しい水着でこの前はグリーンで、素磨子が泳ぎに来なさい。私の家のプールで奈世さんとも泳ぐの。それから破くわ。ゼロになる。奈世さんの為にね、そうするの。貴女にも見せて置く必要があるから泳ぐ所まで素磨子に見せるけど最後は素肌が良いって感じてくれたの。見せたら零秒で透明になって透明とは無くなる意味合いよ水着は私の素肌を気に入ってくれた奈世さんへ、と、こなごな碎けるの。だから記憶は大事よ。水着を見ない。今度素磨子は私の水着を見るのよ。微妙ね。…え？貴女の事よ。（普段のきらめきはどうしたのかしらね鮮やかさを隠してとろやかに、瞳がとろーり、ぶれている。これは当然貴重な輝きよ）それは美しいけれども、不思議だわ。あら、ああ、泣くのね。そういう事なの。座ったまま、涙を拭かなくていいの？うん…うん。ではそのままなら、いいのね…ええ勿論、私と奈世さんが居るもの。ふふ。話を続けるわ。そのままでも涙を放したままでも私の話を聞いてくれるの？いいえ。聞けるの？そう。聞けるのね。ではありがとうね。嬉しいわ、水着を破いた私と、奈世さん。私達は裸でシャワーに居たのよ。

奈世さんが嬉しそうな顔をして、ものを喋って、固まった顔をした。奈世さんの口と小さな小さな前歯が隠れがちにさらに、隠れてゆっくり閉じたら真っ白。ほっぺと唇、割れ物人形みたいに上品（シャワーの流れが瞼に入る、まばたきしてない）。私は瞬く。奈世さんの瞳が心配で、私の指が上がった、でも制止はできない私は早く奈世さんのシャワーが流れているから瞼に触って・気付いて欲しい。御身体には必要なことだもの。まばたきと、私はもうまばたきして指先で毎晩爪は丸い。貝殻より短く磨いているもの。（指先は特に操作をし易い。精緻で弾力性に富む。）触れる先には力を抜いておく。糖度の少ないカステラはべたつかない絹ごし豆腐のよう、で、その先へとゆつたり指の先。触れる指先隠れた神経節までふにと優雅におかくまり。しているとは緊張してると言う事。きめこまかい仕上がりなのに、私は奈世さんを大切にしている事から緊張している。不安も両方、あ

るけど、時間は全く経っていないのに私の心が騒々しい。奈世さんはこう言って不安（奈世さんが静止してしまった理由は恐らくこの感情だろう。驚きより恐ろしそうだっただから、どうやら私（汐見）は不安な存在で一瞬間は必ずそうだった外道、この、無作法極まりない私が有るいいえ、過去だけ、有った、のよ。これからは私は改善して行く。私は奈世さんの良い事になって良い事だけ、する。良い事を！）になったの。

『ああ汐見さん、美しいお身体です。大きくってすんなりしたお身体です。（嬉しそうに上品に彼女は微笑む、綺麗）もうやっとおそろいですね。汐見さんと二人であの、裸に』

そうして彼女の笑顔は止まった。汐見さんにとつての問題の個所がどうしても見当たらないけれどそこは今の今もずうっと問題であり、そこよりも彼女の悲しみが、不安が悲しい。ほどく事がある。ほどくとは解決する事よ、私自身と奈世さんしか居ない。シャワールームに望ましい二人だけ。希望です！。ほどく事を望む。とかく二人の身体は良い。褒めてくれたその時は楽しそう。奈世さんが。瞳が悲しそう、上、目蓋へ指を（用意した指先で触れる。従順なる織物と織物へ、たなびく薄雲ふたえの目蓋へ）

伸ばして触れたの。震えない私の右手と、人差し指から先まで守るべきだから優しく自惚れる程に優しく私は奈世さんの目蓋を閉じる。触って、下ろす、となんてスムーズに左目から閉じさせて頂いたのは、さりと線の細い目蓋……生き生きした御体の線維が一つに、一枚素材よ！カーテンよ。悲しみから隠すの。言葉じゃないのよ、隠すとはいわなくなることで・だから・悲しむ必要がないことよ。だからね、奈世さんの右目も私は、自分の都合で、隠れてもらったのですが思い返せば私は分かっているから自分の都合を勝手に奈世さんに向けて勝手にしていることばかり。全部が。私は分かっている（指先は昔に下ろされた）。大腿部の私の横にある。指先は今固いかもしれないと、神経を向ければまだ柔軟性やわからか、（いつも）望み通りのままでした。私の不安とは別々の箇所では私は奈世さんを大事にしている私は奈世さんを大事にできている筈で必ず、その先にはずっと、私の理想の柔軟さがある。柔軟性はその時々変わる。いつでも私は奈世さんの為に全身（全霊も）最適化していたい。今は努力が足りない。この指は、私の奈世さんの為の指先。目蓋に触らせて貰ってからは三秒（切り上げ）の時間がじっとした。奈世さんは両目を閉じてくれている。見た感じ安心してくれている心なしか、安心は私の気持ちで奈世さんはどうか気持ち良くなっている欲しい。つまり私の望んだ心が見えたの？奈世さんに！？今直ぐどうかにかしたいわ奈世さんの悲しみさえ理解を……、分かっているのに私は一体どうするの、でも（一応、）言葉で聞くしかない。私の望み即ち一縷の身勝手な希望を奈世さんに向かって……尋ねて、優しさに甘える。私（こ）と常世汐見）は以上の証明書を心に留めたのと言った。

「分からないけど落ち着いたのかしら」「はい」聞こえた言葉は、はいでした。奈世さんは目を閉じたそのままの笑いで、いい心を表してくれていた。聞こえてから私は奈世さんを見た。喋る聞く、音だけで一杯だったの。そう不真面目ね。不真面目ね。真実とは奈世さ

ん意外にない。どっちにしる甘えだとしても。(脳を通さない喉と声。)<と、私はまた言った。

「私が理解できない事こそ問題であつて奈世さんは優しい箇所しか、なかったわ。それは問題が無いという事で、私にとつてはそう考えたいの。つまり誤差が有るのよ。奈世さんが悲しんでいた疑問と原因が無いの、はい。私は分からなかったわ。思い出す必要は思い出さなくて、お願い、幸せ…奈世さんにとつての、幸せなようにできれば教えて欲しいわ」舌から、舌から。短め少し長い。舌から震えを感じた私は反射の回廊おとはなつ・熱い。シャワーだけでなく熱い、ぬるま湯なのに私の温度は、あつたのに。いえシャワーは適温38度、寒暖偏らないお湯よ。身体が熱いからその分私はぬるいと感じたの。ええ。継続して熱い…ぬるいと感じる。でも奈世さんには丁度良い温度の筈よ。少しの秒三秒シャワーを浴びる。二人で流れに沿うている、柔らかい気持ちになつてくる。(私はぬるくて丁度良い)それから奈世さんが話してくれたわ…それだけでありがとうつて、嬉しいの。しかも奈世さんは話してくれたから、もの。

「いえ、いいえ。」目を閉じている。奈世さんはそのまま首を振る。いいえと、優しく、悲しそうな声。悲しそうな？強い口調だった。静かなまま震えが走る音。震えは音波の形の、方へ、少し壊れてぶれたわ。この世で最も綺麗な水が凍つて、深い泉の底にある圧力の水はしっかりと奈世さんの心が詰まつて薄氷割れる、とろりとした暗闇のような声。びかびかしてない清らかさ。圧力。無明の光も無くして鏡に映らぬ清らかな、声を！声を、私が奈世さん自身は奈世さんの責任だと明かりにするために？まぶしい光で溶けてくる。氷が、割れる気がすることは、そんな言葉が私の奥まで届く。何で？願望。私の願望。だけれど奈世さんは私を殺してくれるの。そうして生活の喜びをくれたわ。心配で不安でも甘えているからまだ私の体は熱いまま、その時は気付いてなかったけれども記憶の中で今度こそ全部(いいえ虚栄心でも自己愛自負でも、全部！)奈世さんの心を聞きとりたい。おしとやかな悲しみが始まるの。

「私です。私が悪いんです。勝手に待っていたのは私の方で、いえ！」小刻みに高い声が揺れた。一瞬だけで澄んだ音に戻る。私は驚いて、心が怖くて、声を聞かせて貰うと(直ぐ)安心してくる。「そもそもが、裸が…、水着はもちろん御似合いました。いえ。言い訳です、ですけどその、本当に御綺麗でした！でも裸の汐見さんを見たかったです！触りたかったです、裸で水着を交えず、いえ水着は、ああその、失礼でした、でも私は触られもしたかったです！」目を閉じたまま細く大きな呼吸を一度二度、すうはー、すー、はつと、奈世さんの顔を…上をくつと見上げて、次々シャワーが流れ行く。私の背丈を見上げてくれていた。奈世さんはいま目を閉じている。どんな永遠の人形よりさらさらりと、濡れた前髪の合間から鼻梁、果ては頬より首筋に至るまでピュアーに、眼を閉じて美しく眠るのでしよう。奈世さんは…、奈世さんが、しかもいま彼女は起きています！目を閉じて、

あ、私がさつき

感情だけの私は咄嗟に言った。

「奈世さん目を開けて！お願い無理しないで！お願い！」言いながら同時に私は思った。眼を閉じ続ける奈世さんは美しくってそれはどんな才気と努力でもって、頑張る事を、辛い思いと綺麗でどれほど大変だったのか。そして私は頭で思うだけ。そんなことを。それを。優しくしてあげたい。優しくしてあげたい、のに、優しくできていたら良い、という願望を抱いて私は奈世さんの傍に居る。謝るより優しくしてあげたい。声の調節が大声だったかも。私の声はつきりしていない。小声だったの？ぶれ放題の声：小さく掠れた叫び声。シャワー以外に右目から頬へ、だから私は一滴だけ泣いていた。まさか涙まで私は勝手に、でも奈世さんは目を開いてくれた。

「え？はい！」

奈世さんは聴力が凄い。空気と水まで暖かくなって雫のベールに明るい梅酒と明るい涙の笑顔が見える。月と雲のあいだの瞳。色。空の真上の色した目があいた。「はい、ひらきましたよ。」して、涙がこぼれる。困ったようなくすぐったがりの気持ちは私ではなく奈世さんから伝わるもの、でも奈世さんは楽しんでくれているのかしら。私は美しい彼女をみている。心地良くて、見るだけではだめ、奈世さんは触って欲しいと言ったわ。タイミングが開かれた直後から今はもっと、穏やかなスローペースで奈世さんが私の手を取りそのままそのまま困った笑顔がはにかみ恥ずかしがる笑顔、そのまま私は右てのひらから奈世さんの左胸へ着いた。手首に奈世さんの桃の実みたいな左手ぎゅっと、新しい果肉が締まって私の左もどきどきしてくる。奈世さんのペースはとても早い。彼女の心と外側は、是非も無く優しいスピードで、奈世さんはどきどきしながら笑った。意識が飛びそう。到達したのは彼女の理想的な笑顔。リズムが竜巻になっていてもなお心臓以外を分けている。急転直下の鼓動は素早く汗も無く（シャワーで流れる位に、）先の表情から優雅な所作へ続いて、おしなべつつ綺麗に重なるの。奈世さんはとっても楽しそう。私ももっともっと幸せになって、熱さも暖かさへと変わった。これまでにない、身体の制御が線維の果てまで凄まじい！。自分の幸せが奈世さんに直結するなら本当にどれだけいいだろう。胸元にはかなり汗があつたからこれよりは少しだけにする。左胸：から、おっぱいの隙間へと、体がシャワーで流れ落ちて行く。左胸とは奈世さんと同じだわ、それが悪いか良いかはちょっと分からない。さらに右手も重ねて奈世さんが言った。私の手が奈世さんの形を押さえて小高い雪のようなふくらみがしずむ。雪といっても真冬の粉雪だった。それも降りたてつきたての餅より、さらりと：胸の奥までやんわり。しずみこむ。その雪は朝の光の色へとほんのり染まして奈世さんの肌へ、今はもっと真夏にもえる化身（降る、）あかい灼熱太陽あついですね。肌。奈世さんはその時そう言った。

「あついですね。」

私は嬉しい。

汐見たちはベッドに行った。らしい。その前に体を洗いっこしていた。その前に体を洗いっこしていた。あの女汐見に触られたいって触って汐見に遠慮なく石鹸水を泡って、スポンジ、素手からスポンジ、スポンジ。さぞかし高級な石鹸でしょうねあとスポンジ。素手から泡だててたけど私はスポンジだったら許せた。でも手でやった。奈世さんの手は丸い。泡よりずうっとまろやかだったらしい。しかも丸くて細くて丁寧な指は手と共に汐見を撫でつけていた。高級な泡より素敵な手。無敵な手と指、奈世さん、汐見をさわって&さわられたりしてた。洗いっこした。愛とある。恋より何より愛とある！苦しい気持ちになってくる。二人が幸せなら幸せ、はずなのに、私はなんでかココロが窮屈ね。石のような心が転げ落ちてゆく。そういう気持ちになってくる。何が心が気持ちだ。何よそれ。いつも汐見に足りないと言われてた気がするそうこれは私の事なのだ。私が言われた。小さい頃から汐見は私を馬鹿扱いした。でも今はそれすら無くなった。(汐見の話は私へと澄んで来る。) 汐見は奈世さんに(すく) 頑張った。だから思い出は奈世さんと汐見の話で私は、いつの日もどうなっても、良い。汐見は嬉しそうで奈世さんと良かったと思った。

水のあとは空気のシャワーを浴びた。お風呂場ごと涼しい空気から、あたたかめの空気ですくく包む。ワンタッチの陶器は濃い目のホワイト、防水リモコンエアタオル。スローモーションな空気の渦の中、つややく体の水分・水気は残して、表層外だけさっぱり↓ぽたぽた雫を拭い去る。髪も体も程良く乾かす間に(間にも、) 奈世さんが撫でてくれるから私のお腹はお腹じゃない。からだ水滴はその上の空気へと、逃げる逃げる水滴を広げるが如く奈世さんの両手はぺたぺたすーと、お腹と筋肉、大胸筋からおっぱい下まで触って撫でて、しかもかっこよく私を撫でてくれるの。少し震えて撫でてるのは私。抑えようにも時たま震えるの。かっこわるいわね。理解できるけど私がそれだけならいいの。奈世さんに良く出来るかどうか、そこに細心の注意を払ったわ。腕から両手の最先端まで心の使いを丁寧に、ふれるわ。だから私はスポンジを使ったの、奈世さんは残念だったと後で取り返しもつかない事だけど私はまた勝手に嬉しくその時その時は今現在とは違うわ今は最後に私も手で触れちゃったの、ああ、でもだって奈世さんも撫でるから私も手で撫でるべ

きで、撫でて、私は現実に奈世さんを素手で撫ぜたわ。天のろうそくみたいに腰回りとお腹ね。奈世さんは触つてもすべすべしている。皮膚と薄い脂肪から控え目な、でも沈んで行きたいやさしいお肉へ美しい形の肋骨へ、私の指と手の平から見える。笑っているのは私の指先と、奈世さんはもつと夕焼け色の…、私の心がぞつとする。どきどきし過ぎてぞつとする、奈世さんのなまめかしさと笑いと、笑い顔、微笑みでも困つてない・苦笑と恐ろしい震えの指先エロティックな微笑の奈世さんと、奈世さんの恐ろしい美しさ。てぎわりもさらさらになつてくる、と、きゅつとした感じで擦れる感触は私の手は弱弱しくて異なり奈世さんが私の乳房を弾く、掌で水月の上から横まで左右にまた右左へと触つて、清浄なひふとひふが触れる。そんな音が小さく、たまに鳴く。こまやかなる奈世さんの両手には、少しばかり大きな掌中の珠ね…形には自信があるけれど。身体の流線を損ねずふくらみ、通る綺麗な胸だと自負はある。音と言えば奈世さんは柔らかくて沈む。私の手が吸い込まれて行きそうでトモそんなに強くは触れ得ざるもの、肌の雫が飛んでも水の様！だから天国が落ちて埋まつたとこ、な灰の泥とクリームのベッドの様。（だから音が出る位に触れてはよくない）。そうして奈世さんの片手がしずむ。左手。ひふがさらさらになった。左手が私の乳房の隙間へ、下の隙間をなぞつて思案する。こちよこちよとそんな触り方。ドライシャワーが止まつた。自動式。手動を動かすひまもなし、暇は時間的猶予じやなくって私の頭のスペースよ、私の手は寂しく動いて居ないわむしろ奈世さんの手の中に居るの。奈世さんの手は私より大きくないけど小さな手で包まれているみたい。綺麗な手が私の右手を掴んだ一緒の手、（右腕）器用な手。きゅうつと包んで私を話す（。はなすのは私の緊張感。）

「綺麗な手。ずっと美しいですよ」

右手が右手をエスカレーターしていく。或いは木目すら見当たらず、桜木細工のクレールカー。ひとつづくりの転げて行く始末。私の手が奈世さんにさらわれて、でもこうしてお手手はさらわれないのね。私自身が羨ましい程に、だってそれは、私の右手だけ…特別なもの。奈世さんに！

奈世さんは次にこう言った。

「色々仰って貰えましたけどあなたの方が、ずうっと美しいのです。最初から常々、ますますと、です。汐見さんにこそ触つて欲しいんです。私が触るのも汐見さんだからであつて、この要点は私じゃあ無いですよ？。ですけど。ええ汐見さんの、あの、御言葉は嬉しくて混乱するほど嬉しかったのです、けど、も、嬉しいのは本当ですよ。ほんとに。しかし何と言うか、向きが逆です。何故だか汐見さんが不安に見えます。汐見さんは遠慮なさらずに、こう、」奈世さんへ連れらるる私の右手はおしとやかな、おっぱいに到達しつつ奈世さんの圧力が加わつてゆく。奈世さんの右手の激しさで以て奈世さんのおっぱいをきゅうきゅう射止める。そうしたのも私の右手の平ね。奈世さんに全部してもらった気がす

る。確信できる。今奈世さんの胸は汗でしゅわり、と初夏の真っ赤な霜が降りたもよう。私は汗腺を制御している。奈世さんは上品に汗をかく。全部。全てが自然な調律。その中で奈世さんの激しさが際立ち胸に右手と右手を、上下に揺さ振る押し引きとも上手がとれているぎゅったんたんぎゅったんたんとん。リズムに合わせて白い息。炎と遊んで苦しそうだけど奈世さんは楽しいと笑う、嫣然と目を逸らしたい程に、逸らしたくないのに奈世さんの表情は体、凄絶に赤く赤く染まって息と体と重なる心臓の和音がとくとく私を締め付けて痛い。熱い炎はとも灰より白くてそれを奈世さんは体に容れて、居る。さつくりなまめかしく、静か。睫毛を伏せて、開いて涙、が弦の残響の如くひんやりと、辛くて静かに燃えて居る。奈世さんは先より落ち着いているのに私はもっともっとどきどきしてくる。でも奈世さんは凄いい人だから、落ち着いているように振舞ってくれたのかも知れない。よりよく美しくなる為に：しかもそれは私に、合わせる為に？奈世さんはそんな趣旨を言っていた。嬉しいと：幸せすぎるから私は茫然崩れ去って居る。膝が落ちて私は泣いている。声が出ない。嬉しいと言えないなんて私の体はともひどい！奈世さんは私を離してくれない。嬉しい。怖いけど嬉しい。正座した私をしゃがんで見てくれる、すりぬけた奈世さんの左手はまた私の胸元を撫でて、触って、どんな風より優しく背中をきゅつと：きゅつと回して抱き込めてくれている。（私と奈世さんと、触れている。）右手と右手もその通り、奈世さんの胸に私は触って：貰えて：種のように小さな乳首の弾力胸部のふくらみ柔らかさはじくはずむ乳首と沈む指は私が、楽しい心で遊んでる。だから私がそう微笑んだら一転、嬉しそうな笑顔で彼女は言った。

「美しさも、慕情も何もかも、どうか思いつきり触れ合いたいですね！好きです！汐見さん、大好きです！」

こうして私たちはベッドに向かった。

「汐見ごめん。何も言わなかったの」

「素磨子：素磨子は不良品なの？あなたにはちっとも鼓膜が無いのね」

「は！？何が！？こっちは死にそうなのに！？」

「あなたが死ぬ筈も無いでしょ。素磨子。奈世さんはいっぱい言葉をくれたわ。」

「え、だから？」と、頑張つて不機嫌に言った。でも私は死ぬ筈が無いから幸せ。汐見は信じてくれていた！

「だからとは繰り返さない、と。心配ね。あなたの記憶野全部。奈世さんはいっぱい言葉をくれたわ。」

「いや、そうじゃないの。聞いたから知ってる。しつかり、聞いたし、そのことは分かる。奈世さんじゃなくて、汐見の言葉を聞かせて」

「どうでもいいわ。奈世さんとベッドに行くのよ」

「ヤダ聞かせてよ何かし言い返したんでしょ、」「その言い方は不愉快だから止めて」「ごめん。でも汐見、言っただけでもなくって、奈世さんに答えて笑ったんでしょ？」「そうよ。そうね、こう言った。奈世さんへ、はい、私も好きです。はい・から・好きです、まですが言葉よ」「あーそうでしょうね。汐見様。奈世さんは目の前に居るものね」「汐見様って、負けたような言い方をするのね。素磨子は駄目だけど劣つてはいないと思うわ」「ああん、突然…とつぜんごめんね汐見、本当にそんなつもりはないのよ。今も昔からずっと、だからだけじゃないけどお願いがあるの」「そう。次は何？」目が冷たい。『でも最後にするのね』と直視してくる。そんな沈黙の光に向かって言った。

「はい・から・好きです。もう一度っ、ね！」

「はい、私も好きです。聞き取れた？」

「ええ！」

のっぺりしたつららのような音。それでも汐見の声は綺麗。氷の洞窟、鍾乳洞、つららの鉄琴綺麗麗で、はい・から・好きです。灰から好きです。私も生まれる前からそう。

奈世さんは私をベッドに乗せた。より明らかに、こう…手を持って。持ちつ持たれつ、でも、持ってもらって…腕から導くように、座らせて。ベッドの縁に私のお腹の下から、順繰りにするするっ、と乗せてもらったの。縁から真ん中から枕…、頭の横が乗って、乗せてもらって、私専用ですから大きなベッドよ。白いシーツに霧がふわふわかって霧だから厚くも薄くも潰れる、霧布団とゼリーの敷布団。どちらも遠隔操作できるけど今そんな有糸はとて無し。いつも私はひんやりさせている、から私は冷たいままで置く。ゼリーの外は不透明な布。絹立てシーツと固い霧。シーツも要らない霧布団、どんな糸より肌触りがいいの。（そのために私が作ったものね。）固い霧は消えずに潰れて走る。大きなシーツの踊り場が揺れてその上を、ぺったり、波が飛ぶ。それがおさまるとふわふわ私の背中、ひざ裏、肘から腕…全部。ぎゅうぎゅう詰めの小豆枕の下まで。首がふわふわしている、くすぐりたい…小豆枕はかっちりしてて良し。いつもここだけダイヤモンドのよう。ベッド、ベッド、ベッドの上は、まるで踊り場みたいに大きい。（現実を見る。度胸の試しが無い。）とにかくその場所へ私は寝ている。横向き。奈世さんのお腹と手の甲、お風呂上がりのきらきら色の艶。眠らないまま正面だけを見ていた。（だから体が重くてとても睡

眠など取れない。心もシロップの結晶と化して、熱いわ。」オアシス温泉みたいね

「オアシス温泉みたいね」

「え、何か？」

「はい。いま。」と、私は言う間に考えた。心が口に喋った。良くない。私は奈世さんのおへそを見ている。薄くしなやかな脂肪と腹筋と、白昼夢に映った影の点。その周囲は僅かにちゅっとして、胸から腰までさああと元気の中で、おへそも元気に（「僅かに」）ひっこんでその中央ラインに臍がある。どうあっても壊すことなどできない細くても元氣一杯の体よ、まずは月の光を重ねて広げたよりも黄色と白のあわみがいとしくばっつん！、ばっつんばっつんと全身。余すところなく張り巡らされた皮膚の下には薄造りのような…、透き通ったまま重なり合う脂肪、一つ一つはいまにも無くなりそうな、とろけて消えそういいえ、優しく重なる脂肪はすら、すら、割れないシャボン膜。そうしてきっちりおさまって、ほっそりした全身、胸から脚まで二種カバーに守られ（ああ柔らかい、ああ素晴らしい…元気の）筋肉があるわ。細い体にこくこくと詰めていて肉は黄金の砂をとじたみたい。卵とじのホットケーキのようで奈世さんは砂時計よりも、くうとした竹の木の一節が近い…よくそれでしなり合う竹でしょう。でも近いだけで奈世さんの方に惚れるわ。奈世さんの体も体型にもほっとする。不滅のホットケーキな柔らか筋肉、羽細工の脂肪と皮膚のカバー…に、先の小さくまとまった体つきは元気ね。だって全部ですもの。全部が元気。だから私は、はつきりと奈世さんへ言った。

「オアシス温泉みたいね」

腰へ触った。乳房の下大胸筋からつるつる、つるつるクリームのように守られて、しっかりとしたパンケーキの弾力で遊ぶ。指先でふつくらと奏で立つつ、（つつつ）薄く綺麗に並んだ腹筋から、腰骨、上に乗った肉と脂肪と肉とぷるりとしたスーパースポーツボールのお肌と、いやお肉が満月餅なのね。つきたて。すべすべ、べたつかない面。粉一滴もたかずに最上の肌よ、それにくくつと沈んで弾む餅。薄い脂肪と元気なお肉のバランス透き通るようなベールと柔らかいすじにく。お尻から太腿への曲線、黄金の月の光の肌色モモの正面よく見えて顔を近づけ過ぎているのに私は何にも緊張していない色も、見えない位に小さな産毛も、プラチナブロンド？、髪は丈夫で黒いし、でも細くておにんぎよさんのよう。

凄。私の息で震えた。産毛と皮膚からああ、筋肉までごめんなさい奈世さんのふとももさん、これはリラックスと同時に興奮してるの。…私の息はとても、冷たい。奈世さんは凍りついたまま溶けちゃいそうな、の鋭利な part で全身ぴかぴかしており触れる度にすうすとその体が笑う。触った箇所からしかし消えては広がりがまた幸せな波が広がってそれ以外の（つまり私から、以外の！）動作は完全に静止していた。その声もくすぐったがりの、合間に、その声で私は良いことですからと私は奈世さんと、良い気持ちになりたい。鈴蘭。短く摘んで、摘まれた小さな音節から雪が、降ると同時に私の心臓へ溶けて痛い位

に幸せ一緒の奈世さん、私と奈世さんミルフィュー、そんな声が一緒に伝わるの。

「え、ひやつ、ああ、あの、あはう、あのつです、ああですうれしつ、うれしそこへあつうれしい、です。ひゃあ、う、うれしい、です。でもつ、わたし、こしむねの方、あう、こしよりもつともあああ、こしさわ、すごいいいです。いいですよああうすばら、しい？わた、し。いいです。つよいきもちあつ！、気持ちがわたしはとッ、てもつ、いいですよ。はいっ。」

霞の小花が乱れ咲く無理の隙間へいいですよと容れて：ああ、いつも最初に奈世さんは許してくれるの？安心と、嬉しいのは私もそう！今も昔よりずつと、鋭いほど磨かれていくから：、奈世さん。だから私の好きな気持ちを許して。奈世さんも私も硝子の針一つ、二人で、ふたつよ。私で、私も、貴女と一緒に磨いて欲しいわ。そうなれると決めたの。（そうなるわ。）↑でもこれは私の決めたこと。これからも今より（私が）頑張つて今も：奈世さんの方の頑張りを、ちよつと休めた状態にさせておく。：奈世さんは頑張りが過ぎよ。そうして。

「あの、どこが。腰のどこがいいですか、お腹の横も細くはないです。モデルじゃなくて、キュっとはしてないからそこ、そんなに自信も無いところですよでも！ダメなさぼりは、無いです！本当に健康的なつ、だけで、気に入ってくれたのでしたら、」と、言いつつ奈世さんの手がしゅるり、私の右手に突撃す、撫でる手を奈世さんの手が撫でるように掴む、セロリを手取るように、密密張りゆく力も分かるでしょう？どんな野菜より私は強いもの。でも奈世さんは私をぐつと押す。それはもう強いから当然ね。私より。ああ。なんてこと。幸せな私の頑張り不足よ、奈世さん、気持ちいい奈世さんの体にどんどん私は溢れかえつて、掌には至上の弾力性がさくらんぼとマグマのゼリーに似ている奈世さんの体から奈世さんの顔は融けた鉄がささやく熱の生真面目笑顔じゃないけど幸せそう。私がとろかして溶かしてあげた幸せ？頑張る奈世さん。言葉も表情も、融解しつつも硬いままの剣・（前者も聞こえる。）「ここです！汐見さんそれうう！それをも、もつとつ！もつとです！」奈世さんのおかげで奈世さんの体は私の手に抑えられている。私はやうやう細い声の息：：ひう、ひゃあ、と呼吸が洩れていた。幸せで熱い。私も、尽くしてあげたい。私の息は最早に、とても熱い。

全部一緒の考えのような気がする。腰の次は子宮のお外を撫でたい。

でもそこまで言わなくても良いのに：幸せそうにゆったりした表情！。そんな友人に、

私はこう言った。

「汐見彼女、まあ奈世さんだけど。つまり寸胴体型を気にしていたワケ？」

「素磨子。あなた殺されたいのね。」と汐見は私の方を睨んだ。私は何だか…、おなかいっぱい満足？友だち甲斐あって幸せよ（奈世さんの事はさらっと話してみたい）。

「だって本当のことでしょう。それに奈世さんの体型は、とっても美しいんでしょ？」

「馬鹿にするニュアンスが見えたわ。聞こえる？」

「それはまあ、寸胴って言葉が悪いの。今は違うわ」

「そうなの？悪さは聞こえないのね」

「うん。」素直に、嘘だけど。「でもごめんね、汐見。言い過ぎたから。私の理解？、が合っているとは思わなかったし奈世さんは、またキレイな体型なんですよ。ごめん言い過ぎた、汐見」

「分かっているわ。奈世さんについてはもつとよ」。彼女たちのもつと、は分かり具合も、相手の綺麗さの事もでしょう。だから私はこう…、繰り返して言った。

「ごめん言い過ぎた」

ええ、と直ぐ彼女は言う。「貴女はそうして分かっているのが良いわね」

私だけに汐見は安心して今も少し笑って息しているのが見えたわ。甘さひかえめのバニラアイスみたいで、きつとヒマラヤが辻にも、咲いていないここだけここだけに咲いた花びら！今も汐見が褒めまくるどこかの女よりずっと、綺麗に、咲いている。微笑んで居るわ、汐見さん。昔初めてこう呼ぶと怒った気がして（いや怒られた）、未だに一度も呼んでいない。最初のさん付けはノーカウントにしているけれども、それはお互い分かっている事だしだから私は怒られた事なんてないのよ！汐見と仲良しなもの！私。

本当に、私は両利きで良かった。絶対に丁寧じゃなかったら触っては駄目で、だから奈世さんに今空の左手でさわられて左手で感じられるもの。私は全身が丁寧だから。でも体はとっても熱いけど、呼吸と付随する脳味噌については乱れたまま幸せにして置いてから、空いたスペースを用いて脳味噌、骨髄、神経回路の奥から先端へ（左手の指先から触れる。）私の全身を奈世さんに（丁寧に）、最高の体を自負できる。左手の指先から触れる。奈世さんによる幸せな私の脳と体と奈世さんの為の残りすべての分と、奈世さんは私の幸せがいいと思うってくれて居るのだから私は奈世さんと一緒にいいわ。細くてたくましい素敵なお腹とつるつる、すべすべーのお肌から下腹部へ、右手の腰は控えめに通った曲線、くの字にひっこむ激しさじゃなくて緩やかあな楕円が内に向く色。ホワイト・ライト、白電

球、部屋の電燈より明るい薄黄色の肌（すべすべだから、反射するもつと）。少し左手がお腹でじっとしていた。暖かくて熱い血液の流れがさらさらと真下を通っていたわ…綺麗、いつでも奈世さんは綺麗、腰からお腹の下の部分へと右手の下方位置も、私の左手、綺麗になつてゐる気がする、奈世さんと一緒に生きていく。そんな私のパーツを持っていく。両利きの丁寧な先端部分はいま最も丁寧。右手左手。特に左手を丁寧にする。慎重に行う。左手が先。私の一番先の、細くて強くて…お揃いね。奈世さんの体と私の綺麗な左指…思う間もなく奈世さんは当然だもの。綺麗がつまって潤う体にその先は狭くて黒が細い。背は低くて茂みは上品な黒。ちよつとの範囲がすぐく欲しい。上品さは酷く贅沢だと思うの、濡れても指先へ微笑む陰毛…ひとつひとつがふふつと軽やかに、空より気高く泣き笑う。それはみな私の指先へ、もう、自分を大切にしてほしい。…本音…だけど、失礼だったから…私は幸せに違いない。少しでも客観的に見ないと死にそう、自分で思つて自分を殺すのは勝手でそれはもう一切許されはしないわ。勝手だものね。奈世さんも悲しむわ。…また両手の先まで止まつてゐる。一緒だからと傲慢に成るから、私は、駄目だから駄目では優しくない。恐ろしい。私は優しくないからせめて、お近づきになるべき点まで尽力して…指を…奈世さんに、ごめんなさい、また甘えの視線を伊達眼鏡の奥底からじーと、前髪にあふれた赤々と、開いたおでこの奈世さんが見えて表情は痛くない苦しさで、だから悲しみはないけど苦しそう。黒くとりけた瞳の奥が私と、私の手の方へと向きそうで、視点が前から下への揺らめき線香花火の掠れるさまに、我慢と我慢を繰り返している。私が繰り返させている。そうしてもらえる。酷い。嬉しい。後悔と優越感がある。嫌、心はそうでも体の能力だけは、私はとつても強いから。私は奈世さんの器に触れた。熱にはじける高密度の寒天が二枚、かつちりした力が（指、撫でたら）つと返る。生殖器に元氣を感じる。熱量。奈世さんも私も両方ね。危ない。私はびっくりしたから落ちて、体が落ちるところをベッドにころうじて倒れこむ。奈世さんは私の二の腕一つ、緊張して余つてた右手の方へと両手を寄せて、汗までさらさらした指、手の平と私の筋肉を合わせてひゅうつと呑む如く引き込んだ。きつと引き込んでくれたのでしょうね、奈世さんは優しいからまた私に、私だけまた良い思いをしている気がするそんな私に奈世さんはからかった。？微笑んでくれたわ。からかう、ちよつとからかうみたいに思えたけれど、とても綺麗で夕焼けの終わりをみたい。そんな微笑みも背筋が緊張してきて、綺麗で悪いなんて有り得なかった。どういう意味？ちよつと解らない。奈世さんに失礼かしらと思つてその表情は夕焼けの終わり頃。見ても分らずに夜の真つ赤な divide それ全部を捧げたような笑み。それは私だろうか捧げる。今から？私は今からね。

「はい。私はそうですよ。」真夏日の陽炎の声。奈世さん。「分かつてくれたみたいでその、優しいとかありませんよ。ええ、私が幸せなんです」…指が、指がもう私の生殖器の外、薄い感触と小さな遊ぶ揺れ、踊りとダンスが、はやはやまって、「汐見さんだから幸せ

なんです、何でもっ！」あ、陶器をなぞってパンにする指。奈世さんより硬めの真っ直ぐな、スキの繊維を締め上げて流した並びを腰上から順、ちよつとのところからもつとの真下へ毛は濃く並んでまた薄く、しつとりから含んでずつしり消えれば水気の泉に奈世さんの指は私の隙間へ柔らかくする。器は既に底から濡れていたけど、硬かったけどパンになったらやさしい。水と一緒にこねても薄くはならず激しい素早くすぐつたい爪、硬度のある元気な小さな御爪が芯と芯と隙間と周囲と陰毛、水溶きにおいて解す、撫でる、しんなり毛すじを撫でつける。水増しではないむせ返る位のパンは幸せが喉に詰まって美味しい。呼吸が困難になるけど私は水ではなく解れてきてくるの。液も涙も水だけど、私は今私の水ではなくってそれからどんどん生じてくるのよ。流したくはないのに流れるの。濃く味わって、奈世さんが先に私に触ってくれたのよ。ええ、あつ、そうね。そうよ。奈世さんが触れてる箇所から、幸せよ。私のそれは、奈世さんだったの。生じてくる秘密の起源が奈世さん。私はそれと言ったのね。私のそれ：間違い。部分になったの？私は気にしないでいいの？私は指を動かし始める。無心の道具になる準備をしておく。「私は気にしないでいいの？私は気持ちいいだけなのに」「は、あ！？」絶句の顔色と怒気。奈世さんは私に怒っているのに私以外の何かへも憤っているようね。そう感じるけどその対象が妬ましい。ぷるんとした指先と硬い爪から：爪が少しだけ冷ややかで心地良い、奈世さんの指から撫で立てられてくる。生殖器の隙間に芯からさすって立てる。素早い爪の味悲鳴。こうしている余裕も無くなっている。脳のスペースが殆ど残ってない悲鳴、私はせめて指から、捧げたい。指。奈世さんが指から重ねて動かす。指で指を：雲の糸が絡みつくみたい。私は嬉しいのに何もできない。すべて奈世さんだった。全部が、全部が、私の力が全く足りない幸福、吐き気がして私は幸せに噎せてえづき、悲鳴、奈世さんが、唇の音、キスと舌と小さな歯並びほっぺ、唇キスする。色素も肉も。薄い唇はもっと欲しくなってしまう。薄いからもっと欲しくなる。離れる奈世さんは唇離れる。舌から私は離れて頑張って止まる、ああ離れた唇舌歯、唇、あ、あ、また怒って奈世さんが怒って私に話すことも全部。してもらえばかりで力が足りないわ（奈世さんは怒って私に言う）。「そうです！そうですのに、また止まって遠慮しましたね！？私は、そうです、と何度も言って！オッケー！ってことです全部を了承なんですそれなのに、もう、何でもです、よ！？ああもう、私が腹立てるのは汐見さんの別の部分なんです！もう：もう！我慢ですよ、なんで！？私は我慢とか嫌ですよ！？はい！精神力やら頭が出来過ぎなんです！凄過ぎですよ！もう！でももっと遠慮は嫌です！あ。でもその、別でも汐見さんですから、それも私は好きです。丁寧ですし：でも遠慮は嫌です。それってわりかし、一緒です。から、もっと遠慮は無くして来て下さい。別にして：言葉通りです、どうか！」顔と顔から左へ奈世さんが俯く。沈むでもなくその熱を移して見ている。重ねて居る手をじっとみる。私も奈世さんと一緒に見ている。力を抜いてる私をぎゅっとする指は嬉しい、奈世さんは力強かった。どんな部分

までぎゅっとしてくれていた。気付くのが遅いのはそれが私にとって当然の事だと思えたからで、奈世さんがその様に尽くしていたのね。力が抜けて顔が赤くなる。もっと熱いのは恥ずかしくて、恥で、私はもう真っ赤になっているだろう。指を意識的に弱弱しくしていたけれども今更その必要もない。私は力が、強いから：嘘。こんなに弱くてはいけない。奈世さんはその様な指を見て、もっと、全体へ力を込めてから言った。右手も左手も全部きゅっとしたうすあかりの銅線締め付ける声が、「この指なら全部いけますね」と、私を物扱いした。鈍い光と鋭い締め付けと、仄かな声。鋭い絹の指。銅線は電気が鋭く走る。奈世さんの動きが速いのも当然だった。電気信号。綺麗な頭部と頭と、髪の毛がさらさら伸びている。もう部屋の空気はスローモーションだけれど奈世さんの髪の毛はさあつと揺れる。スローモーションを繰り返している気がする。疲れない？ずっとそうしたのでしょよね。部屋の空気は止まったも同然なのに、奈世さんの長い髪の毛は揺れる。ゆらゆらしている。月の無い夜よりも綺麗。ゆつくりだから：、上品とも言うわ。私だけがそう。そう言うの。言わずに思うだけの意味よ！禁止で絶対、止まっているものね。ゆつくりだもの。空気は素早くはないの。素早いのは奈世さんの指だけでいいわ。空気との比較じゃなくても素早い。私に分からなかった内に、『あ痛っ』と奈世さんの声が聞こえた。止めるべきか力を入れるのか何か、奈世さんのする事がはつきりとは分からなくて私は物でも奈世さんがやりたいことなら情けないけど任せてみようと思っただけで分らないまま奈世さんの髪の毛を見ていた。やっぱり墨の飴を束ねたような髪。しかも石鹼水よりサラツと流れて、その奈世さんは、「あ痛っ」、と言っていた。奈世さんはさらに言った。「いたたた、あー、幸せです」。苦しうでもない声ね。だから私は情けなくて悲しい、けど、それは自分の都合で要らなかったから私は正直に奈世さんへと言葉を伝える。

「物で傷付けてしまう事はやめて。そんな大事なことはどうか、奈世さんの御自身で行って頂戴。物は、ああ、どうして物なの！物なんて絶対に嫌。駄目よ！私は、それは嬉しいわ。私が変わった物も私自身も、どちらにしても大層過ぎるのよ。光栄過ぎるの、駄目よ勿体無い！だってこれは、奈世さん御自身の事よ！それはもう私は、私は、嬉しいわ。どうして奈世さんは私で肉を裂いたの？、奈世さんの血肉よ、痛いよ。奈世さんの体は奈世さんだけの、奈世さんの、奈世さんのお体なのよ。」言わなければならなかった事を遅れて言った。私はまた勝手に泣いていた。泣くのは私の道具だったから私は悲しくて泣いていた。その事でも私はまた泣いた。涙が増えて情けなくて悲しい。奈世さんは言葉も無く驚いていて、半開きのお口が可愛らしい。小さくてキスは歯も心地よかった。舌が乾いてひりひりするほど良かった。口づけは嬉しさで必死だったけどそこには心地良さも有ったから凄い。だからずっと一緒に居たいと思える。自然に思えるのが凄い。奈世さんは綺麗で可愛くて落ち着く。私も落ち着けて幸せにしてあげたい、けど、ずっと何にもできていないのよ。私は本当に情けも無い。幾度となく酷いし、何よりも今が酷い。私はとても酷

い。幸せが良いのに、私は奈世さんを幸せにしてあげたい。奈世さんはちよつと怒って言った。「まあ、そうですが、あんまり痛くないんです。体質でしょうか、ともあれ良かったですけど謝るべきかは！、分かりません、ごめんなさい大声を上げて、ですが、もう私は全く分かりません。私は悪くないと思います。」

私はまだ泣いていた。眼鏡は、涙で濡れても伊達だった。気にしないのに眼鏡が濡れていて外した。奈世さんの言葉と顔を、見たい。勝手な願いを自覚してまた悲しくなった。奈世さんはちよつと怒って言った。

「私ということは汐見さんもわるくないんです。こつちばかり見ていて居ますもの。分かりますよ。さっきは私の口でちよつとそのびつくり、あーぼかんと少し開いてて私はそこやら恥ずかしかったのですけど、いえ少しだけ恥ずかしかったただなのでそんなにわるくはないのですけど、汐見さんなら先程の口づけでしょう？そこを見てぼんやり泣きながらあの時だけ涙が止まりましたしつでも嫌とかつ、そんな事は無いんです！恥ずかしい等も別に困りませんし、できれば可愛いとも言ってほしいですがいえ、いえそれも本当ですけども楽しかったらつ、もういいじゃないですか。私もあのキスは良かったです。だからこそ今現在そう言えたんです。確信、ですよ。伝わります。」奈世さんは、あ、と淋しい顔をする。私は怖くなった。奈世さんは何か悲しい事を思い出したのね、と、でも私が楽しいわ、と喋る前に聞こえた。奈世さんは勇敢なのね。努力が過ぎるわ、後悔する間もなく奈世さんは言った、自然に、そこも、優しいわ。怖い。

「でも私は物にしました。してくれないからそうしたかったんです。多分決して優しいから、しないでしようから。だからもう急いでやっただけです。残る傷で外には目立たないですし、それなら汐見さんだけに、やって欲しいです。今もそうだしそうだったんですよ。だからやっちゃいました。はい。証明とか証拠とかそんなのじゃなくて、単純にあの傷は便利だからです。外だけキレイで目立たない所ですしね。そこに汐見さんの指が入るなら、汐見さんなら最高、違います、比べる必要もございません。最高はまあ言葉としてそうなんですけどそれよりも唯一、素晴らしいんです。汐見さん唯一だけなのです。もう。本当は悲しむのが間違いいんです。でも汐見さんは優しいですものね。ここまでとは、もう、申し訳もなく私は勝手にやりました。すみません。でも間違ってます。むしろ妥協した部分もあります、こんな薄い膜であんまり痛くも無くて、ただそれだけなんです。便利でしょう？物足りませんよ。より、より、証明等をこれからしていきましょう、いえ、していきませんか？」奈世さんは確かに笑った。色濃い光の願い星が今それよりただ一人の綺麗な奈世さん。奈世さんは楽しいと確かに笑った。「汐見さんこそです！、私と汐見さんと、一緒に！。私は全部。全てです」

私は言うべきだと思う。奈世さんの…、ああ、ごめんなさい、不安の理由がようやく、やつと分かったわ！。繰り返さないと私は奈世さんに思った。だからその事も含めて言った。

私は中指を触れずに抜いた。傷口も周辺にも…、その痛みは無いはず！。

「私も全部楽しいわ」

もう涙は止まった。制御が戻ってきて、奈世さんのおかげで体から良い調子になった。いえ、体も心から来るわ。その気持ちもいつものことだもの。気持ちは気分になるの。調子。最高より凄い気持ちになるわ。そこから体も…、体もいいわね。奈世さんの言っていた事が分かる。私も奈世さんにそう思う。ずっとそう思ってくれていたのね。スペックを生かそうと私は思う。これからはもっとそう思うので、もっともっと私の力をあげたい。きつと以前とは比べ物にもならない。比べ物もの。悪くないものね。でも奈世さんは間違っていると思うの、私が私を使った方が上手いわ。だって私の体は、完璧だもの。奈世さんは赤い中指を見ている。淋しい不満の視線から、奈世さんの血液ではなく先には私の中指と女性器の外側があった。たまに後者を見ようとして戻る。視線が西日の錐みたい。細く開いたその眼がちよつと痛くて、切ない欲望が私に刺さるの。奈世さんは痛いわけではないのに。そこは上手く抜けたと私は分かった。でも中指と女性器に不安と欲望、少し悲しい水気が瞳に潤んで私は困るけど、でも私は、決して奈世さん、その行いを繰り返したくはないのよ。すぐ分かり易いけど困ったわ。奈世さんがかつて導いた中指だからこそ、欲望は、奈世さんの意思なのね。でもそれはもう絶対に嫌よ。無理よ。私はそんな趣旨を言った。

「奈世さんそれは、痛いのは駄目よ。私は絶対に嫌よ。絶対、いいえ私じゃなくツて奈世さんなのが、ダメなの。私の心配はしてないわ、本当。私は完璧だもの。肉体が強いから、能力があつて何でもできるの。これは確信できるし、私には心配がないのよ。でも現状私ではなくて、奈世さんご自身の肉体が問題にあつて奈世さんを傷付けるのは絶対、許せない事だわ。奈世さんのお願いで無理よ、奈世さん、私は奈世さんと一緒にもつと良い事を私は、奈世さんとしていわ。どうか、だから奈世さんの、もつと良い私との欲望を聞かせて。」

「じゃあ早くさわって下さい」雨の日の視線。上目で熱がある。不満が心底嬉しいと思う、だってそれは私もそうだもの。何故か奈世さんは『あ、』と眉尻を下げた。「ああ、あの違う。違うんです。合ってますけど今のは違うんです。触って欲しいです。本当！不満も何も無く本当なんです」。私と奈世さんの願望からすると嘘ね。欲するところの体つきに触れる。腋からずっと。すべすべね。太ももまでほぼまっすぐ通って脂肪の下、筋肉を揉み込んだ。だから少々強めに力を入れた。皮膚脂肪血管を快楽で結ぶよう、神経もしっかり刺激する。緊張。乳酸。緩和で解消、揉んだり撫でたり繊維を愛でた。まるで奈世さん御自身、髪の毛みたいにたおやかな一本一本の線が肅々、元気に詰まって柔らかい真芯様。さま、この密度が本当に心地好い。腿なのに真芯。素晴らしい。二本揃ってシクリと柔らかい。しっかりと固い。柔らかくとりけるように、火にも溶けない硬くて鉄塊粘土に気持ち

よさそう、自由に指を舞わした。色んな快楽を私はできる。私の大きな綺麗な指で、爪跡勿論指紋も残さず一切丁寧さで以て、私は奈世さんの太腿を一巡していた。骨も丈夫で綺麗な感触で、内側まで一巡素晴らしい。お声も自由に硬度が変わって、あ少し遊び過ぎたかも。綺麗でもあり可愛らしくもあったわ。楽しそうな悲鳴は悲しくなくって、ひめいは喘ぎ声と吐息。激しかったり深かったりする息、声、静けさからジュエルの砕けた涙と、涙以外には大きな声だったりする。それがステンドグラスに刺さるみたいに声の宝石破片が歌より叫ぶ。激しいのに流れるような声。静かでも大きくても一緒。気持ちよさそう、楽しそうで間違いなくって奈世さんは私の両手に向かって小さな手をしっかりしがみ付く。もつとで気持ち良くて了承、欲望のままに私の指まで圧力を通す。奈世さんと私で奈世さんをぎゅっと揉む。骨肉蕩ける油とすべ血管全てのパーツを抱きしめる。血と神経がソプラノよりよく流れて私もすっごく嬉しいわ。だって、奈世さんは今とっても元気ですもの。ずっと元気な体で心も元気で私と一緒に笑っているから明日はサイクリングがいいかも。太腿も、いえ、全身全霊が良いわ。だから水泳一緒に泳いでみたいの。私も私は泳ぐのが得意ですもの。私の筋肉は奈世さんとよく似ているわ。大きさと仕上りの差は確かにあるけど奈世さんも！綺麗で力持ちの体で全部強靱さが一杯詰まった体よ。一緒に泳いでもっともっと見たいわ。泳ぎを楽しんでくれるのかしら、好きかしら、楽しんでくれるように頑張る！奈世さんは私を好きなのよ。私も好きよ。奈世さんの体から、楽しい気持ちもち良さも得るべくして、今私はセックスでそうするから幸せ。奈世さんこそあったかくて、もっともっとと幸せになるのよ！…揉むのがとてもよくて気持ちいい。幸せな現実と理想が見えた。「こうやって幸せに触るべきなのよ、奈世さん、言う事が違うのは嘘でしょう。私の発想が遅れていただけだもの。ごめんなさい。行動こそ、そうね。悲しい不満足はもうないわ」発想ではなく現在の行動こそでそれこそ行うべきことだから私はさらに正確に激しく触れた。太腿はこれで最後だったから最後に筋肉を硬く締め込んだ。奈世さんの筋繊維を指先で流して揃えて、表の皮膚から一緒に撫でさする（神経細胞をしゅりしゅり刺激する）。何故なら私は奈世さんと共に自然な緊張が、欲しかったのよ、奈世さん、じんわりと付け根から腿が開いてて硬い筋肉もぱつと輝いてて好きよ。キャパシティをちよつと超えて硬くしちゃったからまあ少々、疲労は残るけど、でも完全に丈夫な筋肉よ！大腿筋が煌めいてるのは奈世さん。奈世さんの筋肉を私が、太腿！、私が可愛く綺麗に鍛えてあげたの。これで女性器ももっと気持ち良くなるわ。私たちの欲望の達成を私は凄まじい位！、確信しているわ。私は奈世さんの女性器に触れた。

汐見がとうとう始めようとしている。しかもセックスではない。いや、やった。始めての汐見のマッサージ。奈世さんに、した。奈世さんにした。太腿を仕上げてあげた。汐見が私…の体軀じゃない。揉まない。奈世さんを気持ちよく揉んであげてる。それも終わって気持ち良くなった！嫌！最高の筋肉にした！？なんで。汐見のマッサージは私だけなのに。汐見は、私だけの特権なのに。あの女はもう許さない。どうせ褒められても貧相な体つきのくせに、モヤシの亡きがらみたいなカラダの、くせに。なんという情けない女だろうか奈世とかいうあの女は絶対絶対に殺す。いや、別に。それは駄目だから、守るべきだし絶対生かせておくけど汐見が絶対死なせばおこるし悲しむし、やだ、嫌だけどその上その上汐見は悲しむし、もう奈世さんが居ないとあいつは悲しくて泣くし、汐見がこんなに悲しいのだから私が決して死なせはしないわ。私もね。汐見とおんなじね、でも今回：今回は奈世さんで！許さない。絶対、許さない。奈世さんとかあの女、あの女、私は奈世さんを永久に許さないっ！でも汐見はセックスしようとしている。奈世さんと愛し合ってきたもの。ずっと。私も汐見と仲良しなのよ。ずっと：時間以上に色々差がある！嫌だ。もっと前から自覚するべきだった。（奈世さんは会ってすぐでよかったらしい。）汐見は奈世さんと幸せになるべきね。涙も流さず黙って聞いていた。少し笑う顔。心と別れて便利ね。（奈世さんとの、便利な道具になりたい。）汐見と奈世さんは幸せそうで良い。幸せそうで良い。幸せっ。

液の量は既にとっても多い。白米の研ぎ汁、張りのある溶かし汁のように女性器から太腿上部へたっぷり、ところろにシートを塗り込めて、指もいつしか私は濡れている。奈世さんの御陰でその前からずっと、指以外も濡れたい、濡れている！嬉しい。本当にすっごく嬉しい。気持ち良いのはずっと一緒だったけどこんなに、奈世さんの洗液は多くて指にも馴染むわ。皮膚に優しい、素直な感触で：ぺとぺとした西洋米かしら。それも白米なんて、あるのよね。奈世さんは綺麗なものね。姫様。右手の人差指はぺとぺと。それは五本指が全部そうだけど、左手も一緒よ？。多い水。液。入れるのは右手の人差指で、左の指では陰核を撫でて問う。つまり先に左指を動かした。中指で核の芯に触れてゆっくり擦る。ノックもゆっくり、ゆっくりと：ああ小さいわ。とんとん桃色、赤色、（奈世さんの性器、）薬指人差指は上から下、上、海綿体（外周部）を左右へまんべんなく、揺り撫でた。そういう質問、つまり外側からね、奈世さんに聞いたところ奈世さんの息は、それは、舌と喉から急き切りお腹と脳から、楽しそうに山風を抑えるみたいに上品、繰り返してくれるのね。嬉しいけど一つだけ不満があるわ。

「目を閉じたりしないで。」

息がひゅっと止まった。心配になったけどすぐさま早口が返ってどんなに、CPUより早く、奈世さんの声が聞こえるわ。か細くて風より早い声だから私はそれでも満足していた。

「ダメ汐見さん無理です無理なんです、無理！」

「分かったわ。綺麗。我慢が素敵よ」

「だから無理ですつい目を閉じちゃいます指早く最後まで達してばかり！最後に最後に死なない前まで入れると素晴らしい快樂を下さい！」

「分かったわ。もう大丈夫、無理に話してもらってごめんなさいね。言葉で言うと、私は楽しいわ。少し笑った落ち着いた表情よ。心も体も安心しているわ。良かったわ。奈世さんの声が良いのよ」

宝石が千々に吹きすさぶ一すじの。必死さ、声、風、どれもそう。頑張り屋さんね。奈世さんは、あ、私は奈世さんへ言っておかねばならない。

「ああ勿論、声だけじゃないわ！氣遣い、優しい心も体も、そうよ！つまり奈世さんは全てが、素敵なの！綺麗で凄く良いのよ。素敵。」

シャワーからここまで水分を摂っていないので奈世さんが少し心配になった。女性器の液量もさらにびしゃびしゃ濡れる。心配ね。奈世さんの体は良いけど私は水分については平気で、私の体は奈世さんより強いから、どうしても能力の差で心配になるわ。自惚れはともかく、実際に奈世さんは私が綺麗かつ素晴らしいと言ってくれるし、体調については勿論大切よ。不安は不安で安心が一番だもの（奈世さんが安心、安全であることよ）。右手の指、人差し指を使って、今からでも早くかつ丁寧に、丁寧に最高の瞬間へ奈世さん、私は奈世さんを最高に楽しませたいわ。私たちの願う快樂と、欲望全てを叶えるの。私は指を奈世さんの！女性器へと刺した。内部の海綿体をゆると、一気に攪る。仔猫を転がすみたいに刺激する。くるくる触ってくるくる回して、縮むことなくしゅるしゅる最適化、くすぐり、快樂、最適化呼吸、奈世さんの呼吸と我慢の弾けた御声で楽しいひめいや叫びへ最適、最高、左手もつぎつぎすぐく分かって撫でて揉んだり、揺らしてリズムを取って、快樂の空の向こう岸も越えたい。何が、奈世さんに私がするのよ。私が奈世さんにするのだからもう、そんな事なんて、とっくに越えているのよ。水分が増える。心配ね。奈世さんの振動が激しくなって私を支点にきゅうっと抱いて、未だそれでも丁寧に固定する！奈世さんはいつも私に優しさ、氣遣い、過ぎるわ！残る手の平や胸、お腹、腿、私ならどうにでも動いて支えられたのに。私の指は決して折れないし、もちろん奈世さんが傷つくこともない。私はどうにだって優しく動いてはつきり調整できるのよ。奈世さんはそのまま我慢する必要も無くて私が体全部で、心で尽くすのに。でも奈世さんは最後まで優しいわ、だから私は涙を流して泣いて、だけど私は奈世さんが嬉しくて、嬉しいのは奈世

さんも楽しくて、気持ち良いのは快楽の事もそう！私と奈世さんの今セックスの良い結果は奈世さん気持ち良さそう大きな吐息が一すじ、最後に二すじ、つぎも息：その前にはもつともっと大きな水分（吐息の落ち着くずつと前の事）、奈世さんの女性器の奥からじやぁんと細い急流あらあらしいほど水気が奈世さんの水が手に当たる。

汐見は幸せそうね、とても、奈世さんは幸せそうねとっても、本当に全部が幸せで、楽しくて気持ちがいいのでしょうね。心と体、二人とも、何処をとっても彼女は幸せそう。私は彼女になりたかったわ。奈世さんは御免だけだね。貧相。私の方が強くて綺麗な筈で、でも汐見が綺麗と言っているからやっぱり奈世さんの方が綺麗。やだ。やっと終わってくれたと私は思った。そのあとまたシャワーに行ったらしい。は？汐見はまだ全然、満足してない。満足してるけど快楽は？なに？欲望とか快楽は一体、どうなったのよ！何の話よあれは！何の話よ！奈世さんだめ、奈世はもう全然だめよ！（呼び捨てにしてやった。満足。）…一応ごめんなさいとか言ってる、ぬけぬけと。まあ。言ったらしいわねムカつく、むかつくむかつくわ。腰と腿抜かす位なら頑張れ！セックスでも汐見に尽くしなさいよね。セックスでも、汐見に、尽くしなさいよね。汐見の事を優しくするのは認める、認めるけどセックスが無様過ぎ。奈世。それはまあ：無様かは分かんないけど、ひよっとしたら汐見が認めたことだし次からは物凄うく上手いのかもしいない（認めたうえ大好きで愛しているわね、でもあんまり考えたくない。奈世サンっ。）でも次失敗（今回素晴らしいんだけどさ！）、失敗したなら駄目よ！繰り返しは御免よ。良いのなら、素晴らしいんだったらやっぱりやだけど。いや素晴らしい。良い結果、になる。私ならずと幸せにするけど。汐見ともっともつと幸せになるけど私より、奈世さんが元気で幸せ！汐見が。（汐見が幸せになるの。私も、私も幸せになってるわ）。奈世さんだけが汐見を幸せにできた。私は応援するだけ。私も。何が楽しい事かは汐見が知ってる、私もその中に入っていたけどこれから奈世さんの次に来ている。奈世さんが私より汐見の全てに多くの部分に、最高になるの。もうなった。なったの。奈世さん最高。私は二の次。奈世さん恋人。私は幼馴染でしかない駄目な子。女。女の子のくず、いや、そうじゃないわ！汐見が言ったわ！私の体は汐見に近いもの！最高なもの！ごめんなさい汐見、私はだめな女なんかじゃ無いの。心はこんなだけだね。ごめん。でも汐見は幸せになってほしいのよ。その点は奈世さんにも（絶対！）、負けていないわ。奈世さんは汐見にだっこされている。そのままシャワーを浴びた。

（きれいに。）汐見と二人でとっても幸せのシャワー、体が疲れた奈世さん、抱っこ（汐見が、奈世さんを。悔しい。）…汐見は（＝奈世さんに気を遣わずに）今すぐオナニーするべ

きなのにね！私を手伝っちゃうのに違う！、奈世さん、奈世さんは疲れてできないなんて！貧弱で貧相な女の子、駄目！綺麗で元気な子ってのはどうなったのよ、どうなったのよ奈世さん！何がごめんなさい、なの。私だったら最後まで出来たのよ。汐見は、貴女を好きになったの。好きで好きで愛しているのよ、ほんとに。本当に私は言うべきだったわ。好きとか好きとか恋とか…片方。私は片方だけよ。本当。奈世さんこそ両方元気なの。汐見も貴女もどっちも元気になるのよ。元気で明るい未来なの！。本当。(奈世さん。汐見との、)汐見との

セックス頑張りなさいよ。

微笑ましい表情から汐見が変わって突然、私をかつこよく睨んだわ。嬉しい。

「私と奈世さんに対してのお節介はやめて」

それを聞いて私はなんとなくわかった。

「ごめん、どこまでかは覚えてない。でもセックス頑張りなさいよ、汐見」

「繰り返したわね。当然よ」

またソラのように綺麗な表情、汐見の火がずっと冷えて落ち着いた…こいつの火はいっつもあるけど。短気。もしくは完璧な気配よね(こいつを怒らせるのは綺麗で楽しい)。今は多分、でも、奈世さんではないから。汐見に私が注文するのは、良い？けど、奈世さんだったら絶対(！)許されないもの。汐見は可愛いから分かる。綺麗で美しいから分かるわ。

「奈世さんは大切ね。汐見。」

「勿論よ。何故それを今言ったの？理由は？」

「なんとなくよ。それだけ。」

「当然なのに。わざわざ言うから何か、とびつくりしたわ」

「大切でしょ？だからよ。私も言ったの」

「ああ成程。貴女も。話してよかった。」

ああ、うん、ありがと。コクコク頷く。汐見の笑顔は奈世さん、とっても、奈世さんこそすっごく羨ましいわ。『話してよかった』。超笑顔。私に奈世さんの御陰でくれた。雪の結晶が真夏に咲くような、冷たいままとっても…気持ちが良いッ！

汐見と奈世さんがはなれない。仲良し。いらつく腹が立つけども仲良しは良いわ良いからね、ね、私の体はベッドの中に。頭の中ではなれたりしないわね。汐見と奈世さん、恋人同士！わーぱちぱちぱち！愛でたくない！ああ！私は固つたい枕の上でもやもやモヤ眠っていた筈なのに何故か内側と外側の中には汐見と奈世さんが一緒に、一緒に！離れない恋人同士よ！ずっと！恋と愛なんて汐見だけで幸せなのにつ、汐見と私なら一緒に良いのに実際幸せいっぱいなの奈世、じゃなくて奈世さんと汐見が幸せ。汐見と奈世さんと汐見が幸せ奈世さん、やだもう。とてもいや。でもこれが一番いい形なのよと私は幸せを考える。そうしてれば最悪の事象が出てくる。どうしてよーそこは最高でしようにほら汐見との二人だけの勉強会とか汐見は私と居るより奈世さんが、いい。正直な私の気持ちが出てくるホラ最悪よ。（嫌な事。）今日聞いたので一番いいくないショックが始まり汐見が二回目のシャワーで言った、

「奈世さんの声はいつもよ。髪と、一緒に黒よ。水より黒が綺麗で、墨より水よ。それよりも綺麗。美しさが濃くって重たいの、だから私なら持ち上げられるのよ。心地よくひょいっと、抱き上げられるわ、いえ私はともかく奈世さんの色はきつと、薄めるでもなくとろりとした黒よ。それが水なの。それより比較もできずに、奈世さんだから、比べられないのよ。言葉じゃないのよ。凄く良い。だからさっきのは私の勝手に喋った私だけの言葉でしかないわ！そしてその、これが本題だけれど、奈世さんの声はとっても綺麗で、快樂に出会った時の素敵だったけどウイロウの餡子が澄み渡るのね。しつとりと。積まれた上品な黒が、撫でたら形を綺麗に変えるの。その通りなのよ。ずっと変わるの、撫でたとおりに綺麗なウイロウお餅が。さっぱりした餡子のお餅なの。黒くて綺麗で、それがもうきいんと澄むのよ。きんきんきんの水羊羹で、可愛い。甘味に不協和音が一つもないのね、もう一つ残らず全部っ、可愛い。抑えの利かないウイロウは羊羹なのよ。さっぱりした綺麗な水羊羹が、お湯に溶けないつるつるの炎で澄むの。それは大切な熱よ。快樂よ。私はどうにか言葉にしたら近いわ。近いけどそのみだからもつとよ、奈世さんは当然それより強い。ずっと強くて素敵で、ずっと凄いの。だから私の態度が不安になるのだけれど、奈世さんにとって私は大丈夫かしら、いえ！だからと言っても勿論、奈世さんの責任など存在しないわ！ただ単に私のみが問題でそれがセックスの時の態度なの。特に声が、奈世さんが綺麗だからこそ私と一緒に居て大丈夫か不安なの。今は気遣い無く、思い切り言うて欲しいわ。」

奈世さんは泣きそうに見えたとかそんなかなり寂しそうな顔をして（らしい）、でも直ぐ笑って言うてくれたとか。…こんな汐見を愛した言葉を言った（無論、素磨子さんは悲

しいまだった)

「つるつるの石炭が燃えるとへし曲るんです、石炭はもう綺麗な、大きな塊で、汐見さんの両手がやりこく曲げます。つきたてのお餅の軟度です。輪っかにしてやりこく曲げてしまえます。だって汐見さんは比べちゃいけない人で、そんな綺麗で格好良しですからね、汐見さんが輝石をへし曲げてあげたら、沢山、綺麗になりますよ。はい、あの声です。あの、音です。でもずっと綺麗。例え等、本物石炭などは石ですそんなこんなよりずっと美人さんの声！、可愛くて御綺麗なのですね！」

『やかましい！』これは私の声だ。口には出さないし出せないし思ってるだから夢の中でも目を覚まさない。夢の中でも汐見の幸せな悪夢。幸せな悪夢。私の悪夢。奈世さんは不幸せの印かあるいは不幸の使者とか言ってもいい。いやでも良くない。私は嫌だけど、でも、汐見が好きな彼女だもの。汐見が好きな…好きな…好きな…

私の幸せを考えたい。それは絶対に奈世さん（＝（認めたくない）汐見）の不幸とは異なる。異なるというか、むしろ絶対に違うわ。それじゃ無いのよ。奈世さんとか、出てくるな。汐見と延々一緒に…ああ、もう！とつとと幸せにしていればいいわよ！私は汐見とずっと、一緒だものね！ずっとずっと子供の時からずっと、汐見と私はふたり一緒に居たもの！私は奈世じゃなくて素磨子！素磨子さん私もさんと呼べ！駄目、私は最初から呼び捨てよ！ああ、だんだん引き出しのなかが出てくる私の記憶がしんとする！ああ！夢の私が夢の中みたいな現実、過去の中。そう、過去の中に居る。というか今よ。いま四歳。五時？汐見と一緒にの畳張りの個室。テーブル、料理、分厚い（高級？）座布団、黒塗りの木材テーブル（テーブル？）。高そう。足の低い机。つやつやした、馴染みやすいウルシ（多分）。目には馴染まなくとも手に馴染むから、高そう。全体的に白と黒とベージュ色（日本のあの白というか砂色というか和紙っぽいあの色はなんというのかしら、でも私はもなかの外側にも見えるわ断じて小豆のジャムではないけどああモナカの、キツネ色の焦げ目は控えめ…焦げ色？とにかく白っぽい色で。控えた白よ。白？白よもう！。）が多い。部屋はそういう感じの和風レストランだった料亭かもしれない。いや料亭よ。ステーキを食べた料亭よ。醤油。美味しい醤油味としか言えない。まあ美味しいね。四歳児だもの（＝醤油）。だからこそその、和風レストランなのかも？でも高そうで上品そうだし料亭、実際上品だったし間違いなく高い。美味しいし。汐見が選んだ店だし。汐見は既にお箸（これすら黒塗りで高そう）を完璧なまでに使いこなしてた。凄まじい四歳児だと思う。私はお箸でステーキを食べていた。汐見と一緒に、ね。一緒。ステーキと一緒に食べたわ。美味しい、私のお箸はクロス持ち。細長いペケ字に持つけど…今も。昔から成長していない。まあいいけどね。汐見は上手。あのなにやらカチカチ、びったりするアレ上手なお箸の持ち方よ。それも実際にはカチカチ音すら鳴らない、綺麗にすーっとお箸を持っていく。挟む。無音。お箸をお口に、一口分だけしっかり食み通す。今思えば汐見って昔から凄いわ、

いやそんなの分かっていたわよ私は！四歳の時から汐見は汐見なの凄。それよりも綺麗で、綺麗で凄いわ。ところで私の服って幼稚園児なんだけれどこれは制服っていうの？似合っていない。いや似合うというより、場所に合っていない。スカイブルーのなにこれ、なんでこれそう、汐見が無理矢理に私を連れてきたからよ。でも何でこの…汐見は同年って言うのにシックな黒地の何やら、上品な長袖…袖の縁に黒、首の縁…から、腰の上までだいたいの全部黒。上着のおしまいまで全部、三種類（四種類）全部の黒がきれい。潔癖症の喪服のドレスみたい。つまり、私の適当さと違ってきちんとしてるわ。汐見は綺麗にできている。薄くて艶のある白いソックスと、またミニスカートの分際でまた上品な。ああ、この時から汐見のふくらはぎは鋭い。この時からというか…ずっと。生まれる前から。絶対そう。ふくらはぎは柔らかくて鋭い。綺麗に走った筋肉のライン綺麗に走る筋肉のライン綺麗な、強靱な形作ってる。ホントどうやってもいつみてもキレイね。切れっキレ。机があっても見えるわ、というよりの確に想像できるの。その前に座る前から見てるし。食べる前、汐見に捕まる前から。出会った時ね。もう捕まる直前。いきなり話しかけてきたし。こいつ同年、とは思えなかったし。綺麗だし服より本人が強い。強くて綺麗で服装も、そりや綺麗にあるけど、それより本人（そう）汐見が全く比較もできない！強くて綺麗はそれだから、よね。とにかく私は汐見の体を見ていた。性格とか会話はそれからだった、でも汐見はいきなり話しかけたもの…私に！。私に汐見は言った（あと汐見は間違い無く私に言った。）

「綺麗な顔立ちと体をしてるし元気な美貌を持ってるわ。元気が凄く良いわね。とても強い元気で、肉体が見た以上にずっと強いわ。そうよ、それまでが外見だったの。綺麗な体はもつとだわ、もつと。ずっとすごい。ずっとつよいの。一応名前は？あるの？貴女。」

「あるよ。すまこ。あおぎりすまこ」。もつとまじな事が言えなかったの、私は。汐見に綺麗と返すとか、好きとか。何ならあなたは誰なの、でいいから汐見が答えてその言葉に凄いと返して頭よさそうとか大人っぽいとか綺麗とか強そうとか褒めて、褒めるっても事實はそのままでからそのまま、あいつなら無反応でしょうね。当然だから。自分で汐見は知ってる。そもそも頭とか大人っぽいとかって私が言われない事だったしね…その時。今はもう違う筈…でも汐見には、ちよつと言われたいわ。奈世さんには会いたくないけどね。言いたくも言われたくも無い女、ほんとと汐見とは大違い…ああ、でも汐見の恋人ねごめん。嫌味じゃないわよ？ごめんなさい。エエごめんね。汐見は私に言った（4歳だった）。

「名前があるのね。すまこ。そう。ごめんなさいね、名前があるか疑問だったの。名前が無ければ私が付けようと思って。字はどう書くの？あおぎりすまこ。すまこ、ね。私は汐見と言うのよ。常世の汐見で、漢字はこう。」汐見は生徒手帳らしきものを見せる。園児手帳なの？金持ち。昔も。私はそれが『汐見』かそして常世かも全く分からなかったけど、ともかく汐見のかっちりした手指が、これが汐見、前のこっちが常世、とさしてくれたお

かげで両方分かった。「頭は微妙ね」と汐見は言っていた。今から見れば4歳を考慮して欲しいけど当時から同い年の私と汐見はやっぱり私が劣ると思った。恥ずかしくて今でも死にそうよ汐見ちゃん。4歳。頭いい四歳児のしおみ。私は漢字がわからなかった。そう言う（わかんないとか何か）彼女は私を拉致した。正確には「そうなのちよつと待って待ち時間の経つまでは食事をしましょうと夕ご飯になるわね」という風に一続きで言った。私はアホみたいに「たべたい」と言って汐見は「良かった」と言った。汐見は嬉しそうに微笑する：微笑って。4歳園児のくせに。幼稚園児の4歳のくせに美人ね。私はやつぱり嬉しそうに笑った。ちよつと赤い笑顔。照れた。恥ずかしくて恥ずかしくて、綺麗。はにかむという言葉を知らずに知った、私と、汐見は知らなくてもいい！。私だけ恥ずかしいとずっと知っていれば良い。汐見に知られたら今寝込みそう、寝てるのに起きて尚私は倒れる：汐見のせいよ。可愛い、綺麗。けど知られていれば奈世さんより前に、嫌、私が前に前からずうっと汐見と友達なのよ！気にすることない。全然ない。私は汐見について行くとすぐ汐見の背後すぐの車に乗った。乗る準備もすぐに、と、今見ればフェラーリね（危険安心。汐見の膝へ乗る：無論汐見によって乗せられた。当時もやばそうだと思ったそうそう、クルマ古いのもキケンそうだって失礼ながら思っていたわね私、たしかこれエフ四、五十だか何かよ？）。兎も角私は汐見の膝へ乗る。ついでに車にも乗った。そして4歳の私は、こう言った。

「いたくない？」。汐見を心配している。幼稚園児の私、えらいわね。汐見は間を置かずにすぐ、「平気。貴女は痛いのか？体格にも筋肉にも恵まれてるのに、だから骨格から全部が優れているでしょう。だから貴女も痛くは無い筈よ。絶対そうよ。貴女も優れているもの。」とか4歳児に見えない事を言う。案の定私は見えていないから多分（絶対）体へ乗ってるのは自分の方だし痛くも無いのは当然だからと「うん、ありがとう」ってへらへらしてるわ。年相応の馬鹿げた良い笑顔！。乗せてもらったのは私の方なのに。車？クルマはどうでもいいけど汐見の太腿と膝の感触が私のお尻に当たってる。今より随分小さな体ね、膝も腿もお尻の形までふたり、ふたりいっしょに4歳からいるの。汐見は129センチ33キロ私は130の、35キロ。今思えばフェラーリに乗れたのが奇跡、あ：汐見が乗る前にごちやごちやして気がするけどあれはきつとその、フェラーリを壊したのかしら。内側の足当たるトコとか開いて、空気にして椅子も後ろに下げて：一杯、乗れるようにして。だから私達二人が乗れたのね。汐見の膝の上。最高。4歳児の私に代わって欲しいわ、二人だけの空間が始まっているのよ！。運転手は居ないし。自動運転している。車じやなくて：自動車ね。自動車って素晴らしいものね。自動車は本来が単なる車でこれこそ本当の自動車よ。だから汐見と二人で食べに行くもの。汐見と、二人で、食べに行けるもの！

幼稚園が終わったばかり、拉致。今から思えばむかしからだけど、すつごくすつごく嬉しいわ。

とろんと幸せ。はっとする。突然お肉を食べて気付いたわ、だって味がとっても美味しいんだもの。私はステーキ屋に戻って来ていた、到着していた。座って食べてる。座敷。料亭。車で予約を？私と汐見は子供だけなのにあの時さっそく座れた気がするステーキを食べた。食べてる、美味しい！。醤油とお肉の味がする。油はあまり：下に引いただけかしら、おかげで肉の味が濃いわ。がっしりしている肉の味と肉。一口一口が分厚くて、歯でぶちりつるつる切れてくの。お箸で一口一口？鉄板、お皿は熱くじゅうじゅう言うけど最初から切れてたわけではない。だってナイフとナイフ（刺す用か、細い）でお肉を並べた切った跡がある。鉄板の左にちょこんと乗っていたから。私には分からない切り方で、汐見が切ったわ。4歳なのに、思い出したらあの時親切ね。優しくて私は幸せよ。4歳の私も楽しそうに食べてるし：あ、だからもうステーキ！がないわね。ずるい。汐見はお肉を切りながらこう言った。確か自分のを切る前に、私の方から切ってくれている時に、木の柄のナイフとナイフ（刺す用）を上手に使う

「漢字が読めないと言う事は下手なのでしょうね。私が切ってあげるから任せて。」
「あ、うん」

私は汐見に任せた。4歳の馬鹿な頃の事だった。：思いだしたわ。何となく偉そうだと思った！今はもつともーっと偉そうだと思うわ！。まあいいけど。汐見は上手に切ったし。ステーキは美味しかったし：自分のを切りつつ言って、私はその時既に食べ始めてたわ。4歳の私にも問題があるよね、でもとにかく汐見はこう言ってくれた。

「美味しい？」。今より純粋で可愛い（多分）。言葉はくれたけど視線はナイフにお皿ね、まあ危ない？し、それはそれでもイヤ当然！当然のことね、ごめんなさい。私4歳は何にも考えてないけど。：ないけど、今回はそっちのが良いわね。汐見の問いに笑顔で一言、「はい！」と、私は元気に答えた。ちよっと緊張したような言葉遣いでも顔は4歳児らしく足りないスマイル：妬ましい。私より良い子になってる。汐見に押し付けたりしないのが、良くて、今の私も見習うべき所！。だから、汐見の目に可愛いと映れば良いわねいや希望的観測云々じゃなくて是非私も、可愛い、と思つて欲しいわ。できれば4歳から今までも。いや私も？あの女はここには居ないわ。だから私を、可愛い、と思つて欲しいの。汐見。お願い。今までも。また押し付けてる。昔は可愛いから、汐見、私はもう口出ししないから二人聞くだけでいいの。汐見と私を今の、私の夢から見ているだけなの。あ、汐見が私にステーキを話すわ。

「咬合力がないと噛めない料理よ」

「（う）ごうりよく？」

「噛む力よ。美味しいわ」

「うん」

「噛む力があるから美味しいの。ステーキがしっかりしてるから美味しいのよ、これは。柔らかくも何ともないでしょう？」

「うん。だけどおいしくて、たべれる」

「ええ、そうね。」と、汐見も切ったのを食べた。一息、一息、噛んで呑む。小さな喉からこつくり頷く(可愛い)。「…美味しいわ。まさに食べれる、そう食べれるのよ、貴女ならきつと、このステーキを食べれると思ったの。咬合力があつて美味しく噛めるのよ。貴女もそうね。やつぱり。嬉しい。これは歯応えがあつて、美味しいの。大好きなのよ。私の好きなお肉よ」汐見はまた同じにして食べた。美味しそう。スマイル。食べ方可愛い。「…、ええ、この料理はとっても美味しいっ！私と貴女の最高よ！うん！ステーキ牛の腿肉でもこれは、林檎やトマトよりも真っ赤に熟した赤くて凛々しい腿肉よ！」

汐見が美味しいって言ってる！嬉しい！汐見の御馳走だけどね、嬉しい！ありがとうと御馳走様よ、汐見！4歳の私も、ありがとう、って言ってる！…まあ馬鹿なりに。4歳児子供なりには…、ああもう、その場で伝えなさいよ！私が汐見の事を好きって、いや、そこまでは行かなくつても、だから一緒に居て落ち着くし憧れちゃうって！。じゃあやつぱり汐見が好きなのよ。その時からずっと、好きなのよ。初めからずっと、素敵で憧れ、ね、大好きなのよ。対等なはずよ。その上で憧れているはずよ。やつと気付いたわその時気付かなくつて、凄くて憧れてた気がするけど汐見と私は一緒に居たのよ！。だから一緒に暮らしてきたはずなのに。楽しくて、一緒に生活してきたのに。同居か別居か一緒にいるもの！、幸せな時間ね。幼馴染の始まり。(ステーキはとても美味しかったわ、汐見…汐見に言つてまた食べに行こう、二人で、私と汐見の二人で思い出の美味しいステーキ屋さんで料亭かも、ステーキを二人で食べるの。私と汐見。私と、汐見と私がっ！…無しね。汐見が喜んでほしいわ。奈世さんと三人で食べに行きましょう) あら？うん、幼馴染の始まり。奈世さんの薄切りとか霜降りとかでもいいでしょ、食べやすいと思うし…ここ美味しいし。ステーキと単品(和風の京都っぽいアレ)しか、私は食べた事無いけどさ。じやあ肉以外で。奈世さんはお野菜、刺身で。魚なら刺身とか天ぷらもあるしおすましとかかなり美味しかったし茶碗蒸しも薄いダシがしっかりついてた。多分正方形の部屋にハープの音がね、しんと鳴るような味でステーキには及ばないけど美味しい！まあ奈世さんならそれでもいいと思うの、どの道おいしい！どの道、ね。私と汐見が会話をしている(4歳)。汐見がこう言った。…ああ、嬉しい。

「あおぎりすまこ、さんね。そろそろ検索できるわ。ともあれ素敵ね。こうしていると楽しい。貴女の身体は言うまでもないけど…、非常に素敵と言う事よ。分かる？貴女は私より頭が悪いもの。素敵だけどね。この場の雰囲気も貴女も…、いえ、貴女がよ。貴女は凄く、素敵よ。」

嬉しい。今よりも褒めてくれる気がする、きっと初対面の雰囲気感謝しよう…と、4歳の私も感謝しなさいよ！もう！今じゃないから二度と来ないのよ！私十七歳が譲ったも同然なんだから。夢だからって違うも何もない。多分。おかしいとは思うけどずるいもの。

私4歳は相変わらずへらへら笑って、

「うん、しおみちゃんもすごくすき」

「そうなの？」

「うん」

ああ会話してる！仲が良い！ずるい！私も汐見とは仲良しだけれどそっちはそっちで汐見が可愛い！だから汐見は、4歳の時から、可愛いっ！、汐見に今好きって言えば良かった！今はもうこの時4歳だもの、好きって言うのよ！4歳の私はアホなの！？最初に、最初から私はずっと汐見が大好きだったのに！、いや、この時に好きって言ったけど言葉がこの場合は素敵と思うで違うわ。好きと思うって伝えるべきだったのよ。汐見は直ぐ私に返した。

「印象等はある？私についてのその、できれば良いイメージか何かよ」

私はちよつと考えて言った。頭が悪いから考えなくてはいけない、私ならばんぽん出てくるでしょうに。でも私は私で4歳だったからこれから汐見に好きと伝えよう。プールで汐見と一緒に泳いで水着を見て体と汐見の肉体、そして素敵な体と汐見の笑顔。私もフィジカルには自信があるから汐見も楽しいって思ってくれるわ。そして会話して笑顔になってくる。私と汐見。奈世さんも来るのね。ああ、会話に割り込んでこないと良いけど。私と汐見のデートで会話なんだから私が当日告白までするしね。好きって言うのよ。セックスも多分する。どうでもいいけど恵まれてる過去の私が汐見に対するあの印象を伝える。

「めがね、って感じ。ゆうとうせい。」

…あの印象？そうね。その通り。しおみちゃんは、めがねではいなかった。

汐見は眼鏡をかけた。0度の。

汐見の家のプールで一人、私は汐見を待っている。裸に水着。そりやそうね。ボディラインは汐見より大きくて太い。胸とお尻と柔らかい筋肉の素肌が丘の上みたいに上がって盛られてのべつ幕なし体の、山岳？合ってると思う。綺麗なの？綺麗。汐見はいつでもそう言うけれど、私は汐見のが綺麗だと思う。そろそろ汐見は来るし、来てくれるはず。私の裸に付けてる水着は汐見が選んでくれたけど、やっぱり機能性、イコールファッションなあれで詰まる所は赤々赤々白くらのF1チックな競泳水着、ああ汐見は好きね。ワン・パターン。お部屋の中も変わっていなかった。よし。昨日の事を思い出したわ、奈世さんの雰囲気は勉強しても全く無かった、ええ、感じなかったわよ。汐見の部屋で一緒に勉強したのよ。セックスの雰囲気は全くなかった。換気と掃除。歓喜？カンペキ！にしても、汐見は準備が速いわ。流石は天才昨日の今日。一昨日から今日。汐見。セックス。私もしたいと思ってる、セックスから、それより水着と水泳。汐見と一緒に泳ぐのよ。ね。汐見の姿も見えたし一緒に、まあ一緒に、あの女も居るけど。上品な水着。ワンピース。白。黒々しい黒髪お姫様の肌、薄空のお茶っ葉にも似た白肌：山吹色はだ？薄めの。白木？どちらにせよ髪の毛とワンピースが目立つわ、くやし悔しくないけど彼女は、キレイね、ねえ奈世さん。

「初めまして奈世さん」「え？」サラッと云えた。びつくりしてて、いえ、驚いてる。ねー、奈世さん。（まるで体中）サラッと冷えた（気分ね）。凍結して死なないかなこの子、このコ同い年？年上？ほんとに十七？ほそこまかい女ね。そう、こまかそう。髪の毛が長くて綺麗だから細かい、ゼツタイ細かい。苦労しそう：、汐見はあれで丁寧だけれど、私は、もし私は奈世さんが汐見に一々文句とか言ったりする所があれば、困るわ。私は奈世さんを殺したくないもの。違った。奈世さんに死んでほしくないもの。私だけじゃなくて、あらゆる理由で。汐見は奈世さんを大切に継続するでしょうしその点は幸せいっぱいでおక్క！私は二人を守りましょ。ね。その点じゃなくてその全部が幸せ汐見と奈世さんの幸せプロジェクト！死ぬ。奈世さんだけ速やかに死んで欲しい。汐見が私を奈世さんに紹介するけど聞きたくないから聞いていないわよ汐見、ごめんね。奈世さんも奈世さんも、嫌よ。なんで私が心の切れ端だろうとあの女に謝る必要があるのよ！汐見はモチ全部だけ。心の！、それだけじゃなく体も認めてくれたわ。いつも汐見は私の体を褒めるの、奈世さんの：まあ奈世さんも褒めたけど、確かに：確かに、奈世さんも綺麗かもしれないッ！ええそうよ！確かに綺麗だわ！汐見も奈世さんのを元気な体つきと言ったしこうして見ればしっかり体力が付いてる。薄い脂肪と筋肉のバランスが良いけどナチュラルね、運動部にも居ないかたちで、じゃあバイトかしらん、いや金持ちそうだし、おうちの仕事？

踊りとか着物？…で、だいぶ長々と働いてるのかも。何かしら伝統的なあの…体使うタイプの習い事。ああそっちなか！。習い事。ソレね。まあ知らないけど真実水着は白い。いやそうじゃなくて、生地が薄い。クレープより餡子の薄皮より薄い。それはないかもだけれど筋肉が透けてる。というか肌の色も、もう透けてる！ずるい。綺麗な肌の色と白。知らないけど白夜の月ってこれでしょ？、たぶんスペインかそこの白い月。ずるい。筋肉はしっかりと綺麗な寸胴！汐見の言う通りだわ！悔しい。私も体なら負けていないのに負けていないだけになっている！。あんまり。そんなに！勝てていないもの！勝ってるけど、月とスッポンじゃなくてあんまり大差が、ああ月とか、いらないつ！奈世さんだけでもこんなに綺麗なんだからその上月とかいやどうでもいい奈世さんは、本物とか要求してない。奈世さんだけで白夜のなんだっけ、ああ月よりスペイン月より綺麗よ。なんで私はこの女を褒めてるのかしら。汐見の彼女だからね。それね。汐見が認めるだけあって本当に、ああ、もう分かっていた事じゃないの私は汐見に聞いて、奈世さんが綺麗！今見てほんとに綺麗！ほんとに…でも本当に私は優っているのよ。汐見の口から聞かない限りは私が優っているのよ！がんばろ。私は汐見に言う。あれを。

「ねえ汐見、今度セックスしましょう」

「そうね。でも始めてね、珍しい」

「は、え？」

奈世さんが言っていた。過呼吸？

汐見さんは今日もあの水着に着替えた。泳ぐのは急な事だったけど嬉しい。プールに誘われて嬉しかったけど…しかもまた汐見さんの自宅に行けて、その冷水プール（温水はぬるま湯で嫌い、と汐見さんは言われて私もどちらかと言えば冷たいのが、好きで良かった。）で泳ぐと、だから…私はみつともないのではないかと凄く心配で不安になったけど汐見さんに教わるのも楽しそうだと思う。そう思って甘えさせてもらおう、と、私はメレンゲのような時間にたっぷりお砂糖とミルクを加える。胸いっぱいの水泳教室をしたい！。そう考えて水着を詰めてきた。背中に翼のあった骨、後ろ肩と背骨のシャープな谷間を腰の上からくくつと開いた水着。そこ以外は布越し透き通る白の剥片みたいなワンピース。雪のひらを延ばしたようで好き。です。汐見さんなんだからわくわくしていて、雰囲気があるという雰囲気です。二回なのは、私もそうだからでしょう、むしろ私はいつもそうなのですから汐見さんが楽しいと貴重で、嬉しいんです。貴重というのは失礼でしょうか？いえ。完全に優るのでから確実に、大切な、ことなのです。私の好きな（大切な）人です。着

替えているうちに汐見さんは着替え終わります違うとうに、着替えを終えられていますから私は大変たいへんと申し訳ないのです、私が汐見さんに対してです。何故か汐見さんもその様なお顔をしますね。汐見さんはどうして気遣うのでしょうか。

「あの、お待たせして申し訳ありません」と、私は何気なく微笑みます。私の悩みは深刻さに欠けます、汐見さんには何でもない事ですから私は、羽のように思っただけです。今は私の責任（スピード不足。）なのに、汐見さんは少し悲しそうです。

「いえ。」汐見さんは右手を伸ばします。私に向かって、ああ嬉しい。「ちょっと、ごめんなさい」私のワンピースの首元がぶれている。乱れていたのが汐見さんによく見てくれたので私も分かるワンピースの首元が寄っていた。ちょっと首側の方に左首側が布が寄って乱れて皺になったの？汐見さんが見て直してくれたのが嬉しい。私は急いでいたのだろう。でも汐見さんは、気にせずに、私を気にして、私の乱れを治してくれます。それがひどく申し訳ないです。

「ああ…、」納得するように。「ありがとうございます！」と私は大きく笑います。

眼鏡を外して（くれて）、見えるのは、汐見さんのひんやりした表情。素でも気持ちのよい冷たさですね。

「洗練されてるから、私は着替えが速いの。」

「はい。」と、だけ私は言います。水泳や経験の量より、何より、汐見さんは御綺麗ですからね。でもわざわざ言うなんて、私は阿呆じゃないです。はいと、それだけ答えます。

「そう。ありがとう、奈世さん。」汐見さんが笑ってから真剣になります。すると泳ぎに行くのでしょうか、と思えば汐見さんは、「そう。嫌な思いはしてない？」とか私に言ってきました。真剣、です。私は呆れましたが嬉しいのでそのまま答えます。

「最高に嬉しかったし、気遣いが嬉しいですよ。着替えの速度は私も気にしません。汐見さんが気にされていませんし、ふふっ。その点も有難き幸せ、です。残念な事は私が遅いから、いえそれそのものが悪い悪くないではなく、汐見さんの御体をよくよく見れなかった事です。つまり、その裸のええと、裸体の動きや服との合間やお肌、お肌と裸の組み合わせなの、です、まあこの後まぐわえればいいですね。兎も角水泳。泳ぎましょう。」「ええ。」

即答ですか。（こっくり来ましたね。）でも両方に領いてくれたのでしようし（汐見さんなら絶対にだと確信できます）、この後も非常に非常に、はあ、楽しみです。氷あずきみたいな汐見さんの氷と私は小豆の部分になりたい。甘々したとろける餡子の私と落ち着かせてくださる汐見さんで最高のアソートかつ、リゾートです。毎日がリゾートの平凡です。落ち着くりゾート。素晴らしいです！、今の平凡とは最高の表れですしね即ち今も。今もです！あははっ！さてマジックミラーの廊下を抜ければ汐見さんの冷水（？）プールとの事です。冷水がホントなら似合ってますね！楽しみです。体は頑丈です、私も！時に居る

かの女性は誰でしょう。女中？恵まれた御体ですね、流石は汐見さんの御女中です。体に汗が出て寒いですね。汗にしても汗など出てないし、体が冷えるのが早すぎます。温度は丁度良かったのに。何故？御女中さんが御女中だったらしいのに、オッケー、それですべては解決私と汐見さんとで二人、女中なんてカウントは要らないですよ、でも女中にしてはまるで肉体が綺麗で汐見さんと遜色がまるで無いのです皆無で差がゼロでおんなじ凛々しさ美しさの御体は方向性が違っても全くおんなじ美しさですよ。綺麗ですね。御二人私以外。『あの方は一体何方でしょうか』と私なんかが聞ける筈御座いませぬ。そのうち彼女が言った。彼女！？私は自分の意識を殺そう！、自殺は駄目です。この女が言った。

「初めまして奈世さん」

「え？」

文字が出ない、ああ、私の頭は凄くびっくりしました！いえ可笑しいですね。丁寧語なんてどうして汐見さん以外に使うと、この女が美しいからです。正直に言えばその通りですがどうしても良い言葉が浮かびません。死ね位でしょうか。いやとんでもないきつと彼女は汐見さんの友達でそれも素晴らし御友人であられま彼女の、御顔と御体を見れば分かります。綺麗で可愛い人ですね。すごい！私が不用品じゃないですかッああ！すごいしひどいすぎます。凄い！彼女の、誰？、いえ、御体が綺麗。御綺麗です、まず、汐見さんが作ったに違いない。それは、彼女の着用する（着ている！）水着がそうです真紅に真っ直ぐ敷かれた曲面、飛行機雲が飛ぶように流れる光は真っ赤な水着が太陽で、日の光がとても眩しくて白い。けしてぼやけた陽炎などでは無くて、はっきりくっきり線を引く光。赤い日を切り結んで輝くラインは水滴がきらきら張り付いて、…ぼたりともしない。ゆつくりと、蜘蛛の糸・一本を真横の、幅まで、引き延ばすように線上へ、薄いコートが流れ落ちて行く。そのまま太腿。上腕。臀部も、きらめくお肌へゆつくりと…水が静かにプールサイドへ流れる。床に水の板…水たまり。シャワーか先に泳いだかは知らない、知らないけど、汐見さんと一緒に泳ぐわ。この女は間違いなく待っていた。私ではなく、私は二人目でもなく二人目になるのはこの際一人でそれは彼女の方だから彼女がいえ、現在に限った話でもなくて彼女はずっと一緒に居たのね。だから今回も汐見さんを待った。汐見さんと待った。二人で二人を、お互い一緒に、待ち合わせしたわ。分かるもの。私もそうする筈だったのよ。貴女じゃないのよ。汐見さんと、私が、汐見さんとは一緒です！。でも実際に目の前が、真っ赤です。綺麗な赤色。水の膜、アクセントは白。ラインに沿って流れ落ちる光は静かに恵まれた五体を抜けて行く。大きな足元に水の板ができる。水たまり？水。私の涙、と、これは少々自虐も過ぎましょう。ふふ、可笑しいふふふ。（涙に有らず。）汐見さんの大切な御方でしょうとも私は汐見さんの恋人ですから決シ、て失礼は致しません。汐見さん是不実がお嫌いでしょうし、その一つには諦めも含まれるでしょうですから、私は大切な人です！私も、なのです。私もなんです！私も汐見さんの大切な方

です！水着は自分で選んでしまった。着てきたから今日はこのまましかない。あの娘の水着はきつと汐見さんが作った。きつとあの娘にプレゼントしたのでしよう。デザインの好みは似ていますから、何処となく汐見さんと対（ペアルック！？）になるようで私は又もや痛々しくなる彼女はきれいで心が薄い。薄くてすぐ割れちゃう心です私が！、でもそれは彼女とは関係ないです痛みは全部、狡いです、コチラのほうで、彼女は幸せなのでしょう。汐見さんと、こそ、お似合いの彼女です。なんて。幸せそうな彼女と汐見さんが毎日、やっぱり楽しそうにと。では感嘆詞は悲しい言葉です。なんて、がそうです。綺麗な彼女。私がどうでも良くなります！ね！何故この女は存在しただろう。私と汐見さんが恋人こいびとで、なのに彼女は無上へ存在している消えればいいのに今も居る。まだ！

それでも尚彼女は美しいのです。これは卑怯な事です。自然の公平。上と下に分かれているだけです、何！？なにが公平でしょうか、ええ！？。でも、だから彼女は相応しいのです汐見さんにこそ相応しい彼女さん、です、ね。私もあなたとは同感です。全く全て。相応しい御身体：汐見さんとは並んで歩くのでしょうか、私は世間を見なかったせいで水泳大会とやら。汐見さんを、初めて見たから、この彼女は知らない。知っていれば心の準備も無理ね。どのみち無理です。綺麗です。学校とか暇潰しの暇だったのに。どうでもいいのに、無理ですよ！私に気付けと。シンドイです。でも汐見さんと出会えて素晴らしかったわ。ついでに彼女も知るべきだった。今でも名前すら分かりませんけど！、ああ汐見さんと彼女が並んで歩くの。それだけでも至上の美しさでしょう（見たかったわ。汐見さんに頼みましょう。）少しだけ幼いきつい瞳と似た感じの顔はさっぱりしてます。気難しいお茶碗みたいな可愛さ。汐見さんにだけ親しみやすいのでしょうか、それこそ毎日お茶碗のよう。あの桜色わらび餅：なんでしょう、あの薄い唇から食べるのね。ああ吸うのね！吸うのね、汐見さん！アア。次に：まだ次。次がある。そう…。

首筋から一続きの山脈が通る。6尺5寸に、体重は：その重さは30貫位？はつきりとは、もつとありそうで：かつ無駄なんて一切なさそうで、あんなに豊かではつきりした体格はでもすいすい大地や空を駆けそう。泳いでも走っても早そうで、私はまた嫌な気持ちちがしてくる。彼女は勿論走って跳ぶだけではなく汐見さんと一緒にプールで一緒に泳ぐわ。競える。汐見さんと並び立つ体。髪を巻いて正確に量ってみたいわ、重さを：いえ、分かんかったから！分からなかったとはいえ、重さと言っても、私は量るなんて大それたことを汐見さんの大切な方に対してそれはそれでも私こそ大切なひとですが、汐見さんは、私を好いてくれますが彼女も素晴らしい方でしょう。汐見さんにとって物凄く大切な方です。明らかに彼女は素晴らしいので私も髪から全身を感じて彼女を確かめたい程です。私の髪から、彼女の括った髪から。どんな弦より堅そうな彼女の髪の毛、そのサラッサラな、ポニーの先から全部。根っこから全身まで、全部。ああ妬ましや、妬ましいッ！髪の毛まで：髪の毛まで当然綺麗。私も自信があるのです。でも彼女はきれいなんですゼンブ。や

めてください、御身体はずっと綺麗。私よりもずっと、綺麗です。山よりも遥かに美しい。一続きの肉体。滑らかな形と内側から骨格、重厚な輪郭は磨き抜かれた石とも、象牙も軽々トルコ石も粉、瑪瑙も翡翠も金剛も、砂より小さく打ち砕かれそう打ち砕く。至上のまろやかさ。そして不透明な真紅に照る水着の張り、ふくやかな胸とお尻の張りから剛柔自在な腹筋の張りへ…無敵のルビーと柳細工の塔、です、見るだけでも…髪を巻きつけたいけど見るだけでも分かるわ問題ないもの首から…がっしりして可愛い。筋肉の水晶を固めたみたいにどこか優しい首から肩甲骨へと（優しいって今、やっぱり…円やかだから？彼女の筋肉は曲線を描く。その柔らかな感じは汐見さんより上かも、真っ直ぐ気味な部分を交えた全部の、完璧さでは汐見さんが上だけど。でも完璧って色々あるから、汐見さんの御友人も（全体、）完璧に見えるわ。この悔しい、悔しい！、彼女さん。私よりずっと彼女さん）、三角筋は…大きな広い肩。そこから、腕に始まって、首筋から一回、二回の曲線がちがちの柔らかい直角線、腕に始まる90度（強）の日差しが明るいラインを現します。肩は広くて腕の周囲も広いわ！水泳かしら。やはりそうなのかしらね、なら一層羨ましくなります。それを言ってもどうにも御座いせんから私は黙って、見ております。想像される彼女さんの立場は非常に羨ましいものですけどその綺麗な身体は綺麗な人です。私の感情を容易に超えています。感慨など全く足りない気がする。どちらも、私が思う事だけです。彼女さんにはどうでも良い事です。御身体がとっても綺麗です。彼女さんは、凄いが全部です。私の髪で全身触れてみたい。汐見さんと一緒に触れてみたい。汐見さんと私と二人でもあるし汐見さんと彼女とどちらのかたにもさわる。さわる…、大層な事です、素晴らしくってさわりたい事でもあります。汐見さんと好き合う私にしか出来ませんから、私は御二人を命で（懸命に）触る。今はとにかく、その内、あることです（これはもう決定事項です）。太腿の前に、後ろから見たい。でもいきなりそんな事は言えませんか、私は彼女の太腿へ。髪、は、駄目です、行くのは光で、光の視線は目の力、なので、髪の毛は休憩です。さっと目を下ろします。一瞬で、さっ。自然になつてればいいですね。でももうばれても構いません。どっちもどっち。彼女さん。汐見さんの筋肉をあの時撫でれば良かった。緊張は、嫌です。ばれるのも。ああ。髪の毛と頭部はばれたらダメです。汐見さんの御身体は見ても綺麗で、私はあの時触れば良かったもつと、全身、私の全部で髪の毛お手手に舌までも、舌！？私はなんというはしたなさ。ああ。でもとっても全部で撫でたいです。今は素磨子さんの太腿が見えました。股関節からきゅきゅと豊かな筋肉、切れ込む太腿ちらりと臀部は菱形、真ん丸、楕円軌道で、質量は見た目の何十倍かは何百何億倍もでしょう。そんな重みの行く先遥かに超えて！、密度は素晴らしい柔らかさ…、さわりたい！、駄目！、固くてやわい、お空の果てまでより綺麗！。彼女の筋肉、筋肉の、お尻の重量とはサチです。汐見さんとの、私も！、幸せなのです…彼女さん。（が、）水着の終わる箇所。（で、）赤と白の旅路が同時に裾へ、お水の滴りつるつる、滑って、白い布

から彼女の太腿へ至る直前まで此処、ここでした今。お尻がちらつと見えた気がした。それだけなのに私は頭が足りなく幾らも追いつかなくなつて、能力が思う心が沢山凄、が溢れて止まりません。彼女にうつつに存在している触りたい、だめ。太腿が。太腿も、もう、すごい筋肉ゆたかな太腿筋力です。太腿も？、そう！太腿が！全身優美の更に上がありそれこそ太腿だったのです。太腿がとくに凄いです（つまり彼女は汐見さんと御揃いですね。ここでもお揃い、ずるいです）。まず肌、勿論全身ですけど旬の筈をうでたような肌が、うつすら濃い肌色と見えました。いえ、逆ですね。例えの順番が…、あ、そんなのはどうでも良いのです！。兎に角物凄くエネルギーの溢れるお肌でそのお肌も太腿と一緒にの筋肉引き締まつて尚更そびえ立ち、すらりと盛り上がる脚力が二本その基、膝上からどんと、颯爽たる超重量体こそが彼女の太腿お筋肉つ、お肌と骨太つ、御筋肉肉（ふとももが）、宇宙全土を叩き上げた青銅器のよう、でも、そんな器物は太腿さんに破損されちゃあつて宇宙よりキークック！で粉々ですね。或いは三角締めですか。はい！

私が殺されますね。ええ。こんなに綺麗ならきつと、汐見さんと一緒に生きるのです。私は納得します。納得できないはずがまるで完全に納得するようで彼女は汐見さんという御綺麗です（一等賞は二人揃つてます）。綺麗なんです。綺麗なんですよう。だから私は、彼女と汐見さんとは別です。私は汐見さんに好きと言つてもらうのに、私は汐見さんを好きなんです。でも私は彼女さんも好きなんです。恋とは肉体とはなんでしょう。彼女さんには憧憬を感じます、汐見さんにも私は感じ入ってます。順番がはつきりしません。死にそう。汐見さんは私の恋人で、彼女さんには絶対に違います。汐見さんの心は別ですが、私の気持ちは変わりません。というか、あげない。あげません。私の気持ちは私のもので、汐見さんのは汐見さんのです。ですから汐見さんのものでもあります。私の気持ちについては、ですが、汐見さんは優しいのでそうしないのでしょうか。彼女さんを敬つて、と言つたらするの。もう、しているのに。汐見さんの気持ちは、私が問いたくありません。あの方の言つたら世界の何を、何とでもしてくれろという気がするのですがまあこの世やあの世は消えてもいいけど汐見さんの気持ちを私が言つて、そんな事は断じて言いたくない。考えたり思つたりも、もう嫌です。したことないです。本当です。でももう、もう嫌、とさっきの思いは、嫌だの事です。私が嫌で、悪いのです。しかし反対に彼女さんは綺麗です。汐見さん、と…彼女さん。ああ綺麗なふたりが御綺麗です。私は邪魔者ですね。嫌です。彼女さんなんて好きにはなりたくない。汐見さんは彼女さんと居るのでしよう。私は汐見さんと付き合います。だから、汐見さんは私の事も好きです。愛情（なにそれ）では私の方が、はい。恋とかなら私の心です。汐見さんと私の、愛情ですよ。彼女さんには…、性欲ですよ。それだけ。憧れの綺麗さ。欲情で欲しい、私についてはそれだけなのです。多分。そうです。セックスが？、はい、彼女はとっても綺麗です。（だから違うのでしょうか。三人暮らし。ひどいくらいに面白そうですね。）私は髪の毛だけ自

信があります。それだけのパーツ私ちゃんひどい。御二人にも並んでいたいのに。彼女さんをまた私はじつと見る。短い間に彼女はとても綺麗。しかもそれが永遠に続くのです。汐見さんと、彼女さん、とも、私も一緒に二人（三人）、彼女さんは言葉を動かした。

「ねえ汐見、今度セックスしましょう」

「そうね。でも始めてね、珍しい」。

汐見さんもそう言いましたから、私はとても阿呆な声になる。この会話は悲しい事でした。

「は、え？」

私は、とも言えません。息苦しいです。私はどうかと要らないにしても後日に三人でしようにそれを、私がしたいのは御二人ともです。三人一緒に遊ぶのです…英語で、プレイ。3Pです。そして（ですから）、御二人ともが、

太腿からおみ足…きれいです。

奈世さまの方なんて私は見ない。私はそのまま汐見に、言う。

「じゃあ今夜ね。できれば。それが明日で。奈世さんと、まあ、予定とか？話もあるし。

汐見と決めればいいけど、でも多分明日で良いと思う。その辺も」、あーイライラしてきた、

「だからね、その辺もなんだから、その辺も大事なのは奈世さんの意思でしょう。私から奈世さんと初めて会ったし、日取りとかも含めて色々話すわ。話したいし、色々。お互いとかね。だから先に、汐見は泳いでおいてよ」

「ええ」

じゃぶんと波が立つ。その場から長大なバク転状に、汐見が背面跳びで込む。かつ踏み切った音も無く、高さのジャンプは最小限に、雪山を逆さに滑り落ちる体で汐見は、私もどきどきともせず安心してつやめくアーチを辿る。汐見は体で。しなやかに。私は目で辿る。先、結果としてプールのお水が揺れた。丁度いい…どころかパーフェクトな波。控えめだけど、じゃぶんと積もる波。雪化粧みたいね。汐見の背泳ぎ。そうね。汐見は背泳ぎから始める。腕と足と首とを見たいけど我慢。おっぱいも見たい。体に従って揺れる。でも奈世さんとの話が待っている。お腹の筋肉を見たい。汐見の。我慢よ

あ、そうそう。満足な事は今、私は穏やかに笑ったまま言えたわ。最後まで汐見に対してはそうだけ奈世さんは全く知らないの。これからのことも。お互いが、ったく。

「じゃあ今夜でいい？」

「私はいですよ」。

ちよっと止まった。ぱしやサアンサアンと聞こえる。ぱしやと弾ける。空気に浮く音。

サン、サン、と水を切り進む音は、いやそれよりもこう、何というのか、

「水を動かすみたいな音ですね」「そう!」、と、私は喜んで言った。(私は先に奈世さんに言われた。)(あまり悔しいから、私はこう言った。)

「音と違って：違う。違う。あの音の通りで第一印象とは違って、切り進むじゃあないの。無くならないから、切ったら無くなるものでしょう。だから、自然に手足の泳ぎが、背中も、自然に水へ浮かぶの。汐見は重いけど、浮かぶのよ。泳ぐから浮くの。泳いでいるのよ。今も汐見は泳ぐの、背泳ぎよ、背泳ぎで背中からすつと、半分水の中から動いて半分体を上にして泳ぐの。ぱしやぱしやって、ざんざんって沢山の水が軽く、何だか嬉しくなるのよきつと。楽しくってすららかな動きなの。水に無理がないわ。そう。水の動きと重さは無駄にしないのよ。水に無理がない。ふふ、水なのに。水とプールでしかないのに、凄と思うわ。汐見が強いのは当然だけど、泳ぎもとても凄いのよ。あ、強いつて比べるじゃあないの。そんなの詰まらないでしょ。しんどい。ただ私が一緒に居るだけで、強いはずらしいって事ね。汐見がいいのよ。凄いでしょ?」「ええ勿論。少し整理なさっては。」「は?何が掃除、私の頭を?私はそう良くないけど、汐見が別に。なんでもないけど、別に。腹立つ。」「汐見さんは聡明の彼方よりも遠く、すべて諳んじた知性をお持ちです。そして貴女には非常に近いのです。しかしながら知性ではないとの事で、まあ要するに、整理すら出来ませんからね。いえ伝わりましたよ。伝わったと言いますか、私も理解してましたから。ええ言葉か否か、それだけです。ただ単に、貴女だけ一緒というのがそれだけ気に入らなかつたです。私は汐見さんの恋人ですから!」。

こいつにつこり笑っちゃったわ。こいつにつこり笑いやがったわイマ。だけど、恋人、知ってるそれは。でも何かな?私が一緒じゃないって?あんたを混ぜる?ああ!そう言う事死ね!(叫ぶ!)

「ごめんに決まってるじゃないの!なにそれ!??、なに、いやッ!」

「嫌ですか、それは残念ですが、でも私もそう言うでしょうね。何せ初めてですし。私が初めてですけど、汐見さんとは私が初めてですけどまあそれはとっても良いことです。たとえ貴女が何と言おうとも。私が嫌なのはセックスの一緒では無くて貴女が昔から一緒な事です。この上なくむかつかますからね」とこいつはにこにこ早口で言った。

殺そうかしらね。汐見が居るわね。泳ぐのは二周目のこっちに来ていて二周目の帰り道に泳ぐ。三つの始まり近くの背泳ぎ、背泳ぎは次からバタフライ。ぴつとした姿勢から自由に跳ねるの。背泳ぎはフラストレーションが溜まりそう。私ならそうなるけど汐見の場合綺麗に泳いでいる姿勢がまっすぐ水の中水の上をすわわ。すわ爽やかに背泳ぎからターン。背泳ぎで爽快なのは凄い。いつでも見てて感じる事だから。今は?見てないけど分かる、水音が密度を重ねた軽さでさ。ぶさぶさぶさぶさくくりゆったり入道雲まとめ

るみたいな良い音！そこから束ねて、バタフライ！いい！激しいリズムであつくなる。厚いジャンプと水かき、真つ赤な体温。いや体温は私で汐見はアイス。アイスクリームの表面よりずつと。ずつと滑らかで溶けないまま動く。シヤンパンのようなバタフライ。すつきりした跳ね方、跳び方、泳いでプレシオサウルス下半身。ドルフィンキックじゃ物足りない重さ。華麗な重量。キックと半身、全部が…全身、水をかく翼で進む。そのウイングは力強くてもずりりと、水をすいすいしゃぶしゃぶ前から後ろへ前から後ろへ押して行く。後ろから前に物凄いスピードで泳ぐ。幅広の波を動かすキックはそれ自体が一緒の波になりながら穏やかあな曲線、腰から脚へ、踵が水の中にちらちら浮かんで沈んで、蹴って？、また一緒の波。キックが自然でキックに見えないけど、何？。重いわ。綺麗だわ、重さが…汐見の脚ね。汐見の体。水より綺麗な身体。熱いマグマの翼は上半身。全部？どっちも全部。冷たく落ち着いてるけど…でも全部が熱いのも一緒。綺麗って凄い。それで泳ぐのって、凄い。汐見は泳ぐのが上手よ、ずつと…。

、今日は熱い気がする。いつも粉雪の火で融けて行くように、バタフライの波がゆつくり躍るのに。今日のははじめからとても熱いわ。背泳ぎの次ぎとかじゃなくても熱くて粉雪がないのよ。汐見は今確かにマグマね。理想的な泳ぎの時間になるけど、タイムに変わりはなくても違うの。ざぶざぶする厚みも多いしね。音が激しい気がする。動作も熱いわ。正確なリズムが冷たく脈打ってるのは普段は気付かない筈なのに。私も。汐見の泳ぐ最中にはお互い、声と気持ちがなかなか出てこない、あの、綺麗で綺麗で凍るから！。今はなんかすぐ気付けたし。綺麗に変わりはないけど、目立つわ。二つの綺麗があるから…どうにか押し込めてるから。バランス。いつもは一つでもっと自然に、いや二つあるわ。熱さも、冷たさも…今日は少々バランスの熱波が多いの！分かった！やつときちんとできたわ！殆ど奈世さんのせいだつても分かるわ。私は…私は、普段が好きよ。今も綺麗。悔しいけど、凄く。奈世さんと私と居る汐見は綺麗。だから、汐見は今泳ぎがすてき。普段も良いけど、この泳ぎも凄く好き。でも、汐見は普段の、が良いけど。泳ぎも、だから泳ぎが、綺麗で…全部大好きだからね。そりゃ押し付けないけど。したくない。そんなの。汐見が可愛い。さっきから汐見の踵が気になる…たん、と浮かんでさぁんと消えて行く、来る。掴んで引き寄せたら怒るわきつと。てか絶対怒る。キレられる。やばい。黄金の林檎かクリーム・アップルみたいな、大きくて丸くて重たい重たい踵。でもどんな林檎より硬くて柔らかい筋肉。土踏まずも指先も踵の先も、全部全部自在に操れちゃう。私が。

硬いも柔らかいもしてあげるっ、今日！

…あ、奈世さん？まだ居るわ。うっざっ。何故か微笑んできたけど理由が分かった。

「はい、汐見さんは美しいですね。」…、とか。

「勝手に見て勝手に言わなきゃ駄目なの？言わなきゃ信じられない、かわいいそんな女、っ

てわけ？」

「勝手？勝手とは何ですか？あなたに言うのは勝手でしょうけど汐見さんと私は恋人同士です。」目をぱちりしてじいっと見てくる女。瞳とおんなじ宇宙のようなヘアがまるでしっとり系からさらさら系へと変わる。金属線みたいにサラツと揺れる。墨でシャー芯のかどっこを削るように書いた線。墨鉛筆。墨。鉛より重たい色合い。夜を結んで溶かし込んだ色。水気を切り取って硬くなる髪の毛：そっぴいやもう濡れてないわね。シャワーは吸ったの？もといシャワーの水、吸ったの？髪で。何の金属かしらね、硬い金属：強い鉄。黒の、流れない生クリーム（しっとり）を凍らせた：カフェイン？珈琲：より、水羊羹。ほいしさー。そんな甘そうな金属片ってあるの？とても美味しそうな金属の切れ端みたいなの。水羊羹を切って：天の川みたいにな、伸ばして。さらさら。しっとりからさらさらへ。水羊羹のキラツ、だけ抽出したら、こんな風にさらさらになるのかも。水なくして怒ったつやの色、あ、怒ってるから言い訳しないとね。

「私見んなって事よ。」とまあ、こう。なかなか気持ち良い感じ：なんで？こいつが綺麗で？やだなあ。

「あ、そうですね。そうですね。」と、奈世さんの髪がまた流れなくなった。ここ室内だしね。不思議な女。つやつやが重くしっとりしてくる（隙間の空気をこう、プレスして無くなったのね）。「あなたの同意が欲しかっただけです」「だから？」「あなたのつてことです」「私の、：：：だいぶ分かんない。今あなたが言ってるみたいに私は友達、あなたが恋人だから、：：：何だろう。私に聞く必要が無いし上位に居るのは、あなたの方だし。」

「分かんないんだけどさっぱり。分かんない。奈世さん、それ何？」

しかもあんたはしんどそうな顔をする。なんで分かってくれないの的な悲しさ？なんだか泣き出しそうな眉（冬の影かとしっかりした眉毛）、黒くて鮮やかな斜め。不機嫌な角度。寂しさで：、これ？

「あなたこそが、汐見さんの御友人でしょうに。きれいですてきな人ですよ、二人、御一緒ですから。当然ですよ」

あなたはすぐに答える。（奈世さん。）色がまっまいして（もっと）寂しくなるけどそんな眉毛はスリリとちよつと太くて、なかなか可愛い感じ。不覚にも泣きそうな顔が綺麗。不覚にも泣きそうな顔まで綺麗ねくやしい。どっちも無茶苦茶に悔しいっ！でも私はなんだか抱いていた。抱きしめてみた。奈世さんを。うわあ。

小さくてさらさらね。とてもいやーな彼女はきもちいい：ヤダ。どうしても嫌いだわ、こいつ。この女は奈世さん。汐見の彼女。

「早く行きましょ」「なぜ」「汐見が一人」「泳ぐから、ですか？」「そ。私たちもね」「見えないのですね」「汐見よ、汐見。信じているし：奈世さんも私も。違うか。信じてるっついとかさ、ふたり？私たちが二人で話すって言うから。私がまあ、そう言ったから。我慢よ。」

だから信じられるより汐見を信じる。汐見はこんなのはね、どうこう言ったりはしないの。そんなの勝手でしょ？ ひどい。汐見が私にああ奈世さんにも無視勝手とかまわずないからね、絶対！。ダメな事って、単に見ないことじゃないのよ知ってる？ そりゃ解るわよね奈世さん。ごめん。また嫌味言っちゃった。」「いえ、いいです。よく分かりました、とても。これは全然嫌味じゃないですよ？」くすりと粉薬の舞うように笑う何それしゃれた様子だわ。（おしやれって洒落と一緒に言葉な気がした。）苦笑い粉笑い粉薬？ 小さな微笑み粉の中みたい。

「まあ奈世さんのハダカも見たいわけじゃないけど今回、初めて、私と汐見がするから、奈世さんはハダカでバイバイしててね」

「その次は御一緒ですか？」

「そうそう」そうそう。思いながら言う。そして私は違うと気が付く。違う！、だけれど顔が、穏やかーな顔が近い。美人ね。何歳なんだろう、可愛い所もあるけど美人ね。紅葉とお茶飲むのが似合う、そんな感じでソフトクリームを舐める。一緒の場所で自然に移行する。そんなタイプの可愛い美人さん。近い、（ずるくてひきょうなくせに近い。）ああもう。言葉が出にくいからね。「あ、うん奈世さんとはともうぬぼれてるわ。」「はい。」「はい。」「はい。」「プールなのに伸ばしてますから、今日」「伸ばす。髪を？」「そうですよ！」、と、言いつつ奈世さんが離れた。手をとん、つてしてた。されちゃった、みたい。私。力入れてなかったみたいだし。私。手と腕がクロスした感じにこう、実際は平行線に近いけど私の腕が片っぱ切れたくさりのルールみたいな輪っかで奈世さんが通る。手の平の端っこをすつと抜け、からだ幽霊みたいにすうっと動かし私はひやつこい感触よ。これはたぶん空気の感触ね。交差よりも手と手の間を通る。奈世さんが柔らかく手について…、柔らかい。とてもきりつとした両手が、私の肩口の筋肉を撫でた。胸のドームの縁から左右をきゅうつと、蜜柑ジュースを絞り込むように…匂（瞬）に揉まれて撫でられたそんな気がする。だから今。こんなに冷たいの？（そう。）熱いからこんなに冷たいの、え、ね。よく分からないわ奈世さん。私？、私は奈世さんを見てるだけ。また、いたずらのように笑って放つわ私じゃなくって奈世さんが、そう！、「三つ編みを乗り越えましたから！ あれは隠さないがメインだったのですけど、今こうしておしやれが出来るんです！ あれは汐見さんに失礼でした、儀式で、三つ編みでもさらさらですけど私は、艶々で最高に綺麗だと自覚はあります、ありますケドやつぱり流れとか…、性交なら流れとかあるのです。初めてでしたし…セックスも何も、はい、綺麗だから髪の毛を下ろしてみました。セックスの時もいまでもすよ。お口があるので。隠したスタイルですけど、髪い下ろした私は綺麗です。三つ編みはあんまり隠さないんです、理由はそれだからダケっ、なん、です、あー。」と、笑いながら上を向く。笑いながら真剣な話をしている。それだけははっきりと分かったわ。まだ、「失礼なんです。」何が？ 見てるだけ。「失礼なんです私、失礼なんです。何で私は今こ

な事言うのでしょうかね、髪型がきつと甘えのせいなのです…汐見さんにもあなたにも今こうしてヤメマス。汐見さんに、やったのです。自分勝手に三つ編みだったのです。だから私はあなたに罰されても了です。何があっても了解できます。それ以外、汐見さんにまつわる私との恋人以外は、私と汐見さんだけなんです。すみませんそれだけは絶対駄目です。絶対、駄目です。絶対に。それ以外だったら全部を、従います。」「真剣な話って可愛くないわね。」奈世さんが上向いてるだけ。なんだか、ゆっくりゆっくりと降りてくる。

「綺麗じゃなくて、可愛いと言いましたか」と、またユーレイみたいな良い表情。そう言っただけ綺麗で良い表情よ、言わないけど代わりにこう言う。私は、

「ええ。私が恋人になるけど。」…答える。

次にこう言う。

「あと勝手に筋肉揉むな胸からずっとおっぱいから肩まであーおっぱいも、つつーいつでもうでつかい、張りトマトみたいに！私が汐見と二人でセックスするから3Pはまた今度にしましょ。て、いうかつ、そうしろ！ええ！？奈世さん！」。

これは刃傷沙汰かと思うわ（何故かホントに何故か嬉しそうに返るし）。

「はい！」

嬉しそうに奈世さんは言った。

私はちょっと泳ぐのを止める。水に浮かんで話をしている二人は仲良くて、幸せそうだから。ぶかぶかしている。…奈世さんが。素磨子も、いつもそう見えてしまうけど彼女は水中に立っている。普通は（普通にしてたら）沈むし、沈まないよう普通に立っている。水面を水中に頂く感じで浮かぶの…もとい、歩くの。ちょっと踏む。そっと踏む必要はないけど、ちょっと。力を入れて水中板にする。私が教えたものね。偉いわ。

『素磨子さんここ広いですよね』『胸には私、自信があるのよ筋肉も上のおっぱいもでかいしね』『はい素晴らしいです。同感も同感です、けど、ここというのはプールの事なんです。すみません。綺麗な水ですね。でも髪に当たるのが不思議な水ですね。これ。』『あ、はい…はい。そうですね。なんか一気に喋り過ぎじゃない、奈世さん。』『どうも。水コレ、ぽかぽかしますね』『ぽかぽか…って、気持ち良い冷水だけ…っアでも確かこれ機能が付いててお肌の良いのよ。それかしら。髪にも良いから確か。美容にも、ええ汐見が作って、油がないあのヒーリングオイル、みたいな？カガクシキ、みたい。多分なにかの、ビタミン。ビタミンで良いと思うわゼンブ。』『それ半分間違ってますよね』『ひどい。あと100メートル、プールよ』『片道ですか。』『そう。だから結構広いわ。汐見がターンをするけど、』

『ええとても！凄く早くて綺麗で！』『そうそう！だから狭いのよ、分かる！？分かるでしょ、ねえ！』『分かりますとツても！』

まぶしい気がする。そんなに凄いの。確かに私は美しい強さを持つけど。泳ぎもとても凄いと思うわ。そうね。でもそんなに凄いの。恥ずかしい。水の中を歩いて近づいた。板の上をたんたん、ゆっくり跳ねるの。水をパイ生地のように伸ばすわ。立って、話すためにそこへ。隣、二人の隣の傍までがぼがぼ。少し隣には無理があったわね。水中から斜めの光と一緒に二人の声の音が届く。水は綺麗できらきらと揺れている。しいんとした水と、光の割れた水。(特に後者は波とも言われているわね。) 加速してゆっくりした音がする。転がるアメ(甘いレモン。)のような声。

『え、溺れた。』これは素磨子ね。オレンジ。

『どなたが。嘘。』これはきつと、奈世さん。だけど固い夏。すこし苦くて、まだ早いはつさくの声心配。私は大丈夫よ、奈世さん。起き上がる所を素磨子の手があり握手して素磨子が一方的に、片方の手を掴まれてひよっこり昇る。

「心配しすぎよ。駄目なのよ、と私は言った。

素磨子が逆に怒った。

「それ奈世さんの前で今ゆ」「違うわよ！、ああ、素磨子のが心配したせいで、でも、だから心配を余計、増やすことをしたのよ。」「え？…ごめん、分かんないんだけど」。素直ね。怒って悪かった気もする、私の方こそ素磨子に向かって言ったわ。随分私がいけないと思うから言うのよ。

「ごめん。」

「え。ギャグ？繰り返しの奥義？」

「怒るわよ」

「謝る必要のないのに。立てる？」

「馬鹿にしないで。私があなたに言ったの。」これはパイ生地より難易度が高い、クレープを広げて形をふっと、真円絹一枚カーテン。真円は普通すぎて嫌。ではモルワイデ図法。海しかない。そもそも塩分はすこく控えめで髪もお肌も痛まない。それどころかすべすべの成分(一部)よ、地球上にこしかなのお水。いい水分を楕円形にして、ほら、水に立てるわ。私が素磨子よりしたもの。身長は少しだけ下だけど、これは全然私の方が上手い。そういう意味じゃないもの (do it can)。 (だから私はこうやって言っただけなの。)

「ほら私が素磨子より水が上手いのよ。私のが先によくできたもの。」

「まあ見えないけど立ってるのは上手ね。」

「何で素磨子が偉そうなの？」

「これ以外どう言えと。コレだけ。それよりこの水って美味しい？」

「美味しい岩山みたいな味よ」。楽しそうだし私が水を割ったわ。だから確かに失敗は失敗

ね。「あと、手伝ってくれたわね。ありがとう。そして奈世さんと話すからね、素磨子。」
「うん。イワヤマ？何それ、ガチガチ？ちよつと岩山で合ってる」「合ってる。ミネラルと清流と山の奥カラ」「あー」横眼と早口だけで答える。あー、とは理解の七割程度で、良い。少しだけ素磨子のそんな声が聞こえた(やつぱり頭が悪いのね)。私はこんなに元気で無事で、奈世さんは凄まじく寂しそうな気配がするわ。何故かしらね。私も寂しくなったわ。お揃いだけ少しだけ嬉しいワああ御免なさい。また私はどこがおかしかったわ！、まずは、「奈世さんまず初めに言う」と、私は大丈夫だけど奈世さんが心配。このプールは深いけど泳いでいるの？脚から。腰に伝わる振動を見たいと思うわ。それよりも触りたいとも思ってる。いえ、水から見ていいかしら今、見るのはそれで・できるのエエ。イエ。違うのよ。別なのよ。今のは私がしたいことだから、今は、奈世さんがよく分からないの。だから奈世さんが、よりよく心配なのよ。良くないわとても。いけないの。私が、私だからよ！？奈世さんじゃないのよそれは！でも寂しいのはお互い良くないと思うの、これについては間違いなくお互いで、だから、いけないけどお揃いよ。寂しいのはお揃いで、綺麗で、嬉しい。私が奈世さんと御揃いだから、私が、奈世さんにはごめんなさいけど、いいのよ。それが私の寂しいで、奈世さんと多分違うの。でも始めに、初めからなのだけど、奈世さんはどうして寂しいのかしら。それが分からないからどうか教えて。」「少し驚いただけです。あの、私の答えにはならないのですけどどうしていま水へ沈んだのでしょうか？汐見さんの意思かどうなのかさえ、はい。私も分からないんです。」「奈世さんは少し笑った。)、スコシ。寂しさの中で少し笑う、綺麗。私もちよつとだけ笑う。受けて、鏡の中に私も行きたい。表情は鏡の外側ね、きれいなつくろいできた筈。「私の泳ぎは綺麗に決まっているけど、でもわりと恥ずかしかったのよ。綺麗で速いのは分かっているのよ。当然。いつもそうして私は泳いでいるのよ。今の、失敗なんて一度も無いの。ホントよ。今はちよつと恥ずかしかったからそれで水に沈んでしまったの。水が割れたのよ、水中でほら、水が板になって…、浮くの。それがこおって割れちゃったからああ、氷は氷じゃなくて水だからいいの。水だから、足から踏めるのよ。そうして浮くけど沈んだの、失敗じゃないの。失敗よ。だって凍ってしまったものね、私が凍らせたから、私が氷になる感じ！それ！、ああごめんなさい、興奮して素磨子の様ね。私はもっと」

素磨子に割り込まれたわ。「え、私？ひど」「黙って」「このっ、あー、でもいいんじゃないの？汐見も、」「それは自己弁護になるのよ」「あんたの！？はっ！？話ラストまで聞いてよ！。割り込んで、まあ、悪かったけど！？でも今私が喋ってるんでしょ！汐見が喜んで可愛いからいいでしょ！」。そうなの。興奮とは違うわ。彼女が怒ってるけど私が間違いだと思った。確かに興奮状態とは間違ってる気もした。そんな時は素磨子も良く可愛い。何かどうやってか一緒になってきた？(良し)。今日私は素磨子とセックスするのね。それも(何となく良い気分だったけど)、今から凄く良い気がするわ。『そうです！あと美しく

もあります。』とも奈世さんが言っていた音波が伝わる。水の中のコートを伝わって、興奮とはちよつとだけ違うこと…ああ、奈世さんも？超可愛いわ、時に私はまた水を踏み外していた。素磨子につかまりたいと思う。…とても！。素磨子は居るから良いわね。

汐見と泳いだ。三人。奈世さん。速く泳いで早く時間が過ぎて、（奈世さんはどうか知らないけれど、ちよつと寂しく無かったかが心配。奈世さんはプールサイドに座る。泳ぐときにはロングヘアーが纏まる。なんで？優雅にさわさと流れる。扇状に広がったりはせず、いつも綺麗に（控えめに）纏まった。その上で水面・水中をさーと走る。走るのは奈世さんのクロールが、綺麗。私のがクロールが上手いけど、私のは水面をざばざば切り裂く。要するに汐見程綺麗にいかない、二人ほど優雅に動けない。クロールはとっても速いけど。上手じゃないみたい。嫌ね。私より奈世さんの方が上手い。ヤダ。こんなこと思い出しちゃうなんて、一番速くて一番汐見が綺麗。クロールもバタフライも何もかも。私が思うのはこっちの方がいい。汐見のことだけを考えていたい。でも奈世さんの髪の毛はいつも綺麗ひきよう。水の中でもプールに足付けた瞬間何だか動きが変わるみたいに、しっとりくつきり水墨のように水気とひとつになる、みたい？それなら人間じゃないわね、奈世さん。道理で人間じゃなかったわ！綺麗過ぎだもの。ずるい。彼女がプールサイドに（疲れて？）座ると落ち着く。髪の毛も私の感情も。酷っとにかく頭を経緯に戻ス！、私の方こそねっ、疲れるし…。早く時間が過ぎつシャワーを浴びる。奈世さんが帰る。シャワーを浴びる。ご飯と一緒に食べる。シャワーを浴びる。最後は汐見と一緒に。夜になつたから最後のシャワーを浴びる。今浴びてるから恥ずかしい。これ…

汐見の姿を見してみる。可愛い。いやむしろ綺麗。そっちなんだけど、どうして【可愛い】なのだろう。最初がそっちって、私…。全身像をじっくり見るしかない。そこなくっちゃあ、嬉しいものね！私もう全然困らない！、そうッ！。

「汐見を今見て、いい。」と、一応聞いた。条件反射の気もしたわ。こいつ。（私。）すると、…まあね、

「いつも自信があるわ」。とか、言い出した。まあね。綺麗でかっこいいけどね。私もこう答える。

「だから私が言うのよ」。

「何を？」

「聞くこと」。

「聞くとは、尋ねる意味かしら。そんなのいつだって良いのに」

「どっちが？」

「今良いと言ったのよ。きちんと聞こえた筈でしょう。いえ分かったわ、良いのはどっちもよ。つまり私と貴女の両方が良いわ。私はいつでも言った通りだし、貴女もいつだってそうして良いのよ。そっちの満足の自信もあるもの、それに、貴女にも自信があるわ。まあ代わりに断言して、ごめんなさい、でも私にはそんな風に見えるのよいつも。だから全然謝る気は無いわ、というより、あなた自身理解しているでしょう昔から私がそう言ったじゃない。貴女も絶対、自分で理解していたわね。でも私は言いたいから言ったのよ、いつでも。だから繰り返すと素磨子はとても綺麗よ。きりつとしたスイートな岩山よ。全種類がとも見やすく、すぐ強いと分かって伝えてくるの。泳いだり貴女を見てみると、ね、強靱さってそもそもが自由なの。感覚で頭で体力で、何度も何度も分かるのよ。そのたび幸せになるわ、一緒にしよう。素磨子さん。」

えと、強靱さね。その意味と、それと…それこそ、綺麗さね。でもトいうより、当然即答するわよ。

「あんたの泳ぎ、汐見の泳ぎとを一緒にされても凄くて、困るわ。いや、ね、嫌とは全然チガくて、私はフツ―に、ふつ―にしているから。でも汐見の泳ぎは、普通なの？」と、（最後に）私は気付いた気がする。汐見が優しいからそう答えた。

「そりゃフツ―？よ。考えながら泳ぐの？、まあそんな時もあるけど少し違うわ。別にどっちでもいいけどだんだん固くなるから。だから普通に泳いで優しく柔らかくするのよ。優しく、は違うわね。気分によるから。硬いのもそれでいて綺麗だわ。真つ二つに進んでいく道も、翼と水飛沫を切るの。真つ二つの真つ二つの繰り返しでね、そんな風に硬めの泳ぎも綺麗よ。今日みたいに緊張する日とか。奈世さんには全部見せるつもりでいたけどなかなかアンバランスになるものね、でも思いつ切り冷たいのも熱いのも、硬いのも柔らかみも見せるつもりよ、素磨子は見ているわね。失礼。でも私はどうやっても上手に泳げるからね、使い分けなんてそんなの全然無いのよ。いつもの、普通よ。でもこう言ったのは初めてだったわね、普通だと分かった？」私が文字通り固まっていると喋った。「あのね、補足が必要かしら、だからこそ素磨子と一緒にいいのよ」あそう。やに私は答える。

「私奈世さんと一緒にされたくないけど」

「当たり前じゃない。何で一緒なの？話が今更に通っていないわ、ああ、その事を言っているのなら、奈世さんの気持ちと貴女の気持ちは別でしょう。喜んでくれるとは思わ。勿論。気持ちの単語の一致は、きつとするわね。それで分からないんだけど、素磨子が今怒ったのはどうしてかしら」

困ったわ。きつとどう言っても下がる。汐見に嫌われたくない嫌よ。それこそ最悪。どうしよう。こんなカウンターは予想外だった、嫌、こんな時にふざける場合じゃないわ、よ。ここは。どうしても正直かしら、でもどう言うのかしら。正直に？自分を下げないよ

うに、奈世さんて…余計！どうしよう。汐見が微妙そうに見てるわ。結果が怖いし結果が、ああこうだ！そうよ、そう言えばきつとヨシ！これ、

「奈世さんに追いつかれるのが怖くて、まだちよつと理解が出来ないの。まだちよつとね、怖くて不安な感じで。だから奈世さんともその内3Pするとか、そうしてらぶらぶしていけたら、良いわね。不安をこう、一緒に気持ち良くなって…安心？不安なんてドコにも無くてさ。皆で。今汐見とするけど、いつか奈世さんともね、勿論汐見の居る所でよ。だからまだ私は、ダメなのよ。ごめん。奈世さんともまた会いたいわね」

「そうなの。素磨子は積極的ね、私は奈世さんには、あつ賛成よ。素磨子の明るさを見習うわ。」

「意外とシャイよね」

「答えたくないわ」

「ごめんごめん。」

ゴメンゴメンゴメンね私、私いまなに言ったのちよつと！？喋る調子のノリとかで3Pって汐見に、しかも奈世さんともしたいの私は！？ええ！？昼間の影響で奈世さんが可愛かったし確かに綺麗なひと、人？だったけど、割と汐見が好きとか分かってるコだったし強さ（＝綺麗さ）にも理解が、まあ！私程でも無いけどっ！そりゃ3Pできたらなんてこたないけど気持ちの落ち着きがついていないのよ！ああまた3Pとか思った！ヤダっ！何で私が奈世さんとセックスしたいの！？分かることは一つだけある。汐見。その汐見にこう聞いてみる…恐怖ね。

「奈世さんって可愛いわね。」

「そうよ！綺麗よ！どっちもあるの！」。満面の笑み。汐見が可愛いと思う。奈世さんの存在はここまで可愛いらしい。何思ってたんだろ私、でもまあ確認は取れたわ。

「私もそう思うから」と、心からの言葉。私もそう思うから、ずるい。奈世さんがずるいのは間違いないと思う！。

「聞きたいけど、私はあるかしら。」

「え何が？」とつさにそう答えた。答えになってなかったわね、ごめん（とは、言わないけど）。

「綺麗さと可愛さよ」「何が心配なの？」「え、素磨子、早いわね。素磨子なのに頭が回るのが偉いわ。可愛さは、だから、向きふきむと言うのかああ失礼、向き不向きだわ私は向いてはいなくて気になる事よ。綺麗さと格好よさには自信が」「奈世さんは知らないけど汐見は全部だからね」「全部？どうして」、早口になってきた気がする。お互いに（私も）。「私がそう思うし実際そうだと思うわ奈世さんもシャク、じゃないけどそう思ってるだろうし奈世さんはまあ汐見のが知ってるでしょうね私は全然知りたくっドーニモ、知りたく、知らないけどね、全然、なんで二人つきりで奈世さんの名前が出るの？奈世さんとはこの前

やったじゃない。しかも可愛い可愛い綺麗って思ってた。奈世さんが、あなたに、汐見に言ったの。何故か私と奈世さんも同感よ。当然よね何故とか、みすてりー？トカ無いから。無いから！だからね！、汐見は、あるのよ！可愛さも綺麗さもかつこよさも全部ある！でしょ！」奈世さんには絶対聞いていない、ああこの！「奈世さんもそう言うわよ絶対！ねえ！」私は汐見のおっぱいを揉んだ。そうしながら汐見を全部見る。見される？（汐見はこんなに素敵だし。）

右掌に弾む力が溢れる。奈世さんより大きくて私より小さめの、ジェ、ジュエル？ゼリーの元気な宝石みたいなゼリー。（あ、）ジェルはトルコ風アイスクリームのジェル！で、ひんやりあったかく固めた感じね。丁度この、私はぶにぶにしてみる、中指人差し指先の、ああぐんぐん押し返してきてる！。意識が逸れちゃうこのおっぱい、なんだっけ形（かたち）は形にね。私は全部に意識をあげちゃうけれど。（持っていかれるというか奪われちゃうみたい。）質感が夏ミカンの夏だもの、いっぱいまって（元気で）柔らかい。柔らかい夏のクリーム餡蜜、かき氷をスムージーと重ねてしつとり、私が夏で、汐見がそれならいい。自分が明るい（あつい？（↑私じゃない））明るい系だっと思うしさ、汐見は私と一緒に暮らすべき。ちやうど今がずーっと続いてくように、ね。

だいたい奈世さんが元気ゲンキって何なの？汐見はどうして、こんなに、なのに言うのよ。まだ私おっぱいしか触ってないのに、ああでも、（見直した。）奈世さんも頑張ったのよね。汐見はこんな凄いのには奈世さん、奈世さんは確かにやったかも。（途中でダウンはしたけど）だったら、私も頑張るつきやないわね絶対！奈世さんより沢山してあげる。ええ。

「汐見が冷たいなら私は熱くていいかも」

でも独り言だったのに聞かれた。言われた。

「そうなの。でも奈世さんより冷静なふれ方をするのね」

ぶん殴ってやるうかなこいつ。顔見るとシャワーより熱いし、熱いって汐見が恥ずかしそう。なの？、ふうん。おっぱい見てたわ。可愛い。私のよく分かんない説明もやるわね。説明と言うかあれは正直な気持ちよ（でもそう思うと恥ずかしいからもう！、二度とはっ！言わない！）。あつ、ノリがいいのでこう言い返そっか。

「初めて顔見た気がする」。笑いながら言っただけの口にはシャワーが入るいつも美味しいお湯ねミネラル？あのプールみたいに。あとで聞こう。こっちは岩山より優しい丘のようでも、それきつとお湯だからよ、私…今とても温かいしね。だからこっちは言わないでおくわ。絶対

ちよなんで！？なんでそんなキスするの！？歯茎の横からちゅっと舌入れてくるしで苦しくないのに！言い訳できない！そんなの舌まで↑これわたしの舌、先端に先端が触れるのよちっさっ！先のトコ丁寧だもん！小さい！触れるところがと小さいの！寒天うどんが巻くように撫でるし舐めるといより撫でる舌が汐見の、私を撫でてくれる！舌よ！寒天うどんは鍋に入れるあれ、酢醤油で食べるとあつたかくて美味しいアレ何、まあどうでもいい！どうでもいいわ！ほっぺの横が気持ちいいんだもん！そこんで分かるのそこよそこほっぺ、ほっとするほっぺがほうつと！、するのっ！落ち着く気持ちでこんなに興奮するのよ！？歯の上から先まで撫でてきてるもの気持ちいい気持ちいいほっとするとこだけこんなに、こーん、なに、汐見が、しってるのっ！やってるの・知ってる・してし、しってる？分かんないけどーしよーも、ないじゃない。もう。

汐見にキスされたようね。（冷静。）汐見は舌入れちゃうのね。最初に。私初めてだけど。舌ね。汐見。恥ずかしまぎれにそんな事するなんて。おっぱいもんだ仕返しかしら。違うの？時にどうして性感帯がいきなり分かるの舌よ。舌と頬の裏と歯と、まあそんな曖昧じみたトコ。多分汐見は消去法で決めてるんでしょうね。私ならそうするしかない。分かるの。分かるのはそれじゃなくって、汐見は最初から全然見えちゃってるんでしょうね。だからこんなに気持ちが良いのでしょうか。凄っ。

唇から吸い取る気分で外れる。私の気分だけど、近いと思う。舌はお互いほっぺの中へと戻った。そこから離れて、唇が二人。私と汐見がシャワーで二人いる、じゃあじゃあ。唇、撫でたい。私の。気持ちが良いから。（私は汐見に）熱いのよ、と言った。

「熱いのよ。汐見。汐見に言うのよ」

「そうね。シャワーはもういいわ、どう？」

「はい。」って、つい頷いたけど違うわ。「それはちよい、置いて、キスしたの？」

「ええ」

「ええって、まあ悪くはない、けどね、何で？タイミングがどうなのよ。」

「恥ずかしくて我慢できなかったのよ。落ち着かないから。タイミングは胸と一緒に。揉むのも、キスして撫でるのも、胸と、口よ。前者と後者と、両方一緒も、良いわね。今回一つを、胸とキスずつね、お互いお互いにしたけれど、ね。あとは私が早めてキスしたせいで言えなかった事項を、今言うと、奈世さんは夕焼けの終わらないみたいに私を揉むのよ。熱くて眩しいずっと、林檎よ。秋の林檎はとっても赤いのよ。だって奈世さんは夕焼け熱いつ、手つきで、秋の終わりが終わらない。ものね。素磨子は林檎なら、林檎を並べるみたいよ。縦にタワーを丁寧にするのよ。それくらい丁寧におおと、してたわ。成層圏まで林檎が並ぶわね、あれは、激しくしてほしくてもそのままずっと、積乱雲より延々と積み上げて揉むもの、違うわ揉むのが、積み上げる事よ。積み上げるだけ積み上げて高まり続けてかわってくれないのはどうかしら。私は、素磨子と折角だから、その内ね、

激しくもしたいものでも、あれは永遠にそのままだった気が、するのよ。今言った永遠でも奈世さんと貴女は違うし、セックスの例えでもこうなもの。そんな力があるなら何処かに到達しないと。奈世さんはそうしてくれたけど、でも、何とこのか素磨子は、まだ謙虚なの。抑えと手加減が過ぎるわよ。言い訳すると私は我慢せずに良かった、なんていう風にも思ってしまうわ。キスしてその先に行けるもの、恥ずかしかったらまたあとで話せば、いいでしょ?」。偉そうなのに。最後は心配そうね汐見、汐見さん…【ちゃん】?どっちも違うわね汐見。汐見は汐見でいいかしら(私の)。

「いいわね」、と私は言ったみたい。賛成+命令形的な、あれ、(一石二鳥とも別だから)音に、言い聞かせるような声だった?汐見と私に一緒になって。賛成して提案してもある。私のが若干激しい次、で、多分汐見の言葉を聞いていない。次と言うのはセックスのことである。いい。いいけど、汐見はどうかしら、聞いていないのは流石にまずいと思うし『いいわね』と私は言ってみた。↓「いいわね」。同じこと繰り返しただけじゃない!なにこれ!?こんな事奈世さんなら言わないでしょうにと私あいつのこと考えたくない!汐見はどんな感じが好きで(奈世さん。)違う!違わない、けども私の感じが、私も汐見の好きに入っているのか気になって間違ってしまうと、気になる(間違ったのは奈世さんあー言いたくないあの女が原因じゃないけど、私っ!私の浅っぽさが、原因(さいあく、)↑ああいい形で心配ごとが終わった、だって

汐見の安心した笑顔が可愛い。安心の理由が優しい気がするそれって私には分かんないから、理由(↑それ)。それって結局何かしらこれ、汐見はいつも(今も)眼鏡を掛けていて、いま水を碎いてきらく眼鏡の向こうで湯気立つシャワーに負けないどころか私には非常に良く見える、汐見の安心した驚き…?丸い笑み。気持ち、黒目がくりくりして丸そうね。

「ええ、勿論よ!。」なにびっくりしたのか知らない(分かるけど、ちょっとだけ優しすぎる気がするわ)。

でも結局(良い意味の結局で)、汐見がとツても明るい気がする。それはもう絶対私が逆で、さいあくと言った正反対は、強くて、ゼンゼンオッケーだし嬉しい…分かった反対の言葉は最高!、つまり今最高ってことね、これから。

ああ、これからね。もっと、もうずっとになるの。

(楽しみと、懐かしさ?と、両方。)

汐見はベッドでも何にも着けていない。

「ネグリジェとか、涼しいパジャマとか汐見、睡眠とか、きてなかったつけ」。訳の分からないままに私はそう言った。(多分or気がする)。

「睡眠じゃないわよ」

えっ何？、と、そう言われた気がする。睡眠・バツ。今の私は、えっ何？。と、これは私のことでも汐見は汐見も驚くことはあるかしら(あるわね。主に奈世さんが綺麗とか可愛いとかダメ、他にはええと昼間のプールとか。私も奈世さんと一緒に褒めてた！駄目だ。やめよう。私は一緒に居るはず奈世さんより汐見と一緒に居て、奈世さんともまあ一緒に居るけど汐見の方がずっともう、ずうっと居るのに、でも奈世さんも私を認めてるのよね。奈世さんも、じゃあ、汐見もそうだわ！やったあ！。何度もそう言ってくれたしね。汐見は私が凄いつて言ってた。綺麗で強くて綺麗とか、まあそんな感じで何度も小さい頃から言ってて、そんな感じの回りくどい事を、ええ！奈世さんを喋るとき一緒に感じ！、あ、じゃあ奈世さんより私が先じゃないやった。嬉しくて奈世さんに悲しい、ような、私は奈世さんも好きかも。奈世さん、何だかんだで汐見と合う気がするより、むしろとっても似合ってる程に綺麗。で、何故か、奈世さんが一番の気がして奈世さんが恋人だからね。正直。今度は私が悲しいわ。でも、綺麗なのは奈世さんの本当ね。可愛い。じゃあ今度やっぱり3Pよ！良し。)とッ、だから私が驚くより！、ないわ。本当はあるのでしようけど。悲しい。上の空の私(…多分ちよつとした間ね)に汐見が言った。ああまた繰り返したわね！こいつ。

「睡眠じゃないわよ」。今度はハッキリ聞こえた。

「いや知ってる」。と言ったアー眼鏡の向こうが、見える、ホラ呆れた顔した！(すぐ。こいつ)

私はちよつと焦って言った。

「でも、」…何だろ焦るとかこれとか、でもってどこに繋がることばだろう、ひどい。「でもきつと、汐見にびつくりしたから」汐見は喋らない(即答してない)。話せて事ね。話せ、はむかつくから話して、ってコトね(汐見は前者の気分で言い方は後者で要するにいつもの腹立つ感じね、でもなんだか落ち着くから…あーヤダ)。だから、私は素直に喋るわ。早いし。「全部綺麗でびつくりしたからよ」「そう。当然じゃないの…知ってるでしょう」「ええ知ってるわよ！？だから何！？はあ！？」「だったら大声の必要がないわ。だから何と言うなら、素磨子も綺麗な事ね。だから驚くのは…まあ、驚くわね。まじまじ見ると、いつも驚くもの、そういう事ね。ごめんなさい、素磨子。」「え、あ、そー、そう。こちらこそ。」「…。

「ええ。」と言った汐見は、綺麗ね。私は太腿に目が行く。恥部とか。(こいつは私に恥ずかしがったりするのか、奈世さん、それいい(結構)！やな感じ酷い、それはいい、ヤダ、

逆に逆によ、恥ずかしがらないのも私たち二人！には両方、両方！、得かもしれない！）キュツとした臍、下、数センチからのしっとりした真っ直ぐカーブの茂みが綺麗な影と黒の陰毛。つや石を黒糸みたくに編んだ、沢山の毛が揃って丘に：影に？太腿の間の影になる、感じ。でも真っ直ぐカーブって何なのかしらね、こうしつとりと、曲がって、ゆつたり：真っ直ぐ曲がる線、楕円のうえ・した？切り離して伸ばした真っ直ぐ感。ゆつたり感とか、曲がるとか：しなやか。風呂上りの、しっとりしたさわり。うん、やっぱりしつとりしつかりしている。手に優しいさわりでこう、つんつん、しゃんとした弾力でつん跳ねる。ああ、もう触ってるし問題ないわね。無意識って怖いわ（無意識にしておく）。

「もう触ってるけど」と私は言った。

「そうね。」と汐見はふつーに答えた。普通に頷く。頷いてないけど、体の動きじやなくって、言葉で。分かりにくいわね。分かりやすいけど。優しい気がするふんいき？そうかしら、私、現実がそうであつたらいいのに（汐見がそうだったらいわ。↑これが心配。はつきりしないから）。でも汐見は私に氣遣いしないしそう言ってくれたから、私は続ける。氣遣いしてなかったらとってもいいのに。

私は汐見の、汐見の上に、柔らかな立体六やま、下はち（にい）まい、陰毛からあそこへ七枚、八枚、筋肉いっぱい詰まったお腹が引き締まって柔らかくって埋まって、私の指十本ぎゅつとして、埋まってゆつたり熱々つ、抱いている、汐見の腹筋が私を全部、指から全身抱きしめてくれる。私より細くて変わらない、いえ、私が柔らかさの両極端で、そっちが私で、汐見はしなやか。弾力があつてぎゅつとする。きゅうつと動いて飛ぶように跳ねる、泳ぐ！その為の筋肉ね、やっぱり！こっちまできゅんきゅんしてくるわ。指から：きゅんきゅん弾むのよ。心。体。毛の先全部が鋭く弾んで、頭と手足へ。指先。そうね、そうだったわね、もう全部がそうなって分かんない（戻って来たわ）。手先で、触った！。

「腹筋、いいわね」

「ぜんぶ自信があるから」

それは知ってるし、知ってる。性格は腹立つし実際全部が、最高に全部が格好いい。きれい。あと性格が時にすごくかわいい。素直さがむかつくし可愛いし、だから私と汐見が暮らしたい。今みたいに生活している感じで時たましょっちゅうこうして居たいわ、一緒に寝て一緒にセックスしたいの。この生活は今でも戸惑ったりするけど、でも汐見の屋敷で暮らすのは楽しい。豪華さは（このベッドもふかふかで大きい、）毎日服とか絹とかラクダ？とか、やたらちつちやなラクダがバンビ、小鹿で、（写真を見せてもらってペット向けなの、と聞いたら、あーあの時も汐見にアホ扱いされたしあいつはむかつく、偶々でもなくむかつく、）それをいじめて着るみたいで躊躇いがちだします最初に値段が、躊躇っちゃうし、聞けない、でも一緒にずつと居たいの。汐見と私は普通でも（頭が悪いし、）お金が釣り合っていないくて、ごめんなさいとも、なんかするたび思って申し訳ないけど私はどう

してもこのまま暮らそうと思うわ。汐見は言った事無いし私も言った事無いけど今日の終わりに言ってもいいかしら。言おう。小っちゃい来た頃は普通だと思ってたけど今思えば私をどつきたい。ばか。何で普通だと思うのよ私は、あ、うん、分かった（分かったらしい。ごめんね私）。汐見だから全てが当然だったわ。綺麗なお屋敷だと私は思った。私にも一目で分かったしアホな子だったのに、いや兎も角汐見だから当たり前のように、よ、好きだから馬鹿にも一目見て分かったの。汐見よ。屋敷のデザインは汐見が（、同じく子供。恥ずかしい。）きっかり、二日で動いて建てたらしい。建てたか描いたか忘れちゃったけど…、じゃあきつと両方。間違いない。屋敷も綺麗で、凄いわね、汐見。こっちは頭の良さ以外は自信もあるから。体には…性格にも、まあそう悪くはないから。体は汐見も一緒に褒めてくれるし、私が傲慢に思ってる位に。でも性格は、『でも』って、違うから、性格もなかなかオツケーよ！。私。（なかなか中々だっけ。困る。…上々にオツケーな性格よ。これ。）

手について、お腹であつたかくなってる。汐見の腹筋でとめてもらってる。熱いヤシの実みたいな気がする、手触り。肌がさらさらで力強い風で、良く返って肌からその下からと、汐見の筋肉。気持ちが良い。ずっと（ちよっと？）考え事してたから。だからとめてもらって、いっぱい時間の感じが一気に分かってくる。手触り、で、熱いからずっとこのきゅうっと押すのが今までずっとしてくれたと分かる。ずっとずっとずっと、って…、ワンパターンな私でも、それって、分かるの。

「ああ汐見ごめんね考え事してて、汐見のお屋敷が綺麗だと思って」

「そう、ありがとう」

「うん」余計な事早口で言った気がする（汐見は喜んでくれたわ。）なんで？。「そうなのよ。階段とかふわふわしてるし」い、って、私！。カンカクツで喋るとこうなるものよね汐見は優しいからどうにでもなるかな。ごめんね。ありがとうって、いま言ってくれたから、ごめん。

汐見は気にしてない感じ、で喋るし。

「あの階段は、小さいとき苦勞を掛けたわ」

「え？」何それ。作るのに？「そんな苦勞とかしたの、汐見」「え、ああ優しいわね素磨子、勿論私もなんだけど、私は分かって作っていたから。貴女の方にこそ、申し訳なかったと思うの」「ちょッ答え早っ、ええと、作るのじゃないの？」「作るのはちよっと、後からの問題があつて、むしろ後には良いけど直後から暫くがあつたの。そこに問題があるということでああ、だから最初に勘違いがあるのね素磨子、作る事それ自体は普通のものよ。作ったのが問題になったの、要するに今じゃないと分からない事よ。今最近から一歩楽しいの。その一番に来るまでが時間があつて、そのあいだが素磨子に、苦勞を掛けたわ。ふわふわするのは最近の感じなの、とても。歩幅と体の上がり具合が、丁度成長してからふ

わふわっ、て、するのよ。そういえば素磨子も言ってたわ。ふわふわしてくれて嬉しいわ、凄く、凄く私も、そう思ってたから。小さいときそうだったわね。今もね、とっても階段で嬉しいわ。ふわふわの感じがするわね！とても。」

「あ、うん。かわいい。じゃなくて、嬉しい。いや合ってるけどね、とにかく違うの。言うのは難しいことだから、ねえ、恥ずかしいし無かったことに、したいの。」思ったまま言ってる内に思う(違)。それはちよつと全然違うと思うし、だいたい最初が本当だったし、「汐見の笑顔はかわいいと思うの。」私も、笑顔になれたはず。今見せた笑顔がお互い、ホントね(汐見はさっきだけど、私は今なの。ごめん。)ああまたちよつと思うところがあるけど私は顔には出しはしない、ハズ。色々不確かで恥ずかし過ぎるわ。ともかく、(とにかく)「とにかくね、汐見、さっきの汐見がふわふわの感じで沢山？だったの。ふわふわの感じって分かりにくいけど、すぐ分かるのに言葉にしにくい感じで、分かりやすいのよ、分かりやすいけど汐見の笑顔が超えるの、凄く、そうとても素晴らしくて超えて、る：かわいいさ？ええ可愛さと、その他全部だわきつと。かき氷と太陽のオレンジみたいな。太陽の光がオレンジ。ソースになって、熱いから日差しが溶けるのよ。半分ふわふわして可愛い、みぞれの光と、太陽と：あとしやりしやりにとろけたかき氷かしら。太陽の光でこう、甘いよ。オレンジソースね、太陽が、その。ごめんちよつと私が、分かりにくい：感じで。」でも、まあ、何となく伝わって欲しいな。汐見はあの、階段を作ってたんだしふわふわしたまま伝わる期待(?)で。これ私の期待、ね。勝手だわ、ホント…、本当に汐見はいつでもかわいい。今は笑うとかわいい。綺麗とかわいい。いつもは、本当は、いつでもね。綺麗と可愛い。いいと思う。

汐見は気分良く(と、はっきり分かる。)笑って、言った。

「ありがとう。素磨子は雲みたいで、可愛いわ」

「雲？どこが？」。私ふわふわしてない。そんなに私は(汐見程)可愛くない。やだ、汐見は割と酷い事言うのね。知ってるのに。そっちじゃかなってないとか、私は綺麗とか格好いいとかそっちだけ全部で出来ていて(多分、汐見曰く)そっちもまあ汐見の言った事だけれどだからこそ自分よりも、信頼できるし、でもそんなに可愛く無いと思う。特にその経験は無いから。汐見も、汐見が言った事無いし。つと、私また汐見に押し付けちゃってる。私は困る。とっても、駄目ね。汐見は困ってる私？(私ジシン困やかしい存在だけだ)私に対して言った。多分。

「言葉にして私を見てくれる所と、表現がふわふわしていて可愛い素磨子よ。どっちも一緒に、今回もその通りなの。私の事を、また言ってくれたから。いつもふわふわしてるのが来てくれて、その時はいつも、光栄で、嬉しいの。でもこれは私の気持ち、だから、説明？が、ああ、質問だったわ。素磨子の質問、だったわね。説明は最初の今言った事で

前半が今私の嬉しい全部で後半がいつもの可愛い素磨子よ。嬉しい全部が後半に含まれているのよ私は今回もいつもが素磨子で、素磨子の言葉が嬉しくなるの。おもしろいかとか、素磨子の全てがよ。普段、大体がそれで今でも、そうなるわ。新鮮さが継続してるのよ。素磨子。説明は答えになるわね、以上よ」。ちょっと悪いけど聞けなかった気がする。なんか凄いい持ちが汐見の言葉で私に凄いい持ちを私に言ってたような確か。確実。汐見が私に。体が熱くて泣きそうよ。目が泣きそう。ガマン。汐見に言う。

「それほんとに、私に言ったの？、汐見」

即答。いつもの汐見？が喋る（いつもの汐見でいいのよね）。

「え。そうよ。勿論素磨子に言うのよ言うより、もう言っただけ言わないわ。きりが無いから何度でも言いたいけれど、だけど素磨子は何度も嫌でしょう。そんなの。私だけ言いたい事じゃないしかも分かり切っているコトだから。特に素磨子は、あなた自身だもの、だから素磨子は不安定な頭が悪いわ。、ああごめんなさい、つい、わたし繰り返したわ。不安定な表現が素敵なの素磨子は、素磨子はずうっと、頭が悪いから。だから何時でも素磨子は素敵なの。不安定な素敵な表現が言い方っ、言い方、凄く可愛くて、素敵よ。私が可愛くなってる気がするわ。いえ、素磨子にまた失礼な事言ったわね、その、私も一緒に可愛くなりたいわ。そうなれた気がするのよ、素磨子の言葉で、確信。その通りね、私の言う通り。確信できるほど絶対そうなれたのよ。ずっと私はそうなれて来てるのよ。だから素磨子、ごめんね、ありがとう。」

「エッなんで謝るのよ！汐見！」

「あ、それは、私だけ自分の気がして、自慢的に失礼な事、言っただけから、素磨子が一番、最初に、可愛かったひとなの、私も嬉しくて、私も可愛くて嬉しい。どちらがと言うと、私たち両方よ今は、昔から会った時からずっとよ。私は一緒に居たいわ、素磨子。そうやってるのが嬉しいの。それに素磨子も楽しそうにしてるから。だから私は良かったと思うわ。今も。楽しい、嬉しい事よ、素磨子、貴女と一緒に活動が良いのよ。いつもの…、どうやってもいつもの生活。それ以外言葉が無いわね。どうも、私は素磨子よりも上手じゃないから。上手とか素磨子は考えないものきつと。私も私は覚えているから私は、デザインして、考えて作ったわ。上手なのが素磨子より、私が出来ない所で、それでも私の出来る事がこれだから。昔から上手にやれたのよ。今もだけど、昔もふわふわしたいの。そうしたくて階段を作ったの。でも完ぺきを求めて成長に期待して作って、素磨子にはいっぱい待たせたわ。他にも階段以外にあるけど、階段は椅子より、そうね。特別。食べる椅子ってふわふわしない方が良いでしょう。クッションもかっちりした感じで、そうしたわ。段でも階段は違うのよ。階段は動いて遊べるわ。食事は静かにするのが、良いのよ。そう思って階段をそうしたの、あと、椅子にはかっちりしたのよ。大体。ホームシアターもかっちりするのが良いでしょう？」

「あ、うん。そうね。すっかり映画を見たいわ。たまに寝るのもかっちりしたのが良いしね」

「ええ、寝具も固めが良いわね。セックスと眠りは別だもの。」

「そうね。」今ほんとにそう思う。「そうそう。」と、私はまた言った。今するのはセックスよね。汐見。お腹の上の手。私の手（あったかい）。熱いくらいあったかい、私の手。気持ち良いけど、気持ち良いから、私はこうやって汐見に聞くの 聞こう。

「次ふともも触っていい。」

「ええ勿論。何処でも自信があるのよ、でも確かに、貴女と同じで良いわね。脚の太腿はとても、貴女が良いからまあ全部がそう素晴らしいけどだけど、何というのかしらこう、目立つわ。貴女もとっても、目立つわ。太腿。格好良くて、触ってみたいわ、私も素磨」

「一緒にしましょう、汐見」「触るんじゃないの？一緒になのね。ええ！」

私は汐見の腿を、触った。

私は素磨子の腿を触った。素磨子は優しいから嬉しい。甘えなくなるけど、甘えてしまいうし、私は自分が怖くなる。奈世さんと居る時、セックスの時もそうで、（実際とっても、そうだったから！）ちよつとどころではなく、凄く私は、努力が足りなくなってしまう。今も凄く素磨子が優しく、私はしたいようにしてくれる。（奈世さんもそうだし、素磨子もそう。）だから私は、甘えたから（それはもうどうしようもない、から）とても、素磨子に気持ち良くなつてほしい。素磨子が全部 Ⅱ心とか体とか、全部が気持ち良くなつて欲しいわ 欲しいというのは、私の気持ちで、両方、私の勝手もあるけど、両方、素磨子の、素磨子が欲しいものの方も、私が素磨子を欲しいのもあるけど、でも両方叶えるのが良いと思う。一方の欲しいのが私の勝手でも、現に気持ち良く（素磨子も、私自信も、気持ち良い感じでいま、一緒に居る。）素磨子は触ってくれるし、欲しいというのは両方合つてと思うわ。素磨子は気持ちが良いさそうだもの。私は素磨子にも甘えているけど、それとはきつと、絶対、別にして分かるのよ。欲しいで両方、合ってるの。

素磨子の腿は、とても素敵だわ。今は何より柔らかくって、（すっかり、）すっかりした柔らかさに私の指、引き込まれて綿雲きゆうきゆうするの。サンシャインの光の渦の中、体中が吸い込まれるみたい。私の体も。素磨子の体も。ある時は固めてピシッと（きちつ、と）するけど、今はもう柔らかくて素敵。私が言えばきつと、固めてくれるわ。でも今はまだこのまま、揉むの。触って撫でて、さすって揉むの。両手で両脚、一すじ一すじを。

こいつ遠慮しないわねいいわね。汐見は気持ち良いさわり方をする。えろいとも言う。きつとえろいとも言う。私も負けてらんない（と、思つて良いはず）わ。だって汐見は全部が身体中がいいけど勿論太腿も最高！だもの！格好良くて、弾んで、素敵！弾むのは

私の心でも、汐見の太腿だつて、ぐぐつと。きゅうつと私を包んで、光が優しく跳ね返す、みたい！、に。きゅつと指から手の平全部を返して私が押して、何度も返して。私が何度も揉み込んで。汐見。汐見の太腿は私より、ちよつと細め？（似合わない言葉。）の感じで：違うわねやつぱり。元気な、感じ？。力強いクロールのバタ足と水と。波間の、流線。冷水。↓プール。冷たい冷たい気持ち良いプールの冷たさと、違う、氷を浮かべて？（リクエスト。）私の汐見を。汐見が泳ぐの。流れる冷水プールになるけどスムーズに（静かに、）波シブキは終わり。見てないと分からない位に早くて、早くても滑らかよ！汐見。きゅんきゅんする、あつつい筋肉よ。ホノオをとるかす熱い岩、みたい。厚い岩みたい。氷かな。純水結晶？、純粹。きゅつと。硬くも柔らかくもあるの。弾いて。私を。汐見の筋肉。汐見の体で遊びたい。私の体で遊びたい、ト言うか、遊んでほしいわね汐見是非とも二人で遊びましょ もつと。！

「固めて」と汐見が言った。いいわ。とつくにエレキ（＝電気？）で、ぴりぴりしてるもの。私。（この電気つてまあ、そういう事よね。）気持ち良い感じの汐見の、欲望何ちゃらいや、私。私のセキニン。でも一緒に、私は良いと思う。汐見の手が揉み込んでいる（めり込んでいる）。それだけとっても、喜んでくれたつて事ね。頑張ってくれた、じゃなくて、これ多分シツレーだし、ね、汐見は喜んでくれたのよ。頑張る必要とかないし。、

あ、心配。汐見の事だし、真面目で、私は思うけど（頑張る必要とかないし。）つて、これ。私は自分でもちよつと頑張るべきとか思うし実際そう思っているけどタブン、でも汐見はちよつと真面目すぎるから。好きだけど。真面目で真面目な感じが。委員長ぽくつて優等生と、昔の私が初めて、（初対面に、）言った位より今ではもーっと大好きよ汐見。

でも気持ち良いから私はそのまま固める。かたつるん、とコチコチに両太腿で、汐見の両手をさすつて（しゅうつと）押し出す。両手を離れたようで怖い。汐見の両手は自然に押し上げたから、傷どころか、良かったら、疲れが消えたら。最後のやつでちよつとでもマッサージとかできたら：、そもそも汐見に疲れ？とか、有り得ないんだけどね！私ばかり夢中になってるわ、それは往々に（何この形容詞）非常な申し訳ない心で、何かその、やめます、私はともかく、とにかく気持ち、腿が！良かったし。汐見がえっちく揉むから：良いから、汐見は気にしないで、いいの。それを私は完ぺきに言おうと思った。

「もしかしてだけど、汐見は気にしないでいいわよ。」

「え？」と汐見は言った。そうね、私も自分に対して言いたい。これの、どこが、完ぺきなのか、と。とりあえず汐見を揉むのはやめない。太ももが（私も）気持ちが良いから多分、絶対汐見も良いはずよ。きつと。私は揉んで揉まれて（揉んでもらつて）気持ち、ジューフクして、良いけど。汐見の太腿はダイヤのゼリイみたい。マングローブの（確か海の森？）の根っこが凝縮されてる、そんな感じのトラン・ポリンみたい。氷河の万年雪の熱。高熱ジュエルのゼリーは、硬めで。ふにとしたものととした密度。ぎゅつとするぎ

ゆつと詰まってる感じが私の両手にハッキリ伝わる。はつきりとくつきりとも優しい？優しい、いつこの感じがするわね。たくさん。それこそ、大きな（&、おっきな）感じ、で。「気持ち良いから、汐見は、気にしなくて…、いいわよ。」…。揉みながら。ぽつぽつ、ぽつぽつ言ったわ。というか言ってしまったとか、ような。言い訳は…『仕方がないでしょ？』コレね。これしか全部が無いのよね。汐見。私はちよつとアレだし。汐見。言い訳、ちよつと、ね、

「あ、ええ、素磨子ありがとう、素磨子。私、どうも、ありがとう。ほんとよ！」

汐見がちよい泣いてるけど。ホント？。…ほんとって言ってくれたから、本当。セックスしたいししているだけなのに、ね。私はちよい、申し訳ないけど言わないだってもう汐見が絶対、気にしちゃうし！から！、言わない。あーやつぱり言う。気にしなくて、良シ！！！！、

「仕方がないでしょ？汐見が凄いから、いいのよ。」と、言っただけ自分でもわかりにくい気がする。ダカラ私はも一度：答えて、そう言う。（「いいってのは、つまり、」と私は言ってる。）「汐見は、だって、汐見でしかない、し、だって汐見が綺麗で可愛いから！いいの。汐見は良いとこしかないし」。…ん、我ながらよく纏まってイイ！。汐見も泣いてないしよく見てくれてる。好く見てくれてる。このカンジ！。私はまた言う。繰り返す、

「良いトコしかないもの！。汐見は。これよ！」（え、）

即答。汐見？今即答？怖い。汐見は私を嫌いじゃない。はず。筈とか要らないし迷惑とか要らない。汐見の言葉が来る。（すつ、と。え？）

「汐見はじゃなくて素磨子もじゃないのなんでよ！いつでもそうだったじゃない！嫌よ！貴女が自分で自分を今、抜かしたのが嫌なのええと、ごめんなさいでも勘違いだったら、そんなつもりが無かったならごめんなさい。私っ！、あ、声、大きくしたけど、ついなの、素磨子、素晴らしいと思うわ。私は素磨子が素晴らしいと思うの。さっきのはそのまま素磨子にも来るのよ。私は勿論そうだけど、素磨子も、素磨子も勿論確実にそうなのいえこれは違うわどうにも、言い方、最初よ、最初からずうっと一緒だもん。いえ一緒なもの。子供っぽい。違う。言い直すわ、私と素磨子と順番、どっちでもオッケーよ素磨子と私はお互い最高に綺麗で可愛いわ。貴女という通り：言う通り、凄いてそういう事なのよ。でも私は何方でも正解だと思わ。言い間違いだっただけど、実は正解だったの。ふわつくわね。貴女のいつもみたい。ふふ。今、凄いて私たちの事なのね。どう？」。粉雪ぼく笑う。（すつ、と。そうね。）（ふわふわしてくる。）

「楽しい。」、それしか今言えない。最高、（ふわつく？割とあるわよ。汐見はどっちにしろ可愛い。綺麗。）いつも。

いつものことよね、全然！

「そう、良かった。」と私は素磨子に返す？

返すというか一緒に気持ちなの。『素磨子も楽しいのね、私も。』声に出さなくても分かる。ベッドの上。微笑ましい暑さ。私たちがとつても落ち着いて、色々良くなったから、私は、ちよつとばかり上体を起こしてハンカチ…、薄手のハンカチーフをサイドに。キラメル色した円盤（材…ブラックチェリー）の上に置いたからこれ、で（取って）眼鏡を休憩？私と一緒に。素磨子も、眼鏡も間が空くからちよつと、素磨子には待って貰うけど、眼鏡は私が泣いたから…だからこう、涙の眼鏡を外して、ハンカチで少し（ハンカチが少し？）（ああ薄いから。軽くて空色、薄絹。そろそろしてしつかり肌滑る板。ふわふわした板。勉強する素磨子みたい（だから頭に入らないのよ貴女は滑り台みたいに知識が滑るの）。そつと、ちよんちよんそつと、素磨子が居るからそつと拭う。素磨子のお気に入りだもの、眼鏡。濡れてない眼鏡を（拭いたから）また掛ける。素磨子は待ってる。（わくわくしてるわ。分かるの。）ワクワク、するのは私も一緒よ。私は緊張してるわね、やだ。待っている素磨子に…素磨子は緊張しないで。何方でも良いけど、素磨子はそのままで良いの（だからこそ何方でも良いのよね。）あ、

素磨子に押し倒されたわ。上体、そのままだったわね、さっき上体を起こして今また倒れて素磨子のそのままでは多分、心で、私については体を起こしたまま？で。それより両方りようほうな気もする、から、二人とも両方りようほう…心と体がそのままな筈無い。あら？無いって、良いのはそのまま、もつともつと良くなる気がするわ。そう、（答えが分かるの。）

「もつともつと良くなる気がするわ」と、私は素磨子に言った。丸ごと。（Ⅱそのまま）

素磨子は不思議に少し笑った。困ったけど嬉しいような顔。でも不思議なのは、私がよく分からないから。嬉しいのはどうしてなのかしら。素磨子の言葉を私は聞きたい。聞きたいわ。はつきりする素磨子。（こういう時、青空みたいになるから。）素磨子は小さく言った。振動？小さな揺らめき。雲に風がある。

「汐見はよく、言葉が浮かぶわね。」

「どうして」と、言葉通りに思った。控えめでもやっぱり明るい声と、ちよつとだけ不安？の理由が、ちよつと。でも、返事の素磨子は早いわ。（早口？）

「ごめん気にしないで」。ここまで早口だった。枕に俯せになった。どうして？「汐見。あのね、汐見、私は凄く嬉しいの。凄くよ。本当。私の問題」「私は天才だけどそんなの思いつかないわ」「いやちよつと、またそれ嬉しいんだけど、恥ずかしいけど、嬉しいのもあるし、でもとにかく私はよく分かんないから。ことば…ああ汐見の言葉じゃ無いっ、のよ！分かるの！汐見は分かるし私の、問題。私こそ、私が何言ったらいいのか、凄くツ、嬉しい。返せない気が、して。私だけっ、ああもう、私だけ！。ごめん、でもあんまり上手に、言えない。今もだし。ゴメンでも、大丈夫かしら。卑怯よね。私。これ聞くのがもう、大丈夫とかもう、駄目なのよ。ほんと。でも私はそこまで言葉とかないから、だから、大丈

夫じゃなくてもこのまま通すわ。」と、顔を上げて生真面目な表情、ね。素磨子は心が綺麗ね。早くて。雨無く、してさぱっと晴れるもの。あと言葉はきちんと上手だと、思うわ。今もね。素磨子。言葉が続く。「別に今泣いてなんかかないのよ。本当。ただ嬉しくて、恥ずかしかったけど、それだけ自分に悔しい、とか思ってた。泣いてなんかかないけど、嬉しくて、その、私は私のやり方でやるから！」

とっても一番ね、素磨子。（何処をとっても一番ね。）だから、

「そうね。」 ↓、私も一息に言った。 ↓ 「それが一番だと思うわ。素磨子。別に泣くも泣かないのもどうでもいいけど。」

「そうなの？」、きよんとしてキツとした。「そんな事、ああ、優しいわね。汐見ね、わかったわ、ありがとう。」 また微笑み開いた。素磨子は素敵ね。

「全部が好きよ。表情も何もかも。言葉も別に、どうでもいいのよ。どれにしても良いのよ。どれでも全部。言葉も別段、貴女で良いわ。素敵なの、素磨子。そういう事よ。」

「うん、ありがとう汐見」

「こちらこそ。」

素磨子は私にキスした。私と。私からしたような気もするわ。キスが叶った。そんな気分ね。（キスが叶ったそんな気持ちで以て、）私は上々に熱くなる。素磨子の顔が近い。当然。唇が触れ合う時間が長い。素磨子は少しのキスが好き？そう？ そういえば素磨子に当たってない、レンズが、だから今眼鏡が無いわね、私、キスする直前の素磨子が、外した…、そうね、やっぱり右手の端に。素磨子は両手で丁寧に外して、自然で程良く高速な動きで。小さい頃。十四歳の春まで。素磨子に外してもらうことが多くて。私は今また幸せで、私が泳ぐ前に自分で外してそれから（その前から）外すことが多くて、素磨子を外していたのね。私。不安だから強く、抱き締める。素磨子の体、背筋からを、ぎゅうっと、ぎゅうっと押し返す強さが私を淋しくしないでくれた。私はどうしようもないのね、素磨子。一応素磨子に聞いてみる。触れ合うだけのことを、（キスだから、）ソとゆっくりと…、離して、言った。

「久しぶりね。眼鏡を外して貰って。」

「あ、うん。そうね。良かった？汐見。」

「最高よ。外したつもりはないの。素磨子にやってもらうのが落ち着く。私は一人でやってただけなの。素磨子に、一緒にいいの。嫌なの。素磨子を眼鏡から外すのではなくって、私が、眼鏡を外してただけなの」

「いや何となく分かる気がするけどそれって、汐見がただ自分で眼鏡を掛けるとか、外すとかそういう何でもない事じゃない？そんなの知ってるわよ。汐見。そんな有り得ない、勘違いは。流石にしないわ。私もね、自分にはまあ、自信があるし…なんのかわんで褒めてくれるじゃない、いつも。私も何となく、どっちでもいいのよ。汐見の眼鏡は似合うし、

光栄だけだね。嬉しいのよ？ 汐見が外すのも綺麗。だから私、あなたと一緒になの。どっちでも最高よ、汐見！」

「私を泣かせたいの！？」

「何でっ！？」

素磨子は嬉しいわね。私。

汐見の、私が手にしてた眼鏡を（早く）置いて、そっと、でもそっとテーブルの上に小さいテーブル、人形劇みたい。言い過ぎかしら。ブリキみたい（おもちゃ？）。そもそもブリキとか知らないし。綺麗なおもちゃのテーブル、かもね。ミルクとピーナツ色したキャラメル。ミルクは色より、とろける味で。口どけにつやを出す感じ。この色：ツヤ？ みたいに優しい味の、キャラメル、テーブル。どっちでも。眼鏡は大きいレンズがしつかり、安心する感じでしつかりと置いた。置けた。ゆっくり。安心する雰囲気。汐見の眼鏡は似合ってる、と思う。それより、いや大事だけど早く、ちゅっとした涼しい唇合わせて（ちゅっとした、は音じゃなくて（音？は無かったけど感じが、そんな感じの擬音？がした気がするし、でもそれだけじゃなくて！）ホントに全部が）、とにかく汐見とキスがしたいの。また私、汐見とキスがしたいのよ。

汐見は泣くとか言っただけそんなのじゃないし。良い感じ、だから。汐見がゆったり。すーって眠りそ、なカンジでさ。ゆったり、するする。深夜がゆったり、まだ9時かその辺？ だろーけど。眠り姫なりかけの汐見は消えそう。直ぐはつきりする。もったいない。だから、

私はその前にキスした。

キスしながら胸を合わせてみる。大きい。？ 丁度いいけど、しつかりしてるから。その下の胸板筋肉も、おっぱいの柔らかさもぴん、と。キュウっと押す押す筋肉と、柔らかくて不壊のパナ・コッタ？ と。（ミルク・プリンで良かった気もするわ。） 大きい気持ち良さがあるの。…それ！

（涼しい唇。ちゅっとするキス。気持ちが落ち着くキスの味。心がどきどき大きいのはこの口付けも、あるけど、そこから変えてみたいの。更に。胸も。全身も。）

ちゅっとするキスからベロを、入れたわ。こっちの舌は私の汐見の舌と、ディープキスするって初めてね汐見。（奈世さん。） 嫌な事どうでもいい。ともかく舌が一瞬止まって私は、ごめんね、汐見すぐ私、キスを続けて… ゆっくり、不安？ で（わくわくで）、ゆらゆら、舌と舌でキス。距離ゼロ。舌って、近いから。たぶん… 多分！ これで、大丈夫なのかな私、汐見！ 嫌だったりしないの？ 汐見あつ

これ奈世さんに言ってたじゃなくて私に言ってた奈世さんに的確にしたあれね多分ものっすごい確実にきもちのいいとこばっかり休んで撫でつつく頬も、私の、またくすぐった

良い、びんかん、口と舌全てが歯の裏も、表も唇裏まですべてを舐めるしつつくし触つてよ汐見、触って、そう、そう！もつともつと（よだれが、）もつと気持ちよ、く、気持ち良くしてよ。

いくから。私がいくから先に。私だけ行くから、ごめんね、（良いから、）ありがトこれっ！！！！！！！！。

、なんていうのか、私だけわるいわ、ね。

汐見：なんていうのかしら、ね。

こんなに嬉しそうにしてくてるから、素磨子は、私はキスを今、続けて良かった、と、いっぱい。（感じる。）

「嬉しかったのね、素磨子。」

「え、そう、もちろん勿論よ。ごめんね、とつても、気持ち良かったの」

ごめんとは、私が不安から？聞いて、それなのに素磨子は良く分からないと、ごめんねって何？単語があつたわね。私は素磨子にそれを聞く。

「素磨子の今に謝る必要がお互いきつと全く無いわ」。いつもより早口になったわ。素磨子は…、

「え、そうなの。ありがと。いつもよりコトバ早くない？ずっと。」

聞き取ってくれたなら安心ね。早口言葉に、なったから。

「そうだけど、素磨子ね私の方こそ少し不安でだから、聞いたのに、素磨子が不安になるのはそうね、素磨子に申し訳ないわ。だから、私が不安でちよつと、移ってしまつて、それで、ああその、ごめんなさい。私は、兎に角嬉しかったの。本当よ、素磨子」

「じゃ汐見さつ、それでもいいじゃない！」

あ、

「…あの、汐見、蕩けそうに止まつてるけど…、私がきらきらして我慢が出来なくなるけど。汐見がきらきらしてるわ。知ってる？。分かつてる、汐見？。えろくて可愛くて綺麗であと綺麗でえろいから。…ね、ちゃんとして最後に言つたわよ？」

「知ってる押し倒してずっと。」

「ええ。そうしてるわ、大丈夫？続けていいの」

「いい。大丈夫。続けていい。」

「分かった、解ってるわ汐見、心配もぼーっとしないでいいから。」

「ぼんやりするけど、同時にはつきりしてるわ。好きだからこんなにぼーっとするのよ。」

好きだから今それしかないの。それだけがすつごくはつきりしてるの。素磨子がえっちな事を二回言ったみたいに私も、素磨子ね、そうしてみたいの」

「あ…、二回ね。二回なの。そう、最初にそんな気もあつたし私つ、ああ言ったわ。言っただけとにかく私ね汐見、じゃあ我慢とか、しないでいいのね」

「勿論よ、早く。」と、私は言った（とくとくとくって、昔の良い言葉・とくとくとは心が甘露になって、一杯一杯満ちる音！。そしてもう、とっても早くして！素磨子）。

「分かった。もうするわよ、全部。」

素磨子は、きゅつと歯を噛んで微笑む。そうしながら一旦、そう言って、言った後にまた素磨子はそう、した。

別にそんなのしなくていいのに、素磨子。

我慢などいい加減に解きたいと思った。

「ええ、全部。」と、私は直ぐ言った。いつもの素磨子みたいに。（綺麗に。）笑って。素磨子ね、私も今そうしたわ。

。優しい、激しい！ハード・ロックな、素磨子の柔術みたいな動き。ね！

汐見が可愛いから我慢ができない（、汐見が可愛いから我慢もできない）。何あの笑い方！何！？普段の汐見以外に、誰かが、汐見に影響している筈よ！汐見が汐見らしく真似して、綺麗に、明るく光って可愛いの！汐見汐見、ぱあーって光るの、可愛いッ！、誰よ！？誰それ！？奈世さんでもないでしょ、奈世さんは昼の林みたいで、まあなんとなく涼しくて日が当たらないとか、そういう落ち着くカンジでしょ多分！っ、あーやだやだ、やだ！奈世さんとかやだ！しかもソレ以外また、また増えたし！（汐見が可愛いからいつか。）よくない。状況よくない、サイアク、けど汐見、汐見がやっぱり最高。汐見は、当然いつでも、最強！。両脇から挟むように手を入れて、脇を揉んで親指で胸、捏ね回して、そうしつつ、（楽しいっ！）その汐見へと聞いた。

「誰、それ。今の。今の笑い方、」

「ええ、ん、貴女よ。素磨子、ちゃん。」

納得できた。

一瞬で、で、でもね、そんなの恥ずかしすぎるわ。

親指で私は両乳首を突く。ぐぐつと、押し返されたら、弾く。転がすようにと、ぱるんって。汐見はひゅつと言った。息ね。焦りと興奮、冷氣と炎を胸いっぱいまで吸い込んで。

ね？

落ち着いてきたわ。腹筋を触る。左手は、そのまま、胸で、汐見の腕を、押し付けて。私の右腕を使って。汐見を、左手を胸に右手を、ふつきん。私の腹筋、触ってみてね。（私の右腕、ご一緒するから。）私の右手も汐見の腹筋。今。幸せね。汐見の片手は、そっちは

私の両胸で、中心、挟んで、内側からね、一緒にいっぱい、お願い！揉んでみて？。私は両手から押させてもらったけれど、だって、汐見は片手からだから。両手。汐見の脇も良かったわ。つるつる処理して、滑らかな肌と湯豆腐みたいな絹ごしの熱と、絹ごし。絹つて一緒だし、絹よりつるすべ料理より、素敵。汐見の肌のが、ずっと好き。(綺麗。) 流線形？(この例えていつも分かりくいわね、イメージでスツキリする感じ？)の、脇口と腕と背中と胸まで透き通った筋肉。硝子のあれ、芸術より繊細なのに、さいく、細工ね、最高だけど、細工は間違い！最高だから！。透き通るようでもずっしりしてるの。その上良く揉み込めたし、弾むの。柔らかくて一杯でキュウキュウ詰まって、弾んでいつまでもどこまでも押すの。汐見が押すし、私が押すの。筋肉が押し返してくる。押すの。私が脇を(脇から)ぎゅぎゅっと押したら汐見の体が押し返したから：最高。いつまでもどこまでも、ふふっ。笑いながら、汐見の腹筋を撫でる。あはは。くすぐたいくすぐたい汐見。こっちも汐見もくすぐたいわよ、しおみ、指の甲はおっぱいずるいし左のおっぱいは綺麗な指先、形でもう長くて大きくて綺麗、指で撫でてる♪胸、両方。内も外もどっちもくすぐた指、嬉しい。嬉しい！、くすぐたさよ！お腹もね、そういう感じだし。腹筋。指先の線が踊って、くすぐる。汐見のぎゅうっと押し込む踊りで、ダンスを、私も腹筋固めて、しゅらしゅらスマート、力の踊りね。こっちは物凄く力強い！。でも、くすぐりね。おもしろい！私もくすぐる！くすぐてるけど！もっと、もっとよ、汐見を、もっと！汐見ともっと！くすぐり、そのさき 手始めにもっと、もっとたくさんいっぱいくすぐるの、汐見ッ！

素磨子の腹筋はまだ柔らかさがある(指、押し込めそう)けど、世界一頑丈なまな板みたいね。落ちないダンスフロアで踊る。私の指を、躍らせ続ける(これでも興奮してるのよ)。たたかず、なでる、ピアノを愛する？NO。素磨子の体を愛する。地震で落ちない、お腹のように：どんなの来たって、本気じゃないわ。(素磨子のお腹はまだ、柔らかい。)それでもがんばって、素磨子のように

くすぐるみたいにくすぐって、撫でる、私はくすぐったくて綺麗。それにとっても気持ち良くて、柔らかい、そういう気持ちにくすぐりたいけど、体も、私もそうだけど、

でも私はそのまま、素磨子を押したわ。指で、おっぱいの奥(大胸筋の隙間？)。それと、勿論お腹の上と：右手の親指、一番力を、込めて、素磨子の腹筋の上は御臍の左横にするわ炎を包んだアクリル。体温。つるつるでキュッとしたカーブがいいから素磨子のそこへ、私は、親指、お臍に向かった(腹筋の、ライン。綺麗な。)キレイな曲線を突くの！、押したわ。突いたともいうわ。がっしりとも、グツと、突いたの(押したわ)。綺麗なのは強くて綺麗なの、素磨子、勿論解ってはいたけどもっと解ったわ。綺麗に、強靱に、理解があったの。素磨子が、居るのよ。あったのよ。お体、素磨子の身体が本当に、良いの。それ

と、私は一応言った。

「進んだけど、頑張らなくていいから、私のしたいように素磨子としたのよ。いえ、素磨子と、いえ素磨子を、したの。ごめんなさい。私は勝手にしたわ。」

「やめて。」素磨子は手を止めて言った、くすぐりから私の動きと合わせて？何となく羽衣みたいに撫でる手、ゆるゆると、不安かも、落ち着くのかも、と、後者は私が凄く落ち着く。素磨子がどうなのかも聞いてない。やだ。素磨子は私に言葉を、また言う？勿体無いのに。(素磨子は、綺麗)

「汐見、また気にするでしょ？してる、し」。私の腹筋(全て)を大きく押して、ぎゅつと押して揉む、手と指、素磨子の。素磨子が大きく強いのにふわりと硬めに緊張した？優しさが、こっちに伝わって、抱くようにするの。素磨子が私をお腹から抱いて私は背中から両手を使って、素磨子に抱かれてる右胸が、熱い、左手に包まれて緩やかに震える。血潮と電気の光と胸と、胸は、素磨子がゆっくり揉むからその度私は驚くの。全部が震えるの。胸が。胸から。腹筋から、全部。素磨子が両手を合わせて抱くの、合わせるよりも、これは、通じているのよ。素磨子の抱き締める動作が同じく。最高に通じて両立するのよ。私にも通じると信じていいわね、素磨子。素磨子が抱くようにするの。私も抱くように、したわ。さつき…さつきよりもっと前、そうね、私は爪が、綺麗に(縦一直線)割れてる。後から(…今)私は、それ、気が付いたけれど、別段、素磨子に血が付いちやうけど私は止めてしまう気はない。そんなこと考えられない背中(素磨子の背中)。背筋から、素磨子を抱きしめてるから。ずっと。短い時間の、ずっとよ。幸せが冬の夜より濃いよ、その上寒さより澄み渡っているのよ！。(日の出に邪魔されない、夜よ。)(とっぷりしたチョコレートみたいな幸せ。)ああ、心が加速するみたい、私。(私)背筋から素磨子を…素磨子の背筋、私の背筋と、両方。そこから、素磨子を全身、抱くの(全身で全身を…、素磨子ッ！)。彼女の背筋へ沈み込む指。両手の、全部ががっしり、した柔らかい筋肉。素磨子の背筋。私の背筋で、りよりよく。膂力、背筋、腕力へ、指先から素磨子、に、背筋。(素磨子の背筋。あったかい。)柔らかくて沈む、私の力が指まで、指から、背中(の筋肉。ポリウム豊かで、沈み込む指がぎゅつと、してても、してもね、ぎゅーつと。ぎゅーつと、素磨子の筋肉が包むの。私の指を、素磨子の、背筋。背筋ぎゅーつと包み込む。ぎゅつ。強く強く揉んで、柔らかく揉まれて(がっしりぎゅつぎゅつ)。素磨子がふと手を止めた。揉んでよ。私の手を取る。右手。持ってくる。軽々。(少しだけ緊張したけど素磨子は軽々と私の手を、緊張してたのに、力が入ったのに、ほら目の前、すーつと持ってきて凄いわ、また腕相撲で久しぶりに地盤を割りたい。いつも勝負がつかなくて地面から先に、次にテーブルが粉みじんになるわ。床と地面、テーブルがザツクリ、クツキ、クツキとは昔の素磨子が言ったわ。クツキ…みたいって7才の素磨子は笑った可愛くてどきどきしたのよ、私、ああその時から綺麗でたまらなかったわ素磨子、素磨子。その内テーブル

とユカとジメンが勿体無いか、訳の分からない（優しい。）理屈を捏ねだして素磨子は、やってくれなくなったわ私は不機嫌だったわ素磨子、でも今なら素磨子はやってくれる気がする、今からいつでも未来の事よ、未来の、現実になる事ね！。腕相撲。勝負がつかない本気で、地盤がパキンと、いえ割らない、今の私ならコントロールできる気がするの。テーブル床地面が割れないように、クッキーに力を入れないように：空中では足りないでしょうから宇宙へ力を分散させるのよ、二人で、ふたりで！素磨子と私ね、素敵！地球が割れたら素磨子は優しいし、私だって割り過ぎかと思うもの。素磨子と私なら問題ないわね。（宇宙へゆらゆら、力を逃がせる。）私たちは二人とも大きくなったし腕相撲ではしゃぐと、凄く、影響が出るけど広範囲のクッキーがパキリと行って、それはまあそのままのお話だから私と、素磨子が宇宙まで割れたらどうなるかしらね、けど小さい頃みたいに押し合って繋げたらいいわ。地面を空間全てにするだけで何にせよ、結局は軽々、ね。軽々。私と素磨子の力が対象まで作用するように軽々、私と素磨子の力以外は。私を動かすのは、素磨子と奈世さん、物理的にはきつと素磨子だけ。奈世さんの髪の毛は丁寧に扱うものよ！！一杯に緊張して、そう、緊張、緊張した私を素磨子は動かす。軽々と（楽しい）、そう軽々よ！。）

「汐見、何これ」

「腕よ。私の手と腕、立派で綺麗だと思うでしょう？貴女だけが私を、こうして軽々膂力で動かしてくれるのよ」

「知ってる。私と汐見だから。」

「そうね！」

「でも私ちよつと機嫌が良くないの」

「そう。」と、反射的に答えて、素磨子が怒っている？事に気づいて、私はどうしてかしら、と思った。だから、「どうして。」とも、実際に言ったわ、素磨子に。

（私は、怖くて、良く分からないの、素磨子、どうしてかしら、素磨子。）

素磨子はちよつとかなり怒って答える、かなり怒っているみたい素磨子、どうして、素磨子、素磨子が言ったわ。

「中指、人差し指、割れてるわ」

「ええ、縦に、綺麗に割れたのよ。一つの真つ赤なラインが四つで、素磨子の筋肉に揉まれて、ぱつきり！、こんなの素磨子だけよ、素磨子。腕を、貴女が動かすのと一緒に。貴女の腕と、私の腕、という事よ、でも決して、私は、良かったと思うの」。今も、良かったと思うのだけど、自分の言葉で嬉しくなったりそれに素磨子が冷え冷えとするし私は決して、悲しくないのよ（良かったと、言っただけど、もう一度）。「私は、素磨子、良かったと思うの、現に今、嬉しくて私は言ったわ、嬉しそうに貴女は見てくれたはずよ、素磨子なら」、きつとそれくらい簡単に分かるでしょうとの私の言葉を終える前から素磨子は、

私に、まっすぐな強い声で言った。マリン・ブルーの透明な真球の海、だからこそ私のマリン・ブルーよ。空には太陽。透き通ったゼリーののように、透明が見える、深い海。輝く真球。海の星。暴れる黄金の太陽と、底なしゼリーの、硬い、純な声。それでも尖った所の無い声。優しい声と、マリンブルー。そんな色に輝く澄んだ声。強い太陽の星。心遣い。太陽。海と、あおぞら灼熱っ、水の冷たさはとつても心地が良い。怖いほど冷たい。素磨子の痛みね、心が、素磨子の優しい、冷たさ、痛さも、怒った気持ちの、優しさ！そのせいで私のせいで、素磨子は、心があんなに痛いよね！？、この綺麗さは、私、ごめんなさい、素磨子！綺麗だけど、そんなのは分かっているのよ！こんなにするなら、綺麗は分かっているから、私は、こんなにはいらないの！素磨子！

「汐見、これは私が気にする。汐見：汐見は、もちろん爪、治るの。それは分かるけど、気になるの、すごく。すごく、心配になるわ。汐見。私が、汐見は平気でも、心配。何でも無いって頭で分かるけど、とても、私の勝手で心配になるの。これはさっき言った汐見みたいだけど、勝手って、ね、でもこれ、ダメよ。ああさっきのこれは、今の私で、今の私がちよつとその、心配しすぎて、それがさっきの、汐見によく似てる。たぶん。でも今のこれは、ああこれ、ダメって言った、私が勝手に言った方だけど、私が心配している方で、汐見が傷ついてるのが心配。汐見の爪を、きつと、私の体で、割っちゃってしまったのがいやなの、嫌よ。私はそんなのは必ず、ダメなの。必ずって、ね、絶対、って事なの。汐見。だからこの、さっきの、あとに言ったこれって後の方だけど、最初の最初にも言ったわ、言葉の前よ。最初の、気にするって、言ったの。ごめんね。私が、もう、勝手に心配してるのでもとつても必ず心配するのよ、私、私がね、ごめん、心配になるの。汐見、汐見の爪は、綺麗ね、汐見の今真っ赤な爪、桃の、真珠の硬たい結晶みたいな桃色で濡れた、しっとり乾いた、硬いの。そんなね、綺麗な、つるつるの爪よ。でもジュシーっぽくて、果物みたいで、でもカッチリ、乾いた、割れなくて、私以外多分何もかも、割れない、嫌よ、私は好きなの、汐見、汐見っ、だからね、ごめんなさい、汐見の硬くてしつとりした爪。つるつるですべすべの寶石ばん？、真珠いた？フルーツきんぞく、みたいな？鉱石？すごい瑞々しいの。でも良く分かんなかったりするけど、言葉が無くて、汐見の爪しかないの。言葉が無いの、汐見の爪には、凄く。汐見は綺麗で、見つからないのよ。汐見はここに居るから、他に、全部の言葉が無いって事よ、汐見、汐見ってここに居るのね。私と一緒にいるの。汐見。だから私、汐見を傷つけないイツモよ、いつもね、そりやそうだけど、でも私は今言うしかなかったのっ。今それを言うしか、無かったの。汐見。汐見の爪、治るわね。私は、汐見は心配ないけど、でも凄く心配だったのよ。そんなこと言ううちスグ、爪、治ったけどね。汐見がぎゅつとしてて、爪、抑えて、両側から反対側の手の指ね、私がやらなくて良かった？両利きね、汐見。私もそれなりに器用で、気

を付けるから、その、汐見が反対側の手で大変で、爪割れてるのに、痛くないかと思って、両利きね、私がやってもそりややっぱり痛いから、だから、汐見は器用で、その、痛くない？、痛いわねそりゃあ。ごめんなさい。私もカツヤクしたかっただけ、ね。でも私も体を動かすのは上手いし、指も器用だし汐見を良く知ってるわ。私が汐見の次か、同じくらい知ってる。何でもないわ。何でも…、ああ、何でも二人ね。今何でも二人ね。汐見で、私っ！。」

汐見は、私が言ってる途中に何だか不安そうな顔をしてたけど私は止まらなかったし、言った。全部、汐見に言わずに言った。また不安になってる汐見は、ちよつと、私が元気に言ったら、止まるし。不安が、止まるし、元気は止まらない私の元気と一つになってね、そういう感じで汐見と一緒に、一緒に居たいの。汐見ちゃん。汐見が指をぎゅつとしたら止まった。私の不安も、汐見のケガも。全部止まって、でも、良い方は、良い方は二人とも！。全部止まらない。汐見の言葉もうるうるしてくる(聞こえてくる、嬉しそう！な声)。

「素磨子、私、」

汐見の言葉。うきうきして私は口を挟んだ。

「なにかしら？」、と、でも、明らかことば(汐見の！)途中に、だったわ。ごめんね。言わないけど。楽しいし。(いたずら？)。汐見の言葉が続く。

「ああ、そのね。素磨子、嬉しいの。素磨子が嬉しいの？、質問で、答えの分かった質問、言葉よ。素磨子が嬉しいのは、分かる。嬉しいの、素磨子、分かるのよ。だからでも同時に先が先だか、一緒にタイミングできつと、絶対、私と素磨子が嬉しい、嬉しい、ああ私、嬉しいの、素磨子、嬉しくて楽しくてとても良くて、どうしようもないのよ。心配ないから、素磨子、私、とうに指の爪も、はやく治ったわ」

汐見はたまに前後が反対になるけど多分それ、言うタイミングがいつも、それこそ分かり切ってるから、よね。汐見の頭でも、たまには私の頭も…あんまり良くないけど分かるときにはいつも、心の中で二人とも分かっている気がする。というか絶対な気がする。むしろ。むしろで当然でいつもで、絶対、そんな時は大事なとき・ことばだし(むしろって蒸しまんじゅうを作るあれみたいな気がする。木で出来たカゴっぽい器みたいな。それよりときって、時で、とうときみたいね。ときたまご。違う。宝石みたいな。きらきらして嬉しい感じがするあんなの、バターのきらきらオムレツ・ジュエル。…もうそれでいいわ。ときたまご、と、ミルクの優しいきらめき、オムレツ！。宝石より柔らかくて好きよ。私は色々考えつつ言った(…、言えた、オムレツと安心で泣きそう、汐見、私が汐見に撫でて欲しいの。)。とういとはオムレツの事だと思っし、汐見と私の良い気持ちとか、言葉とか心とか気持ちとか楽しい。嬉しい事とか、まあそんな気分。楽しい。汐見が無事なのは知ってる。とても。高速というか一瞬できゅつとして、爪を両側から指つまんで治ったのも、見てたし、私は今、安心してから、汐見、私は汐見に泣きそう。泣かない。私は

明るく笑って、できた。

「知ってる。一瞬だったわね、さすが！」

「ええ、そうね。分かっていることを、言ったの。」

「こんな時も真面目ね。セキニンかんかく的な？」

「今は私、そんなに真面目じゃないわ。爪が治ったと私が言ったのは、要するに、素磨子が心配したり、私が素磨子に嫌われたくないから。つまり、自分のためなの、素磨子。素磨子の方がよっぽど、立派だと思うわ」

「いや真面目でしょ。」

「そうね。」

汐見は微笑む。自然な感じに、私のことを、多分、シロツメ草の指輪を巻くように。(？、あったかい白味の指輪をくれて、花のまま私に巻くように。) 私に、だったら、違いわね。

「何か誤解してない？」と、汐見(※本人)に言った。

「そう、思うの、と、汐見が恥ずかしがってる。可愛い。スモモのピンクで、可愛い。

「あのね、だったら、その、素磨子。素磨子は私を、可愛い、と、思うわっ素磨子の事で私は、真面目な方、なの。私はそうだけど今言った通りもあるから、偶然繋がった言い方、言葉で、素磨子の為にも、私は真面目になれるの。奈世さんも、素磨子は昔から、昔から私は素磨子に真面目よ」「知ってる。」と、返事を挟んだ私。恥ずかしいし分かっていることを言う。お互いに、ええ。お互いに。恥ずかしいからそのあと、私も止まったスモモ。

そんな感じの薄ピンク色の朱色。でもスモモは真っ赤にはしゃいでる色だし、なんでか朱色で桃色の、爽やかな薄ぼんやり？のはつきりしたような、スモモの甘酸っぱい、感じ？そんな感じの色がね、すっぱいの。しゅわつと甘くて、(また)すっぱいの。スモモは真っ赤な色なのに、素敵に、素敵な楽しさと一緒に！(きつと予想外の甘酸っぱさがある。)恥ずかしい、汐見。しゅわつと弾ける、桃色。：私もしおみもごいっしょに！一緒にわーっもう！、私は、汐見に言うのよ。今すぐ、落ち着いて呼吸を切って、と！、

「どうにかなりそうよ。汐見」「そうね。私もよ、素磨子。」切り過ぎて呼吸が止まりそうな気がした。気がただけで息、凄く落ち着いてたから、何だか海の中で、幸せで、はつきりと汐見を見ている気がした。水中が空の上とベッドの上で、夜で、それ以外は完全に合ってた。要するに空気の中よね、ここは。空気は中も外もなくで、でも現実には、こここに汐見が居るから、真ん前に汐見が居るから、その前、汐見のすぐ前にも私が居るの、すぐ前？空気を挟んですぐ前！いや空気はもういいからすぐ前、汐見、汐見が私を抱きしめて、汐見。

汐見が私を抱きしめる。強く。強くてぎゅーつと、汐見、ちゃんっ！♪

素磨子がこんなことを言ったから・「どうにかなりそうよ。汐見」「そうね。私もよ、素

磨子。」待ちきれずに私は言葉を切った、素磨子がこんなことを言ったから素磨子の言う感じは、とてもちゃッと恥ずかしがってる！笑顔と嬉しさ、涙と、嬉しくて楽しくて恥ずかしくって私も、私も素磨子ほど可愛くなっていれば良い恥ずかしがってるけれど、素磨子、私もきつと、素晴らしく映えるわ。二人とも！恥ずかしいのは…いつとう、可愛いからよ。その恥ずかしがりも凄く、可愛い。私も。素磨子も。綺麗で可愛い、可愛くて綺麗で、抱きしめたくなるわ。だって素磨子も、こう言ってくれたから（私も、の証明）。

「どうにかなりそうよ。汐見」

「そうね。私もよ、素磨子。」

待ちきれずに私は言葉を切った。素磨子を抱きしめる。素磨子。

強く、強めに、抱きしめていくと、素磨子の筋肉が厚くて、熱くて砂浜をしずめる位にあつくて、厚くていっぱい筋肉がいっぱい私の方こそ締めつけてきてくれて、そこから（腕から背中から）全身までぎゅーっと伝わるの。素磨子の強さと美しさを感じる。素磨子は、抱きしめて感じてくれてる素磨子も。私も、抱きしめ合ってる。素磨子も当然抱きしめあってる、しあわせ。

「汐見ちよつと遅れて、ゴメン、幸せで、タイミング良すぎて汐見、抱くのが遅れて、抱き締められるの、私しやー！、わせっ、で、ちよつと汐見急に指動かすとか、やめ、あははっ！」

やめない。そのつもりは全く、無いから、私は素磨子にやめて、と言った。

「いや、やめて。素磨子が、ごめんをやめるの。」私は指先（今はもう爪とかも、万全。）を一本一本、素磨子の背中の大きなラインと背筋のライン、大きくて、一部分一部分まで、大きくて、私の指から一本、一本、素磨子の背筋ぎゅーとして！なぞって、揉み込み、締め付けられて、それでも私は素磨子を、くすぐる！さすってさわってスツとして、その上揉んだり押し込んでみたり。押し返されたりいっぱい、抱き締められたり。素磨子の背筋を抱きしめて、私の指から、掌からぎゅーと、素磨子の背筋を揉み込んだら最後、最初から抱き締めてくれる。素磨子の柔らかくて丈夫な（綺麗な）背筋、私は抱くの。抱かれるの。撫で、なで、くすぐる。私を、抱くの。素磨子は撫でるとかくすぐるとかせずに、ただ私の両手を指先を、抱いて。そのままぎゅーとするの。熱くてあったかくて、幸せよ。一本一本指先を、一本一本全部の筋肉、素磨子が私をぎゅーつとしていてどっちもどっちが、どっちもで、筋肉が体躯が背筋、両手、指先手の平肩から背筋私っ、体と熱くって素磨子、私も、身体があったかくて今、素磨子、私も！幸せ、よ。私も素磨子も抱いて抱かれて、両手の指先に筋肉を抱いて、綺麗ながっしりの両手と緩やか、重たい、がっしりしたぎゅーとした優美な、素磨子の背筋を抱かれたり。抱いたり抱かれたりぎゅーと、きゅーと私も素磨子もして居るから、私は、素磨子に、こう続けるしかないのよ（また私は手と背中に私の力をぎゅーと、ぎゅーつと入れ続けている）…。「つまらないこ

と、ごめんとかもう言わないで。私も。素磨子の全部が幸せ私も、だから、謝らないから、私は素磨子に大好きで、楽しくてずっとそうだから、私も、素磨子にはごめんとか言わない私は素磨子にこうしているから抱いて、抱かれて、素磨子の力で両手と両腕と背筋、せなか、背筋、ずっとしたがつしりした筋肉、ずしりした柔らかい超！硬くなったり、そういう素磨子の筋肉が全部、素磨子の力で、体躯で、身体が、私と素磨子を抱かれるの。良く分からないけど、抱くのも抱かれるのもね、ええ、分かるのよ、私と素磨子なの。抱くのも、抱かれるのも、全部、素磨子の全部が幸せだから、謝る必要はもう無いわ。抱き合うって、素磨子と、私の、最高つ、素磨子と私の全部が良いのよ！。」と、素磨子は楽しそうに笑っているから（同時に、）気持ち良く筋肉がキュッとしてくれるし、恥ずかしそうな、くすぐりの、真っ赤なほっぺも気持ち良さそう！に、素磨子が笑っているから私は、合わせて見えるのが凄くて、素磨子が、素磨子の吐息と笑顔と涙目！震えて、気持ち良く恥じらって、笑顔で呼吸を切りつめて深く、ひゅと、涙目、合わせて見えるの気持ち良さが素磨子が恥ずかしがつて気持ち良さが全部が良いのが分かるわ！最高よ、素磨子！最高ね！そうでしょう素磨子。手に力。私も素磨子も手と身体に、力を、私も、声と息（私の声が高い）、丁寧、指先、慎重さは要らない、丁寧さのみと筋力を以てして素磨子、私、恥ずかしいのだけど。少し…だけ、目を逸らしたくなってくる（どこに？おっぱいに胸筋に腹筋に腰つき分厚くて筋肉いっぱい、筋肉いっぱい流れるラインでガッチリ、大腿筋は柔らかきも硬きも太腿（ふともも）、素磨子の全身が全身全箇所が、全部が最高に自由な筋肉！素磨子の思うまま感じるままに、最高つ、硬いのも柔らかいのもね！）。目を逸らせない。どこにも、困ったわ（良いわね！）。

汐見の体は私より細い。でもとても触り心地が、いいの。私もだけど（汐見、自信があるわ）汐見も体には自信があるわ。（体にも。だけど、今は特に、体には）。筋肉がぴしゃん、としてやわらかい。柔軟性、というか、ぴしゃんとしている、し…とにかく違うのは凄い所が、私の筋肉がピン、しゃん、変えられる感じで、自由にかちかちとかやわらかーいとか、変えられる感じで凄いいんだけど、自慢だけど汐見の私も私と違って、汐見は私のことと褒めてくれるし、私も汐見のこと、全部、凄いと思うし、光の海流？それっぽく、力がきゅーん、と流れる筋肉。私の汐見に（筋肉に）入れた力も、汐見の入った力も、ぴしゃん、と、きゅーんと筋肉に流れる筋肉。私にも汐見にも流れてくるの。汐見の筋肉の綺麗な動きと、ハンシヤ？と、跳ね返しのカウンター的な、反射でいいの？鏡とは全然違うわ。汐見の筋肉が（きゅうつ、と）動いて、力がふわって私にも来るのにそう！すっごく素早い系なのに、ふわって力が、返ってくるし、かっこよく流れるから凄いのよ。ぴしゃんと、きゅーん！と、ふわっ、と力っ！汐見の筋肉は最高ね。今思い出したけど弾力ね、弾力。でもぴしゃん！ときゅーん！のがそれっぽくて、いいわね！

「汐見の筋肉は、背筋も、全部、全部の中で、背筋もぜんぶ、全部の筋肉！最高ね！汐見つ、汐見って最高ね！、そう！そうだったわ、汐見、そう思えるの。ありがと。私、ごめんとか言わないからね。だからねッ！私、そう思えるのよ、最高っ！」。私は汐見へと一氣に言った。途中で思い出して気付いて言った。汐見にありがとって言わなくちゃって、そう思って全部を言ってみた：良かった。私、汐見、良かったと思うわ私。汐見。きつと絶対お互い、汐見と私のどっちも思うの。思ってる気がする。：幸せそう。汐見。汐見。汐見が、可愛い。

素磨子に、身体に、私は片手、私の右手をすべらせて、背筋から腹筋の前へと辿って、しゅっと、肌触りがトップスイートで、ぐんわり広がる重なる大きな背筋、ハチミツ色した曲面を、ハチミツみたいな感じの可愛い、綺麗な、甘みもパワーも筋肉で強い、強い背筋をたつくさん、いっぱい触って・辿って、腹筋はきゅうつと六枚、縦↓一枚二枚

（親指で少しだけ触れる左側の一枚、三枚目、だけどさわりが感触がくつとして素磨子の、反射的な僅かな力でもって、私の触った親指が力と、一緒に、弾かれちゃったわねすごい）、横に三枚四枚同時にふれて、手の平と手の指で同時にさわって、きゅうつと・もっちり、くつとばるんと、気持ち良さが私までやっぱり！、おっきい！、腹筋が、素磨子の。腹筋も、素磨子は全部の筋肉が、すごい。（私も負けてないけど。）絶対。（これには二つの意味がある。二人の意味ね。素磨子、私。素磨子、私も凄いのよ。）素磨子のおまんこへ、と届いた右手で私は素磨子の陰毛に触れる。割と薄毛でふしゃふしゃして、上品、まつすぐしたそよ風がくすぐつたいと、くすぐつたいとも、お互いに、私も笑って感じるように、触り心地が明るい（眩しくない！）、やさしいふしゃふしゃ。素磨子のおまんこの、つい、上ね、素磨子の陰毛から、私の手、おまんこへと伸ばして触る時。触るとこ全部が良いから、素磨子、私の心はやつとだわ。素磨子。私は、やつとなの（私も）。：素磨子。（心で素磨子と呼んだ。）

何となく、汐見もやつとって、おまんこにふれながら思ってる気がする。私のおまんこに汐見が触って。汐見のおまんこに、も、私が指で、すうと触って（手を伸ばして私も、指で触って）、ストレートっぽい丸やかな陰毛がふつさり。まろやかだっけ、円やか、丸やか。円やかだとカーブがググつとし過ぎて、汐見の陰毛とちよつと違うから、丸やかで半円を伸ばしたみたいな、丸やかだとカーブが緩めの気がして円やかだと360度ぽい、から、やっぱり汐見の陰毛はカーブが真っ直ぐ、直線的でほんのり丸みを帯びてる丸やか、まろやかな気分なの。ひらがな？まろやか。そっちで、直線、まあいストレートが、綺麗。すっきりした良く映えた陰毛ね。すっきり。まろやか。ふさふさの。すっきりした厚みのかげばやし（林と、綺麗な声の、汐見が歌ったおはなし？おはやし？）：みたいな、

まああるい秋月の童謡みたいな、難しいコトバが分かった！これよ！まああるい秋月の童謡みたいなまろやかですつとした陰毛が、触るとしゃんとして、ぴいんと突くの。私の指を、指先を。手の平も、ほら、遠慮なく触るし私、汐見、汐見の事好きだから勝手に。汐見も勝手に好きに、好きでいてね私を♪っ！。

素磨子にさわられて私もさわる。おまんこ、おまんこ。線の細いせまい、女性器。私は：私も、かなり狭いわね。素磨子の筋肉はリラックスしてるけど、この場所は柔らかくも狭いと感じるわ。背中や腹筋みたいな、広くて、筋肉がぎゅうつといっぱい締まるようなあの感じとちよつと、大きくも違って、狭くて柔らかくてお股の筋肉がいっぱい詰まって左右から一緒に、上下は斜めから左右に駆けて、力が走って肉間の右左から、ななめ、真横に、いっしょにたくさん、狭い！へ力が集中する様。なぞって手の平でおさえたりして、ぽふぽふ、きゅうつと柔らかくおさえ、素磨子の筋肉のあの感じくらい柔らかく優しくおさえ、きゅうつと押さえたなら手の平、そのまま、ぽふぽふ、さらつとちよつと、私が手の平を下へ潤滑液が、垂れて流れて、指で、また私あいだをなぞって、指の下の平愛液ばたばたたん、ばたたんラブジュース？水気。しつとりさらさらねぱり。と、すまこの愛液は透明ね。奈世さんよりちよつとだけ色が薄い。奈世さんよりさらに薄い感じ。奈世さんが薄色甘酒で、素磨子は透明かき氷みたい。爽やかにとけたあとの、水。シロップ。お砂糖？かき氷。白。透明の、白。素磨子の白と、奈世さんの甘い、甘い白。ねっぱり、さらさらのバランスが、さっぱりした和菓子のソースはねつとり、さらさら絡める、絡まる♪、楽しい、桜の甘酒！、奈世さんと、シロップの溶けた、とけた透明の熱くて冷たい爽やかさの意味で、冷たいわ、とろけるかき氷のシロップみたいな熱くてたまらない素磨子の愛液！ばたたんばたたん、溢れて来てるわ！手の平からもね、もう一杯、ベッドに！シートに垂れるのが勿体無いわね。その事は本当に、本当に思うのよ、指を早く入れてから舐めるべきなのよね。おまんこをゆつくり、なぞってきたから。中指から3本でおまんこ揉んだり、なぞったり、撫でたりさわったりしたから。丁寧ね、素磨子：も、そうしてくれたわ。私も最高だけど、素磨子、気持ち良いけど素磨子、勿体無いのよ。その先。ずっと。舐めてみたいわ。（私素磨子ずっと。ね。：、）

「素磨子の処女、いい？」と、すぐ聞いてみた。そろそろいいかしら、と思ったからすぐに。早すぎたかもしれないと私は思った。でもそれは有り得ないことだった。何故？素磨子は気持ち良さそうなの？、そもそも小学生当時から私は、素磨子と、気持ち良く！セックスを、セックスを思った時しておくべきだったわ！、幼稚園かしら。その前ね。最初に。最初からこうしておけば良かった。私は素磨子としたいのよ素磨子。素磨子とセックスがしたいのよ、素磨子。ステーキを食べるのは良かったけど。素敵よ。素敵だったわね、素磨子。いつでも素敵だったわね。「いつでも素敵だったわね。」と、同時に、返

事を待たずに私は、口にして同時に素磨子の言葉じゃなくって私の、私の言葉と心と同時に言ったの、素磨子、素磨子は言うのかしら、素磨子？、怒ったりはしないと思うけど褒めたし、そうね、確かに褒めたわね、私は、素磨子の色んな全部の素磨子が私は良いって良いって、良いって、良いという事を素磨子が言ったわ！！、こう！。

「私も、汐見がずっと好きで、好き。素敵。素敵って何かしら、これよ。この気持ちだが、汐見のおうちとか、場所とか、ベッドの上とか状況、ここで、この場所で汐見といっしょに居れて、居れて、分かると思うけど、でも、入れてって事でもあるのよ汐見、汐見、でもいっしょに居るのも、良いのよ、そうじゃないけど、いま言ったこと、一緒でもあるけど、汐見にしてほしいのもあるの。汐見に、してほしいのが、あるの。汐見と一緒に居るのは、昔からそうで、私のっ、いちばん、いっちゃん、素敵よ。私こそ、その、違わなくナイけど私こそじゃなくて私が、私は、私もああああもう違うッ！わたしもわたしもわたしもとかじゃあないけど私もじゃなくって、私は、あの、汐見、汐見の事、好きなの。汐見に今、怒ったとかそういうんじゃないから。そういうのは絶対、私も、ああ私もね。私も。絶対ないことなのよ。汐見に今ちょっとふきげんとか無い、くて、無くてっ！私も、絶対無くて！そんなのは、私の勝手なの。私が勝手に今も、怒った感じで、大声で言ってたコトなのよ。勝手ってのは、さつきとはちょっと違うの。私の心の中とか、そういう。そういう、汐見に怒ったのを向けるとかね、違うの。そういう、そんなのじゃないのよ。汐見。私がそういう、私だけでのみ、ワタシの勝手に思ったことなの。」、でも聞いててちよっと思つたわ素磨子。少し不安な聞き方をしたのよ。素磨子。私は直接、素磨子に言つた。心配はしてないし、良いって（素敵って！）言ってくれたけど、でもちよっど不安なの。素磨子：、ワタシって聞こえて、どうしてかしら、と、私はその事をこう言つた。素磨子は「え、なんて。」と、言つて、ちよっど焦つて泣きそうな顔をした。何故？（やつぱり泣きそうなね、とも思つた。）「イヤ、ゼツタイ言えない。それゼツタイ言えない。それやだ。」私はこう言つたけど、伝わって良かったと思う。私はサイアクだと思う。やつぱり泣きそうなね。素磨子。ワタシって無理して辛そうに聞こえたの、素磨子。私はなんで言うのかしら。心配。もっと心配になるわね。素磨子。なつたの。っ、私は泣かせたのだと思う、素磨子を（素磨子に）、言つたから泣かせて私は素磨子が泣きそうな顔をしてるのよ。

さつき

「じゃあ素磨子はどうしてなの？」と、私は言つた。私は言いたくないけど素磨子が、心配、素磨子が泣きそうな顔をしてるから、私はまた、素磨子に、言うべきなのよ。きつと。言いたくないけど私が絶対、素磨子に、絶対今こゝで言うべきなのよ。言いたくないけど。泣きそう。素磨子が。私は泣きそうな悲しい、素磨子に言つた（焦ってるから、素磨子が、泣きそうな顔で、悲しいと思うわ。それは私が嫌だわ たぶん二重の意味で、だけど、二つ

目こそ勝手に私こそが・自身が嫌よ！。悲しいなんて私の勝手に、嫌なの、そんな素磨子への感想は嫌だし、勝手よ！、ひよっとして素磨子が言ってたような、でも、素磨子は勝手とか、そんな風には感じられないけど、私、こそ！。

「素磨子にだったら、傷ついてもいいと思うわ。」と、私は泣きそうな素磨子に言った（悲しいとは私の勝手に、いけない！）。素磨子は私を思って傷つく。たぶんその事だから絶対この言葉はいけない矛盾になるけど私はそのまま素磨子に言ってたわ。どっちみち素磨子にひどいことをするのよ、したのよ。今私は言った。さつきから二回も同じような酷さで素磨子にそんなことを言った。言葉を違えて二回も、ゆったの。言ったの？素磨子に、そんなひどいこと。

素磨子は泣きだした。可愛い。私の欲情は底なしだった。愛とかよりずうっと、酷かった私は。私はもう言っていないけど素磨子は、何だか、ひどいこと？を、言った。

「汐見私、奈世さんのこと大嫌い。」

だいきらい。大嫌いとはだいきらいにひらがな。でも大嫌いしか考えられない。ひらがな。別のいみ、ことばはあんまりないわね。

素磨子は奈世さんが大嫌い。やだ。

やだも何も素磨子の考えだけけど私はやだって嫌だと思うの。素磨子も私もやだ、って、同時に、やだって思っているのよね。今。奈世さんについてを、やだ、か、やだやだ、か。私がやだやだ。呻いているの。呻くって素磨子責めるみたいで、嫌だわ。でも私は、勝手だから、やだわ。私がやだやだ（心の中で、）呻くばかりね。どうにも…素磨子も？。私是不安だし、そして、心で呻くばかりだし、そしてよりも同時によりも、おなじで、意味が不安と心で呻くと、いっしょ！（素磨子に理由を聞いてみた。）ああ。

「素磨子、どうして。理由は、理由だからよ。理由は、素磨子の、奈世さんが嫌いな理由よ、奈世さんは分からないわ、素磨子。奈世さんには素磨子は好かれていたと思うのよ。素磨子の嫌いな理由で、だけど、どちらでも責めているとかそんなのは全く無いのよ、違うの。ちがうのよ、素磨子。ひどいけど、でも、ああ、違うの素磨子。ひどいけどやだやだなの。私。結局責めているのよ、素磨子。私はこんなのだけど、でも、ね、私は、素磨子の理由が知りたい。今こんнадし、私を嫌いでもいいけど、というよりそれならすごくよく分かるし、だけど、奈世さんへの嫌いな理由は、私は分からなくてよく知りたいの。知らなくてもいいけど、伝えてほしいの。知るの大切な素磨子のもので、でも私は伝えて欲しいから。私ばかりね。でも、素磨子、そうして。私は、私ばかりにされたら、素磨子に返していききたいわ。是非そうしたいし、しなくちゃいけないし、でも、私がそうしたいし素磨子にずっとね、しなくちゃとかそんなのじゃ全然違うの、だけど今は素磨子に伝えて欲しいの。私ばかりそうして欲しいの、つ、ああ、素磨子ね、本当、本当よ、素磨子。」

知りたいから伝えてほしいのに変わるの私が素磨子を欲しいから。素磨子に嫌われたら、

私は、不安になるの。たまらなく不安になるから、いやなの。でも私は、奈世さんを嫌いなのも、何でか、私は素磨子その事も、不安で、だけど、知りたいって、素磨子の事を思うのよ。その時にできたら伝えてほしいの。ああ。でも、伝えてくれるしかないから、私は結局、私だけ得しているから、素磨子にばかり無理させてしまうのね。私は嬉しいけど、素磨子は、大変だから。私はこうして、伝えてくれると、幸せ。素磨子に幸せをあげたい。素磨子。

素磨子は泣きながら言った。

「汐見は分らないし、分からなくて良いのよ」「どうして。」

（泣きながらも素磨子のはつきり、言った。とても良く聞こえたし私は分かった（言葉が何を言ってるのか分かった）。でも良く分らないまま（素磨子の言う通り。）だった。素磨子にどうしてなのかしらと言う）口より同時に思った。先に、先より先に、思うのもなく、思うと同時にコトバを、先に、どうしても感じて？思っ、言っ。色々と思うより先にもう、思っ、どうしてと私は思っ、言っ。素磨子が怒るといやだわ、これは、だっ、私は、聞きたいから言っ、それでも尚言っる気がするの。多分そうなるしこれからも素磨子に言うわ。素磨子はもうそれは知ってるし、素磨子は言っ。知ってると分かる。素磨子はベッドに俯せて言っ。私の横に居る素磨子は綺麗。素磨子はいつも綺麗。髪が長くて、きらきらと背中流れて張り付く。ぺったりきらきら、月明かりの反射と綺麗な石炭色の髪。素磨子はぼんやりと笑っ、泣いて、静かにそういう声で言う。そんなに静かでも、素磨子、背中の筋肉に流れる髪は、黒ガラスよりもダイヤの強、つよしさで、

元気のコールはきらきらして綺麗。素磨子はあれ、な疑問形、じゃなくて私が、素磨子におかしさを覚える。素磨子の言葉はちよつと変。素磨子の髪は、可笑しみがあつて綺麗よ、だけど、素磨子は寂しい声で、そんなに不安？な、事を、真剣に、素磨子は泣きながら微笑んだ声で私にこんなことを言っ、そう、私が変と思っるのが変だわ！。

「だっ、奈世さんが大嫌いだもの。奈世さんはともかく、どう思っるのかしらね、なんだか違う気もするけど嫌いよ、私が、私の方が奈世さん、奈世さんの、ことを、嫌いな！。嫌いな、奈世さん、汐見が好きなの、でも私、なんだかとても、嫌いよ、なんだかじゃなくて、はつきりと、キラ。好きな気に入っるところもあるけど、嫌いよ。たぶん好きでキにいっるトコロもあるのよ！っ、でも、だけど、私は！、キライっ！、なの！。奈世さんのところがだいっきらい、で、奈世さんのところは何かしら、ね。何かしらっ、汐見の、ああ！もう！、汐見の口からそんなコト絶対ゼッタイゼッタイ聞きたくないの！、だからね、私も、ああ、私もね、私が代わりにだいたい言えるから、ゼンブ！ぜんぶ。全部っ、ぜんぶは、つらいわ。全部はその事全部の、文章的な、あれでも、言うのは難しいし辛いしっ！、とても、文章じゃなくても、辛いわ。悲しくな

るのよ。奈世さんが凄くて、私が。全部は汐見が、汐見の方が、とても！とても、知ってる事だし、やだ！、やだ、嫌なのは、私がイヤなの！とても！全部は言えないし言ってほしくないけど私が私にも分かるのがあつて分かるのが沢山あるからつらくて奈世さんの凄いのが素敵なところが綺麗で、綺麗で、凄くて、強くて、髪の毛明らかに最高、超えてて、最高以上で、とっても強くて、あの髪の毛は、私以上、なの。それは、それ、私、奈世さんの方がとってももつ、とっても、凄く、私を、とっても、超えちゃってる所なの、キレイ。きれいで、綺麗で、とっても凄く、で、凄いい強いしきつとね、完ぺき、超えてる。綺麗で完ぺき超えてるの。凄い。すご、私が、駄目な、ところが、色々ね、色々はつきり！、はつきり、はつきりとつ、見えて来て分かるの。髪の毛が私は綺麗じゃないから。奈世さんが綺麗で、私の髪の毛、とか、セーカクとか、性格ね、これ、性格、私は綺麗じゃないから。ひどくて。酷くて性格とか、嫌よ。奈世さんは私に、何も、感じなかったわ。嫌な事なんにも、きつと、感じてなかった、それは、とっても良い事なのよ、私は、悪くて今の言い方も！それがもう、最悪なところなの。ずつとね。ずつとそう。私は、感じてきたのよ。私は、嫌なのを、感じてきたのよ勝手に、一人で勝手に。そんなのよ。やだ。奈世さんは性格、私の事も、そんなに、良い性格をしたのに。奈世さんは良い人だったのに、でも、私は嫌なの。勝手なの。そう。私は奈世さんが嫌なのずつと。私が嫌って事なの、どっちも！。どっちにしても、私の方が、いやなの！。奈世さんの髪の毛は綺麗で素敵だと思うわ。水中での流れとかさらさら水中から浮いてて、みず百トンより、もっと？最強。そんなとこチャーミングで素敵だと思うの。水から浮いてて超えてるとか、間抜けで、天然とか思えてとつてもつ、可愛いと思うわ。でも私の方が強いけど。それだけ」

「奈世さんも素磨子も嫌ではないから、二人ともそんな嫌と有り得ないと思うわ。素磨子も素敵な髪の毛してるし、奈世さんは最高の髪の毛だけど、素磨子の髪も、質がね、他の最高よ。最高じゃないけど、最高の髪の毛だと思うの。夜は柔らかくて艶やかで綺麗で、とつぷりこくこく真っ直ぐ通って行くけど、しなやかにひっそり、さらつて、波打つの。奈世さんが夜の髪の毛よ。素磨子の髪の毛は硬くてサラサラしてるわ。砂じゃない、月夜の真っ白な砂よりずうっと、硬くて、石炭みたいな、真っ黒のひかりを伸ばして重ねた、伸ばして、重ねた、光の、石炭。コールブラックよ。元気な黒が、元気な髪の毛を伸ばすの、素磨子、素磨子がそうして綺麗に、元気にしてるの。元気に伸ばすの、素磨子が、素磨子が！。素磨子の髪の毛はそっちで、そっちも、最高！、でも月夜は奈世さんの髪の毛とは違うわ。月夜と言ったけど、それは違うの、例え。例えの話で、奈世さんはきつと、奈世さんは、色も自由にできるの。それよりも奈世さんは、月も無い、怖くて冷たい柔らかな、くろよ。怖いわ。怖くて綺麗な夜よ、夜よ、よる、色、くろ。は、夜よ。柔らかくて冷たいしなやかな夜！。奈世さんは、シャット・アウトの夜よ。月夜の真っ白な砂なんて、色、全然違うし、手加減してるの、色が、月とか違うし、夜しか共通点、が、無いか

ら。奈世さんならきつとね、髪の色も自由にするけど、私たちにいつも、見せてくれる、きつとこれからもそうしてくれるわ、奈世さん、髪の色も、質感も、最高で、私たちに全然、最上級に、奈世さんの最高の最高の髪の色を私たちにそうして見せてくれるの、最高で、奈世さんは触らせてもくれるのよ。時と場所なら、ああ、一緒に、触らせてくれるの。素磨子と一緒に、髪の色も、触って、奈世さん、奈世さんを、見てみたいたいわ。素磨子と奈世さんと私と、三人、全員、全身の体よ！全身。髪の色も体の一部なの。当然、髪の色も体の、全身、三人いっしょにみてさわってみたいの！全部よ！全部の全身が、素磨子と私と奈世さんとで一緒に、たっぷり最高に三人ずつやるの！だから素磨子の髪の色も最高よ。当然私も自信があるけど、髪の色、素磨子にとっても褒めてみて欲しいわね。自分で言うより恥ずかしいけど、良いから。素磨子も完璧に、解つてるところからこれは、恥ずかしくて、嬉しい、私の楽しみ。楽しい。素磨子も楽しんでくれると良いわね。私の髪の色は、自信があるからきつと、素磨子も、楽しめる気がするの！。それとも私から、もつと言った方が良い？素磨子。楽しんで、して欲しい、のよ。」

素磨子は泣きながら、じつと泣き止んで、私をじつと見て真剣な顔で、聞いてくれていてすぐに笑って、聞きながらきげん良く多分怒って、機嫌よく笑って、くすくす笑っていただけ泣いている気がして、まだ、ずっと、不安ね。心配なのかしら、私。私が、不安なだけみたいな気もする。素磨子が心配では無く、私が。素磨子が不安なのに！。怖い。私は素磨子が心配なのかしら。

「汐見、嬉しいけど、即答するのね、いっぱい。」

素磨子は微笑んで小さく泣いて、怒って、私に微笑んでいるだけで、綺麗、素磨子は今、大きめの声量で落ち着く？、落ち着いた小さな声から、はつきり、大きめの石柱をぴんと弾いて楽器に、高い高い巨大な落ち着く石の、ミルク・アイスの純白の綺麗な、天まで、大きな雲と、柱もまっすぐ純白、大きな大きな柱と、一面、全面しっかりしたふわふわの綿雲。青空一面、ふわふわの純白ランドよ、土とか土地とか、全然、全然違うの。ふわふわの純白おふとんが、雲。お空の全部が雲なのよ。空。上には青空と日差しが丸くてまろやかな何だか優しい太陽、目にきらきらする、優しい丸い、真ん丸の太陽がはつきり見えるの。揺らめかない水中みたいな、青空、よく澄んだ軽い軽い水！、くうき。クウキは、青空ね。でも全部きれいな音は、音から、弾いた柱の音からぜんぶ、天にも柱にひびが大きく大きく見えないのに大きくひびが、声にぴしっと、入っているわ。ぴんと弾いて、ぴしっと、入るの無くてっ！、最初から素磨子に不安があったの。

最初から素磨子に不安があったの！、綺麗な落ち着く高めの、素磨子の声は、今はつきりした高さで大きめの声で綺麗に、ふわっと、憧れちゃう！ような、素磨子の声きれいで落ち着くのは違うわ。違うから、私は間違ってたのよ。分からないけど、だから、素磨子に聞くわ（これも間違いだけどより少ない方向の筈で、素磨子が未来に、本当に落ち着く、

その方向になっている！、筈だから！」。

「素磨子、私は間違ってるけど、その間違いがどこだ分らないのよ。私と、素磨子が楽しく落ち着いて、楽しめるためには、どうするのが正解？、かしら。どうするのか、素磨子がしてほしいと思うの。素磨子がしてほしいことを、私が、とつてもして欲しい。こ、なのよ。私が、して欲しくて、したいことなの。素磨子にそうしてあげたら、いいのよ。私がそうしたいことなのよ。素磨子が、思うのが、一番なのよ。」と、私が言うとき、素磨子が、言った。「奈世さんよりイチバン、って言つて。汐見。」

言う答えが今見つかからないけど分かった、素磨子は奈世さんが嫌いなのではないわ。

素磨子が不安なのは、多分、私がある場に居ないということ。

私が奈世さんと居るのが、ほかで、素磨子の居ないの。ところ、なの。そこ。

奈世さんと二人で、私と奈世さん、素磨子が奈世さんと私と居ないの。違う。奈世さんと、では無くて、私と素磨子が一緒に居なかったのよ！、私が、奈世さんと二人きりだったわ。今は素磨子と二人きりの時で、それなのに奈世さんと一緒に、嫌なの。素磨子はたぶん、嫌なのよ。それは。嫌な思いをしたから、取り消したいのよ。二人きりを二人きりで、するの。奈世さん・私と、素磨子と・私で、二人きりの一緒に一緒になの、それは、一緒に一緒に嫌な事、だから、素磨子の悲しい思いをしたから一緒に一緒に、ゼロより消すのよ！。私は、素磨子がこう思ってると思って（・思うのを直接。こう。）、言った。

「今は二人で、奈世さんは居ないから、一番。素磨子が一番強くて、綺麗で、私と一緒に可愛いわ。私と一緒に一番強くて、強くて、綺麗で可愛くて可愛いの！、綺麗、全部があるのよ。全身に。そう、全身、全部に、全部なの！。素磨子が一番よ。二人。二人きりで当然、そうなるの。奈世さんと一緒に一緒に、奈世さんが居ないからあの時と一緒に素磨子が居なかったわ。一人、ああ、最初から三人ですれば良かったわ。素磨子は、三人ならどうだったかしら」

「違うの。汐見、私が、先よ。」

「奈世さんが先で、だから今二人きりで二人よ、私と素磨子と。の、二人よ？、奈世さんが今居ないことでは、ないの？」

「それとこれとはそうだけ別なのよ！、ああ、その、怒るじゃなくって、これは、ジジツで、嬉しいことなのつ、汐見。私と汐見と一緒に居たでしょ。ずっと。昔から最初からわーっと一緒に、わーって、私たちいっしょに、いた！でしょ、だから私、奈世さんと違うの！、先なの！。私と汐見が一番先だし、一緒に！、一番さきって花が咲くみたいでまるで、私と汐見のことよね。そうよ！、奈世さんより私が、先に咲いたもの！。先に咲いてて、そのまま咲きつばなしで、ずっと、咲いてて、楽しいままでいて、ずっと、全然咲いててしんどくもないしつ、咲いてて良くて、良くて、最高！。最高よ！私と汐見が先に、先に！、咲いたし、さき咲きより最高なもの！先より咲き！より！ずっとずっとね、

最高っ！最初で最初から、超えてるのよ最高も、全部！。汐見と私で全然全部が、良いのよ！、だから、こそ？、ね、私が奈世さんより先なの。セックスも、先にこうしてたら、良かった。それなら、私きつと納得たぶんっ、もつとカンタンにカンタンにこう、して、できたわ？。まあ3Pってのは正解だけど、たぶん、私が先なら奈世さんにも多分っ、奈世さんもね、二人きりで汐見と、セックス。私もするから、奈世さんもするべきよ二人、汐見と奈世さんと、二人で、するの。楽しいしね。それもね、凄く落ち着くのよ。落ち着いてて楽しいのよ、とつても！。だからその、結局は私の勝手で、汐見とこうして、セックスが、したいの。したかったということ。で、それよ。奈世さんより、私が最初につ、ええと、私が、セックス、汐見としたいの。奈世さんより先のが、良かったの。先だし。私が最初に汐見と咲いたから。先に、奈世さんよりずっと先に咲いたから。汐見。私のワガママだけど、汐見、私は、奈世さんより先なの。最初よ。私が、好きになって好きになつてくれたのは、両方、汐見も私も、汐見も私も両方！、どっちも、好きで、好きで好きな、絶対っ。汐見と私が好き合つてることよ。だから最初に先に！、先に！、そうなの。汐見と、私、好きなのよ。お互い、どっちも、汐見が私を好きで、私が汐見を好きなの。ずっと。最初から、昔からちっちゃな頃から、最初っから私たち、そうなの。汐見。奈世さんより先って、言って、汐見。ジジツをジジツのまま、言って！。」

「それは勿論そうね。奈世さんも言わないと思うわ。本当だし、大切だし、素磨子に会った時から、最初に分かったことだもの。素磨子が凄く良いって、思ったの。奈世さんより先で、素磨子が最初だわ。奈世さんも今日会って、そのことなんでしょう、素磨子、きつと完璧に分かつてくれたじゃない。私は最初から、小さい頃からずっと、素磨子を好きだったわ。素磨子。そのあと、ずっと、最近になって、奈世さんの事が、私、奈世さんを好きになったのよ。だからやっぱり素磨子が先なのね、そう、奈世さんも素磨子を好きになったのよ。今日はやっぱり、そういうことでしょう。素磨子も奈世さんを好きに見えたわ」

「それとこれとは別よ！違うのよ！、一緒だけど、それはもう全然、いっしょで、ぜんぜんいっしょでぜんぜんちがうの！。私奈世さん嫌いじゃないわよ！？そうよ！そりやまあ確かに、そうだけどでも、でもね、私が先なのよ、ええ、私が、奈世さんより先なのよ。でも！、奈世さんは分かてるし負けてる気がする！、私はこんななんでもん汐見っ！奈世さん、奈世さんは、いいコじゃない！とつても可愛いし、綺麗で、ココロもっ！、心が！心が、私よりも、ずっと、ずーっと、ああ、もう！ああああ、もう、綺麗っ！私こんなだもん！やだもん！奈世さんは物わかりがヨすぎるのよ！やだっ！私よりも奈世さん、かわいいもん」「イコールでも不等号でも、ないわ。しいて言うなら重ならない鉄と硝子よ。平面と平面が平行線で、別世界の綺麗さと可愛さが、あるのよ。当然強さもね。あるの。黒真珠を溶かした：弱いわね。鉄と硝子はどちらも弱すぎるわね、違うわ。それこそ違うのよ。素磨子と奈世さんには合わない。素磨子と奈世さんは、素磨子と奈世さんなのよ。ど

うあっても鉄と硝子ではないわ、素磨子は奈世さんは、最高なもの！。素磨子と奈世さんは最高のよ。私もだけどね。当然ね、素磨子。最高のラインは三つも、あるの！。とっても、凄く、楽しくなるわね！」

人の気も知らないで、と、私は笑える。とっても楽しく笑えるし、とっても、凄く、楽しくなる…だっけ？その通りだし私は泣けてくる。でも面白いし、楽しいし、汐見は、可愛い。奈世さんもうでもよくなった。良くなった。戻った？ともいうわ、たぶん…多分！、おそらく！、良い子だと思う、私にとっても！良い子、だと思っ！。悔しい。くやしい。泣けてくる。もう。奈世さんは可愛いものね。本当。汐見が好きになるだけ、あるわ。奈世さんを可愛がれば良いのよね、多分…、というか実際文句とかないし。私が私にあるだけ、だったしやだよ。奈世さん可愛いもん。あー。

、汐見、けど最高のラインって、あれね、一つだけ思い付いたこと、あるの。私も思い付いたことあるの、でも、汐見と一緒に感じ？で思っただけ、いー感じで思っただけおそろいじゃなくて、何だか文句をつけてみたいで、私は、こう言っただけに、心配、でも正直ダメ、って思っただけ。つらい。

「あのっ、汐見、返事が遅れて、嬉しい、楽しいし嬉しいわ。汐見。いや別に嬉しいのは返事の遅れで、そうじゃなくて違うの。嬉しいの。返事の遅れがどうか、嬉しいじゃない、いや別にそれじゃない。それじゃない、汐見よ。汐見の、だから、言葉がね違う、汐見の全部が好きで、今嬉しいの。でも言葉が今違うのよ。ええ？もう！、分りにくいから、あの、ね、私は汐見が好きなの、全部、言っただけでも、心も好きで、だから今、ずっと今むかしからぜんぶ、昔からはちよつといまつ、話が、ずれてない！。私はずっと今なの、汐見ッ、楽しくて、嬉しくて、汐見、ね、私は最初から、今なのぜんぶ。汐見と会った時から、ずっと、今みたく楽しいのよぜんぶ！。だからね、言葉がちよつとちがうだけなの。ラインは超えたらいけないものだし、サッカーでも、サッカーだと超えちゃったらいきたいフリースローとか点になったりするから、だめっ。フリースローとフリーキックは、端で、ゴール以外は投げパスと、カド、パスと、コーナーキックね。角のパス。フリーキックはあれ、ゴールね、蹴って。程ほどに蹴り込んで、シカッケイの隅っこを狙うの、そう。それよ点になるから！、えーと、ゴールの、ラインで、ゴールラインね。合ってると思うわ。ラインは、ほらね、越えちゃうのよ汐見。私がボールを蹴ったら、ゴール！で、なんだかダジャレみたいね。汐見。ボールにゴールって、逆か。ゴールに蹴り込むから。ボール、つと、それと、直接蹴らないで直接走れば、いやカンセツ？。走るの、見えないラインが、見えるとあつてね、オフサイド。なってる。知らない時なってるのよ、汐見。見えない線、なのよ。ライン？。とにかくね、超えるのはダメなの、汐見。それが線で、ラインというもののよ。しかも簡単にダメな印象になるのよ！、ほら蹴ると、

走っても嫌な方に超えるし！。蹴ったらいけどつ、ヨクないけどラインは。どのみち線はダメよ。超える。カンタンに、超えるとダメになるのよ。」

汐見は、聞きながら頷いて、また、頷いた、あとに、頷くのを、言ったわ。頷くのを言ってくれて、嬉しい！汐見は最初にそうねと言ったわ。

「そうね。最高が素磨子と奈世さんと私の、つい三人だけでいいのよ。ラインは、全く要らないわ。平行線とか、要らなかったわ全部、全部が、素磨子の言う通りなの。素磨子の言う通りだわ、全部！。ああ全く、とんでもないことなのよ素磨子。とんでもないとおつぴな例えを、したのよ。あの、ごめんなさい、最後にするから。言わないつもりだけど、最後のごめん、よ。だからもう、決して言わないわ！素磨子！。素磨子のオフサイドはひどいもの。キックは素晴らしく超えるのに、ああ、だからとっても簡単に超えるのよ！。素磨子は、素晴らしく決めていくから。だから、ラインは、もういらないのね！あっても意味ないもの。全部。オフサイドは、ラインが見えるほどひどいわ。キックは全部決めるのに。素磨子。良いキックよ、素磨子。大好きよ。offside はため息になるのよ、私、」「発音がむかつく！発音が、アメリカ！つ、えいごッ！。英語よ！褒めるかなすか、やめて！どっちなら褒めて！褒めてよ、汐見っ！」。

結局サイショだけかこいつ、と思った。

「素磨子は綺麗で、格好が良くて、とっても最高で素晴らしいと思うわ。」

そうね。でも、そうでもなかったわ。当然みたいな、顔して、汐見は綺麗で、冷たさが気持ち良い、優しさ。優しい汐見が、また小さく口を開いて、(言った?) 言うの。

「普段は英語ね、イギリス式らしいわ。私。」

分からない。分からないからね、汐見。私は分からない、と汐見に言った。

「分からない、汐見。でも、褒めてくれて、嬉しい」。ちよつと私、いやなこと思った気がする。「嬉しい、あの、褒めてくれたのが嬉しい。あの汐見、ね、らしいって言ったの、誰なの?」「英語の事?イギリスえい」「そう！、あ、ちよつとあの、気になるのよ。汐見。」「そうなの。素磨子、そう言ってくれたのはロシアの友達と、イギリスと、アメリカの友達が二人よ。丁度お茶会したのよ。私との、五人で」「いない。」「え?」「そんなの、いない。またふえたじゃない、汐見。」「要らなくはないわ。みんな素敵な女性で、見目麗しい可愛い、女の子たちよ。女の子の良い所があるのよ、みんな」「わたしと奈世さんでいいでしょ！ダメなの!?!」「好きなの?。好きなのは勿論、そうよ。素磨子と奈世さんだけよ、好き、なの。友達は好きだけど、好き、とはちよつと違うわ。素磨子と奈世さんの好き、なの。勿論。お茶会、イギリス英語。の、話よ」「そうなの?。」「ええ、当然、そうよ。素磨子にもう会っていたから、私。」

、ちよつとノドしゃっくりが出るように止まって(止まったの私)、気になるわ！。嬉しい気がする！汐見！、

「汐見ね、もう私が、好きだったの？」

「最初からそうだったわ。素磨子。お茶会はずっと後の事よ、それにこれ、失礼なことだけど、その友達を素磨子や奈世さんの、あの、好き、とか！、考えられないの。もしそうでも素磨子に奈世さんに行ったわ私は多分ソノ失礼をしたわああその、これはもう失礼だけど、友達とかお茶会とか考えられない。素敵だけど、全く違うのよ！、素敵、素敵は素磨子と奈世さんのことなの！。素晴らしいのよ。全く違うのよ。最高。最高に素敵で素晴らしくって、素晴らしくて素晴らしくて、好きよ。そんなのは、私、素磨子が好きで、奈世さんが好きで、素磨子と、奈世さん！。私、素磨子にもう会ってたのに、奈世さんとはとても好きになったの。素磨子。今どうしてかしら、分かる？」。

なんで真剣にそんなこと汐見が私に、私にどうして聞くのかしらね、汐見、汐見は真剣に聞いている、汐見は真剣に、可愛いふしぎそーな顔して、真剣に真剣にこたえなくっちゃ。汐見。私が真剣に、こたえる！

「奈世さんは、私と違うけど、別だけど全く、ステキだからでしょう。素敵よ。可愛いし、綺麗で、分かるわ。可愛いし綺麗で強そうだし！、奈世さん！、汐見っ！。汐見が、好きになったでしょう！？だからもうすばらしいに、決まってるじゃない！素敵よ！それこそ分かってる事だわ！私も分かってたもん！奈世さん！。奈世さんが良い人で、すてきで、素敵よ。私も自信がある、わ！けど、汐見！。汐見は、奈世さんが好きなのよ。ああ！、汐見は私が好きなのよ汐見！、汐見は、私が奈世さんと、すきな、ああ、もう、ほんとにほんとーに、好きなの。奈世さんとお話ししなくちゃ。汐見。私も奈世さんと話すわ。汐見。汐見と、私と奈世さんが、好き！、汐見は奈世さん、素敵だと思うでしょう。私も本当に、素敵だと思うの、私もっ、奈世さんをそう思うし、汐見！、汐見は、私もそう思うでしょう。私。私と！、奈世さん！、ね。私もそのうち、できるように、できるようにするからっ！。できるように奈世さんも、好きになってくわ。私も、奈世さんは、キライじゃ無い、から。」

汐見は急に泣いた。汐見、私が奈世さんのこと、とか、言う、と、汐見は雪の川、冬の川みたいにきらきら、冷たくてシャリシャリ流れる水が、きらきら、あったかいみたいに優しい？、優しい、穏やかーな流れる熱さ、ね。冬の涙がきらきらあったかい。汐見は勝手に、優しく、綺麗、私のことでもあると思う。勝手も。汐見が好きな人が、私、も。奈世さんも私も好きな人。いい。好きならいいと思う、汐見。

「私も綺麗でしょ、汐見。」

「ええ。」

汐見が、私にいっしょ、と言った。ええ一緒よ、綺麗よ素磨子、って。

つい私は、自分を綺麗と言って、汐見はその私の勝手な、言葉に、きっちり！同意を！、して、くれる！（くれた！）。汐見が、私にプレゼントをくれた。いい！と、私は思う、の！。

私は倒れ込む。汐見。体と体とセックス合わせて最後までセックスする感じで行く何だろう、それ、気持ち良くなる？、なるわね！それで、ラストのセックス時間よ！、瞬間？その瞬間、ラインをうちこわす無くなるラインをゴールも無くなるカンジで何々、何かしらそれは、そうよ！。その通りでそのとおり、しかないの！。押し倒して押し倒して押し倒す感じ、同時に包んでいっぱい包まれたりしてむぎゅーと、もぎゅもぎゅ！、抱き締めちやうのね！。そうね！汐見、その通りわたし！。私と汐見がその通りなの！。

汐見は特に（特に！いい！）落ち着いてうるうるしてるし行ける。私は眼鏡が無くても特にどっちも、特に！どっちも、どっちでも！汐見は綺麗で、綺麗で、可愛い！。うるうるした涙の落ち着く瞳がきらきら、私を待ってくれてる。汐見は落ち着いて、待ってくれてる。私も落ち着く。見てみる。可愛い。やっぱりきらきらして涙、うるうるした瞳が涙をぼたり。はらりと枕に流れる。あーあ。勿体無いから耳元近くを指で、右手の中指と人差し指でゆっくりなぞって、汐見の左耳、ほっぺ、目のふち近く、右も、ゆっくり、ゆっくりなぞって私は自分の指、舐める、だって汐見の涙がきらきらしてるし！。

汐見のほっぺが真っ赤。目が怒ってるみたいに、可愛い、恥ずかしいしよっぱいお味で、ちょっぴり私の心が？甘い。甘くて、あわい？そんな味。きれい。キレイな味って、私は思うの。でも汐見は恥ずかしくて？怒ってるみたいね。怒ってないけど恥ずかしいのかしら？、可愛い。ほっぺが真っ赤ね、汐見！。

、あ、ちよつとこら。（うれしーよお。）

素磨子に思うことを、言わない。(私が泣くのは、嬉しいからよ、素磨子、どうしてそんな恥ずかしいことを、するの。)心の音で言わなくて今、音ではないのよ。体なの、素磨子。心から体に、表されるのよ今ちょうど私がしたようにいま、素磨子の太腿を太腿で挟んで脚の、谷間に、谷間を重ねて。その前に私がしたことは多分、素磨子の可愛らしい、(え、可愛らしい?)恥ずかしい!両手を、(素磨子は右手の指だけで優しく中指と人差し指でしゅるつと、やわらかいささりでもって、私を、いとしく。優しく、してくれたけど。)私も両手を使って(掴んで!)手首、素磨子の体のバランス、脚が入るようにするの!、そうしたみたいね!流石ね、私!素磨子は右手の指で涙を、私の涙を恥ずかしく可愛くしたけど可愛いのは素磨子で、素磨子の動作が可愛い。でもとにかく私は両手を掴んだ。素磨子の全体が美しくって、恥ずかしい、動作も可愛くて、だから?、分らないみたいに分かるのだけど、ぜんぶ分かるけど素磨子が可愛い。右手だけ責任があるのでは、無いの。素磨子の全部が私に対して、したのよ。だから私は、両手を掴んで、したの。どうせなら両手ごと仲良く掴むわ。掴んだわ。そういう事なのよ両脚、そう両脚もね、今から、するのよ。力強い手首、両手の中に、素磨子の体、全身で!、私も全身で両手と、両脚、素磨子の体と合わせるの!。合わせちゃうのよ。綺麗な筋肉、綺麗ね。素磨子私も身体が、綺麗ね。強くて素敵で、最強よ。もう!。もう我慢しなくても良いと思う(お互い)。私はそう言った。

「素磨子も我慢しなくてもいいのよ」

「私から先にもう知ってる」

そうね、と言えない!。素磨子は早口で、一緒に、言葉より先にもう太腿でおまんこを撫でてた、私の太腿、素磨子のおまんこ、素磨子の太腿、私の女性器っ、おまんこがかちかちしてるわ。とても、筋肉が良く締まる感触よ!。緊張してるけど、全然、気持ちが良いのよ!。緊張して密度が、きゅんきゅんかちかち!するのっ!とつてもするのよ!しちゃうのよ、素磨子っ!。太ももに、液体からびちちよりと、しゅつ。と、くつつけて、しやすしやす陰毛を交えてこするの、今そうしているように前後と左右にさゆーは揺さぶるみたいにこするの、かちかちの振動でがच्चりぴちゅぴちゅ水気の音から、涼しい、灼熱、背筋がとろけるすうつと風に、大気と天国涼しい汗と、熱いあつい体と身体、筋肉、厚いカチカチの気持ち良さが、あるの。氷みたいな、とろける、かちかちの氷、硬めの筋肉。ぎゅつとする弾力と一緒に、熱い体と涼しい気持ち良さがある!。背筋と頭が冷えてあつたかくなつて延々と気持ち良さが続く、熱い、やっぱり体も何もかも熱いもの!冷静よ。

冷静にそう思えるのよ、素磨子。汗は涼しくて熱くて良い気持ち。いい。何もかも熱くて考えたくなる。電気は冷えてると私は思うの。すぐ熱くなって、弾けて元に戻るの。熱くなる熱くなる元に戻るの、元から芯からあったかく、熱く、もとからずうっとあったかい！、熱い！。その中に冷静な気持ち、良さが、ある。スパークの冷静さがあるわ。（結局よく考えられなくなるのよ。）素磨子と私のどうにもならないわ、これは。私のおまんこと太腿が気持ちが良いのよ。冷静さは、冷たいすつとする気持ち良さ、なの。それだけ。考えることではないのよ！、そうよ！。動かす動かしてるだけなの！、私が。素磨子がつ！、わたしといっしょに、太ももを全身を動かして、るっ！、だけなの！。素磨子のおまんこは柔らかくって、きゅうきゅう、私の太ももから良く弾む。みぎひだりに柔らかい素磨子の筋肉、おまんこ、私の太腿はぎゅつとしたトランポリンみたいに、キュツと受け止めてきゅつと、何度も前後に、揺らしてきゅんきゅんキュンキュン弾むわ、素磨子の液体でとろとろになるの、とろとろにも弾んでぴちゅぴちゅ、音よ！。素磨子のおまんこを受け止めて筋肉が同じく（素磨子と！）濡れて、弾む音！、素磨子！、太ももは、素磨子の太もも！キュウキュウがちがちの筋肉よ♪、素磨子！。今度は、いつも私のおまんこが弾むの、おまんこが縦横ぼんぼん、弾んで、素磨子のハードにかためた太もも筋肉すべお肌にはずんで行っちゃう！蕩けちゃうみたいなぴちゅぴちゅ音が、リズムが液体、行くのは、往復運動！前後の往復、太もも、ナメに振動、前後と右、左っ、で、斜めっ！。ナメの振動。運動。往復！、太ももにおまんこを重ねて蕩ける、動作のリズムで復調、重ねて、素磨子のおまんここと私のおまんこ、太ももと太ももと重さと硬さと柔らかさと決して軽くはない脚！リズム。液体とろろかすリズムと体液、それこそ液体のはず。繰り返しの思いと動作とリズムとぴちゅぴちゅ、かちゅかちゅ、するする動くわ腰が、脚が！太ももが、いいの！綺麗で格好良くて、綺麗！、重たい流麗さが、私！。素磨子は、重たい分厚い筋肉！今おまんこは柔らかくって、素磨子、太もも、とっても硬くて、キュツと、美しく固めて可愛くキュツと、その感触はお肌もそうなっているのよ、肌触りはもう、最高で、元気で最高で、キュツとしたお肌に触れて、カチカチした優しい岩みたい…、きゅうきゅうがちがち…、ずつと…、私のおまんこにかちり（っ、触れるたびきゅんと、真下に重たく・確かに）受け止めてくれて前後に真横に斜めに動いて私は素磨子の太腿が良いの良いのから最高だから私は素磨子におまんこでこすっているのよ素磨子、おまんこ太ももが良いの、私も素磨子もそうなって正しいわとても、とっても気持ちが良いものね！。素磨子のおまんこが、太ももに触れて、とらんぼりんととてもあったか熱いの、素磨子の柔らかさで、熱い。熱くてとっても、落ち着く涼しさよ素磨子、素磨子が、そうになっているのよね、いつも。今でも、もつともつとそうなる感じよ。マシユマロより雪よりずつと柔らかい、ずつとしっかりしてぎゅつとした素磨子の筋肉、素磨子のおまんこが太腿の上で前後に左右に上下にもほらほら、私の筋肉（太腿）でいっぱい一杯っ、遊んで！今みた

いに沢山ずっと動いて！ぎゅっと！ぼんぼん弾んで、ぎゅっと！。どこまでも私が受け止めるから素磨子が私を受け止めてくれているみたいに二人でずっと、ああもう、最高よ！。

素磨子。太ももで私はいってる。ずっといってる、どこまでもよ、素磨子。私も一緒にいってるの、素磨子。

「素磨子、お風呂に、シャワー浴びさせて。」

と、朝に、私は言ったと思うの。素磨子も、裸で、そのまま、ずっと、朝八時くらいに、眠ると良いわ…、でも私は、ちょっとだけ良い気持ち過ぎて、素磨子より先に、眠らせてもらうの。

その次に、素磨子を…そう！、少し眠ったら私がそうしてあげるの！、素磨子！。飛び起きる気持ちで私は、言った。

「その後は、私が、流してあげるわ。素磨子。ええ、気持ち良いの、素磨子。」

シャワーお風呂で私と素磨子よ、素磨子、ぼんやりしていたけど、しっかり言ったわ、私は、素磨子に。私が飛び起きて、素磨子、しゃわ…、お風呂で、シャワーをしっかりと浴びるの、私は素磨子に、熱いお湯、と言った。

「しっかりとお湯がいいわ。素磨子。」

「私まだおちついてないのつ、汐見。良いけど。それは全部、良いわ。良いけど、さつきのはそれはもう、良いのよ、良かったから、セックスの全部が、汐見よ。汐見と私で最高なのよ！。良かったから、気持ちが良かった。汐見。シャワーは運んで、落ち着きながら入れるわ。」

「ええ。それでいいわ」

と、いって私はねむった。

ここまでずっと、私の汐見を、私がおひめさま抱っこしてきて、お姫様抱っこ。私が、汐見を。お姫様抱っこは楽しかったわずっと、こうして抱いてきたから、汐見、汐見は眠っているけど、汐見、すうすうとした吐息を首に感じる、気がするけど、気のせい？静かな眠り。静かな吐息。ふつとして、一度、また一度また、すうすう、眠って。汐見は静かに、気持ち良く眠って、すやすや。してくれたら、いいの！。ちょっと楽しかったか不安で、可愛くて力がぎゅつと、汐見は、安心そうに、ぎゅつと、そつと、私の胸に近づく。顔を近づけて腕をぎゅつとして、汐見、汐見が今そうしているみたいにそうして！汐見は楽しそうに嬉しそう汐見！、汐見に、シャワーのお湯、熱い♪。私にもこれくらいが、いいの。お姫様抱っこを、そーっと、下ろして、そーっと？そーっと、どっちでも、しっか

り、弱弱しく無くそつとして、座る、私も、座るの！。汐見を、胸へ…肩へも、もたれて夢の中みたい。汐見はそうだけど、私も、ちよつ、私がそうならいけない！ダメよ。汐見と、汐見と一緒にシャワーに、いっしょ、だから、ね、汐見とあつあつのお湯。お風呂で、シャワーを浴びたいわ。と、汐見も、言った。私も今思った！、お風呂で、シャワーを、浴びたいわ。ふふ。汐見はすっかりして眠ってる。肩、私のお肩に、汐見がもたれて！すったり。可愛い。お風呂してあげるわ、シャワーね。シャワーで…、汐見の身体を私が流して洗ってあげるわ汐見！、汐見♪。汐見の、おねむ。しっとりした眠り、ね、汐見♪おねむ。睡眠時間に洗うだけ、汐見！。私は、とにかくそれが良いっ！。

良い、のよ。汐見。あなたもそうでしょ？。

私は汐見を洗ってあげるの。汐見。気持ち良かったら、最高。私は正直に、良くしてあげるわ。綺麗に洗いはじめちゃう。汐見を。私の気持ちに、まず、正直に…、汐見、汐見は、良かったら、いいわ。おねむ。汐見の睡眠、時間ね、そのあいだ、汐見は気持ち良い？。と？、でも、なんだかそうなる！一緒に気持ち良くなっちゃう♪それよ。そんな気がする。

気がするの、汐見！。ああ！、

私と汐見なら何もかも最高！、気がする！。気がするとは現実って事なの、汐見！。汐見は分かっているから、頭で！頭いいから、汐見！私も、分かった！遠慮なく洗って、洗いはじめるわ、汐見っ！

やわらかーいスポンジにせっけんを、擦って、塗り付ける感じのクリームせっけん、つぷりと、もちもち、絶対高そうな石鹸。いつも思うけど絶対高いと思うわ。指がかかるーく塗ろうとするだけで埋まるし、石鹸の感触はエステの泥みたいにもちもち。エステとか行ったこと無いけど、多分。そんなしっとりした硬めの？泥みたいに、もちもち。しつかりとせっけんのセインが詰まって、成分が泡々で一杯になってる。なるのよ、こう、ほら、お湯でいっぱいに。あわあわにぬり付けたら、なるの。スポンジがスポンジ！で、いっぱいの感じで、スポンジ！ってしつかりした泡が！ほら！汐見の可愛い髪の毛と、頭、シャンプーより先にスポンジで洗うのよ。私いつもそうしてみたかったもの。汐見はシャンプーからするけど、私は、スポンジっ、私もそりゃシャンプーからリンスに行くけど、スポンジでしてあげたいから、可愛い。…するの。可愛いと思うから、するのよ、したの、汐見を、泡とか、スポンジとか私が、汐見に、髪の毛に頭に、触れてる。泡の上でも、キュウキュウしてぱつぱつするから、汐見の髪の毛は、パッション！。元気でパツパツの意味だと思わ、髪触りがぴんこしゃん弾いてくるから、くすぐたくて、良い気持ち！。ええ、もう、とっても良い気持ち、なの、泡々、あわあわで、すつと、ぱつと、髪の毛ぴんしゃん♪してるわね、汐見！。おまけにキュウキュウ輝くさわり、ね！。綺麗な髪の毛。泡、流すわね、汐見、しゃんぷー。そのあと、りんす…リンス。その前に、シャンプー！。やつとかなきや。汐見に、してあげなきや、ね。白い容器がパールのシャンプーで、黒が

コンディショナー…リンス。透明のリンスは後にやるやつ、だから、シャンプーを手に取って一回、二回、押して、桃ピンク？の真珠を溶かした色の、真珠、きらきら、カルシウムとか色々真珠のきらきらした、栄養？。ビタミン。ビタミン分とか入って、それで、きらきら光のビタミン、パールのところシャンプーの中に、光って、水滴に光が弾いてシャワーで溶ける前に汐見の髪の毛、シャンプーをつけて私がすすいであげるの。その前に今私の手で、しゃわしゃわ、こしこし、何度か何度か、洗って、元気なぱつぱつの髪の毛を、汐見を、汐見の髪の毛を気持ち良くて、私はすごく気持ちが良くて何度か、またしゃわしゃわ、って、両手で、こしこし、優しく洗ってあげるの。白っぽいピンクのシャンプー。白桃。真珠の紅色。薄ピンクの、白、それだけ。今つやつやの泡。それだけ。シャンプーはシャンプーであって、私は、汐見の髪の毛が！、良いの。汐見の髪の毛に、そう、良い、泡よ！シャンプーね。スポンジから、今、シャンプー。すすぐの。今は、つやつやの泡で、シャンプーの泡、しっかりした泡の次。スポンジの泡からシャンプーの泡へと、すすいで泡から黒髪が、綺麗、汐見のセミロングヘア。ぱつぱつ。濡れて濡れただけけしっとり流れて首から背中の中、上つ側に、びったりうなじにしっとり張り付いて綺麗！、えっちなね！汐見！私も感じるのにはシャワーのあつたお湯で、ね、熱いの！でもいい！熱いお湯が、良いの！。泡もこれでもう髪の毛を全部すすいだわ熱いお湯で気持ちが良いかから私も…えっちなね。私こそだと思わ。恥ずかしい…恥ずかしい、から、先に、恥ずかしいより先に、リンスと体と、汐見の身体。その前にリンスから先ね。汐見の体。汐見の髪の毛。リンス。リンスが今の次の先、だから、黒い容器からコンディショナーを取る。一回二回。コンディショナー。リンス。透明のとぼとぼしたやつ、さっきよりちよつとだけ水気が多くて、伸ばしやすい泡立てない感じの、リンスね。ああやつぱり、リンスなんだなって思うわ。だから何でもないけど。リンスよね、これ！。コンディショナーでも、リンスだわ、ええ。ぺつとり、と、光のバリアーみたいに滑らかな液体？とろつとしたリンスを、透明につやつと滑らかに張って、またのばして黒髪(ちょい長)に張ってしていく。光のバリアー・コートみたいに、ね！。髪の毛に優しい、クリスタルの液体、リンス。リンスをのばして、なでなで、手にも髪にもなじませてから、汐見の髪の毛、私の両手と一緒に、なじませたつやつやリンスを流すの。綺麗に、シャワーの熱いお湯…と、なんとなく38℃にして、また、ぬるめの温度が優しい？リンスで！。優しい。優しい感じが、リンスが、さっぱりとはあつた温度だから、また、そつちとはちよつとだけコトナル良さ、で…、リンスはぬるめが、良いと思うの。汐見。また熱いお湯にして、ほら、最後のしつとりから、すすすべに！キュツとした元気な、汐見の髪の毛！ぴんちゃんしたのは、リンスで、スラッと伸ばして！元気なまま揃いの一直線の、セミロングでしつとり♪ボブカットの、しゃぎー、シャギーよりしゃぎーで、きさきさしてるの。ぎざぎざしてない、おでこに伸び伸びすらすら、すやすやおんなじ、張り付く髪が！、髪も、やつぱり汐見の、お

ちつき！。落ち着いて安心してしゃぎーに♪しててね。汐見。すやすやボブカット？の、おでこの髪の毛。

汐見ちゃん。

好き。

熱いお湯があついお湯、身体シャワー、上、正面から全身シャワーの熱さでぽーっとしてさっぱりしてきて私も私だけ起きてるからNOよ。汐見は安心した顔で可愛い、ぽーっとしとり、私と、おなじ！汐見ちゃん、眠っててね、汐見、ちゃん。私も、ぽーっとして洗うから！、あ、でも、真剣にやらなくちゃ。ぽーっと、どうしようもないから、ぽーっと、マジメ、熱いお湯でさっぱり私も洗ってそれは後から汐見が早すぎるから私は真面目にさっぱりぽーっと、のぼせて？ない、けど、ぽーっとするの！しちゃうの。汐見の身体も、きつと♪、きつとまあ洗ってあげるって意味で♪。

汐見をえっちな気持ちにさせたい。今は身体をスポンジできゅっとしなくちゃ。抱きしめる感じで全身スポンジを流して、こしこしって泡付けて流してあげて、お湯でも、最後にさっぱり流して、熱い中で優しく洗ってあげたい。シャワーのお湯で、泡で、キュツとしたげて…そうして、汐見を抱きしめてあげたい、たとえの、タトエバの話で、洗って、スポンジで洗うだけ！きれいに、したげる！。

汐見をえっちな気持ちにさせたい。

それはまた、後でもいいかな、と思った。

首から、肩から、背中を洗って、スポンジを流すように擦って、往復させて、キュツキュと洗う、泡も、いっぱい、往復させて、きれいな泡々のよろいをつけて、スマートな筋肉を一杯一杯に揃えた汐見のゆったりした（今は。）背中も肩も（いつもはこのしなやかさが弾けるの、弾力ですつごく流れて、泳ぐの！今はゆったりしてくれてる、嬉しい♪）、真っ白でクリアなシャボンで、いっぱい、よい泡いっぱい。手とスポンジを、手とスポンジスポンジすらすら往復こしこし。すらすら、しゅっと、スポンジッ！あくまで私はスポンジに汐見にふれてる。さわってる。、さわってこすってる、のは、スポンジで、今も首から前から、汐見、肩から二の腕の筋肉、ああもう、綺麗ね、強そうね、汐見、強いし綺麗って分かっているけど、分かっている、でも汐見は筋肉が、良いの。筋肉も、良いの、けど今は、もう、筋肉が、二の腕とか、全部っ！、全ての筋肉が良い感じなのっ！ちよつと掴む（汐見の、右二の腕）、と、すーっと受け止めてくれて同時に（同時に！）、重たくフツと返すのがいつまでも掴むうち全部を返してくれて、受け止めて同時に返してくれるのすーっとフツとが同じ時間なの！期間なの！時間が、すーっとフツとで、短いフツと返すのが、いつまでも重いし、汐見の力の重たさとか私も私の力も一緒に入っているのよ！それをずっとおんなじ時間ですつと、受け止めてくれるのもしてくれてる！から！、すーっと、汐見が受け止めてくれる！しかも一緒に返してもフツと、重たっ、いまもじんじん

するのよ！汐見！嬉しい♪。嬉しい。嬉しいってこのこと、だけど、また脱線したわね私。
汐見。汐見は関係ないけど、関係したから、だから、私がちよつと悪いの。汐見は付き合
ってくれて悪くない。私に汐見が、くれた、だけ、それはすつごく重要だと思う、けど、
でも汐見は可愛いから今はスポンジで、スポンジで、汐見の体筋肉とか洗うの、ああも
う、汐見がえろいから私はどうしても、スポンジで、するしかない 洗うしかない、の！。
もう！私（汐見）！。

でも汐見にもセキニンの一端？が、あるわよ！。

私は洗うしかないけど。汐見っ！。

掴んでた右腕から、私の左手を離してさわるのは右手のスポンジだけね。左手を離して
そつと肩を持つ、やつぱり、左手はそうして（汐見が座るのを、シセイを）支えてるけど、
私が、汐見を、今さわってるのとはスポンジで、左手は、これちよつとちがう、から、支
えているだけ。汐見の、身体を、強そう。見ているだけでも、分かるの、知ってるけどま
た、分かっているのに分かるの、分かるから、汐見が強いから、呼吸が、熱くて、心が熱
くてちよつとだけ、苦しい。楽しいのに、シャワーより、お湯とかじゃなくて！、心の呼
吸！が、熱くて苦しい、熱い、心の呼吸とは何かしら汐見、汐見は頭が良いから知ってる
何でも心の呼吸とか何でも汐見は私の楽しいこととか全部♪、今この、苦しくて楽しいの
も知ってる、知ってるのは私で汐見は気づかい、汐見は私に我慢をしていたわね、さつき
も、さっきの夜の、昨晚！、セックスの時も、セックスの、時こそ。じゃあ、終わりの時、
ひとまずイチダンラクしてシャワーも、シャワーもセックスのひとつで、我慢？イチダン
ラクする終わりのシャワーのスポンジ、スポンジは、スポンジにボディソープ、足して、
泡をまた、たつくさんにしてこしこし、こしこし、汐見の両腕まで洗ってつやつやのふわ
ふわの泡いっぱい。泡。泡が、とつても、いっぱいじゃあ！そもそも鎧って全く要らな
いし、なに！？何で私そんなことしたの！？汐見は綺麗でしなやかで遅しくて強くて褒め
言葉の全部が当てはまるのに！！！！汐見の身体は美しさと強さの、全部よ！！！！！！
だいいち、汐見と私は最初に、最初から、さつきに再確認して、確かめた大切な事があつ
て、我慢とか謝るとかしないで全く良いの。セックスの時あんなに分かったのにねホン
ト、本当に私は、汐見に、ひよつとしたら遠慮がちかもしれない？、とにかく、汐見も別
にいい、答よね。

私は汐見の爪の間まで足の指まで一本一本キュキュツと高速で、丁寧に（きつと）、全身洗
って汐見の太腿だけもう一度洗った。腰回りもついでに繰り返して洗った。スポンジで素
早く丁寧にキュツ、と、こしこしと泡付けてシャワーで流した。腰回りのお尻と股間も泡
付けて流した、綺麗に素早くした。その、ために！。洗うのと、ごっちゃにしちゃいけな
かったのよ！。汐見を洗うのと汐見とセックスするのは、やつぱり、どうせならタトエじ
やなくて泡よりも私は私の身体と、汐見の身体が、良い、と思うもの、だからね、汐見

と私が今から、その二つのシャワーとセックスは、別。だって今からまたセックスするから手早くしたから、洗ったからセックスするもの。

本当に、洗うだけ（キレイに）無心でしたから、汐見、お願い。

私の心は卑怯ね。

とりあえずおっぱいを（二つとも）むにむにして起こした。でも実際には弾力が桁違いだったし手の平にリズムが♪きゅんきゅん返ってふわふわ↓きゅんきゅん↓ふわふわ↓きゅんきゅん↓、落ち着いてすやすやしたおっぱいから、揉むたびに格好良いパワーが、きゅんきゅん♪。今も尚、ずっと、揉むたびに、ゆつたりとふわふわしてキュンキュン♪と、あ、ふわふわが元気に、私の指へ♪、揉む瞬間にも、キュウキュウ！、力が、もにもに！。さわる時から汐見の力を感じる、恥ずかしがってるぽい、硬さ。もにもに。一瞬から、強めの弾力！、キュウキュウ。もにもに。全く同時で、また元気な（可愛い。）恥ずかしがり屋さん、おっぱいまで最高に可愛いわ！、汐見！、おっぱいの返してくるのは、キュンキュン♪、ちよつとだけパワーアップして強めで、恥ずかしがってる、可愛い！（知ってるけど）起きたのね、汐見。

「起こしかたが、えっち。素磨子。ありがとう。洗ってくれたのね、素敵」

「ありがとうって、えっちなことでもあるわね？」

「それは別よ。今から素磨子を洗うわ、つまり、起きて、洗ってくれて、シャワーが熱くて、素敵ね。素磨子。」

「私もでしょ？汐見。汐見も、素敵よ。」

「そうよ。その通りだけど、素磨子、私ね、どうしてそんなに、胸にこだわっているの？。おっぱいがとっても熱いわ、素磨子」

「早く洗って。早くね、洗って、くれてっ、すすいでも素早くさつとしてくれたら、それでもカンペキにしてくれるでしょ。汐見はね、私を素早く洗うのっ、カンペキ。パーフェクトに、きれい。私もそうしたわ、汐見、汐見ね、そうしてくれるから！。でも、まあ、汐見が、やりたいかたちで、そうして。どうにかきれいに洗って。汐見。どうにでもえっちにきれいに洗って。えっちは私だけど、汐見。汐見もえっちよ。絶対よ。これ。汐見がえっちにしてくれるのよ。そうなるの、絶対、そうなるの、汐見。きれいに洗ってね。汐見」と、汐見はもう待たずに言った。私は（汐見の！）おっぱいを離れた。ザンネン。それと汐見が、

「ええ」と（もっと赤くなつてぱーっと♪今）、言ったのが一緒に、だから汐見、私も反応が早い。

つまり物わかりがいいのよ、汐見。

汐見の好きにしていけど、汐見♪、素早くしないと、手でさわるわよ。

私が、汐見を、えっちにするのよ。（私の手も、汐見の心（手）もね！。）

…と、汐見にバトン・タッチね。

素磨子は目を閉じたけど、眠ってない。素磨子は、きっとまだセックスがしたいらしいし、眠らなくても構わないのだと思う。おっぱいから手を離してすぐにそうして、眠ってないのに目を閉じて、綺麗。素磨子は元気で整った表情、素磨子は美人で、目を閉じて元氣。私もだけど、素磨子も頬が赤くて、二人とも、元気で、セックスがしたい。素磨子はそんな気分で、きつと、私も？セックスがしたいと、私も！。元氣な素磨子の目を閉じた美人（＝素磨子）。素磨子は私に身を任せて眠る。眠ってないけど。目を閉じて、シャワー。さっぱりした熱いお湯が似合うわ、素磨子みたいで…素磨子、お湯よりも綺麗。当たり前だけど、でも、肌にぴしゃぴしゃ弾けて、素磨子、私の肌（筋肉）にはゆったりと滑り落ちていて流れて、素磨子は、今お肌と筋肉が起きてる、寝起きの私よりもずっと。元氣に、お肌の上からお湯が、当たると霧と、弾けて、水の砂みたい、素磨子のお肌と筋肉の上を水の砂みたい、さらさら、ぴしゃぴしゃ、転がってお肌と筋肉に弾かれて間もなくシャワーのお湯たちの全てが水滴から小さく弾けて、転がる、さらさらと間もなく消えている。霧。水滴単位の、シャワーの、霧に！、素磨子のお肌と筋肉が綺麗で、きらきらで、元氣が一杯！に、あるから！。

私はリラックス？して押し込めてるけど、素磨子は、閉じ込める気はないみたい…目は閉じてはいるけど、それだけで、元氣！

とっても素敵で可愛いと思う。不器用に我慢をしている素磨子も、素磨子は、我慢をしてない、同時に、正直に、目を閉じてくれて、元気で、素磨子は正直で良いと思うわ。

その元気でセックスがしたいのね、素磨子。

私が素早く洗って、さわるのはそのあと。

素磨子の元氣も、そのあと、そのとき！、とってもとっても、楽しみね！。

でも私は素磨子の筋肉をさわった。太ももを洗っている時だった。太腿。素磨子の太腿は熱くて柔らかくて良いわね。がっしりして、ふんわりした感触がぎゅうつと柔らかさの筋肉がぶつとい太腿、素磨子の大きな太腿の内へ私の手の平がぐぐつと、触るの！、ああ、もう、チェックして触るのよ。私が素磨子の筋肉を愛でるの。

しかし案の定（考えてはいなかったけれど）、素磨子はすぐ起きて私を怒った。そういえば眠ってなかったわね、素磨子。最初から素磨子は起きてた。まずいわ。

汐見のする（やってる！）ことが信じられなかった。私はすぐ目を覚ました、から、汐見はもうかなり洗ってくれて、それは素早く泡でふわふわにしてくれて全身、私、太腿ま

で？、泡でいっぱいね、（もちもちしたしっかりの泡、ね♪）嬉しいけど、でも！、泡でいっぱい、ふわふわ♪、もちもちの泡は、太腿まで、なの！ホント汐見信じられない！汐見！私は汐見に、言ってる！、怒ってるって、だから、私はソク言った。怒ってるって、言ったあとイマ気付いたわ。汐見、私、何故か怒ってる。

『信じられない！何で途中でさわるの！？』

「そうね。」、私は、そうね。と、だけ言った。私はイコール（そうね。）で、間違っていないから、本当は（！）、素磨子が私に怒るのも、私がさわったことも、どちらも、同じくらい当然で大切だからよ。そんなことは言えるわけないから、素磨子、素磨子が、私よりも我慢をしてたわ。我慢しなくていいのに。素磨子、私は、私から、今セックスを優先したのよ。

「先に最後までお風呂に入るわ。洗うの」

私がシャワーを浴びたいと言って、それで、素磨子はそうしてくれて、それだから私はそれだけ言った、洗うのよ、と本当は素磨子に言って、洗うのよ、と、優しく洗ってあげて、優しい感じの言葉で、（洗うのよ、素磨子。）と、私は笑えてもいなかったけれど素磨子は途中で私を押し倒してくれて、今途中で言葉が終わった…素磨子！、私は最後までしなかったけど、素磨子、だから私は、再び押し返して立った。でもまた

素磨子の動き。素磨子の綺麗な一瞬っ、ああ力強い動き！、私の後ろに、私の手を弾いて回り込むまで！。

手がじんじんする。手の平を弾かれて、素磨子、気持ち良い、私の筋肉をはじくのはそんなの、そんなのって素磨子だけなのよ！素磨子！背後から一緒に引き倒されて素磨子が私のベッドになってる！、嬉しい、けど、私は素磨子に言った。

「本当にいいの」

「いいわよ。じゃあ、同時に、洗って。汐見、セックスしながら、ね。私をそうして洗ってよ、汐見」

「わかったわ。」

今わかったわって、そういうしかととても嬉しいと思って、だから私は咄嗟に了承した、わ。思っていることを、思う前からいったの。素磨子は習慣だから、いつも思うけど、だから、いつも思っていたから言えたの、私は身体を返して素磨子と向き合う、素磨子のちよっと怒ってる笑顔は頬がふつくと赤くて可愛い。尖った優しい目つきが微笑んでいて、黄薔薇のトゲが花びらで隠れるみたいに、恥ずかしがってる？、氣遣ってる？、様、私は、素磨子のトゲも見たいわ。

素磨子、私は、膝を起こしつつ傍に、素磨子のお腹（ふっきん）の傍で正座して、スポン

ジを拾いつつ洗って、ああ寝転がる素磨子は落ち着く、私の方こそこうして落ち着いているから、私は、素磨子に言ったことは正しい。正しい。正しいとは、素磨子。素磨子が楽しくて、落ち着くのが、正しい。

「素磨子、まだ何か我慢をしてない?。」と、言ったあと、その時から、スポンジを洗うのはシャワーの中で、絞って、キレイに濯いでから石鹸。柔らかいから柔らかくスポンジに付けて、手の平でスポンジを擦って、泡に。泡がたくさんシャボン玉になってくる、しかもサラサラの泡で、もちもちしている。割れたら弾けずに細かく、小さく、サラサラがもちもち・すべすべになる、シャボンからたつぷりとしたムース。スムーズな、重たいふわふわの泡に、私は、この重たい泡が好き。素磨子。昔こんなのが、好き、って、お気に入りだって、そう言ってくれたし私とおなじ好みで嬉しくて私はこだわって作った。その時(6歳)からもっとこだわってきた、だから、当然、販売などしないのに素磨子はどうして、と、昔!こっちは中学生のとき!。海外から帰って来たときに言われた。私は絶対売らないわ、と言った。絶対売らないわ、と、言った。怒っていたから怒った感じで言った。素磨子は少しだけ泣いた。ごめんね。かつての馬鹿な私はその時も必死で、素磨子に謝っていたわ。私。今も時たま馬鹿な事をしている気がする。

素磨子は(素磨子も)また、もっと赤くなった。

「まだ、ちよつと怒ってるから。汐見」

「やっぱり」

「馬鹿にしてるでしょ?」

「いいえ、やっぱりだからよ。やっぱり、私の見た所と同じで、素磨子はちよつと怒って可愛い。」(右足終わり)指の揃った隙間へ、しっかりと指を、つるりと左手で掴んで、掴める、一本一本すらりと、広くて、広い足の甲から指まで広くてすらり、綺麗な形で可愛い。がっしりしていて、可愛いわ。綺麗。スポンジをやっぱりつるりと入れて、こしこし、素磨子の足が引かれる。左手で素磨子の足首を、掴む、引き返すと、素磨子の声が聞こえる。

「くすぐったいし今更、恥ずかしいん、だけどっ!?」

「それも我慢して。素磨子。」

と言って、私は右足の表、最後に足の指足の甲と裏、土踏まずと柔らかな踵まで洗う。石鹸でいっぱいにスポンジの泡、しっかりと擦って泡立てたから、一杯の泡、になっている。それでも、私には形が分かるわ。素磨子。しっかりと綺麗な脚ね。広くてすらりと、柔らかい筋肉、稜線がゆるり真っ直ぐ!流れて、筋肉のカーブが柔らかくて良い!、綺麗。今とても柔らかい筋肉!、とっても硬くもなる、筋肉よ!。脚、素磨子の太ももから脚、足首、全部が大きくて、綺麗!。脚の指(全部)、踵の方まで、全部:雪のかまくらみたいな、キュッとした踵も。大きくて大きくてしなやかで 綺麗。

綺麗。

左脚を、終えた。表。足の指と、裏。

足の裏が終わったら、反対側も、背中の方からお尻の下から、太もも。

すうっと。そっちも、素早くしないと。

綺麗に。

綺麗だから、素磨子。

私は素磨子に言った。反対。

「うつ伏せに寝て、素磨子」と、私は素磨子を反対の方向にする、うつ伏せ。脚を全部洗うため。素磨子の声も多分同時に聞こえた。素磨子は自分から「はいっ」と言ってくれたけど、

「はいっ。えっ、ちよつとわっ」

と、素磨子の驚いた声。素磨子より私が先に、したから？。多分。そうね。うつ伏せにするのは、もうした。素磨子より私の方から、だから！、素磨子は私に洗うのを任せて寝転んでじっとしてくれていいから、落ち着いて。楽しんでいて、素磨子。、と、私は素磨子に、

「素磨子は楽しんでいて。じっと。」

と、素磨子の背中が見えた。私は素磨子に言った。背中も、とにかく素磨子の全てに向かって、私は素磨子が大好きなのよ。素早く洗うわ。綺麗に。（綺麗よ。）素磨子。

汐見は、踵の後ろまで洗って、そこで、見計らって私は、言う。呼吸と精神を落ち着けて、言う、膝の後ろの（いっぱい筋肉の、）隙間、今は左脚、もう、最後の方で、右足はもう踵の後ろまで終わり、さつき終わった。さつき終わったわ。アキレス腱の後ろ。左足。左脚から左の足首、気持ちいい、気持ちいいふくらはぎの筋肉が、表面から少しだけ圧迫？ スポンジ、撫でるよりぱあーっと軽々したさわりでこしこし、さらさらさしゅさしゅスポンジ。スポンジの、泡、私の表面、筋肉・ふくらはぎの！・後ろ。後ろからさらさらーつと降りてくる汐見の完ぺきな、素早い、洗いの、方法？方法じゃなくて汐見にしかできない。わあ！。

だからとっても良いのよ汐見！。

今多分終わったけど。踵。

踵の、後ろ側まで、全部。

「素磨子終わったわよ。するわ」

「汐見、私の処女膜破って。忘れてたから。汐見、指で。」

「痛いのは嫌よ、素磨子」

「それ私じゃナイ。汐見はもう、あ、そうね。私を心配するのは、嬉しいけど、いいのよ。」

汐見してくれたらこのサイ関係とか無いから、心配も、必要無いから！、いいの。汐見。汐見ね、分かって、くれた？急いで言っただけけど、汐見。恥ずかしくて、さっき言うつもりで、汐見、洗っている時も、さっきだけど、さっき、昨日の夜。昨日の夜の、セックス。その時言うつもりでいたのよ。ほんとよ。でもセックスは気持ち良かったの。汐見。分かんないけど、とっても良かったの本当、本当に、気持ちが良くて、それで、それで他のことになって。多分。他のこと、昨日、セックスは太ももでおまんことおまんこと太ももで、両方、さわりっこをして、それは良かったわとっても、本当よ？。汐見。だから他のことになったけど、汐見、私にとっては大切な、凄く！、こと、なの。処女膜を、汐見に、破って欲しいの！。」

「分かったわ。シャワーをするわね。素磨子。泡を流して、洗うのは、終わり。それからよ。私のシャワーでもあるのよ、素磨子、私は、もう待てないかしら？ちよっと待ちたいのよ、素磨子、私、私、は、分かったと思うの。素磨子。」

汐見はシャワーを流しながら言った。泡が流れた。(さっさとして！)、とは、言えない！。言えない。

嫌とかじゃあ無いわよね、汐見！、私が、待ちきれない気分になってる！、そうなのよ！言わないけど、汐見！。(言えないけど！)(どっちも両方(いわない||いえない)、いっしょよ！)

汐見は横向きに正座した。シャワーが終わったからね、汐見。汐見は真面目だと思う。良い。私の太ももの隣に座る。今そうしておしとやかに座ってる、ところ。そこが、今で、私の太もものたぶん上の方のおまんこのなりがわに座って汐見がちよこん、と、ちよっとだけ身体を揺らして、緊張している感じとかを出して、ちよっとわざとじゃないにしてもうざいとか思っ、ごめん、だけど早く、早くしてほしいから、私は汐見にじっとして、じっと待ってるのよ！私のおしとやかじゃない、汐見！、でもそれは、とっても私にまだ！なの！、じっと私がオシトヤカ！に、待ってるのに、あでも汐見今、数秒？今ね、数秒後のいま！、

汐見。右肩とせなかを、そっと。
やさしい。

右手の中指。(そっと。)

汐見。汐見の、右手の中指。私のおまんこはとくにシャワーでも私の液でも濡れているから、汐見、私のそこは、いつも、ねばっこい、けどね、今はなんだかさらさらした気持ちなの！、しっとりして、さらさらとした、やっときたって、そんな感じの待ち焦がれたジュースがね、愛液が、さらさらしてくるのそれでそれとね、気持ちがとつてもくるのよ！。ジュースが、気持ちの赤っぽいジュースが、血液とか赤くてそれも体液！で♪、あつつい血と運動、サッカーの元気とキョーツーしたところも、ある気、気持ち？(！)するけど、

気持ちの赤っぽいジュースはもっと、もっと、血と違うれっきとした、ジュースで、静かで冷たい気もするの。静かで、冷たい、落ち着いた熱。秋のオレンジジュースみたいな、いいえ！、ぬるくない。熱くて汐見の感じで、冬と雪と林檎が、火の冷たさね！。冷たくて指先が熱くて気持ちいが、気持ちが蕩ける。ゆったり、しんしんと溶けて、真っ赤な林檎はかちかちに感じそう。林檎は、固いわ。かったいの。しっかりして、かったい林檎が、赤いの。蜜は入ってない、けど、とっても甘くて、林檎のどこでも白くて、甘くて、林檎の肌色っぽい白で、甘い甘い気持ちを感じるの、多分。そう、多分、本当かどうかは、知らない！。知らないけど、汐見は、きっと甘い気持ちよ！落ち着いてて、楽しい気持ちの、はずよ！。私の気持ちだけれど、これは、今は！汐見のおかげでもあるのよ！、というより全部が私がそうで、今汐見のおかげだから、私。元気で元気で、待ちきれなくて、すうっと落ち着く冷たさを感じて、心に、心が熱いまますーっと、ひんやり、しっとりして待ちきれない！さらさらしたこの気持ちも、いいけどね、ああやっぱり、いいから、いつでも待てそう♪、とくとして待ちきれない元氣！、ああ、落ち着く、元氣ね、気持ちがさらさら♪しっとりいっぱい。汐見ちゃん。処女膜で中指がくすぐったそうね。ちよつと止まって、だから、私は待ってる。氣遣いはどこにも必要無いから。汐見もそのことを知ってて、知っているから、だけどまあ、汐見はとっても優しい。私がおまんこをきゅーと、汐見の中指、タッチしてからかう思いで寄せて、すぐ離れてまた今度は、締めて、きゅつときゅーつとリズム感？で、くすぐる位に、そうしてあげちゃうほど汐見は、やさしい！

優しい。

私は、多分、言った。

（いいかげんにして、汐見。）

思っただけじゃなくて多分音でも、言葉に口にして、言った。待てるけど待ちたくないもの、汐見、落ち着いて待つのは、楽しいけど、先よ。今私の処女膜を汐見が、破るの！そうするのが汐見と私の、楽しみ！、ええ、私が楽しいけど、汐見！汐見も楽しんでくれるはずでしょう！？だから汐見は早いとこ欲しいのよ私が！、私こそだけ。私こそ、だけど！。汐見。私がおまんこでくすぐると、した。

指が止まってから、え、でも、早かった！、し、すぐだったからきつと何にもしなくても汐見は私をしてくれた、という、そんな感じの、恥ずかしい、確信が、ある！。ひどい。いえ、私が、ひどいと思うわ。でも嬉しいし、ちよつとだけ痛いとも思うけど、嬉しいし、汐見は落ち着くし、汐見、汐見は、綺麗にぼろぼろ泣いてる。大粒の涙。二、三、四滴、分かんない。分かんないけど、何で？。汐見は泣きながら、言った。

「ねえ、とてもひどいわ、素磨子。」

私は言い返さないし知ってる：けれど、ひどいのはそれはもう知ってるけれど、汐見私
がそれだけじゃ泣かないとは思うし、汐見は私のこと好きだし、体とかもう、おまんこも、
大好きなはずだし、だからこそすぐするのは正解、ではないにせよ、気持ち良かったのは
間違いないはず、汐見、でも汐見は、泣いてる、私のせいで、
あ、ハツ音のせいね、と、私は分かった。

素磨子は落ち着いた、ぽかぽかの、ぼんやりとしたあったかい、声だった。内容は怒っ
てて、私は中指が止まって、止まっていたけど、また止まって心がふるえた。

「いいかげんにして、汐見。」と、素磨子は言った。それはもっともな、素磨子の欲しいこ
とだから、私は気がすつとして、中指で最後まで押した。素磨子のくすぐってきた可愛い
（気持ちいい）おまんこの中で、処女膜がすわりと軽く、楽しく、私の指先で（軽く）破
れて、無くなる。軽いぼんやりした気持ちで素磨子の処女膜を破った。つまり素磨子の体
の一部よ、素磨子、血が出てしまうわ。痛いじゃない、素磨子。そうするつもりだったの
に素磨子が言うからよ、素磨子。私はちよつとぼんやりして、してたけど、でも、私は私
だけ、ふわつとして楽しかったのよ。すうつと破れて、とっても反射が少ない。スミース
に破れて指先、すつとして、寒くて指先が、中指押せたわ、中指、素磨子のおまんこの中
でもあるけど、くすぐつたくて気持ち良かったわ素磨子、私の中指！気持ちいい、けど！、
素磨子はいつたい、それでも良かったの！？、と、私はぼんやりして、怖かったから。冷
えたわ。寒くて、指から、押してしまったの。指を押して素磨子の処女膜を、すわり。き
れいになくなって、とおったわ、素磨子、私の指押せたの：楽しい。でも私は、ぼんやり
してたけど、楽しい。私は。私はね、素磨子。

素磨子はどうだったかしら、素磨子。

素磨子がひどいから私は悲しくて泣いた。

どうだったかしら、と、私は、素磨子に！、聞いた。

「ねえ、とてもひどいわ、素磨子。」

確かに言った、けど、ちよつと違う言葉になったわ。

正直に言ったけど、誤解は嫌だわ、素磨子、ああ、でも、私は自分の、ため！、ね！。別
にもう、誤解でもなんでもないわ！、つまり、ひどいのはこっち、なの！、と、素磨子に
言う前に実際は素磨子が今、全然別の嬉しいことだわ。言った。（素磨子が私に。）ひどい
と言ったのに、すぐ！。

じゃあやっぱり、私はとてもひどいわ。

私だけ、最高に嬉しいから、とても、私に、素磨子が誤解でも何でもないのに、先に！、
私に、違うって、言うの。違うって、素磨子は、言ってくれたわ。

「いいかげんにもしくなくていいわ、汐見！」

「そうなの、でも、もう、終わったわ。」言葉が出なくて、思いつかなくて、私は咄嗟に答えた。左手は空いていたから、そこで、目の下を手の平のよこ、親指のほうで拭って、だから、先に、涙を止めて、右手の中指を素磨子から抜いて、おまんこの中のおくから抜いて、血が赤くついてて、私は、言葉を思っ、そろそろ思いついていたのよ。素磨子。私は、ちゃんとして言おうと思うわ。

素磨子に、ぼんやりしてたことを言う。

「素磨子。あなたは、優しいから、良いわね。嬉しい。嬉しいと、いうことよ私が、あの、ね、素磨子で、嬉しいの。ええ！。素磨子。ぼんやりしてたの。違うわ。素磨子じゃなくて、もちろん違うの、私が、私がねぼんやり、してたの！、素磨子！。それだから、急にしたわ、素磨子、ええ、痛くなかった？血が出てる。大丈夫？もちろん血が出るわ、素磨子。痛く無かったらいいけど、スムーズ♪に、いけたと、思うの、ええ、素磨子、ぼんやり夢の中みたい、どんな、夢よりふわっとして、血がね、でも素磨子の私の指が赤くて、素磨子の血がね、私の指、なの、真つ赤よ。膜は軽くて、破れて、すわり、すわり、中指が、奥、おまんこの奥まで膜を破ったの素磨子のおまんこの中でね私はぼんやり、ぼんやりしてごめんなさい素磨子、今！、私の中指、赤くって、ええ、素磨子の処女膜を破ったから赤いわ。でも、ごめんとは、言わないの。素磨子。ぼんやりしてたけど、私も、とっても、嬉しい！、ええ、素磨子、素磨子が嬉しいと、良いの。私も、私ができる、嬉しい。ごめんって言ったかも、言ったわ、素磨子、でも、確か、それはぼんやりしたことなの。素磨子のおまんこが気持ち良くて、それで、言われてびっくりしたの。素磨子が、いいかげんにしないでいいって！、先に、言ってくれて、嬉しい。ありがとうね、素磨子、今！、そのことよ。でも今！、終わったから、別に、それよりも処女膜を破れて、嬉しい。私がそうできて！、素磨子が、そうなれて！、ええ！、どっちも、私たちの二人が、どちらも！。とっても、ね、嬉しい。素磨子と私がとっても、嬉しいのが、今なの。きつと楽しいとも嬉しいとも言わ。素磨子、素磨子は、ああ、いっぱいの感じね！」

私が言うと、素磨子は右手を取って、血を洗って？シャワーに浴びせながら、言った。「汐見ね、いっぱい、嬉しいわ、わたし。ええ、それはもう、きつと、一緒より激しい。ワタシ汐見とセックスしたいし、凄く。汐見が落ち着くより私は、さっきからずっと！、私は汐見とセックス、だけなの。処女膜とか気遣いとか、ね、おまけよ。私はそんなに気にしてないから、汐見。優しいのは嬉しいわ。汐見。たくさん、たくさん嬉しくて、きゅんきゅんするけど、私の全部を汐見にあげたい。汐見。あ、その、今のは、全部って、どっち？、どっちも。どっちもよ、汐見。つまりね、その、汐見の優しさで、あげたい。でも私は、セックスでも、あげたいの。さっきのは汐見の、あの、もう、優しさ？、優しさよ！もう！、言ったわよ私っ！。でも私セックスもしたいの、汐見っ！。きゅんきゅんするけどそれだけだと私、ダメなの！汐見とセックスがまだまだしたいの！汐見！処女膜を

破ってくれたわ、汐見の指で、ありがと。汐見。恥ずかしいけど嬉しいわ、本当、ああ、恥ずかしいから落ち着いてきたわ。これね。これは、でも、それは！、ダメよ！。私とセックス、するわよ！汐見！」

素磨子の言う通りだから、私は言葉を返した。
だから全く同じつもりよ、素磨子。

「そうね。シャワーから出ましょう、素磨子。」

私はまたちよつとかがんで、素磨子の背中に、左手を入れて、右手をそのひょうしに素磨子の左手から離して、シャワーを浴びたからきれいになって血が取れている。私の、肌色。白が強めのすつとしたさらさらの、色。私の肌色。素磨子の血は無い。素磨子の背中をそれより左手で、起こす。素磨子の手を、左手を、また、右手で取る（きれいになった右手）。私の右手は、はだいろ。シャワーを止めるのは手がちよつと足りていない。私は素磨子に言う。シャワー…、

先に素磨子が言った（私に、聞こえる）。

「ねえ、でもっ、汐見の指は、綺麗よ。肌の色が、きゅつとして、水気がツヤで、つやつとしてさらさらした、涼しさよ。なんかとつても涼しくてつやつやで綺麗。私の血は、気になる？、汐見、でもね、血を見られても、なんかね、困るのよ。困らないけど。いや、あの、恥ずかしいし、いやだし？いやというかこまるというか。分かんない。汐見は、ちよつと分かんない？汐見。私もその、あんまり分かってないけど、そんなに恥ずかしくもないけど、なんかね、むずむずするし、汐見が気にするのが、いやなの。血はそんなに私じゃないのよ、汐見。そうよ。血は別に、私じゃないから、セックスしたいのは私で、ここだけに居るから！、そうね！ここだけに私が居るから、済んだことに気を取られても、困るわ！、ああモチロン、別よ！、思い出とは、別！。思い出とか、ね。今言った、済んだこと、は！、思い出とは、違うこと！、なのよ。多分大切さが、じゃない、から、意味合いよ！ええ、意味合いが全然、違うの、汐見！。済んだことはそんなにでも、ないの。処女膜を汐見に破ってもらって私が安心してセックスできるのがそれが全部処女膜と最初のが終わって最初のが、つまりね、最初のセックス。これからの安心して、もつと安心して、私の処女膜とかめんどくさいでしょ？、汐見は、気にするでしょうし、でもね、私はそれ全部、終わらせたかったの！汐見と、考えずに全部が、気持ちが良いこと！、それをね、しなかったの。とでもっ。私は、汐見と！、安心できるの！。落ち着いて気持ちが良いこと、できてっ、セックス。それがそう、やれるのよ！、ね！。汐見っ、シャワー止めて行きましょ、汐見！」

素磨子は私は、一緒に身体を立たせて、私と素磨子は結局一緒に立った。私はシャワーを止めて、「ええ」と、息をした。「ええ」と、確かに、頷いてこたえた。

素磨子と一緒に、裸でベッドに帰った。その一日セックスをした。ずっと。いつまでも、

いつも良い。楽しいわ、素磨子。

一日じゅう嬉しかったわ、素磨子。

汐見と私は、裸で、一緒に、寝ている。すやすや。みたいな感じで、寝ている。目を閉じて、すやすや、お布団で裸、掛布団を一枚もしいていない。敷布団はしくけど、かけていない、こと、それが、掛布団していないこと……、どうでもいい。とてもどうでもいい、けど！、お布団で裸で一緒に、寝ている。すやすや。大事。たいせつで、私と、汐見が、一緒に、眠るの。夢はきつと違う。もちろん。そりゃね、二人とも、きつといい夢で、私はめいせきむの夢が、今この、この、見てる夢。思っている夢？。

『いいかげんにもなくなっていいわ、汐見！。』

『そうなの、でも、もう、終わったわ。』

シャワーの時ね。今、また、シャワーで、私が汐見もばにくったとき。ちよつとだけ、落ち着かなかった（かも）の。

汐見。終わったわ、って、あなた、そんなこと言わないで欲しいわね。あの時。シャワーで処女。汐見。私が処女だった、けど、だって！。汐見に、してほしかったもの！、汐見、私に、してくれたのよ！。それで、私は、さいこー♪だったの。そして、チョットね、終わったわ（by汐見）！って、ひどくない？汐見。終わったわ、って。イヤなの？。汐見が、疲れた？ウソよ。疲れとか有り得ないコトでしょ！。汐見は、私がさせてイヤだったの？、終わりって。終わったわ、って、ちよつと、少しだけ私に、ひどくは、ない？。ひどくはない、かも、いいえ、汐見はそうじゃない、私の発音とか最初の言葉がマズくて、汐見は決して、楽しそうだったもの。私がつと、楽しみたかっただけ、よ。汐見はびっくりしただけ。多分。いや、絶対に。私と汐見で、あの時、シャワーの時も、その前もそのあともずーつと、ずーつと、セックスしてた気分。楽しかったし、落ち着いて一緒にいられた。ずつと。いやとかじゃそんなできない。できた。できないのが全然、ない、無いわよ！。汐見と私だけなもの！、あー、もう、ちよつとパニックったんだけど、私。終わったわ、って、あの時、ちよつとパニックってた、もちろん！、汐見も私も、両方！なんかとっても嬉しい、パニックる？一緒で！。

汐見と私だけとかいうのはよくない。

「まあ、素磨子さんはとっても不謹慎ですね」。

何故か夢の中で奈世さんの声が聞こえる、夢の中だから！、奈世さんは、水着。相変わらずお上品な感じで（水着なのに上品。）むかつくけど、むかつくだけ綺麗よ！、綺麗ね！、

：可愛い。水着なのにむかつくこと言ったのに可愛い。夢の中でもお上品で、綺麗。闇の中で黒髪が輝いていて、朝露よりしっとり、きらきらしている。しかもどんな時間より上品な黒。夜より闇より上品な、黒！。さらあと長い黒髪、しっとり…。綺麗ね。それなのにむかつくこと、言う。そんなの言ってくるから、可愛い。逆にね、上品な声だし、アルト？、低めで、霧粒のひとつみたくに澄んで、澄み渡って霧と思えなくて（だって一つだし）、キレイ。むかつくけど何度も何度も、むかつくけど、逆にそこが、可愛い！。お茶目。それって、そういうこと、なの？（奈世さんの、綺麗で、アンバランス（？）に、むかつくところ！）。

「私がお茶目ですって。それは、素磨子さんの方です。」

「えっ奈世さん、なにが？なんで分かったの？。いや、それよりも、何で嫌な事言うの、私、せつかく、ほめたでしょ今、言っていないけど、奈世さん今わかってくれたわ。だから、それも、ほめたのに、ね、分かるでしょ何で言うの奈世さん、ねえ、」「私があなたの存在なのです。」話が切られた。奈世さんは言った。言う気がとってもするわ。（奈世さん。）、言うのは、奈世さんの話が続けるの、怖い。でも私は聞いている。奈世さんは二回目と同じことを言った。

「私があなたの存在なのです。ええ、素磨子さん、勝手に、私を思って、勝手に、私のことなのです！。はい、不愉快です。とっても、いけない、とっても、よくない、あいだがらなのです。あなたの頭の悪さが出てます、そのあたりすら、とっても不愉快ですよ？。素磨子さん。私は不愉快です。それはそうと、話を戻します、けど。不謹慎だったのは、

汐見さんとあなたが焦って、それは全部あなたの責任なのに、素磨子さんがあなたということですよ。私があなたですから、分かりますからね。ああ話がまたもやずれましたけどもあなたこそに思い知らせるためです。分かりますからね。お見通しなのですよ。つまり全部があなたの、責任、なのです。汐見さんにあんなことを言って。汐見さんにあんなことを言って。素磨子さんこそイイカゲンにするべきでしたね、ああほんとに！どれだけ、処女膜に、こだわったりして。処女膜は私が先ですけれども、それで汐見さんに八つ当たりをしたのですよね。何度も何度も、早くしてーと、汐見さんを急かして何度も何度も、心の中そればかりです。汐見さんは優しいですよ？しかし、終わったわ、と言いたくなりますよ、きつと、いえ実際、今は夢ですけれども、現実にあなたはそう言われました。

素磨子さん、汐見さんを焦らせたたりして。しかもそれでまた素磨子さんが焦って、ぱにくるなんて可愛らしい、ふりの、うその言い方でごまかしたりなんかして。あなたが全部悪いです。全部。汐見さんにいやなことをしないで下さい。汐見さんをそうさせておいてあなたは、あなたと、お揃いで嬉しいなどと！、汐見さんはパニックで可哀想でしたよ、不愉快です不謹慎！、なのです。素磨子さんはろくなことをしませんね。私を自然に、はぶろうとしますしいつも、さっきも汐見さんとあなただけと言う、そんなことを言う。言い

ましたよ、さつき。よくないです。汐見さんとあなただけ、などは、全くそんなに良く無い、ことです。うそだと思えますか。自己中。じこちゅう。じぶんかって、な人です、あなたは自分勝手な人です」

（頷くしかできないからそうしてた気がする）

、お説教聞いているまに目がさめそうで、目が覚めそうで、とってもいい！わたし、はやく汐見に会いたい！、とっても、いろんな、あやまるべきこと！、でも汐見にありがとうって、言いたい、汐見に色んな一つの良い言葉を言いたい、言うのは、一つで、一言だけで、ありがとうって、汐見に言うの。（夢から。）ぼやけてはつきりした気持ち。はつきりだけが、生きてくる気持ち、夢からすぐ明ける時の気持ちで、時間がもう無くなってる今で、夢からすぐにも覺めたい！。はつきり。

それ以外にこの奈世さんにもう会いたくない。なんかふつとばされてるし。奈世さんに。ハイキックの回し蹴りでふつとばされて 今蹴られて奈世さんがふつとばされてた、蹴ったのも蹴られた吹っ飛んでるのも奈世さん嫌な方とってもイヤな事を言うやつ。そうね。ふつとんでって嬉しい♪、きりもみ回転？ぼいの、ハイスピードで真横に！、真横にふつとんでったわ、やったあ！。いやじゃない奈世さんの、右ハイで、腰キュツとした小さい重い回し蹴りで、コンパクトな、綺麗に首元後ろへ、飛んだのも奈世さんだけど。首から。意識も身体もすごい飛んでった、ものつすごくイヤなお説教、したやつ！、飛んでってもう、ほんと！、セーセーしたわね！。真横からちよい前気味？にふつとんでスピード！、すつごいスピードでカアンと回って倒れた、あー倒れたとこちよつと凄い距離ね！。カアン！ってぐるぐる回って、飛んで、ラストすぎーって身体が滑って、倒れて！。倒れたトコすつごい遠いし。もうね、夢の暗闇の中でも遠いつて分かるの！、奈世さん！、奈世さんは、たぶん本物？の、ほう！感心する凄いほうもあるの！。そんな綺麗にキックした奈世さんが言った。

「ごめんなさい素磨子さん、もう少しだけ夢に居て下さい。」

白襦袢を開いた、右脚と、右足首をゆっくりと下ろして、しんなり。奈世さんは寝巻も和風で、綺麗で、ゆったりして前開いて、えっちな感じになってた。ハイキックのため。仕方ない、けど、和服での激しいスポーツ動作は、なんとなく向いてないかもね、と、分かった。奈世さんは振り向かないわね。和服？白襦袢は、でも多分、その問題とか、体が見えるとかそんなんじゃないわ、なんとなく悲しそうなゆったりの感じ、しんなり。奈世さんは寂しかったりするの？。今はえろいより綺麗な身体が、奈世さん、ゆったりと悲しくて気になるわ。えろい。やっぱり綺麗過ぎて寂しすぎてえろい。奈世さんとセックスしたのも分かるわ。汐見。私も、奈世さんは、綺麗。だから私は何事かをしゃべってほしいし、早くしゃべってふりむいてくれないと！、とっても！、おちつかないのよ、奈世さん！ 私からしゃべるしかないかもしれない。しゃべろうと思ったとか思い始めてすぐ

(?)、ようやく!、奈世さんがしゃべってくれたわ。しかも振り向いてくれた。嬉しい。寂しそうな申し訳なさそうなスマイル。今の白襦袢みたいな、綺麗な笑顔。ゆったりした寂しさ。言葉も顔色も、たぶん、全身全部で微笑んでくれて、えろくて、寂しくて綺麗な表情。

しんなり。

そんな風に奈世さんは言った。

「素磨子さんの私は、違います。」

「あ、ごめん。」

そう言った、いきなり、私。奈世さんにごめんとか急に、返して言ったわ。いきなり、だったし。急に、言われたし。どっちも。奈世さんも、私も。奈世さん。にせもの?は、もういなくなってる。消えてる。私をお説教?した、奈世さんの私?、奈世さん、なんか色々言われた私の夢?で、私の、夢の中の、奈世さん、じゃない!、にせものだったから、居ない。消えた。奈世さんが消してくれたわ。汐見じゃなくて、奈世さん。えろい。肌着がゆったり、そっとちよっとだけひらいて、さびしそう、びったりした白、襦袢が、ぼんやりした白、そうっと、ひらいて、びったり着てゆらめいているみたい。だって前、開いてるから、奈世さん、だからゆらゆらするのに、びったり!着てるの。首からおっぱいの小さな谷間と、すんなりした腹筋、腰まで、ずっと鍛えて、ああ汐見の言う通りにきちんと、感じる!、ちゃんと筋肉が、しゅうん、と、身体に通ってる感じね!、腰からもしゅっと通って、太もも、内側、細めのラインにきゅうきゅうガツチリ鍛えて、細いのになーんとしてるわね。奈世さん。おまんこ周りもしゅっとして元気で、良いわね。開いた前から、だいたい全部が、分かるわ!。でも全部って、カンペキでも良いわよね、分かるし!、だいたいじゃなくてあ、でも、すぐ分かったなんて!、すぐって、失礼だから、フンイキ、私に!、汐見が、怒るかしら。ね。汐見。いま、は、ここに居なくて、奈世さんが代わりに私へ来たから、嬉しいけど汐見の方が良かった。ああ、代わりって、それこそ怒られる気がする。でも私は汐見の方が良かった。正直に伝えようと思う。一応。正直さは良いことだって、言うし、だから私も良い言葉?を、いうの!。

ひどいけど私は汐見が、一番!なのよ!。

「奈世さん、私、私に来てくれるんだったら、奈世さんより汐見が、凄く良かった。私、汐見が、凄く良かったわ。今日したセックスも、汐見と私が、どちらも、凄く、良かったわ。奈世さん。あなたはいないのよ。あ、その、今もね、汐見が、良かった。それだけ。それだけよ、居なくていいわけではなくて、ただ私、汐見が、奈世さんよりも、来てくれるのが、ね、凄く!、良かったの。奈世さんが悪いんじゃないのよ、嬉しい、嬉しいけど、汐見が来てくれるはずよ。そっちのが、私は、凄く嬉しいから!。だからね、奈世さんが悪いんじゃないのよ。ごめんね。」

奈世さんはだんだん、ちょっとだけ困ったみたいに、微笑んで、可愛く困って？、優しい、でも困ったのはたぶん言葉でじゃなくて雰囲気優しいからきつと、絶対、私のせいかじやなくて、ああ優しい、腹立つ、綺麗で可愛い！、優しい。奈世さんは面白そうで、なんだか、困っても楽しくて？微笑んでいって、困ったのが楽しい感じで、嬉しい、そんな自然で良い感じ♪の、笑顔（腹立つ）。

奈世さんが、くすくすつとする感じで言った。奈世さんもくすぐられていて、私も♪。

「いえ、あの、いいえ！、それはもちろんです、ですが、そのお気持ちと同じくらい確かに、汐見さんも絶対に来ないと思います。あ、いいえ！汐見さんも、ではなく！、ああ、あの、私はこう来ましたから、ここに居ますから。ああ、ごめんなさい。でも、ふふつ、素磨子さんは確かなのですが、」

奈世さんは焦ったり、そのまま寂しく静かで、でも焦ってたり（同時に）、落ち着いた？あとは、静かの方、とっても、寂しい！、笑顔が、一瞬だけ綺麗で、えろくて！、そこから、その時から一瞬だけで、またくすくす笑顔に（可愛い）困って、可愛い。困るのは私もどきどきするから、私だけどきどきしているかもしれない。それはそれで、奈世さんは困るのは、あれ、奈世さん見て聞き流したかった言葉で、考えたくない言葉、私が、奈世さんも困るのは、言いたくなかった？言葉。悔しいけど優しい。奈世さんは、言いたくなかった、腹立つ、優しい、私の聞きたくないコトバ！。奈世さんは、汐見が来ないと言って、でも、優しい、自分だけくすくす笑って、嫌で、はつきりしてほしい（！）のに、私も、優しさと可愛さにくすぐられて、可愛い、汐見が優しとか優しすぎるとか言ってる、そうなの、でも私は来てほしかったの、奈世さんは、奈世さんは自分を自己中だと言うけど私にとってはそっちの自己中な方が奈世さんみたいな方が、こう、来て！、来てくれる、から！、自己中でも、いいの！！、奈世さん、今こっちに、来てくれるから！。奈世さん。奈世さんは優しすぎて、ずるい。汐見も優しすぎて、二人は違うけど、ずるい。二人とも私は怒れない、から、あ！、ええ！、だから今、二人が優しすぎるから、奈世さんの私の夢に來た力で魔法、多分、で、奈世さんパワーで汐見をこっちに連れて来て貰って、三人で楽しく過ごせばいいわ！。

お茶会とかトランプとか？、おやつとか、セックスとかね。ティータイムが、二回ね。その後。パワー。おやつと、セックス！。

そう、しましょう！。

勝手に夢の中に来て、だから、私は、素磨子さんとずれていることを、私にとっては、勝手に、私の都合で、しかし、私にとっては大切なので！、素磨子さんに、繰り返して（ひ

どい。」言った。

「汐見さんは絶対に来ないと思います。汐見さんは、素磨子さんの夢を、大切に、大切に
する方です。私もそうしたかったのですが、私は、とても自分の、ことで、あの私がどう
あっても許せなかったのです。例えば素磨子さんの意識とかイメージとか、でも、私にはあ
あする他全く無くて全く、許し難い、いいえ、絶対つ、絶対にあんなのは消し去っておく
以外に全く、全く無い、許せないんです！許せない消すしかない事でした！、事です！。
あんなのは、ただの事、です、ただの全く無い不要ないらないコト、です！。だからこそ、
ただの、いらない、事で、事、です、そんな事ですから即座に消すしかないです、即座に、
私が、消しましたからね。許せないんです。素磨子さんの、私のこと、でも、私があんな
こと言う筈がないんです。私は、言わないですよ。あんなの。あんな言葉は全く、間違っ
ています。私が、相手に、素磨子さんですよ。私は素磨子さんを、とっても好きです。あ
んな言葉は全てが間違っています。汐見さんも絶対、そう言いますよ？、私も言いますが、
汐見さんも素磨子さんを褒めます。当然私も褒めて褒めてを、言います。あ。私について
ではないですよあの、褒めて褒めてとは、素磨子さん御自身の良き、で、とにかくは、と
っても、良いのです。ええ。素磨子さんが、とっても、良いのです。はい！」

「奈世さん、そんなことより汐見をここに呼んでちょうだい。」

「え？」

「あ、そう！、聞いてた。聞いてたからね、褒めてくれて嬉しいケド、だから、優しすぎ
るそんなの、のイッカンはいいいから、そんな優しいことより、勝手が、いいのよ。奈世さ
んの勝手が、汐見にも、良いの。汐見を呼んでくれたら、いいのよ。」

素磨子さん。とんでもないですよ？、あッ、
いけない。私はむかついてきました。

「素磨子さん、嫌です。汐見さんが、素磨子さんにしたくないことを、私は絶対にそうし
たくありません。」と、私はそのままに言った。素磨子さんに嫌われるのは、イヤ、だった。
だけどそう言う必要があったから、言った。汐見さんが、私は、大切です。素磨子さん。
あなたにはイヤだと、イヤとも、今ここに居る私たちがどっちも、イヤです。ですけど変
わりませんよ、私は、私はとっても、自己中なのです。素磨子さんは笑顔のままちよつと
黙って、固まって？、それから、真面目になった。いえ、もうずっと真面目な素磨子さん
でしたが、怒ったⅡむかついた感じの、一緒の真顔に。

怒るのが一緒なのは、嬉しい。汐見さんが大切で、だからこそ、私たちは一緒に怒ってい
ますね。逆の感じに、望むのが逆なので、ああ、一緒にするのは不可能でしょうか？、
と、それこそを！、素磨子さんに聞いてみましょう！。

その前に素磨子さんのおしゃべりを聞きます。もはやきつと、意味のないおしゃべりです。

奈世さんはなぜか、確信した言うの、で、いじわるな、したくない！と、言ったわ！。確信して。なんで奈世さんに、分かるの？。そう思ったから私はそのまま言うわ。

「奈世さんに、何でも、だから、何でも、確信して！、汐見の心まで、ずっと、奈世さんに全部分かるの！？、奈世さんっ！。何で汐見にソーしたくないこと、させるの！？したくないのは、私にすることなのよ！？、違うッ！するのは、私に、すること！、しかもね、ここ、いま！、いま私の夢よ！？汐見は、来たいに決まってるじゃない！私にだけ、気を使つて来ないだけでしよう！？違うの！？奈世さんは、来たのに、来ないの！？、ねえ、奈世さん、汐見を来させない気なの！？、ちよっと！。ちよっと、も、トニカク、答えてっ！。」

「はい、素磨子さんが起きて伝えるべきかと。私は、それです。そうしたいんです！、あつ、いえ、これからっ、これまででは、いま！。今も、ずっと、素磨子さんの夢がっ、汐見さんは素晴らしくとても大切で、素磨子さんの、心の中なんです。つまり、もちろん素磨子さんの夢は、大切で、大切で、汐見さんはきつと、絶対に、一切見ていませんから。ですから、はい、その通りに、分かります。私が、自分らしき偽物を感じて、ちよっとその、我慢できなくなつて、覗いて、いけないことなんです。汐見さんは、感じて、やらないことなんです。それこそ、私がやらないようにっ！、素磨子さんを、はつきりと大切にされます。はつきりと、少しも覗いたりしません。汐見さんは、そういう素晴らしい方です。分かりますよ、もちろん、汐見さんは大切な方です。私にも、私にとってもです。答えとしては、汐見さんの、御心です。私も、少しなら分かるのです。まあ謙遜ですけど、ふふっ♪」

奈世さんの笑い方はカーテンからそつと、もみじ色の光がゆつたりもたれて、合間から、ぱーっと差し込むみたいで、夕焼け、プライドがとっても強くて、夕陽のからかいかたがふわつと、耳と目を攻撃してきてかわいい！、強さ、で、可愛いけど強く！、ハッキリ、優雅に。私に自慢して、からかってくる。私に、自慢してくれている。

ちつとも、綺麗と、綺麗とだけで、馬鹿にするとかじゃなくて、負けた。負ける気、無いけど！、でも、私の負け。素直に。私は奈世さんの言うことも分かるし、分かるからっ！、ああもう、素直に、素直に！。

私の負けで、奈世さんの言うことは私。私のことで、正直に言わなくちゃならない。私は色々悔しくて泣きながら言った。恥ずかしい。恥ずかしいと思った。言葉は恥ずかしくも、なんとも無かった。全く。泣くのが、喋るのが、恥ずかしい、だけ！。ゆつくりと（多分）、奈世さんに（早口で）言った。

「汐見が思つてゐるのに、言つてなかったから？」

良く聞こえる聞きやすい早口言葉でこーしきみたいで浮き上がる、ふらふら、くつきりしてて、私は、ふらふらしてて、言葉はトラックのペンキみたいで、競技場、私はグラウンドの白線、すぐ消えるふらふらしたライン、チョークの粉のような、こな。白線の、ライン、こんなに、ちがくて、恥ずかしながら分かりきったコト言うから！、恥ずかしい、思いをして、だから、こんなに恥ずかしくて、ずっと！。また違う恥ずかしがりになる。はずかしがりって！ その発想が、もう嫌。ふらふらしているから！。私！。くつきりして、言葉が、恥ずかしい。なんでまた聞きとりやすいのかしら。奈世さんにもはつきり聞こえた。絶対！。奈世さんにも、はつきり聞こえたわ。今。奈世さんは、現在、手を、持たれている、手の平、両方、きゅっと握って、やつぱり、元気な感じがするわね！、握力も、やつぱり！、かなり、強いし！。

今は軽くて、100キロ位できゅっと。奈世さんがそうしながら、してくれて♪、聞いた！。

「素磨子さん。そろそろ、伝えに行きましょう。」

「うん。」

すぐ領いた。その前、私と一緒に言葉が、奈世さん、伝えに行くって、夢から、起きることだから、奈世さんが、多分の終わりに、言った。

『素磨子さん。そろそろ、伝えに行きましょう。』

『ええ。』

と、私は心の中で、綺麗に格好良く領いていた、すぐ領いたりしてなんかまた恥ずかしくって奈世さんは多分その気にしてなくて気にしてない方が私は良くって時間が多分もう夢の中に、無いから、私は目を覚ましていた。汐見。奈世さん。奈世さんに会ったけど、でも、奈世さん！、汐見には言いたくない！。汐見。汐見の寝顔は可愛い。いつもよりおとなしくて、可愛い。綺麗はいつも、凄く綺麗で、静かに落ち着いているみたい。となりだけあたたかい氷の世界で空気の凍ったかまくらみたいね、何だろ、落ち着く雰囲気、私、で、いやそれなら、良いけど、落ち着くのが私で私の感じるインシヨー、的な

「お早うございます、素磨子さん♪」

奈世さんの可愛い声が聞こえる。右隣に汐見が居て、左を見て、左手側に奈世さんのお顔が、すっぴんで寝起きでもとっても可愛い。綺麗。奈世さんで、奈世さんだね。

奈世さん。私はぎゅっと叫んだ。

（でも汐見は勿論だけど私もすっぴんなのよ、同じく寝起きだし、それも！。綺麗さには、も！、自信があるのよ。私っ！。）

夢からやってきました。あつそう。私はそうやって（でも、無言で）頷くしかなかった。しかもきつちりと着替えまで用意してきていた。奈世さんは白襦袢を脱いでいた。すでに。お布団から裸で寝ていた。あのとき、朝起きた、ときから、着るだけだった。（今食堂、）ゆったりしたクリームとベージュのお部屋に、壁がクリームでカーテンが白っぽいベージュで、ゆったりしすぎて、黒い家具がある。落ち着く。きつちりした、テーブルと、椅子と、お皿を取り出すところと、キッチンもこげ茶色と、銀で、灰色っぽい擦り硝子の銀で、金属だけど、ステンレス？の、高いやつみたい。上品な、目に優しい、落ち着く硝子？、金属。きらきらしてない、さあつと、さらつとした擦り硝子の、キッチン。女中さんが落ち着いて作るのが見える。キッチンが、綺麗で、とつても！。落ち着くものね。黒い木のしっとりした家具と、テーブル、椅子、箆笥（？）と、キッチンのアクセント？、とか、こげ茶もコーヒーマイで、綺麗。床もクリーム色だし、私のスリッパは赤で、どぎつくて逆にもう落ち着く感じで、朝から、夜とかも、黒いテーブルが、綺麗。椅子と合わせて、とつても落ち着くわ。汐見。汐見だけ！、ああ！、奈世さんがいるけど。あー。もう、これからは、ずつと、やだ！

とにかく、考えたく、あんまりない、のに！。あんまり、もう、朝から、顔洗ってさっぱり、歯を磨いて顔洗ってその後も帰ってない、から、奈世さんがまだたぶん洗顔して待ってて、歯ブラシ汐見借りのたの！？やだ！なんで奈世さんにかすのよ、駄目じゃない！ぜったい！やだ！なんでこいつまだ居るのこいつ、この女、奈世！さん！、そもそもしつとりした黒とかこの椅子とかテーブルとかうわああああもう奈世さんのイメージが全体的に落ち着いてて、落ち着いてて、私はむかついてるのに！奈世さんは目の前でとっても落ち着いてて、しつとり、ああもう、このキッチンのお困り気みたいで、もうやだ！汐見の家なのに、ここ、あと私だけ一緒に暮らす家なのに！、奈世さんがぶちこわしにしたのよ！奈世さん！

汐見も落ち着いてるわ。目の前、奈世さんの、隣で、すつごく、楽しそーなカンジで、落ち着いてうきうきしてるのは可愛いけど可愛いけど私はとっても、嫌なの。

落ち着くキツチン。奈世さんみたいな、落ち着きが、奈世さんはキッチンよりすつごく黒がきらきらして、すわーっと押しだしてくる髪の毛で、綺麗で、すつごく！最強、最ッ高の、奈世さん、なのに！髪の毛が綺麗なのに！キッチンより、とっても！

あれ？

とにかく！、奈世さんは、自己中で勝手な、全てよ！

髪の毛も奈世さんもそこが綺麗だと思うし。

ああああああ、うわああああああ、もう、いやっ！。

奈世さんに、とにかく、さりげなく、聞いてみる。(さらっと。)

「でも、用意が良いわね。」と、さらっ、と(↑確実に)、私は奈世さんに、言った。(と、ばかりで落ち着いてないかも。違うわ！。(絶対にさらっと言った。))

「はい、おとまりですから。」

、ト、なんて？え、なに？イマ、どう、いったの？。

言葉が、言葉が、話せてないのよ、私、奈世さんに！、話せてない！、から、お泊まりって！お泊まりって、私の言う言葉でしょ、だから、いつも、で！、私は、お泊まり。今日は特にセックスしたから、お風呂も、シャワーでも一緒だから、汐見とね、一緒に眠ったから、とまり。お泊まり。いつもだけど、いつも！、でも、今日は、特におとまり、なのに！。奈世さんが勝手に言ったわ！、勝手に！、私全然許してないのに、勝手に！

わざと言ってるのかしらこの子。奈世さん。奈世さん、わざと、怒らせているの？。

私は、ぜんぜん、違うことを言う。

「あ、そうだ。歯ブラシ汐見借りのたの？。汐見、歯ブラシ、奈世さんに、汐見、奈世さんに聞いているんだけどね、奈世さん♪、ね！、奈世さんは！、キスして、かりたの？」

なにキスって。私なに言ったの、ねえ、奈世さんは汐見にキスした。この前、この前もセックスの時もこの前、それが、この前で、今朝も、そう、間接キスでも、キスで、そう！、

奈世さんは汐見に仲良く、キスした、ああ、もう、打ちたい！しばき倒してやりたい！奈世さんをキスしたからああああああもうやだ！、嫌ッ！、奈世さん！なんでそう、自然に、キスなの！？汐見と！汐見とよ、もちろん！、もちろん好き同士だから、奈世さん、汐見と、好き同士で、可愛い。なんで？なんでそう、そんな綺麗なの、可愛いから、私からも、凄く！。

そう思うから。

可愛いって、綺麗って、凄く、私も、かなり好きになってるから。

昨日とか。

プールとか、奈世さん、と、

汐見とは、違うけど、セックスと可愛さの感じで、綺麗さも、お布団でハダカの感じで、いっぱい抱きしめたい、感じ♪。セックス。そっちの感じで、セフレ？で。

セフレってこういうことなの？なんか違う感じで、友達？、えっちな友達って感じ…ね、そう、それ、良いわね！。えっちな可愛い、ともだち。奈世さんとセックスとかお話し、したいわ、お話：気が参るわね、今は！今凄くやばいこと言ってたから、私、が…、汐見と奈世さんと3P、それから？、奈世さんとも、先にしたい、気も！するの！。

お話。今のカンセツね、それから。キスのこと。どうかと思うけど、ジッサイ。あつかましい？あつかましいのよ、奈世さん。

奈世さんがなんかしゃべってる。聞いてない。

私は聞いて無かったわ。どうだろ？、もちろん、当然！、すっごくやばい気がするわね！。やばい。

汐見さんは、言われた通りにしてて、待ってて、素磨子さんに黙しています。素磨子さんに向かい合うお席で、ちゃんと。かわいい。私に、聞きましたものね。素磨子さんは、今私に、キスを、いえ、言葉のやりとりで、キス？の、ことを。私は今朝、どなたとも（どちらの、かたとも）キスしていません、ショック、ですが、聞いてくれたから、言いますね♪。

私に聞いてくれたから、答えます♪。

「歯ブラシは持ってきましたよ。素磨子さん、言葉で、いえ、言葉でキスは、ちよつと違います。私の思い込みなのです。ああ。もう、ほんとに残念っ、ですが、すいません。ちよつと、いま、忘れて下さい。とにかく、洗顔は、クリームからぜんぶ、歯ブラシも付けるのも、持ってきましたよ。いえ、付けるのは借りましたが。粉の。チューブの、反流体の、こな？、で、練り歯磨きのコナ、です。セッケンです、そう、借りたのは、石鹸だけなんです。手のハンドソープと、歯みがき用のを、石鹸が、石鹸だけ！、なんです。私の洗顔料はクリームを持ってきましたからいつものを使って後は、借りて、でも、はい！、

そうです！、歯ブラシは、持ってきてましたよ！」と、でも、言っただけ、素磨子さんはちよつと、全然、聞いていないみたいです。ちよつとだけまたショックで、残念です、再び、ショックで、キスしてみたい？、気分、です！。

「素磨子さんと、キスしませんか。」

「私と？」

「はい。」

私は上機嫌で答える。今、素磨子さんは、ぱつとして、ぼんやりして言った。ちよつと前までは、しゃっきりして慌ててみたいで、すらすらと鉄を組むみたいにしやべって、素磨子さんらしくなく、鉄柱をしっかりと、組んで、そんな雰囲気ですっかりと慌てていたから、ぼんやりして柔らかくて、良いです。硬くも無いから、とっても、よくて、素磨子さんの硬めに（しっかりと）お話しするときは、柔らかさも同時にしっかりと！、あります。そうですから、私には、も、汐見さんとどーよー、つぎに、素磨子さんでしたら、何でも分かりますから、私は、慌てていてどうして、りゆうは、歯ブラシとかどうしようもなく気に、できない、ことで、私には理解が至りませんから、気になるのはああ、借りたことが無いからでしょうね。素磨子さんは、手ひどくシャイな方ですからそれはもうその位でかちこちに慌てて、慌ててシャキシャキと御話する位に、それはもう、歯ブラシなど小さな頃から、ずっと、お二人とも自分用、自分用、借りることはスベアも持っていて、一切、

私は素磨子さんにキスした、だから！、とっても我慢できなくて、だから！、キスして朝ごはんの前だからとつてもつても私は舌入れてキスした！、キスしました！私は素磨子さんと、舌、キス、ちよつと薄いぷるるのしゃあんとした、唇！、唇だけでスプーンを真っ平らにできそう、力強い真夏の花びらみたいな、ちよつと薄めのちゅつとした唇の味が、ぷるるで、触り心地が良かった、だからこそ柔らかさと頑強さがあり、この場合は硬さでは無いのですから！、とつても、味が、唇できゅうつとします！、舌と唾液はさらさらでミントの歯みがき、ちよつと甘くて、唾液がすうつと抜けます、舌の上に伸びて伸びて無くなって、空気にノドに、さらつと落ちてきます、ね、なくなるミントと、薄いちゅつぷり感の、すぐ消える飲める飲める液（ぐくぐく）。唾液がさらさら良い感触、です♪。

テーブルにお上がりしますが、私は特に、あんまり気にしていません。

それより汐見さんの反応が気になる、気になります、私はとっても！。（でも、）素磨子さん♪。

「あー。キスだけど、汐見は気にしなくていいのよ。」

と、奈世さんを、奈世さんをキス終わってとにかく下ろして、テーブルを整理しながら言った。テーブルクロスをちょんちょん、と、伸ばして、（それと）花瓶が倒れてたけど、造花で良かったと思った。チューベローズの真っ白な香りの造花、真っ白だから、つまり、香りが無いわね、いつも、紅茶とかコーヒーとか料理の香りで、花は何もない真っ白じゃなくて、白くて、艶があって綺麗。陶器みたいな絹？の、柔らかな造花。私はこんな布、よく知らないけど、ロウソクの絹って感じで、綺麗ね。陶器の柔らかいロウソク、みたいな、そんなのをいっぱい、9本、揃えて、またクリームのステルスみたいな花瓶に、細い上品な容器に揃えてぶちこむ。手を離して空気で重力で落として、カカツ、と、プラスチックの音が、クリームの焼き物にちよつとする。音。カカツとして、クリームをつるつるの花瓶、手で持って、両手で、ひっそりのける。よそへ、細いから割れない場所へ、広がった口から花広がって、きれい。テーブルの端に勿体無いけど置いて、置いてから、私は一気に、汐見へ！。夢のこと、そこから、汐見に　奈世さん？！いっしょに、言うの！。

「汐見は、夢に出て来てくれない？。あ、出て来てくれないのは、出て来てくれないからでっ、だから、夢にも、大変な時、一緒に居てほしいの。私は、昨日奈世さんにいじめられたのよ。私だけど、アー違うの、私だけど、だから！、私の考えてた奈世さん、が、居て、自由に私が勝手に奈世さんを使って、だから私自身私をいじめていたのよ。そんなことがあって、奈世さんが助けてくれたの。だからね、汐見が私良かったの、汐見、奈世さんは好きだけど、可愛いし、私は、汐見が一番、可愛いから、とてもよ！。奈世さんは可愛いけど、私の一番は、汐見よ。最高に、すっごく、可愛くて綺麗で好き！、なの！。今キスしたのは、奈世さんが可愛いからよ。それもね、分かるけど正しいの。それは。奈世さんのキスは、奈世さんが気持ち良かったし、汐見より自己中なキスよね。デイープで。とっても情熱的で、勝手に、好きだけど、私は汐見が、もっと、もっともつとずーっと、好きなの。汐見。キスも、汐見っ、汐見よ！。汐見！。唾飲むのよ、奈世さん、いっぱい、好き勝手に飲むのよ！だから！、汐見もほら、分かるでしよするのよ！唾飲んでキスしてセックスするのよ！。優しさもいいけど、汐見の、汐見と私の、奈世さんも、でも汐見が一番えろいし、可愛いし好きだしそれがえろいから！、汐見の、して♪、もう！、自己中で勝手なエロさよ！。汐見のそれも欲しいのよ！私は！、私も！奈世さんと多分絶対、一緒だし、一緒のココロよ今絶対、一緒！。いっしょ。おんなじで、今日、さぼる。学校さぼって3人で3Pとかしてセックスして今日ずっと最高、さいこう、汐見と、私と、奈世さんと、私と、汐見とで、セックスしましょう。今日は…、今日から、3か4か、位。」

みっか・よっか。それこそが重要だった。今、その時、奈世さんが口を挟んだわ。「あ、私、お料理を御馳走したいです。御馳走ですよ。お昼に御馳走しますから、作りま

すから、その後からで、いいですか。」

マジで自己中よね、って、思うのよ？。奈世さん。

私はすぐ言った。（奈世さんに。）

「聞いてないわね。聞かずに、そうするでしょ、奈世さん。」

「はい、私は上手ですよ。お料理は、美味しいのが好いです。お二人に食べてほしいです。今からずっと、私を、私のお料理のお味も、お二人、素磨子さん、汐見さんとお二人、私と、はい♪。私は、食べてほしいです。お料理です、お料理のお話ですけど、私は、本当に上手なんですよ？。ねえ、素磨子さん、今はもう、貴女に言います。貴女とのお話ですから。これは。汐見さんに聞くのは、ずるいです。」

ちょ え、何が？ずるいつて私に、言ったの？奈世さんが、私に反対から、言ったの、反対って、ハンタイでしょ？反対、って、私からじゃなくて奈世さんから悪口言ってて、奈世さんもこういうこと言うなんて嬉しい、けど、でも！、奈世さんもずるいとか思うのはちよつと意外？だけど意外でもないし、奈世さん優しいから対等？、対等って！、私が勝つてるとか思うし、でも奈世さん綺麗だし、私のが勝つて、それぞれ、それぞれの綺麗さとか可愛さとか私も、私も、あと強さとか、それはもう絶対そうだし、勝ってるし、それぞれの綺麗さとか比べて、いっしょぐらい、か、私がもう、多分、勝ってる！そんなことにしよう。勝ってる。私が。汐見と、私と、おまけで、おまけが、奈世さんの立ち位置で、やだ。奈世さんがおまけとか、そんなのは似合って、無いから。私と、一緒に居て、私こそ居て！、良いと思う！、私こそ、奈世さんと汐見と、多分、絶対いつまでも一緒に居ると思う。ええ！。私は言いながら思った。遅れて、言った後、私はちよつとコーカイした。でも思ったから、あんまり残念とか、ない。言って良かったとは思わないけど、こんな。

こんな、奈世さん、こんなだけど、私も。

「ちょ え、なにそれ。牽制？私をケンセイしてるの？。奈世さんから、ケンセイ、私を、聞かなかって、くせに、質問とか全然、イケンとかモトメてなくって、それでもう、それから！、私に！、いうわけ！？何で！？。、なんで。あ、うん。」

何となく、頷いて手をぎゅつと合わせた。パジャマがちよつとこわれた（両肩、後ろ）。キツと切れて、破れた？けど、気にしない。

パジャマの布がきれいに切れたのは、良かった。

きれいだから、奈世さんも氣にいる…と、いいな。汐見は分かっているから、（分かるから、）嬉しい！。

でも、奈世さんは着替えてて、何故か制服だった。ブレザーが地味に似合っていないわ、と思った。声は、奈世さんより先に、汐見のがフツ―に聞こえた、汐見が、言った。フツ―に落ち着いた声で、私も、そんな感じが良かった。アイスクャンデーみたいな凍ったミ

ルクの、ミルクが、落ち着いて泣きたくなる声。優しいから、私は泣きたくなった。：汐見！

「素磨子、奈世さんは貴女に食べてほしいのよ。お料理も、でも、素磨子は、奈世さん、素磨子はね、奈世さんを食べるとかはしないわ。食べるのは、まな板の上だから。一方的で、そんなのはひどいこと、だから、ひどいことを、素磨子に言わないで頂戴。ひどいことは、素磨子は決してしないわ。できないの、優しいから、素磨子は嫌がるのは、ひどいわ。素磨子が嫌で、しないし、できないことを、素磨子に対して絶対にしないで頂戴。絶対に、素磨子にはしないで。言わないで頂戴。それが我慢できないのだったら、私に言うて。それとね、素磨子、素磨子に言うのだけど、また、奈世さんはお料理を貴女に食べてほしいの。だから、私じゃ無くて、言ったの。私じゃ無いから、悔しくて、寂しいわ。夢のことは、分かったから。素磨子。これからは私がチェックして行くようにするわ、私が行くようにする、から、えっとね、素磨子。貴女の夢に、私こそ行こうと思うわ。」

（奈世さんも）じつと集中して、聞いていて、多分それだから奈世さんも（！）すぐ言った。（おかげで言う必要が無かった。悔しい。）奈世さんだけ、言った！。私と一緒に、遅くて：私！。

奈世さんは綺麗に言った。こちらはトテモ泣きたい。

「汐見さん、やきもちですか？二重に！？とつても、可愛いですね！」

とても綺麗で、奈世さんは、超カワイイと思う。また私は、最高に、ずるい！って、思った！。

私は奈世さんをいじわるだと思った。初めてだった。やきもち間違ったことだし、私は、それよりもずっと見ていたから、二人を、私がしゃべっても良いのよ、二人に、そろそろ言うことがあるわ、二人に奈世さんと素磨子に！、とつても、言うことが、あるわ！。あたりまえで、当然のことなのよ、奈世さん。素磨子はきつと分かっているわね、だから、私は今言われた奈世さんに対して言った（言い始める。）（しゃべるのは、奈世さんに、やきもちじゃなくて。）

「私じゃ無かっただけよ。奈世さんの、することだから、私は自由で、悔しくもなんともないわ。だから、奈世さんも優しいことをして頂戴。自由に。それは、自由に、優しいことをして、ああ、今どちらも奈世さんからやったことじゃない。どちらもひどいわ。ひどいこと、ちよつと、奈世さんが私と素磨子に、言ったわ。夢のことは初めて聞けたから、まあ、いいかしらね、いいけど、素磨子、来てほしいなら素磨子はどうして私に最初から聞いてくれなかったの素磨子」

「そうできるって思わなかったのは謝るけど、ごめんでも、ごめんね、夢のことだけど。でも、なんで逆に、汐見が怒るのは、どうして。どうしてかよくマツタク分かんないんだけど、汐見ね、私じゃ無いって、何なの？。ほんとそれ、私じゃ無いって、シラナイ。私はずっと、汐見が一番だって、ずっと思ってたんだけど、奈世さんも、ああ、うん、まあ奈世さんも、モチロン。勿論、ええそう、私からそうよ！私っ、だからね、私は、もう、キレてるのよ！。怒ってるのよ！汐見より、ずっと！」

「え、素磨子さん、私が先に聞いたのに私より先に言いましたね。私のお料理も、本当に、順番なのに。それは順番で、先に言うかだけなのに、ああお料理ですよ、今のことじゃなくて、それを汐見さんが、私じゃ無いと言われて、私の方はやきもちで見ないふりしたのに、それは汐見さんが可愛いからできたのですけど素磨子さんは案外気が利きませんね」

「は、何で？私自分が大切だし。奈世さんと汐見より、私と汐見のがいいから。」

「まあ、小生意気ですね。かわいらしいですね、素磨子さん♪」

「あ、今はもう、アキラカに怒らせてるでしょ？。キスしたい。」

「そうですね。私も今、いっしょです。色々♪。」

奈世さんが、また、テーブルの上に、行く。椅子に膝立ちして、静かに、さっきより静かに、ゆっくりと、テーブルクロスもまっすぐ、さしゅさしゅならずにまっすぐ、ゆっくり、テーブルクロスの上から手と膝で立って、苦労知らずの猫みたいに両手を伸ばして綺麗に、しっとりとからかうみたいに関手を、くすぐるみたいに伸ばして、素磨子の頬からしっとり、手をすべらせて・くすぐって、頭の後ろへ伸ばして、素磨子のセットしてない長髪をくすぐって、さらさらと、頭の後ろを掴んで、手を添えて、素磨子のキスへと掴んで、素磨子の髪が、さらさら、ちよっと動いて、ゆらめいて、くすぐっているからじゃないの？、羨ましい、素磨子の両肩がキュッと、はにかんで、表情と一緒の表情。はにかんで気持ち良さそうにしてるわ。素磨子が奈世さんも気持ち良さそうにしてるわ。奈世さんも、素磨子も、おちついておちつかないけど、どきどきして可愛い表情ね。素磨子はそのまま一直線に見上げて、多分、膝の上で肩から手を組んで、硬く、手の平をぎゅーっと合わせてしっかり奈世さんを直接見上げて真っ赤に、可愛い、素磨子のパジャマが背中、サーッと、三つに分かれてまんながパサリ、と、落ちて、奈世さんが片手（左手）で拾い上げちゃって私が動くより早くも、自然に、片手だけで畳んでテーブルに置いて、その左手を素磨子の、せなかに、寄せて、奈世さんはどきどきして落ち着いたふりだけしていて落ち着いて表情は心は落ち着いてどきどきして嬉しさが落ち着かないから奈世さんも素磨子と一緒に最高にこの時間がキスする瞬間が嬉しい、楽しみで、楽しくって、嬉しくって、止まらない落ち着き、素磨子の背中にそのまま奈世さんの両手、両手！？左手と右手も寄せて！？それはキスじゃないわ。キスだってもちろん許さない。

「奈世さん、だめよ。」

と、私の勝手な言葉、は、当然無視するのが正しいと思う。でも奈世さんも素磨子もひどいと思った。

奈世さんの両手が、クツと、素磨子の背中を、背筋を触って奈世さんの方まで寄せて、背中から素磨子を抱き寄せてキスする。

キスする。

キスしたわね、奈世さん。

素磨子。

さつきもやったじゃない、素磨子。

キスだから、セックスのはなしは、聞きたくないんだと分かった。でもやっぱり、私は聞きたいと思った。素磨子もきつと、あの時から、話したときから、ずっと。

傲慢かしら。ワガママって、素磨子によく言われた。ワガママでも可愛いって、好きだった、小っちゃい時から。最近は言われてないけど、たぶん。絶対に、今でも、そう思ってくれてるわ。素磨子の好き、は、重くて心地がいい。だからやっぱり、素磨子は聞きたかったわ。私と奈世さんを、聞きたくなくても。それでも、聞きたかったのよ。私も。

私と奈世さんのキス（2かいめ）。花瓶は寄せたからこぼれてない、やったね。チューベローズの、香りが空気じゃない花。わたしが（汐見が、奈世さんが）好きな時に、想像で香りがする花。透明な香りと透明なぼんやりしたのが、（薄いロウソクの真珠の造花？みたいな）汐見のキッチン、の、食卓にとっても合う花。

透明できれい。

いま私は気持ちいいから、助かる。落ち着く。朝ごはんも食べられる気がする、とても！。

気持ちいいから、桃の：梅の、お菓子みたいな。奈世さんはわがままだから、梅の。（綺麗な梅。舌からぼんやりする梅。）

チューベローズ。そういうコトバにも見えた。

切れたバジャマの落ちた、無くなった、空いた私の背中に、手を寄せて。奈世さん。そう。そう、それぞれ！背筋には、にも、自信がとってもあるのよ！。

口と手を離して、少しさみしいときに、汐見さんが私に聞いた。多分、素磨子さんじゃ

なくて、私に。だから？。

「キスはどうだったかしら」

と、汐見さんは言う。だから私は、どうしましたか、と言いたい。

さみしいときに聞いてこないでと言いたい。

「分かりますよね。」と、私は、言った。にこやかにほほ笑んでいると思う。

「終わるまで待ったわ」

「ああ、分かりますか？聞かないで欲しかったので。それにまあ、汐見さんも、それだけではなく、きつちりと楽しんで見てたでしょう？」とか、早口で一気に言った私は、別に、怒ったのがばれても構いませんよ！。でも、にこやかにほほ笑んでいると思う。汐見さんが可愛いのも、事実だし。今、凄く、可愛い。

私のひやくまんばいはさみしかったはず。

可愛い。

汐見さん、凄く、可愛いです。そんな気持ちも、アクアマリン・ブルーで、透き通って、とっても綺麗です。

汐見さんの涙はとても♪綺麗です。

私は夕陽のほのおが、不透明、ですが♪、とってもとってもあたたかく燃えていますね。冬至を消すほどあたたかく燃えています。夜が、来ないです。私は夜なのに。私の髪はそれこそ、それよりずっと、ああ、私の髪と、汐見さんと、素磨子さんと、そう！、素磨子さんの、さつき触らせてもらった胸の後ろから、肩の後ろから、背筋が、そう、私が髪の毛ならば、素磨子さんの、汐見さんの筋肉が、今、汐見さんとお話してますけれど、汐見さん、素磨子さんの筋肉を触って、さつき、今ちょうど、今は、汐見さん。汐見さんの筋肉に、触りたい。髪で。髪の毛で、巻いて、触ったりして、くすぐったりして、全身、あお体を巻くのは最後の、最後で、その前に全身くすぐったりして、と、汐見さんが、背筋、と言いました。多分、素磨子さんのさつきのキスのことでしょう。私は最高でしたし、きつと素磨子さんもですけど、私は、素磨子さんの背筋は！、とっても、良い気持ちでした。落ち着きました。私は、最高でした。

「丸い刃物みたいいきいんとしてかちかちでしたね。」

つまり汐見さんが分かっていることを（早口で）言った。なんてこと。

汐見がスゴイこと言ってる。恥ずかしい。

「楽しかったより、ええ、まあ、見たかったの。私も。素磨子の背筋はどうなの。凄いわ。私も、素磨子に言ったわ。奈世さん。素磨子の背筋は、それこそ、分かっているけど。素

磨子はその時、奈世さんを知らなかったのよ。素磨子とセックスをする前、で、ね、奈世さん、素磨子は、知らなかったのよ。奈世さんのことも、奈世さんと私のことも、奈世さんとセックスをして、気持ち良かったの。凄く、ああ、奈世さん、奈世さんに言うのは、ちよつと、奈世さんは本人だから。私、でも、素磨子に言わなくちゃと思って、それで、奈世さんとのセックスのことを、奈世さんとの私のセックスしたのがとっても気持ち良くて、それで。それでよ、私、お話ししたの。素磨子に、楽しくて、その時も私、楽しくて楽しくて、言ったの、奈世さん、私は、でもちよつと間違っていたのよ。なんとなく素磨子も羨ましくって、嫉妬して、楽しいだけじゃなかったの。私も、今そんな感じだったから「丸い刃物みたいにきいんとしてかちかちでしたね」「そう、素磨子の筋肉ね！背筋ね、さつき、キスした時に！そうね、最高よ、いつも。素磨子は筋肉が、私とは違って、私も、最高だけど、素磨子も最高！、そうよ！」「そうですね。まきつけたいです。」「髪の毛？いいわね。素磨子は？。」

「は？」

まきつけたいって巻き付けたい、で、髪の毛、奈世さんの髪の毛は綺麗でそりやそう、汐見は質問かしら、と思った。素磨子は？、だから、質問かしら。汐見。丸い刃物みたいいきいんとしてかちかちなつて、汐見の、今さっきの。今もなんとなく、ときときしてふわつとして落ち着かないみたいなの、いらつとして見逃せないみたいな気持ちで、多分そんな感じで羨ましがってたあーさつき言ってた、汐見の感じじゃあないかな。私の筋肉も、ちよつとそのまま？な感じで、そりや、そうだけど（超・良いって自信があるけど）、汐見も、いえ汐見は、ちよつと、言葉が一緒に緊張して怖い、みたいな、汐見が怒ったら私はイヤ。わがままね。自分でもそう思うけど、汐見、嫉妬とかほどほどにしたい方が いいわ。私が言えない。そう思う。ええ、でも私、汐見にはこち来てほしいわ、早く！、怒るとか嫉妬より早くね、羨ましがるより私が、やったみたいに、ああ、やっぱり！、その方が、良いわ！。

あ、ええ、私はとりあえず言った。

「奈世さん、汐見さん、汐見つ、その、考えさせて。まあいいけど、朝ごはん食べてからにして。髪ね。好いと思うわよ、私。」

落ち着いた気がする。私たち三人が、多分。奈世さんと汐見と私が、落ち着く。私こそだったら、やだけど。サイアク。やめよう。多分、あ、でも今、考えさせてって言ったけど私考えててそのせいで今全然聞いてなかったしだからこそこんなこと言ったし、でも今、そう言ったけど嘘じゃないし落ち着いてくれて私も今、とっても、本当に好きで、私こそ落ち着いた大切なことは私が今、今も、好きだったから！。あ、落ち着いてるわね。汐見も奈世さんも、そうだわ。全く聞いてなかったけど、何とかなるものね。意外と。

「聞いてなかったわね」

「あ、いえ、素磨子さんは可愛いじゃないですか。汐見さん。素磨子さん、今もすてきで、たきたてごはんみたいです、私、朝ごはん、ほんわかしみましたよ。ね?。」

汐見はきびしい。奈世さんに同情された。本心なら、多分そう、もつともつと恥ずい。あー芝生にぎゅつと埋まりたいっ。サッカー。スプリングラーで汐見に起こされちゃう気がした。

(汐見と私と、最初に、ステーキのお店。)奈世さんがこのお店に来たことは、地味に運命を感じる。私はでも、少し(かなり?)、どうして来るのよ、と思った。ステーキ屋さんに和風でも来るな、と思った。奈世さんは和風だけど、嫌よ。私と、汐見だけの店なのに。お店屋さんはお食事やさんのだけど、それはそうと、キッチンのお店じゃないくて、女の人、きれいな人だった、それでも、ここは、汐見と私の店なの、汐見と、私だけの、場所よ。お食事を奈世さんが作ってくれて、今、キッチン? 厨房? がしっかりしてて、しっかりとして、借りて?、料理している、から、どうせぜったい上手に決まっているから、私は、汐見とお座敷で待っているだけ。座布団に、上品な苔色のしっとりした座布団に置かれて、この座布団いつも良いわね、色がしっとりしてて、海に沈んだエメラルド色のグリーンと、ちよつとかすれてすべすべした布の、かすれた感触の線がちよいちよい、走って、それでなおさら手触り? 膝触り? が良くて、スポンジ? :? は、クッションはしっとりとしてて、きゅうつと、ゆっくりと受け止める感じで、湿り気のあるスポンジみたいな感じで、そんなのが上品に、詰まっている感じ。そんない座布団に、二人で、置かれて…、やっぱり奈世さんがメインな気がする。最悪。汐見と私を勝手に!、置いて!、それで、自分だけメインな感じで、私たちがおまけで、しかもここ慣れてる気がした。何でよ!

私と汐見の、汐見の場所なのに、慣れて！、奈世さんが慣れてて、なんか勝手に、使つて、店主さん（きれいなおんなのひとつ）と知り合いで、私だけじゃなくて、汐見と！私だけじゃなくて、奈世さんも、店主さんと知り合いだったわ。それで勝手に借りてた。話してて、借りてた。キッチン使つてしつかりと料理をしてる。お料理を、すつごく美味しうにしている。すつごくおいしそうって私の予想だけど、でも！、絶対に、すつごく、美味しいと思うから、何でわたし褒めてるんだろ。奈世さん；、奈世さん、だから。だから？。認めている、けど。汐見は何となく浮き浮きしてるから腹立つ。私は汐見に言った。（さらつと、悪口みたいな。）

「お弁当食べないのに、ご飯はちゃんと食べるわね。」

「食べてるじゃない。いつもよ。素磨子、わたし。」

「いや、いつもってあれ、即答！？あれご飯じゃないわよ！」

「錠剤は、味が落ちないから良いのよ。味が落ちるから、お弁当は嫌なの。素磨子、素磨子は、ちゃんとしたお弁当にするけど、私は、ご飯らしいお弁当にするのは、味がちゃんとしたご飯で食べたいのよ。私は、だからね、お弁当は錠剤が良いの。美味しそうでも、冷めると悲しくなるから。冷めたのは、冷製スープとかが良いわね。冷えたデザートとか、フルーツでも良いわ。」

「え、いいの？」

「良いわよ。氷といつしよに冷やして、冷やして、そういうのは、最初から！、きちんと、冷えてて、そんなデザートなら、とっても美味しいと思うわ。冷製スープは、たまになら美味しいけれど。素磨子は昔あんまりだって言ったけど、私も大体は、あったかいスープが好きなの。私も。本当、私もよ、素磨子。いつもは私も、あったかいスープが良いわね。でも冷たいデザートは、だいぶ経ってからが良いわ。あったかいのは、落ち着いて食べてからなの。あったかいのを、素磨子と食べてからなの。奈世さんは、一緒に食べるのは、三人、ああ、分らないわ。全く分らないわ、素磨子。良いのかも、奈世さんは好きだけど、でもね、素磨子と二人だけでも、良いの。奈世さんともそうしたけど、でも、今は、お弁当。素磨子と、お弁当の話で、そう！、奈世さんとは、食べたことが無いのよ！。お弁当、素磨子はどうかしら。三人。」

と、可愛く聞く感じで、冷静に戻って、汐見は、とんでもないこと、言った。

素磨子はどうかしら？。三人？。

私も、言うべきことを冷静に！、言った。

「汐見ね、ところでデザートだけなら、ダメなの？」（これはちがう。違わないけど、ちがう。）

「デザートは美味しいけど、ご飯とは別なの。ダメよ。ご飯には、錠剤が要と思うわ。」

「じゃあ今度からデザートを付けたら。いいでしょ？、それでね、私にも頂戴。」

「ええ、良いわよ。ああ、それは良いわね！」

「そうね。」と、汐見の笑顔。可愛い。良いわね、って、まったく同感よ、汐見！。でも私は、スープのコトとか、汐見、昔って小1かそこらのことだし、冷製スープも今食べたら美味しいと思うし、嬉しいけど、汐見、覚えてくれてととても！、とっても、嬉しいけど！、汐見！、私はでも言うべきことを言う。デザートのコトは終わった。デザート、終わったわ、汐見、最初に。

最初にデザートだったわ、汐見。

ああ、もう！、ああ！、私は、笑顔で（つくつて）言った。

「奈世さんと先にお弁当食べたら二人で。二人で、奈世さんと汐見で、食べてね。二人でよ、先にしなかったら、ダメなの。奈世さんと、汐見のバンなの。絶対、っ！」

あー、あう。

汐見が分かんなくて泣きそうになってる。
知らない。

これは一体、どうしたことでしょう。

「あの、お茶と、おひたしと茶碗蒸しですよ。」

にっこりと、可愛く言えたと思った。

「ホウレンソウ重い。いらない。」

素磨子さんが言った。

汐見さんが呆然と泣きそうになってて、怒って？、ああ、嬉しいです、けど、冷たくて雪の影みたいで、真っ白な怖いくらいの雲が、雪曇りが、真っ白で綺麗です。

血の気が無くて、無いほどに怒っていますね、怖くて、綺麗で、私は素磨子さんと、嫌です、汐見さんとも、一緒にいたいんです。

居たいより痛いのもかもしれない。そのように私は聞いて、思う。

汐見さん。（素磨子さんに）

「ふざけないで。」

と、言って、ああ汐見さん、やっぱり泣きそうになってて、怒って？、だけど分からなくなってる、もう！汐見さん？、素磨子さんが怒りますよ、（ですから、）それは、私も食べてもらうのは後で好いですから！（♪）、

でも素磨子さんは苛々としているから、（何故か、）だから、直接に（ああもう、素磨子さんは汐見さんに！、）言った。

「はっ」

一言で、返した。どういうことでしょう、これは、何だか（どう見ても！）けんかみた
いです。

汐見さんはまた（言葉の、続きを？）言う。

やめておけばいいのに、と、私は強く思う。強く、とても！、やめてほしいのに、
でもどうしようもないですね、と、はい♪、思います。汐見さんも素磨子さんも、正直で
す。正直さは怖くて、素敵だと思います。綺麗で、

今も汐見さんがこう言うみたいに、強くて！…。

「いらないって何、いらない。そんなこと、いらない！、だから、駄目よ。素磨子は食べ
なさい。やめてよ。素磨子。」

しかし私は、やっぱりつらいです。悲しくてどうしようもないしんどい気持ちになります。
す。つらいです。すごく、悲しいです。ええ！。

素磨子さんは私にも御料理にも構わずに言った。ステーキも焼けてるのに。一緒に持って
きたら良かった。御膳が大きくても構わずに、一緒に、でもどうせまだ、食べてもらえな
い、のに！。

いけない。私も腹が立ってきた、きました。素磨子さんと汐見さんに、ちよつと…だけ！。
ちよつとだけですけど私もかなり怒ってて、怒ってますけど、美味しくて、この料理は美
味しく、素磨子さん、お弁当とか、言いました。

違います。この料理は、出来たてです！。

「冷めてないですよ！？このお料理は、出来たてですよ！茶碗蒸しも、茶碗蒸しはとって
も熱くて、ご飯は少なくとも、お味をそのままいけます！おひたしもお互い、茶碗蒸しと
はつきりしてます、はつきりと、ほうつと消えますからね！どっちから食べても、それぞ
れ交互に、いけます！。ご飯は偶にでも、それが、丁度いい感じです！、とにかく、出来
たてで、ご飯も炊き立てで、ちようど、お昼時で丁度良かったんです！。ここも、私のお
店ですからね！、自信はあります、とても♪。茶碗蒸しもあつあつですよ。美味しいです
♪。だから今、美味しいステーキもあります、焼きましたから、持ってきますからね。美
味しいです。どの味も、はつきりしてますからね。そして、どう食べても、美味しくそれ
ぞれが消えます。残りますけど、お味はまた、美味しいです♪。それぞれが、はつきりと
ほうつとしますよ、美味しさはそのままなんです！でも消えて、ほうつと、美味しさのみ
そのままほうつとしますよ！ご飯もご飯だけ、ほうつと美味しいですよ。でも一緒に食べ
ても、もちろん美味しいです♪、はい、はい、でも、その、こんなに喋ったのは、すご
く、凄く、混乱したからなんです。何でもいいです。美味しいと思います、あ、その、
でもステーキを、でも、じゃなくて！、美味しいです！、自信が、超、ありますからつ、
美味しいステーキ。焼いたのを、今すぐ、急いで、焼いてましたから、時間が、ああもう、
焼き直して一から最高のを、一番美味しい時間で、焼いた、ステーキを、持ってきます。

焼いて、また持ってきます。すみません。西洋料理風になります。持ってきます、順番に、次の、ああ、ステーキを、焼いてきます。最高に美味しく♪、お肉を焼きますからね!」しゃべる途中でお盆を置いたから、二つ、汐見さんと素磨子さんの分を、だから私は安心して襖を閉めた。

しかしまあ、お弁当など!、(素磨子さん!) 言い方に、私が、怒りましたから、とても、強く!、言いました。私が!。私が!、お弁当でしたら、勿論、お弁当が美味しいのを、その料理を作ります!。お弁当のお料理は、冷たくてもそれこそが美味しいものです。

『なんか怒ってるけど、汐見がお弁当の話、したんじゃない。』

私がそう言うと、奈世さんが凄く怒ってお弁当じゃない、って、出た。ステーキを焼き直すから、冷めたの? ケンカによって、悪いから、焼き直してくれるらしい。悪いからって、それは勿論、こっちで、こっちのが汐見と私が、悪くて、ちよつと冷めたくらいでまさか捨てるのかしら、こたつかいトコだし、いい料理屋さんだし、値段も雰囲気もとにかく、お味も、いいから、落ち着くし好い所だから、いいとこ、それなのに料理を! 捨てるなんて、困るわ。悪いから落ち着かなくなる。やだなあ。お箸で最初から、最初のひと品を食べる。重いつて言ったおひたし。恥ずかしい。ちよつと赤くなって、その辺にねっころがりたい。顔が熱くて、赤くなってる気がする。ほうれん草。赤かぶで染めたみたいな、濃い綺麗な緑色。ほうれん草と、の、綺麗なおだし色。涼しくなって、落ち着くその葉っぱを食べた。柔らかいその、この!、美味しい、葉っぱ!。かつおとごぼうっぽい茎っぽいさっぱり感と、ほうれん草、葉っぱのしっとりした味、植物の、ほうれん草の味がする! 葉っぱなのに、茎から全部する! いい! ごぼうがスマートにしゅつとしてお味を、美味しい♪、出して、さっぱりしたカツオ? は、多分、鰹節だから!、さっぱりして♪それだけの、さっぱりした味!。しっとりして、キレがあつて、でも落ち着いて♪、穏やかにまとめた、さっぱりした味! あと、超うすくて落ち着く。薄くて、薄味って凄いわ。濃い味だけじゃないのね。うす味。ステーキがちよつと不安だけど、ちよつとかなり、楽しみ!。

奈世さんのお料理は、しつかりと超うすあじだったわ!。ああ、奈世さんが、さつき、言ってたとうりね!。言ってた、通り。美味しいわ、奈世さん!。

なんとなく素磨子とは別に茶碗蒸しから食べた。素磨子とは、同じのからは、少し食べにくいから。素磨子は美味しそうに食べて、良かったと思った。だったら、私も、御浸しから食べたいけど、だけどそれは許されない気がした。私が。だから今、茶碗蒸しから

開けて、木さじで清涼な白味とお出汁のかかった卵の、透明な薄卵色をすくって、銀杏の実とお出汁と一緒に茶碗蒸しのつるつとしたのを食べた。かつおぶしの薄さで昆布巻を食べて、噛んだらすぐ無くなる味で、しっかりした昆布がたまごのぷるぷるに乗って、消えて、かつおだしが後口にどんどん引いて、銀杏を噛んだらすぐ消えて、出て、銀杏とお出汁と（ぷるぷる）卵と一緒に順序？に規則的にどんどん、つるつると一致してどんどん、食べるわ！。絹みたいなのうっすら昆布巻もあるし、たまにはと気づいて、すぐ消えて、昆布ってハードなのにこんなに、優しくて綺麗。ほっとするお出汁の、昆布の薄絹、月のカーテンみたいな昆布だしだなんて。美味しいから、とっても美味しいわ、奈世さん。だっておいしい味じゃないから、奈世さんの、許さない感じが出るわ。薄味の中に、おいしさをシャット・イン、してるの。奈世さんが、しっかりさっぱり、そうして、だからこんなにも美味しいのよね、きつと！。奈世さんの完璧さが、分かって（美味しくて！）、幸せよ。奈世さん。素磨子も今、きつと。

いいえ、絶対！。美味しすぎるもの。

私も、御浸しを食べるわ。素磨子。奈世さん。素磨子と、一緒にね。

食べたら、お二人とも♪、落ち着いたみたいです。良かった。

「ステーキです。」と、私は、お皿（木の鉄板（木皿に重ねた鉄板）、お盆）を二つ。私の後ろから、いい年しておかっぱ頭の店主が、まあ美人で、化粧前は童顔ですけど、私のお皿（大きな、全部、のお盆）を、その通りに大きな四角いお盆で、長方形の上品な（まあまあ、の）金箔と漆で、白と陶器のサファイアを載せてきます。鉄板以外は白と青系のお皿で、御浸しだけ濃なお茶色の、可愛い陶器です。ちゃんと可愛くて渋いのは、好いですね。私がおかっぱにして、地味な緑の和服で、汐見さんにお茶を立ててあげる感じです。季節は初夏で、木の下、溶け込む感じで…、ひとつ、私が、でもはつきり！、そこに居る感じで、まあそれはもう私は目立ちますからね。髪の毛も、おかっぱにしてもまったく！、私の身体も、顔も、私の線も、まあ綺麗で、溶け込んで無くならない感じで、すうっと浮き出て、汐見さんの御傍に、ひとつ…、ああ素磨子さん、悲しい顔をなさらないで下さい、今は汐見さんとお茶する番、なのです。番茶。さっぱりして、夏にはいいです。でも番茶は、ああ、確かに素磨子さんに合います。汐見さんには、濃い抹茶をさっぱり、こくこく、おかわりなどいくたび、幾度！、注いであげたいです。さっぱりした濃い抹茶もあります。私が、私がするからこそ、こんなにも美味しいのですよ。素磨子さんは抹茶とか苦手そうですね。でも番茶は飲みやすいですよ、とつても！。それにとつても、真夏には美味しいですよ。まあ私の料理は、飲み物も、いつでも美味しい♪、ですから。それこそ初夏でも、真夏でも、何時も♪。今は割烹着で、下には桃色の紬で、桃色でも、桜の木を一つ丸ごと、花をつぶして（つむいで、糸に）染め上げたこいもいろいろで、やわらかくてどぎつ

い色味です。白の割烹着の下でも、目立ちます。この色。桜重ねの、桃色。綺麗です。とても、とても、そう、汐見さんと、素磨子さんと、御一緒に居られますように！。

料理の準備が（おやつ以外）終わると、素磨子さんが楽しみそうに、嬉しいです♪、言ってくれた。

「ありがと、美味しそう。奈世さん、そんなに食べるの？」

「はい、食べますよ。妖怪ですから、いえ、いいえ！。私ですから、素磨子さんと、汐見さんと同じくらいには。」

「あ、そうなの。無理してない？それとも、妖怪ってそんないっぱい食べるの？」

私は、ちよつとだけ腹が立ってきた。むっとして言った。（言い直したのに、と、言った。）

「違います。妖怪じゃないです、あ、いえそうですけど、妖怪とか話じゃないです。この話じゃ、ちよつと、その話じゃないです。全部！、違います！。妖怪ですけど、違くて、私は、奈世ですから。素磨子さんと汐見さん風に言うとな世さん、ですから。だから御一緒できるし、御一緒したいのです。ついでに言うと、無理もしてないです。全然。」

そう言うとな（多分、そこまで言うとな）、素磨子さんはふにゃつとして力を抜いた。可愛い子猫みたいに笑う。子猫より、可愛い。素磨子さん！。…と、言った。何て言ったの、でしょう？。聞いてなかった。音の時間を探して、素磨子さんを見つけた。ずるいけど、私が聞きたいからです！。素磨子さん、ごめんなさい。素磨子さんは、確かにこう言っていた。可愛い、と私は思った。声も♪。

「あ、無理してない？そうなの？」

そして私は、素磨子さんが、優しい、と思う。

無理してない方が、重要なんですな。

心で。心から、ああ、素磨子さん♪。

落ち着いてきて、周りを見る余裕が出てくる。汐見は今日、薄緑の桃っぽい色合いのコート（トレンチコート、大人っぽい可愛い感じの。桃色？っぽい、薄緑の柔らかな、さらさらの柔らかい生地。薄手。でも柔らかい生地で、さらさらの布。）で、下になんかかっこいいワンピースを着ている、黒の、白い線がナナメにかっこよく走って、スタイリッシュ？な、すらつとしたきつくないやつ、ワンピースがふわつと着れるやつを着て、すらつとした見た目で、でも、程よく着れてる。上品でも、苦しくなさそうで、良い。デザインはすごいハイカラ？な感じで、モデルさん御用達みたいな感じで、でも着心地がすらつと・ゆったりしてて好い！、私は、汐見がコートを脱いでるから気付いた。気付いたけど、ゆったりしててもラインが出てて、体のラインが、汐見のボディー、が、素敵。すらつと空気のある長袖着てても、筋肉の（腕の、肩までの肩からの身体の！）流れがはっきり分

かるし、胸とか、やっぱりずっと仕舞ってて、スマートなおっきい感じがして可愛い。とかえろい。とても、すごく魅力的!!えろい、よ。白いラインが、ナナメに、情熱的で、なんだかシンプルな、上品なデザイン?なのに、黒いワンピースの着心地が良さそうな、すらっ、スマートなすんなり着れる感じの黒、綺麗で上品な単純な黒いワンピースに白いシマウマの、にしては、少ないラインが、ちょっとだけ、しっかりはつきり走って、さらさらッと、白い線がさらっと、それだけでハイカラな感じになってて、必要十分なスタイルッシュな感じで、コートを着てても、脱いでもワンポイント!、合ってて、シゲキ的で汐見がエロティックに見えちゃう、でも私は、とっても好きだし、好きよ、汐見も、汐見のセンスも全部!...、全部!。全部、一方、私はなんだかのっぼさんみたいなコーデ?で、デニムジャケットの下に紺の薄手、スウェットと、薄くてもスウェットはスウェットでしかないし、でもとにかく、スカートは水色のほっそい縦しまのロングスカートで、水色とホワイトのカシヤカシヤしたロングスカート。電波の流れみたいな、感じの、硬めの生地でカシヤカシヤしたさわりの、感じの...、お店的にも、着てくるのを間違えた気がする。まあ、私も(汐見と)よく来てるから、いいと思うけど...、とにかく、デニムジャケットはとっさに、着てきちやったのよね...、ああ、汐見の大人っぽい、可愛い感じの、そう、ミントグリーン!あの色、ミント・グリーンね!トレンチコートが、汐見に合ってて、良いわね!私も合ってるけど。あるイミ。嫌だ。今はジャケットを脱いでるけど、汐見と一緒に、いちまい?、上着だけにして、でもそれで、それで、言われるのは、嫌よ!。

「素磨子、腕を、そこ。」

「え?」...、と、私は自動的(たぶん)、に、こたえた。ほら言われたわ、と、今気づいて思った。

「腕を少しまくるのは、合っていないわ。スカート。」

そうね。私もそう思う。だからすぐく、イラついた。

でも汐見も落ち着いてきたのね、と思った、思っ、嬉しくなったのが、ああ、もう!。

私は早口で言った。いらついている状態の、ままよ!。

「食べる時ぐらいスキに食べさせてくれない?。」

と、私は、言った。言ってしまったとも思うわ。ああ、もう。

奈世さんが、汐見の横から言った。

「いえ、汐見さん、無理せずに食べて下さい。」と、言ったのは、汐見にたぶん、で、無理せずにつて、私に言ってくれた気がする。何で奈世さんが、汐見に注意したんだろう。

「あの、奈世さんが無理してない?あ、また言ったけど私は、いま、も?、無理してないけど。」

「はい、それで好いです。」

と、奈世さんは笑ってくれる。(とても好きって言われた。)自意識カジョウな気がする

けど、たぶん、奈世さんも3人が好いんだと思う。

「ありがとう。汐見に皮肉言わないで。」でも私は、ちょっと嫌だから言った。ありがたいも、そのあと本当だった。言ってから後悔したけど、言うわ。多分何度も同じこと同じ場所で、言う…、けど、私が二人とも大好きなのもついでにそう次いで、そう、奈世さんが汐見の次なのも、本当。でも奈世さんも大好きなのよ。本当！。だから、

「あ、ごめん。」と、私は、（いま）言った。「ステーキ、いま頂くわ。美味しそうで、ステーキよ、もちろん、もちろん！、奈世さんも好きよ。ステーキよりずっと好きっ、だからっ！、もち、比べたのはステーキじゃないわ。もちろん。汐見と奈世さんが汐見の次に好きなの。つまり奈世さんも、汐見とすごく、好き。汐見も奈世さんが好きだし、私も、汐見が奈世さんを好きなくらいじゃないけど、私も。ああ、ステーキ頂くわ。美味しそう。いただきます」

っ、と、私は、ステーキを切って、食べた。

あ、いつもよりおいしい。美味しい。…おいしい！。ちょっとこれ、美味しい！。いつも美味しいお肉が、もっともっと味、噛み心地も全部、もっと美味しくなってもう最初から最高だったのに、奈世さんがする前から、料理する前から料理が、小っちゃい頃から最初食べたときからずっともう、最高、ステーキの噛み心地も味も、最高で、おいしかったのに、もっともっと、もーっとおいしく、なってる！お肉の味が、醤油味？お野菜とかにんにく？しょうが？ソースから、じんわり、じんわり、お肉がしゃしゃき、するの！お肉の噛み心地が、じんわり、しゃしゃき、もぐッ、って！！もぐもぐ、噛めるの！美味しいの！しゃしゃき！醤油のお野菜（たぶん）ソースで、…お出汁？（和風の、だし風？）知らないけど（もう全く分かんないけどおいしい）、薄味ソースも、美味しい！。凄く、おいしくて、お肉が味はつきりするの！美味しいのが、もっともっと美味しくなってく！、ああ、美味しいっ！！。お肉とお肉が、美味しい！、味とソースとやっぱり味と、噛むのと、噛み心地とじんわりしゃしゃきの味と、やっぱり噛み心地？両方っ！、全部、全部が、全部で、美味しいの！！、もう、奈世さんの焼いたステーキ、最高よ！！、美味しいから、最高っ！！、ああ！、最高！！

美味しかった。一口め、だけど、お肉をかみ砕いて、食べてから、すぐ、言った。

「奈世さん、美味しい。奈世さんの焼いたステーキ、とっても、美味しいわ、奈世さん！」

汐見も、美味しそうに（ほんわかして、笑顔で！）、すぐに、言った（『言ってくれた、汐見が、超可愛いし、奈世さんよくやってくれたわ、本当！！』）。

「ええ、美味しいわ。素磨子に言われたけど、凄く美味しいわ、奈世さん。素磨子。」

「え？なに」

「素磨子は、私の気持ちでも、いい？」

「いいわよ。もちろん、好きよ、汐見。」と、言いながら私は、考えていて、汐見がさみし

かったんじゃないか、って、はつきり。はつきり！、そう、素磨子に言われたけど、って、言ってた！。

汐見が言った。つらいのは良くないと思った。

「ありがとう。嬉しいわ、素磨子」

「汐見、泣きそう？」

「いいえ、それは多分、心配し過ぎよ。今はね、美味しくて楽しくて、嬉しいの。私も、きつと素磨子も、そうだと思うから。素磨子。奈世さんも、一緒。お料理の、ご飯の感想はね、今、凄く美味しい、奈世さんの御膳よ、だから、私は今、素磨子が一緒なら、いいの。素磨子は、今、奈世さんのお料理で私と、確かに、きつと一緒だから。素磨子。奈世さんのお料理は、素敵ね。美味しくて、素敵。素磨子。今は、気持ちが一緒かしら。素磨子。」

「もう言ったけど、一緒よ。」

「嬉しい。泣きそう。」

「その前に食べましょ、汐見。それでね、美味しくて美味しくて、泣きましょ。折角のお料理と、ステーキが美味しい内に、よ♪。」

「素磨子。」

「何？」

「素磨子はたまに、すぐく頭が良いわね。」

たまに、は余計だと私は思った。笑った。面白くて、楽しい気持ちよ！。

「そう？、ありがと。」と、私はステーキを食べた。美味しい。やっぱり美味しい。（美味しい：！。）

汐見も、「ええ。」と、微笑んでステーキを食べた。

美味しそうに、いい笑顔で食べる。ほんと、美味しそうね。すぐ美味しいステーキ。

奈世さんの焼いた、すぐく美味しい、ステーキ！。美味しいって、私にも分かってるものね。汐見。私も。汐見も。今、食べてるから♪。

奈世さんも美味しそうに食べてる。上品に、手を止めずに：よね、あれもう、ほぼ全部？、食べ終わってる、から。

：おかわりとかするのかしら、奈世さん。

私と素磨子は、ステーキを美味しく食べた。（食べ終わった。食べ終わってしまった。）奈世さんは嬉しそうに（美味しそうに）黙々と食べて、同じとき、に、気を使ってくれたの？、私たちとそう同じときに、寒天まで（甘い蜜柑を添えた、柚子色の寒天。蜜柑は甘くて、柚子は苦そうな気がする。美味しそうだけど、もうちょっと食べていたい。）食べ終

わってから、小さく、ことばを始めた。

「あと、牛肉の冷しやぶが」「牛肉の冷しやぶ？食べたわい。」「私ではなくて、素磨子と言ったのだった。私もそう思ったけど、先に。」

私は、素磨子と奈世さんに言った。

「やっぱりそう思うわね、素磨子。嬉しいわ。私も、それが、食べたいわ。」「わかる。ちょっと足りない気がして、ほら。」

奈世さんが心得たように、くすくすと笑った。可愛くて、美しくてどきどきしてくる。月の光で花が咲くように、しずしず、上品にくすくすと可愛くて、奈世さん、私は奈世さんの表情も、好き。お料理も好き。奈世さんの全部と、私、素磨子も、全部が全部、好き！。私自身も、自信があるけれど。（好き。でもやっぱり、二人が可愛いと思う。）

そして聞こえたのは、奈世さんはこう言っていた。

「冷しやぶ風、ですけど、さっきの。ステーキを変えて、浅漬け：マリネにして、冷しやぶ風に。タレで柔らかく漬けて煮る感じ、です。煮込みじゃないけど、煮込み並みに柔らかいと思つて。素磨子さんは残すのとか、勿体無いのは、嫌だと聞いて、それでちょっと、美味しく仕上げてみました。ですから、はい♪、いま、持ってきますね。」

奈世さんは、音も無く（Ⅱてきぱきと）立ち上がって去った。

奈世さんが厨房に去ってから、間もなく、素磨子が話した。話す前に、ちょっとだけ言葉に詰まつて？、なんとなく困つたように、小声で？普通のことを言う。

「あ、ステーキ、400かしらね。さっきの。」違うと分かつて、素磨子は聞いている、声。

私は、特に普通に答えた。（最後に、素磨子の話し方を訊いた。）

「そうね、今日は500グラムだったわ。いつもより100グラム、おかわりしなくても、多めに切つていてくれたわ。素磨子は、今何か困っているの？」

「え？いや、食べたりない位で、特には。」

「そうなの？いえ、さっき、話し方がおかしい気がしたわ。あつ、だからあの、おかしいとは悪い意味じゃないわ。普通じゃないのよ。素磨子が、普通じゃない話し方をしたの。話題が、特に普通なのに、ステーキを小声で、困った感じで言うの。いえ、言ったの。さっきも、今とその、近い時間だから。私は超記憶力が良いのよ、だからこれは、素磨子が昔言った言葉ね。私を褒めてくれたとき、昔、割としば言われていたわ。嬉しい。でも今も、ものすごく記憶力は良いのよ。私は全部頭が良いから。全部よ。奈世さんのステーキも全部美味しかったから、困ってるのは失礼だし、私こそ、困惑してしまうわ！、いえ、だから、奈世さんのステーキが、凄く、凄く美味しいの。それで食べたくなかったのも、確かにあると思うわ。いつも500より多めに食べるものもあるけど、500では足りないというより、量より、質なの。奈世さんのステーキが、さっぱりしかりして、はっ

きり、はつきりとお肉を食べてるステーキの味覚で、味がしっかりした歯応えのあるステーキ肉で、しゃき、しゃきつと、ぎゅつと噛めて、美味しい♪。お肉のソースが、味が全部はつきりするわね。さっぱりして、ステーキの全体、お肉も、ソースも、香辛料一粒一粒、お出汁のお野菜の実まで、はつきりつ、しかもそこからお肉にはつきりするのよ！、お肉の味が、より美味しくなるの。ステーキを食べられるのよ。凄く！。ソースって、お出汁って素晴らしいと思うわ。それが今日、とても！、理解ができたわ！。奈世さん。ええ、奈世さんのおかげで、美味しくて、奈世さんは、料理が、とても上手いわ！。このお店より上手なもの。すごい。このお店はステーキで二番目になったわ。奈世さんは本当に料理が上手ね。素磨子。でもどうして困っていたの？、たぶん、間違はなく、お料理が原因ではないでしょう、失礼なのは私の方ね。素磨子、お料理にも、奈世さんにも素磨子にも、失礼で、発想がとても、失礼なことをしたわ。素磨子、どうかごめんなさいね。」

素磨子は困ったように笑って（素磨子は分かっている気がする。困っても、今は安心してのように笑って、私の言葉こそ、素磨子を困らせて、でも、同時に、安心してくれているみたい。嬉しい。↑それは、昔のことね。↓怖い。）、笑っていたけど、私がごめん、と言って、素磨子は固まったみたいに怒った。素磨子は真剣な、鋭い口調で言った。素磨子の声は、今はカタナみたいね。綺麗な刀を、弾いたような声。重くてつよい、綺麗な刀だわ。

素磨子は、私に強く（！）言った。

「汐見。私、そんなこと言わないわ。ごめんと、謝らせるつもりもないの。汐見は、本当に心配し過ぎよ。謝ることも、謝らせることもない、から。私は失礼なんて思わないし、私、汐見がごめんって言う方が、よっぽどキライよ。また言わせたわね。汐見。もう言いたく、なかったんだけど、奈世さん、奈世さん！。奈世さんも、そう思うでしょ？、あ、ついでに私ね、汐見を悲しませること、しないわ。失礼なんて、私もするわけがないのよ。と、で、奈世さん。そう思うでしょ、さっきの♪。」

奈世さんが答えた。冷しゃぶ風の大きなお皿を、置いて、それから、元気よく可愛く♪、言った。素磨子も急に（怒っていたのに、急に）凄く可愛かった。奈世さんも、今、凄く可愛い笑顔よ。声よ。二人とも、可愛い！。

「はい、もちろんです！」と、奈世さんは言った。可愛い。

素磨子は、素磨子も元気一杯に答える。

「そうでしょ！。あ、それと、困ってるって言ったのは…、汐見が、あの、困ってるって、言っただけ、あれは本当はね、恥ずかしかったの。ちよつと、ね、今日はまあ、奈世さんが居るから。居たから。さっきまで、食べてるときよ？、だからお料理中、じゃなくて持ってくる？トキに、居ない時見計らって、食べ物ね、言ったの。足りないとか、おかわりとか、ちよつとだけ、恥ずかしかったし…っ、だからまあ、奈世さんは気にしないって！、気にしないって、そんなのは分かっているんだけど、ね！、でも私、ちよつとだけ恥ずかし

かった、の！」

「気にしませんけどしらないですけど私は素磨子さんがとっても超かわいいです！」

「え！？あ、はい！どうもありがとう！、ありがと、えっ、あの、とても恥ずいです。」

「素磨子さん、ふふっ、はい♪。」と、二人の早口が終わって、奈世さんは素磨子に肉を差し出した。お箸で、綺麗に、タレをまとい。そして

「冷しゃぶをどうぞ。」と、奈世さんは言った。

「あ、はい。」と素磨子はまた答えて私はとても奈世さんが羨ましく 私ができないことをしている。素磨子は昔、恥ずかしいと言ったわ。私が8歳の時にあーん、と、そのシチュエーションに、素敵だと懂れて素磨子にしたのに、素磨子はその時もう恥ずかしいと言った。6歳の時、食べさせてあげることを知ってから素磨子の食べる姿も表情も美味しそうで素磨子自身もとてもおいしそうで私は可愛い！、と、思っ！、いつも夕食のときには一回はあーんとすると決めていてそうして実行して（実現していたのに！）感動していても素磨子は8歳の時にああああああ、ああああああああ！！！！

素磨子、

ああ、素磨子の、気持ちが！、分かった気が、いま！！。

「素磨子ずるいわ！奈世さんがとつてもずるいわ！！！」

私は叫んでいた。素磨子は叫ばなかった。

ずっと。素磨子は、ああ！、我慢していたのね！

また、私は、素磨子の羨ましい、私と奈世さんとの（対する）気持ちを、ずるいという気持ちをようやく分かった。

さっきと合わせて、も？、まだやっ！、二回きり、だった。

私は嬉しいのか、今このとき言われても、もう、とか、もういいしそんなの、こっちは方だけど、汐見、嬉しいけど、私のあのときと一緒に、だけど汐見、私はもう、奈世さんも可愛いし、汐見も可愛いし、ずるいとか言われても困るわ。嬉しいけど、それはそれで、困る。冗談で済ませようとか、それね！、もう、それしかない、って、思うの！、私！、汐見！、私は、汐見に、えっと、とりあえず正直なキオクを言った。

「汐見、そんなこと無いのよ。だって、私は汐見に、怒ること、ないもの。なんだかんだで、汐見が好きだし、私、汐見が大切な気持ちは、いつのときでも、あるのよ。ずるいって思ったけど、もういいの。私は。もういいって、そのうち、そうなってくるから。今幸せだし、私ね、奈世さんのごはん、美味しいし。だいいち、汐見ってきついあの、冗談とか言うでしょ？、死にたいの素磨子とか、殺すわよ素磨子とか、そんなのでも冗談って分かるし、本気かもしれないけど、私、ずっと怒るとかむかつくとか無いし、ね、それに私

も、汐見にだって、殺されたりしないし。汐見と面白い、楽しい毎日があるから、そんなの絶対、殺されたりしないわ、私！。今はしかもね、しかもつ、奈世さんまで居るでしょ？、もつと楽しいわ。もつともつと、これって、もつと楽しいって、汐見が言ったことでしょ！。確かに、たぶん、汐見が言ったことだし、私もこれ、ジョウダン抜きに、思うわ！、信じて、て！、楽しいって思うの。私、ね。私のことだけど、今は、言ったのって、でも私は、汐見もそう思ってくれたら、今じゃなくて、今でもいいけどいつかね、いつか、汐見もそう思ってくれたら、汐見、楽しいと思うわ！。凄く、ね♪。」

すると奈世さんが、先に言った。汐見はゆるやかになった。ぽーっとして、聞いていた。今も奈世さんの言葉を（私の、終わったから、たぶん、奈世さんの言葉を、）聞いてくれている。奈世さんがずるいというのは、確かに少し思った。でも二人とも優しいし、（優しいような気持ち、表情だし、）それこそが最高に良いかもって思った。良い（かも）って、思った。良いと思った。凄く。

「はい、冷しゃぶも美味しいですよ。」

と、相変わらず、奈世さんは言ってた。（確かに。（同意するわよ。）料理に自信があるのね。確かに。私も美味しいと思うわ。するい、と、思うのはいけないと感じて、分かっているのは、奈世さんが努力して才能とかもあるから、美味しいと思う。凄くがんばってくれたし、それで、美味しいと思う。奈世さんは微笑んで言ってる。可愛い。ずるい。勝てない。私、料理そんな上手くない。奈世さんは可愛い。微笑んで、緩やかに、穏やかに（我慢して）ジシンありきで、言ってる。当然のことなのに、私は凄く、凄く、性格が悪い、って、思った。奈世さんはここのお店の人の（おかつぱボブの、きれいな（最初に来た、昔からずっときれいな）お姉さんの）知り合いで上司さんらしいし、雰囲気の上に居るお姫さまって感じで、店主さんのさらにトップに立つ人。人じゃないけど。今、確信できた。料理で凄くえらい人。奈世さん。私の性格からあたまを外してくれる。考えが奈世さんに行く。そうして欲しいと思う。許してほしいわ。私が、考えたくない。奈世さんを、勝手に、自己中に、優しい、と、私は思った。私自身は、考えたくないし。奈世さんは料理が上手い。美味しい、冷しゃぶ（ステーキ風？冷しゃぶ風ステーキ？、美味しい）。それだけ。奈世さんは頑張ってるのに私は、何でもないけど、奈世さんは、奈世さんは秋の夜風みたいに、ちよつと雨上がりで、しっとりして綺麗。そんなさアとした、聞き心地の最高な声ね。涼しさのしっとりした、夜風…、さあーっと、奈世さんの声が聞こえる。

「…ありあわせで、さっきのステーキをし直したのですけど。素磨子さんは、特に、ご飯を残すなどは、お嫌いだと聞きました。汐見さんを、幼き日に怒られたとか。これはまあ、先ほど聞き質したもので、作り直すとき、横合いからちよつと笑ってて…、あの店主が、ま、ちよつと、かわいかったですけど、でも何となく知らないこと知ってる、気がして、それで教えないと、いま考えて知っていることを、そんな素敵なことは、だって、タイ

ミングからして、汐見さんと素磨子さんに決まってッ、決まっていますからっ！、失礼。ちよつと店主のあれが、記憶？が、ずるいとか思つて、それで私も教えさせた、ものですよ。14回来たときに、甘味を二人で、食後に、食べた後のデザートに餡蜜パツフェを頼んで、その時に汐見さんかもしパツフェが多すぎたら、と、素磨子さん的には失言のことを話して、それで結論は、食べられるからいま、注文してください、最初からそんなことしなければいいと、そんなこんなを素磨子さんが店主さんに話して、お話ししたのは幼き素磨子さんですから、私は素磨子さんが素晴らしく可愛らしい小さな、ああずるい、小さな、可愛らしい六さいごろに、お話しして、また、お話しして欲しかったのですけど！！、あの店主は！、あの店主だけ、何故かあの店主がお二人に揃つてお話ししてああもう！、私を、私を差し置いて本当っ、本当にあいつは、失礼、あいつ、ああ失礼、あのおんな、女店主、そう、が、石ころの分際で調子に乗っちゃっていまして、それはもう楽しそうにそうでしょうね！、失礼、とても、楽しくッ、この私に語ってくれまして、…まして、最終的に麵棒であたまをコチンと、ちよつと割れましたが妖怪ですからね、彼女も、だから直ぐ治つたので割れたけど心配とか…、しかしッ、もつとよく割つておくべきでしたね。憎たらしいです。大変憎たらしいです。でも、…ああ、はいッ、感謝をするべきところは、幼き日の素磨子さんは、いえ、幼き日も、素晴らしく可愛くつて、可愛くて♪、賢い、良い子ですね、汐見さん♪。汐見さん、貴女も素直で、賢くて、理屈も情も、温かい氷のネックレスみたい、です。ぼやんとヒーターになります。涼しくも、氷に、その時はそのまま、いえ、もつともつと丁度いい完璧な冷たさで、最高に、涼しくて落ち着く心の綺麗な方です。汐見さんは泣いていたのですね。素磨子さんは、少しばかり言い過ぎたと思います。私はでも、素磨子さんも、嬉しかったです。料理を作るひとですから、ですけど！、食べきれなかったら、いつでも、どこまでも残してくださいでも、いいです。私はこう見えて、結構より食べられますから♪。それはもう、かなり以上に、ご飯を大盛りで食べます。安心して下さいね♪。」

…とつ、ええ、そうね、安心と言うか、奈世さん、したけど、安心も、確かに（しかもある意味凄く！。）安心したわ。安心、と、それと、時たまに奈世さんの、秋の夜みたいに深く、夜のしずくがとぷんと低めの中に、透き通つて落ちてくる 落ちていける！、綺麗なアルト（ソプラノより、スツと低い）が、きらきら光つて輝いて怒り狂うのも、綺麗で、夜のババロアに宝石（ミキサーした、星？）をスミージーしてみたくなった。違ったトッピングだ。たぶん。

汐見を、（汐見の顔を）見る。案の定恥ずかしがつてた。可愛い。熱い水晶みたいに凍つて真っ赤になつて。無表情。可愛い。恥ずかしがつて。可愛い。

厚切りのままの（美味しくて、（厚切り♪）嬉しい♪）冷しゃぶステーキは、だいたい六時間したシチューのお肉みたいに、叩いて？柔らかくして、美味しい。一割位がミン

チ肉みたいな、タタキ？で、良く焼かれてるのに、柔らかく叩いてくれる。多分、叩きだと思うけど、なんだろう、ハンバーグ・ステーキそのものみたいな感じで、ハンバーグが一割でもハンバーグの食べやすい感じで、ほろっと、ぎゅうっと、柔らかく確かに！、しつかりと、かみ砕けて食べられる感じで、ステーキなのにハンバーグの味(?)も、する。しかも冷たくてぎゅっとしてさっぱりしてて、それでもステーキ・ハンバーグって、もうずるくらい美味しい！から、美味しい♪。(厚切り肉にダシ汁(冷しゃぶ)が絡んで、美味しい♪)柔らかいお肉も、こういうのは、大好きよ(奈世さん!)。今日初めてこんなの(ステーキの、冷しゃぶ?)食べたけど、大好き♪

自由に食べてて、「美味しい。」(美味しい♪)と言うと、奈世さんは月が真珠の(ばあつと)咲くように笑った。汐見も水晶のケーキが(凍りの、オーブンで。)仕上がるみたいにきらきらして、凍り付いてほんわりと、ふんわり、奈世さんに(奈世さんと、)(お互いに?)見とれていた。そう思う。私も見とれてたから、二人に、だから、二人はお互いに、お互い、見とれて可愛い、きれい、って見合ってた…、絶対、気がする、思うし、絶対そう思う、から。

うらやましくない。見たから。

羨ましい。凄く、二人が！。

私も今夜その中そのカンケーに、いっしょ！、こんなさみしいから、違うって分かっているのに、本当はさみしくもないのに、私たちはセックス(Ⅱ3P)させてもらうのよ。させて、もらう、私が、私が見たいからする。迷惑だったら止めよう。そうしよう、私から、言って、そんな時もどっちにしても、私は、二人に迷惑じゃ無かったら、いいな。そんなことは無いって、汐見も、奈世さんも、知ってるけど、私も！、私も！、知ってるけど、だから私もその中に一緒に居たいの！。

3Pと、それから先も、ずっと、私も三人で、あ、急にイラッとしてきた。

私こそ、三人で当然なのに、この場合気遣うのは奈世さんの方からこそ、でしょ。奈世さんは料理を作るべきよ。美味しいし。冷しゃぶ。お肉、ステーキ、お野菜で玉ねぎ、お肉を挟んで、タレと、さっぱりして…、タレの質感からもう、さらびやして自然に付けすぎとか無くて、ぽたぽた、さらさらのタレから、お肉とお野菜玉ねぎ、美味しい、ああお肉が、ステーキ・ハンバーグ風やつぱりしつかり！ステーキ！、ぎゅっしりと、ほろほろ、柔らかくもぎゅっしり、しつかり！ステーキの、冷しゃぶ！玉ねぎもタレ(醤油風おだし、山のお野菜？風味(ごぼうしか分かんないけど))と、シャキシャキして美味しい！。私には作れない。美味しい。美味しいっ、だから、けど、まあ、だから！、私から奈世さんを(汐見と奈世さんを。二人とも、可愛いし、綺麗だし…、ああ、もう、うらやましいに違いない。)気遣ってあげましょう。3Pも。その時も。とりあえず、楽しみね♪。

楽しみね、汐見♪。

奈世さんと、素磨子のリクエストで（奈世さんからの発言だった、素磨子も、私も賛成（して）。）、プールサイドに布団を敷いている。柔らかいアクアビニールのマット。最上級の、柔らかいひんやりした（しかし、寒くはない）ウオーター・ベッド。マットは薄くても、その分（その上で）動きやすくて、しかも十二分、十四分に柔らかい、ぷかぷかしたぽよぽよのウオーター・ベッドが、今敷いた、5メートル四方の水色（やさしいアクア・ブルーの）ビニールマット。柔らかいゼリーの入った（無味無色だけど、一応食べられる（お肌にも、塗っても食べても良い）ゼリー）。だから、内も外もしっとりした肌触りのゼリー、いえ、それと、外側は同じくビニール、しっとりしたアクア・ビニールが外側、同じく、特製さらさらゼリーが内側。別素材だけど、しっとり感が柔らかさと、ダブル！。…ダブル。二重の、気持ちが良いベッドよ。マットだけど、最上級だから…。思うだけでも、自慢はちょっと恥ずかしい。私が凄いののは分かっているものね。そろそろ、ちょうど今くらいの間に、奈世さんと素磨子が、ガラス戸を開けて来る。

一分後か二分後くらい、あと。良い…。あと、秒、ええ！。

奈世さんの髪の毛は私にくれた水着の、こっちの黒い水着の、黒い髪、水着に変えて、着せてくれた（すぱーっと、巻いてくれた？）。しっとりした艶のあるさらさらになって、腰をちよっと回すと、生地を捻るとそこも、そこから？いえ、全身（というより、全体、肩口の紐パーツから、腰回り、背中もあんまり開けずに、髪の毛で抱きしめるみたいに薄く、X字の紐パーツの合間に薄く、ダークシャドウの灰色（Ⅱブラック）の影が、薄いつるつるのバリアに、X字の紐のあいだ（合間）の生地に、脇腹の筋肉に沿うようにも三本、同じ灰色がかった黒の、影の、細長い三角形の薄生地が、背中の膜から、伸びて、三本の両側、さゆうの、わきばらっ、筋肉を爪で抱きしめるみたいに優しく、鋭く、キュキュッて伸びて、脇腹を（筋肉を）抱きしめてきている。背筋に（はいきん、から）ぴっちり沿って、そこから、X字の紐も、割ときつめに締めて、ずれそうにないのは助かるけれど…、

胸が少々きついのと、あと、意外？にも、腰回りをフツーに見せてるのが、意外。太もも筋肉も、抱きしめるでもなくフツーで、ワンピースの競泳水着、ちよつとハイレグ。みたいな。キュツとする。サラサラで、さらさらでつやつやで、キュツと。…艶々。腰を回すと、今、キュツとして、そんな音が音、聞こえないけど、音が、感じがキュツ、て、晴れやかに、しっとりした艶々感が、夜でもさらさらの夜だし、晴れやかに静かにはしゃぐの。肌触りも、全身キュツて、さらさら…、もうすでに、巻かれた時から、さらさら。キュツて、さらさらと艶々の髪が、すでに、素手で、奈世さんの素手でも、髪でも。不完全に、完全に全体的で、全身じゃないけど全体、水着の部分（奈世さんの髪の毛抱き）は、もう完全に気持ちの良いカンジになってる！。なってる。奈世さんを、好きに。感触が今も、腰を回して、そう、これっ！。）キュツ♪、とする！。良い♪とても、好き！。

「奈世さん、これ、汐見にも着せてあげるの？」と、私は気になってしてあげたらいいと、奈世さんに、ちよつと聞いた、今、とか、奈世さんははつきり返した。いい、と。（はつきり返してくれた。嬉しい。）

「はい、もちろんです。」と、奈世さんは言った。

「奈世さんは着ないの？良いのに。好きなのに、これ。」

「自分自身でも楽しくないので。あ、いえ、自分には、楽しくないので、あんまり。自分で自分を巻いても、着ても、この場合は、着てもそんなに、綺麗だと思いますが、はつきり！、その自信はあるのですが、わたし、私はやつぱり、汐見さんと、素磨子さんを、はつきりと巻いてみたいので。何でしょう。はつきりと、とは、はつきりと好きだということです。好きだという、ああ、もう！、素磨子さんには、もう叶いましたね！今、さつき、もう！。あとは汐見さんですああ、本当に、素磨子さん、汐見さんも、素磨子さん、私はもう本当に、本当に幸せなんです、私は、この上もう、もうっ！、汐見さん、汐見さん、汐見さんッ！」

髪の毛がきゅーって伸びて、奈世さん、自分自身を（きれいな桜色の（と、真っ白なライン（背中に（背中から、お腰まですらーつと、）花びらの羽みたい、白いの♪）の）可愛い♪、きれいな桜の、白い花びら二まいの（舞いの？、羽の）、ワンピース水着を）自分で抱きしめちゃって、それはもう綺麗な恐ろしいロングヘアで、奈世さんが大変なことになってる。

髪の毛がきゅーって伸びて、奈世さん。

「ちよ、奈世さん、髪の毛、髪伸びてるから髪の毛、すごく、綺麗に恐ろしく伸びちゃってるから、いや怖くないけど、綺麗で、恐ろしいほどきれいで、でも恐ろしく伸びてて、自分で抱きしめてるのが、心配…、じゃ、ないけど、心配？、と、いうか、だいじよぶ？、大丈夫、奈世さん。可愛い水着なのに、綺麗な髪の毛で、見えない。いいけど、でもその、これからこれからののに、そんな興奮しちゃって…、興奮よね？。わくわくよね、それ！。

あごめん、私も、私も楽しいけど。凄く。そんなだし。奈世さんがそんなだし、私も、なんか。なんかね、楽しいけど凄く！、凄く。ッ、あつ、ちよつと！、ちよつと、もう。」

もう！と、叫びたい気持ちと、もういいけど♪みたいな、ヨロコビの気持ちと、文句も言いたいけど、でもね♪、あ、でも…、ダメだと思うの。今は。汐見が居ないから。今は！。

（大型犬の、清潔な、可愛い、髪の毛みたい。綺麗に、綺麗で、じゃれついてきて、綺麗つやつやした、さらさらした髪の毛が、いっぱい、いっぱい…。）

腰の下まで（わたしの、）いっぱいさらさらしてきて、さわってじゃれついてきて、巻いて、くるくるとしゅりつ、と、つやつやした硬めのしなやかさ、が、意識飛びそうなほど気持ち良くて、いっぱい！。さらさら。さらさらしてきて、さわさわ、柔らかい巻き方と、触り方、巻き方、硬めの綺麗な髪の毛、つやつと、すらつと、すらすらつと、いっぱい、巻いてきて、胸の中間下から、中途半端なブラジャーみたいにそこからすらすらさらさら、腰の下、まで！、ああもう、太腿まで（そうよね！）。

ひっそりとした（落ち着いたのかしら、）黒髪のささやき声が、静かに、さらさらサワリ、と、トまって、奈世さんの（同じ♪）ささやき声が、した。（聞こえた！。）

「かたちが。わかります。」

「えっち。」

と、私は言った。小さな声で…、小さな、声、だった。ちよつと大きく私は言う、言った、はい。

「駄目よ、奈世さん、汐見が居ないから、ダメ。」

「そうですね。可愛いから、分かります。」

（離してくれない。）、ちよ、すぐ言って、奈世さんは離してくれないけど、私は何となく、でも、一緒に行くのだと分かる。離してくれなくても、仮に？、離しても、一緒に。

汐見。待っている所へ、一緒に。…でも一言だけ、奈世さんに言った。

「奈世さん、私が可愛いって、何が？」

「ダメという言い方が、分かるけど可愛くて、可愛いです。えっちに締め付けたくなります。いじわるで、そう、いじわるが凄く、とても、したくなるのです。」

「どっちがいじわるなの？」

「素磨子さんも、私も、いじわるですよ。させてくれないから、とってもいじわる、です。」

「ごめん。」

「可愛いですね。」

「ありがと。」

「ふふふ。」

「そうなの。」

そうなの、と、私は思った。

「待つてるから、汐見の所に行きましょう。」

と、私は言った。

「ええ。そうしましょう。」

奈世さんは（すぐに、）即答していた。

素磨子と奈世さんは、少しだけ遅かったわね、と私は思った。一分か二分より、思ったより五分ほど遅れた。二人が見えて

二人を見て私は、（また、）思った。

思ったことを言った。

「二人でいちやついてたのね。」と、私は見るなり言った。髪の毛が生き生きしていた。奈世さんだけじゃなくて、素磨子まで！、当然よね！、それはもう、気持ち良いから、多分、巻いたりして撫でたりして、当然、よ！。

奈世さんがでもすぐさまに言ったから、準備してそのことを言ったのかもしれない。怒ると分かってたのね。

むかつく。

でも私は同意見を奈世さんに持った。奈世さんは素磨子が今可愛いと言った。奈世さんが今言ったのは許せないけど（良いけど、気持ちは分かるし、私も勝手だから。私↑何故？）素磨子が非常に今素晴らしく可愛いのは、分かるわ。

どっちにしても、どちらも、（特に素磨子が、）凄く良く分かるわ。

「かわいいでしょう、素磨子さん。ほら汐見さん…ね、素磨子さん、です♪。」

「ちよ、奈世さん。」

奈世さんは素磨子をちよん、と押し出した。

可愛い。二人とも可愛いと思う。

「水着が似合ってるわね、二人。私も着たいわ。」

私は、とっさにまっすぐに言った。気持ちは今よりもストレートだった。考えなくて、怒ることも無かった。言ったときは、とても良くストレートだったわ。だから、

ああ、

もう！。

「奈世さん、怒っていないわ。どうせ奈世さんでしょう？。」

と、私は言った。

「ああ、分かりますよね♪、流石です。はい♪。素磨子さんが、とっても可愛かったの。とつても、素敵だったの！。ふふ。汐見さんも、着たいですか。これを。巻いて着せて

ほしいですか、私♪…に、ああ、そうそう、私に、ですけど、私も。私も、すごく楽しいんですよ！。むしろ私が超楽しいです、はい♪。」

「ええ。着せてほしいわ。」と、また、私は、とっさに（つい、必然的に）言った。

私は、私の水着を破った。エメラルド・グリーンと、つやつやした（しっとりした、あかるい）灰色と、上品な（うすくち）虹の、グラデーション・ラインと、かけらが多い順に、舞う。空中にばらばらになって舞う。夜。そうね、夜の空中にきらきら。つやつや。競泳水着だものね。でも私は奈世さんの方が、好い！。

「怒っていないわ。」と、私は言った。

月の光で、夜につやつやするのは、汐見さんのお体が、お肌が美しいからです。筋肉の、体のラインが綺麗。お体の密度がきゅきゅつと締まって、引き締まって、私は引き寄せられます。

夜の光で、つやつや。

（汐見さんの、）素磨子さんよりもまだ小柄なおっぱいの影が、腹筋にそつとかかって、月の、影の、薄手のお洋服みたいで、だけど布地が小さくてほんのわずかです。

汐見さんの腹筋に、比べると。

こんな（肩から、）しゅつ、り、と、体格、線が、細くさえ見えるのに、キインと、おなか、腹筋が弾力（伶俐な。）があつて、柔らかさと硬さ…頑丈さを両方、備えて、丸ごと、お腹の筋肉、むつつの大きくてほそ細やかな筋肉。

我慢できません。まずは手でさわります。

（汐見さんが、「あ」と、いいました。）

きもちいい。

あたまが追いつきません、もう、私はこの前にも触れているのに。

今も、もうさわって、さわっているから！、汐見さんは反応してくれて、あ、と、私もいまおいついて、びつくりしました。指がさらさらして、しっとりしますね。指を見ても、濡れていないし、夜でも、はつきりと濡れていないと分かる。夜目は、確認みたいなもので、体液でもなく、しっとりしたお肌。しっとりした、感触。さらさらの私の指と、当たって、当たる、しっとりした汐見さんの肌。しっとり密度が、どきどきしてきて、凄いいハイ・エネルギー。が、ぐぐつとする筋肉。肌の奥から、ぎゅんと、一気にゆっくり、おしとやかに高密度な感触で、わたしのゆびさき、指先で、しっとりしたお肌の、しっとり、筋肉、ぎゅんわりつと、ぎゅんわり、ぎゅんぎゅんしますよ！、今、もうっ！。しています。ぎゅんぎゅんどきどきしますね、さっきから、そう、ずっとしています！。

気付くのが、ああ、遅れました。けれど、私はもう、とうにその、あのっ、汐見さんに、触れていますね！。

手の平を、ぺたん、とつけます。ぎゅっと。お腹の筋肉をぎゅっと、肌をぺたんと。しっとりしたすべすべの肌と、ぎゅっと…、全力を、押し返して余裕のある筋肉、お腹の、腹筋の力で、骨格、内臓から何から血管から全てで、きつと、ひとつでも私を押し返してくれそう。

でも、いま、全てで

ぎゅっと、きゅっと。

可愛らしくも、お強いですね。かんぺき。

完璧に、私は圧倒されます。

「汐見さん、手の圧力は分かるでしょうか。」私の手は、圧力でも、でも圧倒されて、ああ、逆に、でも負けてもいいかしら、と思っていますよ。

ああ、いつも、汐見さんに、でも、この私が、です。

いつも汐見さんと素磨子さんには、ああ、もう、いつも、汐見さん、あなた達はすてきです。格好良くて、お綺麗です。二人とも…。

私は、美味しいご飯を作るから、ごぜんさま、とか言われています。

(ごぜんさま。なにげに無敵なのですよ。)

汐見さまが、言ってくれました。

「全宇宙を滅ぼして作り直せる位ね。いえ、それ以上で、比較対象が無いわね。」

「汐見さまの次です。」

「え？」

「汐見さまと、素磨子さまの次なら、良いです。それこそが、それだけが良いのです。私は！」

私のあたまには、黒いくちがある。二つ編みで、最初、あの夜に、隠そうとして隠さなかった、今は、なんにも気にならない体。パーツというか、くちが、体の一部が、もうひとつの私のよく食べるくちが。最初あの夜隠そうとして隠したくなかった、女々しくもすべてを見せたいと思って怖くて結局何にもなにも、できずに、終わって、ああそして、抱いてもらって！、嬉しい！。

嬉しい。私は、髪の毛も伸びる。

貴女を、あなた達お二人のみを、お二人の私がこの私以上で、それよりも並べて、並んで三人、お二人を並べてお雛様みたいで、良いです♪、貴女達（貴女と、貴女の、汐見さんと素磨子さんの二人を。）お二人のみを、私が、髪の毛で抱き寄せられて、そして、抱きしめられるのが、良いです！。

「着せます。」と、私は言った。

「ええ、着せて。」と、汐見さん。（いま。）

髪の毛を、しゅるしゅる巻き付ける。（着付ける。）

黒いパジャマ。ネグリジェ。水着の、それを、ダークブラックに着付けて、しっとりさらっと、さらっと、しゅっとこすれて、さらさらなまめかしい色、私の、髪の毛の黒いや。色。さらさらしたつるつるの水着は、黒の、しっとりした肌当ての感触と、（お互い、しっとり。さらさら。）…そのお互い、互いに素晴らしい気持ちの、感触と、つやつやの髪の毛。つやつや。つるつる。両方、最高にそのまま、私の髪を私の水着にかえて、（そのまま、）汐見さんの御肌に、肩口からお腹と、お腰と太ももの、上はしまで。

私の髪の毛は、今日、水着。今日のパジャマで、ネグリジェで、水着。

お二人と、セックスの時に着る、水着。

あ、いま、違う！。いまの私は違うから、つまんないとかじゃなくて、着なきや、桃の花びらから、（桜色、ピンク、何でもいいから違うし、）私の髪の毛を、私に。水着の上から、透き通って薄手の水着に、シースルーのえっちな肌着に変えて、お揃いだけどちよつとだけ薄くてえっちな、それでも、

お揃いの水着が、いいので。

秘密で私に、着せて行く。

汐見に着せてる、奈世さんの頭の後ろ。口がある。黒い穴なのに、楕円形の、長方形をすっぽりしたみたいな、スモースのなめらかな、穴が、自己主張が激しくて私はそこが、奈世さん、二つめの、よね？。（奈世さんの。）口だと分かった。まよるを充てんした穴。真の夜。まのよるしんのよる、みたい。見たい。もっと、しっとりしていそうで、どんな黒ようかんより、いろいろ、水羊羹より、じんわり、でも、ぷるぷるでも無くて、しつとりと、唯々果てしなくしっとり。宇宙より真の夜みたい。

見たいから、指を突っ込んだ…、そっと、人差し指をゆっくり、いきなり、そっと。

だって口だから、キスよりはいいと思うの。

奈世さんが、ひゃん、とか言った。ひゃん、って。実際に聞くとえっちね。妖精さんとかファンタジーの鳴き声みたいで、実際にはありえない位に可愛い、綺麗、奈世さんはここに、確かに口があるみたい。音は前の口からだった。でも、この後ろの夜も、しっとり、口があって不思議で、とても綺麗。

奈世さんはここにいて、汐見というと思った。

「ひゃん。」

と、（また、）言った。（口突っ込んだから。）宇宙の湿り気があって、夜、気持ち良いと思った。…いや。違う。違うわ、この気持ち良さは、奈世さんのしっとりな口ね、二つの、

二つめの、口ね、宇宙とかではなくて、なんかこう…、奈世さん。奈世さんの！（真よるの！）。

「素磨子、何してるの。口ね。口があるのね、そこに。」

汐見が言ったわ。そうよ。

「そうよ。」と、（ほぼ）同時に私は言った。

「舌が美味しそうだったわ。奈世さん。味わってるわ、素磨子の、指を。」

「違うわ。これは、感じているのよ。」

「一緒よ。」

「違うわ。いえ、まあ、そうかも？、とにかくね、舐められてるとか、ぺろぺろされてるとか、そんなね、えっちなことされたんじゃないのよ」、あ、汐見が口をひらいた。

「当たり前じゃない！素磨子今奈世さんは私にされてるもの！してる！変なえっちなことつ、言わないで！そんなのは！、あつ、違うのよ、奈世さん。奈世さんは変なことしないわ。別に、私は気持ちが良いもの。素磨子も、でも、たぶん、素磨子が、えっちよ。」

あ、と、奈世さんが言った。

「いえ、私もえっちですけど、けれど、後ろの口は、今、まくらみたいなものです。ゆびまくらです。素磨子さんの、えっちな…、あ、いえ、素磨子さんの指を、やんわりうけとめています。われながら綺麗なものです。私は…、えっち、ですけど。でも素磨子さん、その綺麗さが、割れることはないです。われながらとは、そういう、意味ではないです！。」

「気持ち良い？」と、私はいじわるに言った。

「え、ああ、嗚呼、はい。」そう、奈世さんはとっさに？と、答えた。「こっちの舌が、いえ前にしかないのですけどッ、こっちの舌が気持ち良く、気持ち良く動きます。動きまじたえっちに。汐見さん。さつき。言っていたみたいに、あ、もう、水着も完成、しました。御仕舞です…、御仕舞！ああ私のかっこつけも綺麗なかつこつけも、御仕舞、です！。でも私は綺麗だと思います。私は。綺麗さには、美しさに自信があります。」

「しってる。」と、私はイジワルに言った。自分でもなまいきだと思った。

「あら…、」と、言って、奈世さんは振り向いて、汐見の服（つやつや水着）への髪の毛が、伸びてたのがぷつぷり、と切れて、いつせいに、切れて、完成したから。…ああ、指が奈世さんの口から離れた。私の指が後ろのしっとりした口に、あったのに、まぐらのくち？から、外れて、それで、手を伸ばすけど、奈世さんがよこから捕まえて、髪の毛で巻いて、がっしり、きっちり、きつきつときゅーきゅーとつやつやの髪。どこことなくしっとりした感触の、髪。内側が…、そう、内側からしっとり。肌触りはつやつや。つやつや、しっとり、そうね、（奈世さん、）この水着と、（汐見と、）いっしょだわ。汐見の、今、かんせいした、髪と…、髪は、奈世さんと。水着の、肩から腰までの服と。

体のラインが、裸とおんなじの衣装。

奈世さんは、私の指を捕まえて、月明かりといっしよの細い指から私に、そっとして、指と指を触れさせて、髪の毛の（奈世さんの）上から奈世さんが触って、自分の口元に持ってきてちよつと残念？そうに、ふまん？そうにして、目元がちよつとだけ閉じてる？泣いてる？感じで、でも全然泣いてないけど、奈世さんは髪の毛をほどいて笑った。私の指から。：ああ、ハイッ、分かった　！。：けれど、トーゼン！、私は（こんどわたしがトーゼン！）、ちよつと残念になった。さみしい。奈世さんは満足そう。笑って。ふんいきが笑って、につこり、奈世さんは口元に（ふるつ　として、涙の桜みたいな。）

私たちの（奈世さんとの）手と手を、寄せる。

「素磨子さんも、たいへん、美しいですよ。」

「二重の奈世さんがいいわ。」　と、私は言った。

ことばにカンケイがあんまり無かったかもしれない。

でも私は繰り返して言いたかったし、もう、言う。（わたし）、

「私、二重の奈世さんがいいわ！」

と、私は奈世さんに言った。

奈世さんは私のおなかを触った。空いてた（今さわってくれてる！）左手で、ゆったり
：♪、と！。

「はい、だいたいわかります。」と、奈世さんは言った。

「なんで？」私はこども（昔のアホな私）みたいに聞いた。

「私が綺麗ですから。」

「そうね。」その通りだと思った。

「素磨子さんも、汐見さんですよ。もっと。」

「あ、えー、そうね。汐見は、そうね。私はちよつと、強さにはあるつ、けど、その辺の綺麗さはあると思うけど、そのほかの奈世さんとか汐見とかの、は、ちよつと自信がな

「あるわよ！」とちよ、汐見だった。

「すべてがあると思います！」

怒った声で言われた。奈世さんが怒っていた。汐見も。

「そうだからこそ、私は、すべて正しいから、どちらもで。手と。」

と怒りつつ、奈世さんは、かっこよく髪の毛を指先に乗せた。右手だった。どちらの指も綺麗。左手に目が行く。しつれい。右手と、右の指、すんなりした平の上に乗る、さらっ：、さらに、髪の毛のひとつひとつ元気で、するりと乗るつやつやの髪の毛を、見せて、奈世さんが？、私が、見せてと思うの？、プールサイドの湿り気（ちよつと。）に、負けずに打ち勝つバツグンのサラサラ感から、ぴかぴか、宝石か（o r、）電気みたいに光ってる月の光の反射と、ツヤがあるってこういうことなのね。ああ。ああ、分かった。つやがあるって、綺麗ね。

奈世さんの、ふるつとした唇が桜の、花びらの鞭みたいに動いた気がした。

(怒るように、静かに、綺麗に言った。)

見とれてたら、また指を捕まえられてた。私の右手。お腹の前で、私のかつ、かつ、きゅつとした山と、(私のしつかり。…した、腹筋と、)奈世さんのうっすらした腹筋の、丘の前で、奈世さんの手と手がこうして、クロスして、私の筋肉の山並みをお腹を撫でつつ私の右手を持ち上げてゆく。

奈世さんは、確かにこう言った。

「手と髪で、言われたように、ふたえに。」

目の前に私の大きな右手があつて、細い指と元気な髪の毛がしつとり、きゅうきゅうによりそわれている。よりそわれるって何？、しっとりした優しい、奈世さんだけでさらさらの、水分が内側に含まれて伝わる、感じがする、優しい、よりそわれかた…、だきしめかた？じゃなくて、いっしょによりそう感じの。寝る…、いっしょにねころぶのが、近い？どうだろ。ふたえって二重ってこと？ふたえまぶたの、そうね。二重なのは奈世さんと私の体で、私と奈世さんの筋肉が違うし、違うから二重で面白いって、思う！。

「綺麗かしら。」と、私は、したところアリ気で言った。

「本気ですか。」「素磨子、それは本気かしら？。」

…いっしゅんで、二人どうじにバレた。

恥ずかしい。

でも、恥ずかしいけど、言わなくちゃいけない、と、思うし。と、か、私は思って、言った。

「汐見、奈世さん、自信もつても、いいの？」

「聞く必要ないです。」「素磨子、…、なんで私たちに聞くの？。」

またほぼ同時。うれしい。みつともないけど、嬉しい。…嬉しい！、情けないけど、うれしい！。汐見。奈世さん。大好き。自信もてる気がする、そっちも。そっちの綺麗さも、ずっと。汐見の雰囲気と睨み具合の光が聞き返してくるたびに怖く強くなってるけど、まあそれは、あとで(ああ、今から…)なだめることにしよう。

「自信もてた。もてたわ。」とか言つてなだめる…、ああ、もう言つたわね…。

ああ。汐見が適当言うな、みたいな顔して怒ってる。綺麗ね。汐見は怒っても(こっちやしんどいけどとても(×2)綺麗。

奈世さんはくすくすしている。いやみね。ちゃんとかわいくて可愛いのがいやみで、かわいい。綺麗で、綺麗だと思う。わかってますよー、みたいな。むかつく(かわいい)。…ああもう、かわいい！かわいいわよ！、いつも。

いつも、そう、二人はいつでも綺麗ね。

そして多分、…ええ、可愛さも綺麗さも、(二人と、)私、も。

汐見が私に言った。怒ってしつとりした(、セクシーな)唇を開いた。

「早速脱がせなくなっただわ。」

…え、何が、多分、私に言った。奈世さんの髪の毛と水着がお揃い、汐見、私も、ああそれで、汐見は私に。今。言ったのね。

すぐに私つ、(ああ、)さっそく、奈世さんが先に、言われた。

「嫉妬ですか。汐見さん♪、可愛らしいですね。私と素磨子さんの、どちらに嫉妬したのですか。」

と奈世さんは綺麗に美しくにこにこ、微笑んで、興奮して？、言った。多分ゼったい興奮していると思う。汐見を抱きしめたいと思ってる。髪と手で。二重に。不愉快だと思っただ。

汐見が言った。

「二人に。」汐見もすぐに答えた。私もそう思うから、汐見。汐見も、もう言ってくれたから、あれ？、二人つて、ちよつと違う気がする。奈世さんが(また、ふたたび)私より先に言った。まとめて、まとめるのが超早い気がする。私より二人とも頭が良いから。二人。そうね、二人が自分が居なくて、一人(わたし。)足して三人にするおはなしね。

厚切りソーダ・ゼリーみたいな、(炭酸ひかえめの)ウォーターマット…ベッドに、正方形の。三人で。ベッドに、抱きしめ合って、三人でベッドに倒れ込む！。

私は右を見て左を見て言った。真ん中だった。奈世さんが左にいて、つたえる。

「奈世さんだけ、ピンクね。可愛い支配者さまみたいで、可愛」「ちがいますよ。そして良く、聞いてくれましたね!。」奈世さんが遮って一気に伝えて言った。私に。そしてすぐ水着が弾けた、というより、奈世さんがその素手で破った、きゆるきゆるかつしやあああああんで、ばらばらに碎けて、破れてひらひらひら舞って、桃のジュースのかけらか、桜の鋭かくの花弁、そのすきまから、うっすいお揃いの水着が、乳首から腹筋の綺麗なラインまでくつきり、割と濃い陰毛もシースルー・ブラックから黒く、透明な艶々の水着からやっぱりきらきらしたしなやかそうな陰毛が綺麗に流れて、程よく肌透けるのが見えて、するとやっぱり、そこまでは濃くないかも、って、私はえっちさに気が付いて叫んだ。

(奈世さんの。奈世さんの、えっちさに。私は当然、奈世さんが可愛いから(えっちでも、えっちで。かわいい。)思うし。)

「いつのまに、お揃い!？、いつのまに、嬉しいっ!。」

「嬉しい。ああ、嬉しい…。私も♪、ですよ。」

「めっちゃ透けてる!すごい奈世さんだけ透けてる!、奈世さんだけの綺麗なお肌が透けてる、ああもうめっちゃ早口になる!。凄い。」

「生地が薄いです。透けて、秘密で着てて、そのために薄い透明の黒に、髪の毛を障子紙

のぼんぼりみたいに、私が灯かりになりますようにと、そんな秘密の、えっちな、水着の
パジャマ♪。いかがですか。いかがでしょうか♪、汐見さん、素磨子さん、お二方♪。」
「凄いだから凄い綺麗で、やっぱり凄い」言いかけてるのに（私が）汐見が強く（静かに、
さつさと）言った。「さわりたい。さわってから、一緒に泳ぎたい。」と、汐見が言った。
私は、同じだから黙って聞いた。奈世さんが言うのを待った。奈世さんは、言った。
「どうぞ。」

私は触った。お腹の、腹筋からそつと。薄かった。元気で、でも薄かった。ストロベリー・
ミルクの陶器みたいな、うっすらした可愛い寸胴ボディがすんなりしてて、元気に腹筋が
あって、小さなお体の元気な、つるつるの水着と、すらすらした可愛い、元気な腹筋。
汐見の手が重なった。あ、

「っ、あ！、ごめん！」と、いって、私は汐見に、いって、かわってすぐかわって謝って！、
して！、代わった、いえ、汐見にちゃんと戻った。

私の、興味も。

汐見好き。

私サイアクだと思う。

でも止められない。好き。

二人とも、汐見、やっぱり特に、（汐見！、）好き！

汐見はさわってても、えっち。可愛い。綺麗。好き、愛してると思うの、汐見！。

素磨子が見ている。

「やっと触ったわ。」と、私は言った。「同じのは嫌だから、唇で触るわ。キスして、触る
わ。」と、私は言った。返事は、待つべき、とは、思わずに触れた。顔をぐつと一気に寄せ
て、寝転んで（別のシセイで、）お腹に触れた。唇でお腹に触れた。腹筋。奈世さんの腹筋
に、キス。うっすらしたシセイを、筋肉のまるやかな四角を、薄い四角形の山々のかどを、
かどが、丸くてまるやかな四角を、薄い段差…とも言えない、ほのかな、山々を。奈世さ
んの薄い腹筋に、触れる。私の唇で。キスで。（元気。）そう！、薄いけど、灼けるような
弾力を唇に感じる！キスする。キスして。キスして、奈世さん。泳ぐ…このあと、いま、
そう、泳ぎながらキスして。

「泳ぎましょう。」と、キスを離して、（いちどだけ、）言った。

素磨子が飛び込んだ。とぶんと。ゆっくり。飛び込む、というより、水面にとぶんと
と降った。姿勢よく、しなやかに棒立ちながら水面からゆっくり、一気に、とぶんと一気
に、沈みこんで脚がしっかり立つ感じで、胸元が水でちゃぶちゃぶ揺れてる。素磨子の大
きな豊かなバストと、包み込む奈世さんの水着と、プールと。プールの波、ちゃぶちゃぶ、

大きな胸に。素磨子。真っ暗な微かな光の、真っ暗な透明なブルと、素磨子と、奈世さんの黒々な髪の毛が濡れてつやつやにえっちにきらきら光って、少しだけの光とプールの波に、ゆったりとつかって、濡れてきらきらしている。奈世さんの水着が、素磨子の胸元できらきら。奈世さんの髪の毛が、素磨子の水着で、きらきら！

見とれつつ私は言うことを言った。

「素磨子さびしかったの？」と。

素磨子はすぐ返した。

「そうよ。つらいわ。私のほうが、きれい。言ったじゃない。私の方が、綺麗。そっちが、そっちが言ってきたじゃない。知ってるもの。今なら、いらついて言えるわ。」

プールの中から、（上から、素磨子が。素磨子が、上に。）素磨子が笑ったのが見えた。

「泳ぐから、見てて、汐見。」

「ええ。素敵な笑顔ね。素磨子。」私も笑って言った、と、思う。

「ええ、ありがと。汐見もね。すてき。」：成功。嬉しい。「あと奈世さんもね、よろしく。」

と素磨子は言った。嬉しくない。奈世さんの方を、（私は、私が）見た。奈世さんは優雅に、自慢気に笑って、

「でも、水着は私です。」と、：言った。言ってくれた（くれやがった）、と、ひどくむかむかして思った。

でもきれいで、とても悔しいわ、と、思った。

素磨子の気持ち、またひとつ、分かった、：気がした。

分かったといっっては、絶対にいけない、気がした。

素磨子さんの、からだのおよぎを感じる。クロール。将棋盤の緊張感をそのままに、超早送りに自然に流れるクロール！ ゆうり、ゆうり、と力強くがっしり、しなやかに柔らかに繰り返される、素早く、水に埋まって、（うで、あし、）繰り返し浮かび上がってくるおよぎの、ハイスピードなゆったりしたおよぎを感じる。ゆうり、ゆうりと、カジャン、カジャンと、ハイスピードでゆったりしたおよぎ。水着のところから、手足の先まで、髪まで、素磨子さんの！流れる髪の毛のひとしずくまで、余すところなく私は水着に髪に、髪の毛から、ああ腹筋、ふくらむ流れる大胸筋から肩へと腕へと指先へと伝わって、感じる！。おっきなおっぱいが、素敵です。まだ何故か柔らかな、柔和な小さな乳首も。（素磨子さんの素敵で大きな腹筋、腰と、胸と、脚と胸と、うでは、脚は、あしは、足は足首も全部格好良いです。スマートで力強い指の爪までも。）どこか硬い気がする泳ぎ。カジャン、カジャン、と、水飛沫が上がるのが硬い。沈んで、上がって、動くだけじゃない。手と足が沈んで上がって泳いで、どこか硬いから、水飛沫があんなに。カジャン、カジャン

ンと、ゆうり、と、沈んで上がって、カジャンと水飛沫が上がる。緊張と、嫉妬（多分♪）と、…ああ、硬いのは、ふくらはぎと、こう、です。こう、足首の表面と、かかと…は、弾力のある筋肉の柔らかさであって、まだ柔らかい宝石のまんまです。水を弾いて切り裂く足首のおもて、と、足の裏はしなやかな弾力で、すんなりと筋肉が通って、優しく、でもふくらはぎは、熱い氷のようです。溶けない、融けない、熱い氷です。プールの水板を砕いて、壊して、ゆったりと激しく…ああ、ハイスピードとは！。

この場合は、イラつく（灼けつく！）激しさです！正直な（私たちの、誰よりも！三人の、汐見さんも、どなたよりも。）、

正直な、素磨子さんの激しさ、です♪。

私は100メートル、？（入った所から、マイナス10メートル？×2＝マイナス20メートル（くらい）、80メートル約、の、往復。50メートルプール）…じゃなくてツ、80メートルのことです、たぶん80メートル位、泳いでから出た。みず・しずくがじゃばーっと、すーっと流れる。落ちる。プールの縁から、プールへ、縁のプラスチックっぽい床（水色）へ、（プールの底も水色、同じ素材ね。たぶん。）プールサイドはサラサラの砂っぽい肌色。ベージュ？オレンジっぽく無い、肌色。白っぽいベージュ、かもしれない色。水がさーっと、すーっと流れて、引いて、…引いて、流れてまだまだ引いて、一瞬で綺麗に流れて落ちる。水が、全部水着から流れて、水たまりがプールサイドの縁からおつきき出来て、それも、プールの縁とかプールとかに吸い込まれて消えて、ぼーっとしておっきな水たまり、すごいなあ、とか、消えたことにカンシンしたら、すっきり、乾いた。水着が流れ落ちる水滴が異常で、速度が乾く速度の量が、水の落ちる量とか速度がすっごくはやくて、そりゃ乾くわね、とか、もう、それもそれはチガくて、ちがくて、違うの。奈世さんの水着は凄いいけど、着やすい、泳ぎやすいけど、凄いいけど、それも今、違うの。私が乾いているの、LOVE？が、LOVEが！、汐見と奈世さんに、乾くの。汐見。奈世さん。汐見。…やっぱり、汐見っ！。2、3歩で、ダッシュして（スキップ？して、トンとん、と、ダッシュの。）ダイブして、ふとんに、マット？に、おふとんにそこに居る！っ、汐見にっ！。汐見へダイブして、届く！。

届く。
ダイブして、届いた！。

素磨子のマイペースなクロールを見た。苛々して、ゆったりして鯨の狩りみたいに、鯨で、シャチみたいに素磨子は泳いだ。苛々した鯨の、シャチになる泳ぎ。素磨子の、ダイブを

受け止めて、少し、冷たく湿ってて、気持ち良くてシャチみたいだと思った。流水下の、シロナガスクジラの怒りの。冷たさと、熱い体のダイブと、水と、湿り気のプールの冷たさ。夜のひんやりしたプールの、流水。素磨子の気持ち、氷になっているみたい。喜びが、熱になっているみたい。気持ちは、さっきまでの怒りと、喜び。(今。)いまの、喜び。流水下のクジラと、(シャチと、)あついね。素磨子の、体。からだ。からだ、きもち。さっきまでのプールと、(冷たい湿り気。)プールと、素磨子の体と、熱いわ。素磨子の体は、泳ぎよりたえようがないから。

「湿ってる。」素磨子のおっぱいを触って、水着も、さらさらしてる、と思った。

「乾いてる。汐見。」と、素磨子は言った。「汐見!、」あ、と、素磨子は私は、言った。

素磨子は、私のおまんこを、さわる。水着を、上から、さわって、素磨子の手の平。大きな、優しい、激しい、二、三度の、動きが、揉んで、じっとしてる私と、素磨子の、てのひら越し、二、三、回、揉んで、てのひら越し。水着越し。水着が。水着、そう、やぶって、私はてのひらを、じつと、太もも、素磨子の、上に置いて、じんわり、私が汗ばんできて、慌てて私は手の平を外して空中に半分ばんざーい、とする。半分は、腕の開きと上がりが、半分。素磨子は水着を破って欠片にして、黒い硝子の破片にして(柔らかいスマートな破片ね。)夜空のプールの光(？散りばめて、暗い。)に、きらきら、暗くて、きらきらしたブラックの髪の毛の破片が、やっぱり。Ⅱいっぱいに。きらきらして、綺麗。髪の毛の破片。髪。えっ、素磨子、破つたの!？何で。私が望んだから？そうなの？そうだったかしら、素磨子のひとりじゃないの？、素磨子が一人で、そのまま触りたいと思って、触ってほしいと思って、欲しい、ああ、やっぱり!、やっぱり、私がそう望んだからね。

奈世さん。

奈世さんはどうしたのかしら。私と素磨子の、この、ああどうしようもないわね。この勝手に。私と素磨子の、勝手に。

素磨子が左側に、言った。奈世さん。

「奈世さん破っちゃった。汐見のね、水着。奈世さん、髪の毛、痛くない?、大丈夫?、奈世さん。でも私あやまらないわよ。奈世さん。汐見脱がせたかったし、触って、ほら、ほら。」つ、と、かつ、すごい早口で、(言いながら、)素磨子は私を(私の身体を♪)触った。おまんこを揉む手(ライト。右手)をそのまま、空いた左手で私の乳首を触った。手の平で、(やっぱり、)ストレートに揉んだ。右おっぱいのトップと、その丸い周辺から、ストレートに素磨子の(左手の、ちよっと重い。)圧力が来て、やんわりといえ、重く直線的に、(ストレートに、)圧迫するように揉んだ。気持ち良くはあんまりないけど、けれど、素磨子の力を感じて、それが凄く気持ち良かった。素磨子。おまんこは、普通に気持ちが良いわ。素磨子。素磨子の手のひらからじんわり、しっとりした湿り気と汗と、汗と、緊張した涼しさ、夜ね、今は、と、涼しさでひんやりした汗と、熱い手の平とおまんこ

しっとりした熱さと、それが、汗ばんで、揉んできて、優しく、こっちはあくまでも優しく、素磨子が、ゆっくりと優しく・く、（やらしく、）おまんこをしつとりと揉んできている。私の愛液でも、濡れる。しつとりと、たつぷりと、いっぱい、じんわり。ぴしゃぴしゃと濡れて、素磨子の右の手（左手は、おっぱいで、意地悪ね。）と、私と、私の、おまんこの表面うえ、までも。左手は、素磨子の力が、強いわ。あ、揉みながら、（あつ、）素磨子がまた、続けて言った。「さわって、て、奈世さんのことじゃあ、ないのよ。私が、汐見の体をつ、さわってさわって、するのよ！」とかいっぱい（いっぱい？文字数単語数が少ない。多い。情報量が多いわ、素磨子。）言いながら素磨子はいっぱい触った。素磨子は私をいっぱい、いっぱい、さわる。さわってる。気持ち良いわ。素磨子。素磨子の左手の心地いい力も、気持ち良い右てのひらの優しさも。おっぱいとおまんこが気持ちが良いのよ、素磨子。奈世さん。奈世さんは、（でも、）どうなったのかしら。でも。奈世さんは。無視したいけど、気持ちが良いけど、でも、心配よ。奈世さん。どうなったのかしら。どうしているの、奈世さん。

奈世さんのおっぱいが左肩に、当たる。奈世さんの小さな元気なおっぱい。水着。髪の水着（うすざわり）の感触。つやつやした薄さと、（つるつるの薄い布、つやつやの）つやつやした、おっぱいの薄さといっしょに。元気な（腕に、肩に、当たって！）きゅうんとした、おっぱい。私は肩を押し付けて、左肩、薄いおっぱいと、乳首、（小さな、）左胸？、そう、乳首と、きゅうつと（艶々した水着に、肌に、水着、薄いから、肌のさわりまでさらさらつやつと、分かるの、肌もさらさらでつやつや元気で、するつと、入って、肩！ああ、谷間の肌がむねま（おっぱい・すきま）、と、気持ちが良いって、分かる）肩が、するつとすらーと入り込んで！小さな、薄胸の、奈世さんのおっぱいの谷間に、

ぎゅつとしつかりした大胸筋のしなやかさに包まれて、細身のしつかりした胸。奈世さんの胸。おっぱい。大胸筋、肌。つやつや。おっぱい。薄胸の、おっぱい。しつかりしたつやつやの、柔らか。大胸筋、綺麗な、すべらかな、いっぱいの筋肉もお肌も！、おっぱいも、当然、柔らかくて元気で（、弾き返してきて・て！）良い。凄く、最高に、好いわ！（良いっ）。

素磨子が言った。奈世さんに。たぶん。

「奈世さん、なんで汐見に当てるの？」

「好きだからですよ。」と、奈世さんは、

ああ、奈世さんはすぐに答えた。私に、そう言っても、くれた。素磨子と、そして、私に、くれた。私も好き。「私も好き。」と、私は言った。思ったことをすぐさま応じて、言った。素磨子は同時に言った。「なんで好きって分かるの。」と、言ったけど、それは、私がそう言ったからよ、素磨子。素磨子は、私の（当たってる、奈世さんのおっぱい。気持ち良い。）

私の肩（私の奈世さんのおっぱい、幸せ♪）から私の顔を見た。「なんで言うの。」と、素磨子は生真面目に言った。真面目な、怜悯な太陽が凍り付く世界ね。そう言ったら殴られる気がしたから、言わない。私は素磨子に、…素磨子に、「奈世さんは気持ちが良いのよ。素磨子と違って、素磨子と同じくらい、いいのよ。いいの。」と、正直に違うことばで答えた。

素磨子は、じっとして（私を触る手が（素磨子の手。格好良い）止まって、やだ！、止まって、て！、やだ！）、じっとして黙って、すぐで、黙ってたのは多分すぐ（いま計ると、2、1秒）、じっと待って（私が。）素磨子はすぐ、言った。

「じゃ、私のも破いて。水着。奈世さんの水着セックスするために破いて。」

「泳ぐのは？」と、私は聞いた。

「私は泳いだから、ああ、汐見ごめんね。」今度はすぐ、素磨子は言った。心のこもっていない棒読みのごめんね、と、私は確実に思っ、言った。苛々した。

「私は泳いでないわ。素磨子。」

「そんなの、そんなのどうでもいいから！つ、私、奈世さんがむかつくわ。凄く！」

「正直ですね。」と、奈世さんが横合いから（まさに、左横から、影が差すみたいに。）そつと、すうつと、言った。「私は素磨子さんが好きです。そんなところも、全部大好きです。けどつ、素磨子さんは、お嫌いですか。私…、私は、とても綺麗ですよ。心も何だかんだで綺麗だと、そう自負していますよ♪。要するに私、水着を破かせてください。素磨子さんのを、私が破りたいのですけど、あ、私も、私もということ、汐見さんのは、素磨子さん御一人で破いて、なんといえますか非常にずるかったですね。ヒキョウです。あんなのは、あんなのは不意で、不意打ちで私もしたかったですのに、素磨子さんが一番にずるいことをして、汐見さん、私も裸にしたのに。したかった、ですのに、ですよ！、とても！。だから今度は、お二人で、私と汐見さんが素磨子さんをお二人で一緒にしたい気がします。私がお二人と一緒に良いです。二人とは、お相手とお二人さんです。だから汐見さん一緒に、ああ、でも！、どうでもいいです。素磨子さんじゃないけど、そんなのどうでもいいです。汐見さん♪（！）。」奈世さんは非常に力強く可愛く言った。強い、強い猫の剣みたいに、綺麗に怖い強そうな（知ってる。実際に奈世さんは超、強い！。素敵。）スマイル♪で、私に直接（的！）に、言った。（問いて、きた！。）

素磨子は黙って、奈世さんを切るように見ている。肉厚の曇り硝子の刃で…、澄み渡ったつぶらな炎の瞳で、じっと、良く切れる重たい、刃で。瞳、で。突き刺して切りさばくばかりに、そればかり曇り硝子の、綺麗な、重たい、透明な灰色の刃で。

素磨子は、奈世さんの衣装を破った。びりびりに、粉々に薄い衣装を、シースルーの影を粉々に切り裂いて破った。両手で、横に、左右に引いただけ。それだけで素磨子は当然、水着を粉々の薄片、ひかりに変えた。黒く薄いブルーサイドの（つきのひかりの、）奈世さ

んの水着の薄片。彼女の髪の毛の、綺麗な髪の毛のはくへん（どうめいに、つやつやとひきのばした？）薄片。

奈世さんは私を見て、こくり、と、黒いキツネさんみたいにかわいく、頷いた。私は頷いた。たぶん、氷が（素磨子の、綺麗な）肉体をすべるみたいに。すつと、ゆつくり、なめらかに素早く。

私たち（ふたり。被害者ぐみ）は、素磨子の綺麗な（素磨子が、綺麗で、水着…、まあ、水着も。）水着を、散り散りに破った。

黒いしなやかな薄ガラスの破片と、素磨子の、素磨子の！、綺麗な、からだつ！。

ああ、素磨子の全身の筋肉が、見える。

「素磨子さん、先に意地悪でしたね。」と、奈世さんは私（本人！）に向かって、言った。意地悪、って何よ。『意地悪。』と奈世さんに思っ、さつと言った。私は、奈世さんにこうさつと、言った。

「そっちも。そっちが。」「あら？なるほど。」考えをまとめてないうちから奈世さんが言い返してきて、言われて、そうされた（言われた、つて）思っ、今分かつて（たぶん）、言った。分かんないうちから言った。「奈世さんのことひとりでやぶっちゃったけど、奈世さんに嫉妬しないのは、どうなの。嫌いじゃないけど、どうしたらいいの。奈世さん。嫉妬しないのは、どうなの。どうしたら、いいの、良いの？、本当に、良いの。したくないけどそれほんとくに、良いの。したくないけど。嫌いじゃないけど、嫉妬、よ。嫉妬しないのは、したくないけど、どうなの、どうしたらなれるの、したくもなりたくもない、けど！、でも奈世さん、好きよ。汐見の次くらいに世界に二番目に好き、世界で。世界で。言い間違、には？、世界で。言い間違、だから？。これね。だから。だから、奈世さんがたまに一番、好きなの。ホントよ。たまに、いえ、たまに、よく？、一番スキなの。よく、けっこうよく、一番好きなの。綺麗で可愛くて、テンネンで優しくするとき、それが、私にこそ、向かってるときに！、好きなの。汐見と一緒にときは、少し違うの。その時は汐見にいくわ。いつも。いつもよ…そう、いつも。いつも。」

「嫉妬しないのは、無理です。しつれいですから、無理です。」奈世さんは終わるのを待ってたように答えた。急ぎ早に焦った感じで、奈世さんは早く言いたそうに、びっくりしたように焦って、じゃあやっぱり待ってくれたの、と思った。嬉しかった。奈世さんの綺麗なしとやかー、な声が（きいんとしない、優しい？いえ、しとやかー、な、影がかった銀のひかり、が）丸くて鉄の壺みたい、（真っ黒な綺麗な、てつの。）ころころ、転が

す速度で流れる。影が音楽を歌う感じの？、よるで、今日の月よりずっと、ずっと綺麗な！、（綺麗な、しっとりした、銀のハンマー、刃物の、くろがねの銀と同時に豊か？な、すごい高くないのにこんな綺麗な、色んな、ゆったりしたよくきれる刃物の、薄くてハンマーみたいに豊かな、）（そう。それ。）ぼんやりして、しっかりした！、奈世さんの声！、が、する。聞こえる！、聞こえてる！。↑ずっと！。「私は、いつもそういうことなら、いつも、お二人には嫉妬してますよ。素磨子さん。」

「いいの。」と、自然に私は言った：、聞いた、と、思う。（奈世さんがきれいだから自然に言えた、と思う。）

「いいですよ。私がそうあつて欲しいです。私も、そうしたいですから、嫉妬は、：ああ、その、私には気持ちが良いことです。するのめされるのも、両方。」

「汐見は？」私は聞きながら言った。奈世さんはもう分かった。私とは違うと思った、そして優しいと思って、私は分からなくなった。私は気持ち良くない女だと思う。オンナ。大人っぽいけど、それだけ。奈世さんみたいに、綺麗な女性には、ならない。なれない、とは、ちよつとちがう、とは、思いたくて、今はまだ、ならないⅡなれてない、だけで、よ、そうは、ならないとは、今だけの、モンダイになるはず、それ以外は、私は綺麗で、可愛い、はずで、ぜったい、泳ぎとか奈世さんより上手いし、奈世さんのが上手かったら取り返しがつかなくなっちゃう。やだ、（汐見、）私は、言った、「汐見、やだ。」と、私は、汐見に頼って、奈世さん？奈世さん、居たわね、いま、てき。敵よ。（奈世さんと違う）汐見は、さつきから何か言ってる。私が聞いたこと。聞いてない。やだ、聞いていないから、私やだ。やだ。もいっかい言ってもらわなきゃならない。やだ。嫌われたら、凄く、やだ。やだ。

汐見。汐見は、いい。私、やだ。私こそが、嫌な敵だと、思う、つて、私はそう、思うつて、言った。

「汐見聞こえない。聞いてなかったから、もいっかい、もいっかい、言つて。お願い、汐見。」

「何度でも言うわ。そんなことないわ、素磨子。」

即答だった。汐見はいつもね、汐見。頭が良いから、優しいから、即答。今は、優しい方で、それがおつきくて、即答、可愛いかな、つて思うわ。優しいのは、たぶん一番、可愛い。

「奈世さんとは違うけど、求めるところは一緒よ。でも素磨子の言う、頑張つて言つてたことは、思つてたこともきつとすべて、違うわ。間違つているのよ、素磨子。そんなことは、ないの。あと嫉妬とかは、どうでもいいと思うわ。してもいいし、全く問題ないし、私はして欲しいとも少し思うわ。されなくてもいいけど、でも私は、するから。してるから。今も。しゃべつてる時に、してたわ。素磨子と奈世さんのことよ。両方に、お互いと

もに、してたわ。でも素磨子は、どっちでもいいと思うわ。したいように、してくれたら、嬉しいわ。でも私はして欲しいから、やつぱり、ええ、嫉妬して欲しいわ。素磨子。貴女は、ネガティブすぎるわ、きつと、さつきからろくでもない発想をまた！、ええ、また！、してたわ。私たちのせいではないわよ。私と奈世さんは、まあ、考えが足りないかもしれない、けど、素磨子が、どう考えてもつ、ネガティブすぎるわ。私たちのせいではないわよ。多分。ええ、まあ！、多分でも、いいけれど、ね！。でも素磨子が悪いわ、だいたい：大体。意図するところは多分よ。大部分が、素磨子の悪さよ。要するにやつぱり、素磨子は、頭が悪いわ！、凄く、悪いわ！。素磨子。貴女は、頭が悪いわ。」

そうね、やつぱりいつも通りだったわ。即答のあとは、いつも『頭が悪いわ』知ってる。いつも言われてるもの、私。

私はポジティブに、汐見のおっぱいを揉んだ。身長189センチと110キログラムのボディと、そこにある形の良いおっぱい。私よりも少しだけ小さな体と、立派なぐつとした弾み込む筋肉の固さと、(固いトランポリンの塊みたいな金属。)形は、女の子が泳いで鍛えた形で、そこをいっぱい、力強くしちやって、最初から、出来てて、鍛え込んで磨いたお肌と、素肌とぴかぴかのいつでも、綺麗な、(当たり前よね！、)筋肉。汐見の身体と、そこにある揉み込めるおっぱい。ぐぐつと押し込める、ぐぐつと押し返すおっぱい。大胸筋とおっぱいの弾力でもって、ふにとぐぐつと、ふう 春風の、ぐぐうと、春一番より強くて、そんな感じにずーっと、揉むたび こたえをくれる。

揉んでなくても、押し付けて押し込んで、私の手を(両手で(揉んでて、おっぱい(汐見の、おっぱい！) 両掌を) 押し返してきてくれる！、そうして、来て、くれる。汐見。私が(私も。)好きだって、答えをくれる。

私も。：私も。奈世さんも、私も。そっちの意味でも、もう、良いわ。汐見。私も好きだから。汐見。

私の素磨子さんと汐見さんが乳繰り合うのを見ながら、私は素磨子さんの内股に手を伸ばしていく。しとりとしたまっすぐめのかげばやしに触れて(少し優雅に曲がった(真ん中からいちどだけ、すつとカーブを伸ばして、はやしに) 陰毛の上に)

そう、おまんこの上に(素磨子さんへと)触れる。うっとりしたひそやかな(元気なっ！、好きな♪)毛の下のきゅーと、キュツと締まった柔らかさが(しなやかな、柔らかさが！)ぎゅーっと詰まった♪、ご腹筋のいっとう太ももに即した、おまんこのすぐ上の体に筋肉に触れて、そんなかーんしよく♪手触り、おてつき♪だからつ、私もすつごく、キュツとして、(きゅうとで♪) 幸せ、です♪。おまんこの上からさらに！、次は、(もう) おまんこの元へと。お二人ともさわってあげます♪。

素磨子を奈世さんは触って、私にも触れる。手と指のおもてで私のクリトリスに触れたり、おまんこも、おもてから薄い奥の方へと、表面近く、あつ、クリトリスから、おまんこ、いっしょに、私のクリトリス先ず、（まず、（×、感覚が高すぎて高め過ぎて×、）手の甲のカーブさせたしよやかなところを、指のつけねでしゅりしゅりクリトリスをさすって、爪の甲で、あるいは細指の間接、そのあいだの平らなまるやかな指で、（指の甲で、）私のおまんこから、奥へと、薄い奥まで、しか、届いていないしけどっ、指の甲が、とっても涼しい熱さで、さらさらの指と柔らかな感触の爪が、静かに弾ける動きの、指の泳ぎ方、優雅で、しよしよゆつくりスツと、見つけてスツとこすって、たまの動きで気持ち良いところを見つけて、（見つけたから、）さらに、しよしよと気持ち良くこする、動く、奈世さんが細く確かに動いて、泳いでダンスしてゆつくり、たしかに！、して、いく、いつてる。手と指の裏側、柔らかい方と弾力は素磨子に、同じようにクリトリスからおまんこに、いつてる。してる。同時にさすさす、ゆつくり、しよしよとゆつくり、よくスツとダンスする。こっちは冷たい熱さ、背筋がしゃんとする快樂、気持ち良さ、心地よさ、も、けど、やっぱりっ、すごくっ、気持ちが良い、けどっ、素磨子のは、素磨子の方は、素磨子の奈世さんの方は、温かい背筋をとろかす熱さね、素磨子の顔が、私と同じくらい笑顔に、とろけるふんにやりした、おなじ？、いえ！、奈世さんの手の表と甲で、おもてうらでまったく、まったく違うの？、どっちがおもてで裏なのか分かんない。素磨子のは、感触が優しい気がするけど、どっちも優しい、ともっ、あゝ、思うの、少なくとも気遣いは気遣いは上手で少なくとも私にも素磨子にも私にもっ！私にもすっごくゝ、すっごくすごく気持ち良い！！。心地いい感触の、手の甲の、冷たい熱さの、優しさよ、出来てる、できさるっ、とても良いっ、最高のどっちも、奈世さんゝ。

でも私は、私の奈世さんに触れた。素磨子の（彼女の私の）手を、片方確かに、外して、素磨子もそうしていた。

むかつく。

私と汐見は横寝で、よこに、よこになって揉んでいたのに奈世さんが来て、触ってくれて（さわりやがってじゃまして、嬉しかったのがすごく嫌、嫌じゃない、やだ。嫌じゃないけど嫌だけど！、うれしい。かも。嬉しい。それ、すごくいや。今も。嬉しい。今も。すごく嬉しい、嬉しい！、ああ、もう、あきらめるしかない、汐見は奈世さんを触った。今。すごくじゃまして、すごく私も触った、今ふれたばかり。上の奈世さん、私の汐見

の太ももの上っ側にいる、奈世さんが汐見のひざ裏、っ側から、上になっておまんこを指で撫でている。手の平で、パームのやわらかいパーツで、もにゅもにゅと、こりこりと、指の付け根のぎゅっとしてちよつと硬い、とこ、クリトリスをそこから親指の下ラインと、手の平の一番下一番やわらかい、とこ、そこそこワープしてこりこり、もにゅもにゅ、ぎゅっとしてワープして恐ろしくセーカクに、精密に、精密、奈世さんの性格はめっちゃめっちゃえろい、と、思うわ。指の方はおまんこを薄く、薄く入って出て撫でて撫でて撫でて、なでて！、薄い中と表のおまんこ筋肉、撫でてしゅるしゅる可愛がるみたい可愛い、可愛いと、私と奈世さんに思う。私自身可愛い！、って、思えてくるのよ！。顔はもうとろとろしている。とろとろ。顔は、可愛い？、可愛い、って、伝えて来るのは、私のはしたない？そうなの？とろけた笑顔は、はしたない、って、いやなことばだけ。いやなら、イヤだな。それは、超イヤだわ…、ああ、やだ、はしたないのはやだけど、しかたがないもん！、私は、とろけた笑顔で、ふにやふにやしつと、とか、しながら、私はふにやふにや、きりつと、むかつきながら、たまにきりつと、して、ふにやふにや奈世さんを揉んでる。さわってるのは、奈世さんの触りやすい気持ち良いわき腹。ちつともふにやふにやしてない、きりつとした水羊羹みたいなかつこいい、美しい、（可愛い、）キュートなさらつとしたわき腹。すらつとは、してなくて？、意外と筋肉がついてる。汐見のいうとおり。（言った通り。）むかつく。汐見に、あつ、奈世さんにも！、奈世さんにもむかつく。むかつかない。全然、全然！、可愛い。すらつとしたずん胴を感じる。ちゃんときっぱりと筋肉のついた、ちよつとすいっつと（くいっつと、じゃなくて）だけひっこんだ、肋骨が筋肉にぎゅーつと埋め込まれてほっそり。ほっそりした肋骨の筋肉のぎゅっとした感触、ほっそりとしか、感じない、肋骨、シルエットは大体、かなり、強くて、硬い、しっかりした肋骨と筋肉と、ああ、筋肉がぎゅっつとして、肋骨がほっそり、穏やか。ほっそりした素肌の感触。ずん胴。しゅっつとしたずん胴。すらつとした…、あつ、でも、すらつとしたって、感じる。元気で、筋肉がきゅうん♪についてて、でもすいっつとずん胴のくの字が流れた、（細い、薄ぼんやりした小雨の霧みたいなくの字がすらつと、すいっつと穏やかーに…）知ってる、私は、奈世さんの体が大好き。あつ。うそ。それ、うそ、とか、とんでもない！、ほんとよ。ほんとに、奈世さんが大好きああああ、大好き、体も大嫌いな多分、心も、大好き、大嫌いな心も大好き。わき腹とか、体は、あきらめるけどっ、大好き！！！！）さわってくれて、奈世さん。奈世さん、によ、私！、（と汐見）は、触った。同時に。左側の奈世さんに、触れて…、もう随分、ずっとしていたもの、私。と、汐見。ずつと触って、今も、そのまま、もつと、もつともつと気持ち良くなってる。もつともつと私はとろけて、ふにやふにや♪、汐見も、奈世さんも、おんなじ、でも、私は、ふたりともに、すごく、すごく嫉妬する。嫉妬するしてる！、汐見にも、奈世さんにも、お互い…、お互いに、三人がおふたり（↑これむかつくわね）ともに、すごく、嫉妬中、なの。

ぜんぶ。

可愛さも、綺麗さも！、強さも！、優しさも愛しさも全部全部大好き、好きで、勝てないとか思いうのが、怖すぎるから、嫌い。私も嫉妬とか凄くされてるのが、嬉しい。すごく嬉しい。すごくむかつく。大好き。可愛いのに、私に嫉妬するなんて！、自信が、ぐんぐん、凄く湧いてくる。私は卑怯な気がする、卑怯よ！、二人は、ありのまま可愛くて綺麗で強くて、そのままに自信とか持つてて、私は、強さと…あと多分、全部。

じゃあ私も嫉妬される、じゃない。
やったね♪。

素磨子が奈世さんのわき腹を、下の方から触る。右のわき腹だった。前の方。触りやすいほう。素磨子と私に距離が近い方のわき腹。まっすぐなちよつとだけひっこんだわき腹。素磨子がずん胴とか言つてた、綺麗なわき腹。ずん胴も悪くないかもしれない、言葉が、ことばが、ずん胴でも美しく感じる。素磨子が、奈世さんが綺麗だから感じる。そう素磨子。素磨子が触っている、私より同時に。むかつく。私はわき腹ではない。むかつく。後ろ側の、遠い方のわき腹（ひだりわき）ではない。そんなのは、私が許せない。だからどの道、素磨子といっしょにはしない。私が、わたしたち二人より遠い方、だなんて。私は奈世さんの腹筋を、上の左手（下の右手は、素磨子に。むかつく。（でも可愛い。））で触って、ふれている、おまんこ、奈世さんのおまんこを上からすーっと、うすらかな腹筋のラインをなぞりなぞって、しゅっとゆっくりさすっておまんこの上から、クリトリス、周囲のふっくら、水っ気、手の平全体で押し付けるみたいに実際押し付けて強く、ぎゅっとすべらすみたい、揉み込んで、揉みつつ押し付け、なぞって上から（腹筋から）下からおまんこの下からまた、揉みながら滑らせて腹筋まで往復、して、して、奈世さんとさわり合って行く。

そうして、ずっとおまんこをさわり合いして、奈世さん、奈世さんと私と素磨子が居たから、おっぱいとおまんこのさわってさわりあって、さわられていっぱい、いっぱいところとおまんこ、びしょびしょのマットに愛液のミニチュア・プールが、私と素磨子より先にもう、そんな私と素磨子と、奈世さんがでも私に（さわられて！）先に行った。私にさられて、さわられて、快楽をひとさらいされて、さらっと、もみもみ揉み込んだから、さしゅっと、水音がずちゅっと、えっちに、何度も何度も何度も！、さらって、さわられて！、私がさらっていった。私がさらっていったわ、素磨子！。奈世さんを、私が気持ち良さにさらって、

「わきからいっちゃったんだ。かわいい。」素磨子。奈世さんにいつてるの？素磨子。どうして。意味が、分からないわ、素磨子。あ、

私からさらっていく気ね。素磨子。させない。ふたりとも私がするのよ。
あ、それとも、え、でも、それは、それともは、いいけど、いいけど…!。

なんだか、汐見がじつと見ている。私を。

くやしそうな、あつつぽい瞳で、こころで。嬉しい。嬉しいと、凄く私は思った。

「私からさらう気ね。素磨子。」

「ええ。」

（「ええ。」すぐに私は答えた。答えてから、そうね、と言ったわって、思えた？。思った。それに今、ええ、と答えた、から。

「私をさらう気ね。素磨子。」

「ええ。」

そうよ、汐見。とか、私は、思っ、今度は、ちゃんと思っ、（答えた！。）言った。
奈世さんがもたれてきた。どうじに。うざい。（えろい。）でもえろい。かわいい。
ちよう綺麗。おっぱい（せなか、ちいさめ）。奈世さんの背中も、小さめ。手と手の、せな
かから抱きついてくれる、おなかやむねや、かた幅のちっちゃさとか、分かるし。わり
とかっしり（がっしり、とはちよとちがう。）してる、力強いけど、汐見や私とはより小
さい、ちつちやな背中と、その前のお腹や、うっすらしたお饅頭のきぬきじ？みたいなす
らすらした（気持ち良い♪）腹筋や、すわすわしたおっぱいの、ちよとした乳首とか分
かるし。、あ、

すわすわした小さめ杏仁トウフの芸術品みたいなきれいなつるん、としたふわっと、ちよ
んちよんと乳首で押してくるおっぱい。ぷるん、とふわふわした感触と、すわすわした小
さなおっきさが、分かる！。

これからも二人でさわられて、あつ、もし、もしもし！？つ、さわられてさらわれてい
くでしょう、ね♪、と、もしも私が二人でも一緒だと思っ、

私が二人、じゃなくて、私がこの二人、でも。私が二人だったら、取り合いでケンカにし
かならない。二人で汐見と奈世さんを分け合うなんて、そんなの、すっごく失礼だし！、
私がすっごくいやだし！、嫌！だし！、ぞつと、ぞつとする！。私が二人なんて、すごく
やだ。でも私が、奈世さん。汐見。と、この二人なら、きつと一緒にになったわ。奈世さん
は、汐見を愛して、私も、汐見も、奈世さんをあい？する。私も。

まだちよつとていこーが（卜力）あるけど、でも好き。

これからもずっと一緒に居たいと奈世さんも一緒に汐見と思っ、あげるわ。だから感謝し

て、一緒に居て頂戴ね。

約束よ。あえぎ声は約束かしら。そうよね。約束、やくそくよ、奈世さん！。

あ、汐見はもう分かってるから♪。いつも、ね♪。

それを言うとは故か汐見が怒った。なんですよ。

汐見。奈世さん。どっちもそばにいない。やだ。ねむい。やだ。あさ？朝。起きた。汐見の白っぽいへやの、水色っぽいふわふわのうすいろブルーの、おふとん、ベッド、ブルーは夜空をおこして…なに。に？おこして？朝っぽい夜色のブルー？それか、いまきてるたぶん、今着てるやつぱり、ネグリジェ、私に似合っていない汐見の選んだネグリジェ、ふわふわのパールレースのネグリジェ。しんじゅのメレンゲをとかしてほどこしたみたいな、綿あめの糸からさらさら編み込み編み込み、ふわふわ、うすーくおこした？みたいな、それ、おこす、そんな感じにしている。ベッドの上で、ふわふわと寝巻を着ている。ふわふわ、べっどとねまきと、りょーほー…ねむい。あさ、おきる、とこ。はず、で、だから、おぼえてない夜の、ま、すきま、ねたあとのゆめのなとか、そんなまは覚えてぜんぜんないけど、間があるはず、覚えてない、セックスしか、現実しか…楽しみ（楽しさ）しか覚えてないけど、夢は見なかったか、あるいは覚えていないの、どっち？（どうでもいいか）今思った、どうでもいい楽しいし、セックス覚えているから、良い♪、の。凄く。良い。良い♪。良かった。歩いてる。うがい。バスルームの中。汐見のへやの、おへやのバスルームの中…、ひろい長方形の、へやの、カクッとふくらんだ正方形…いやこれも、ちよー方形の、多分、ひろいひろいバスルームのゆったりした中に、…正方形、だっけ？ぜんたい。まだねむいあたまがまわらない？、あたま、ぜんたい、じゃないけど、はつきりはしてきたから、そう、全体は見た目とおんなじ、正方形、はず！。

つかれた。

バスルーム、はいろいろ。

ひろい。ゆぶねがまるいしかつけーいのちよーほーけー□しかく、まるっぽいわくのうちがわとそとがわも…、ひろいゆぶね。汐見のへや、ひろい。ゆぶねはちかけ6メートル、くらい？、8・かけ、×（かける）。6メートル、くらいの、おつきいゆぶねに昨日最終的に入ったみんなで。三人でお風呂に入った。広いから、できた。長方形は、湯船のことだった。この部屋、バスルームは、しかく。しかくは正方形の意。意味の、意。キョーカシヨみたいな言い方。洗面所＋化粧品（防水？でしょうね）とか歯ブラシとか置いてる、洗顔料とか。洗面所だから、もちろん。全部そろってて、良いと思うわ。汐見。

汐見。横から、私がコップを借りるわ。借りて、水そそいで、うがいと歯ブラシを…、借りて、歯磨き粉、つけて、汐見は何にも言わない。そこどいて。汐見。ひじで押す。ちよ

つとどく。私は顔伏せて、水を吐き出して歯ブラシ、歯磨きを始めて、汐見、前髪から水がぼたぼた垂れてて、しずくで全部顔洗うのも終わったとを感じる。歯磨きの歯ブラシも最初っから濡れてた。そのまま、歯磨き粉を付けて磨けた。磨ける。今も。ごしごしやこしやこ、間接キッスね汐見。汐見。何にも言わない。勝手に借りてるのに、色々、歯ブラシとか何にも言わない。

「ねえ、」

と、汐見が言った。怖いわよ汐見！、何を言われるかと、分かんないわね、とか思っ
て、でも歯ブラシは当然（終わるまでは）返さないわ汐見。

汐見。

汐見は、何を言うの、汐見。

なんでも、ききたいわ、汐見。あなたの、汐見の言葉が聞きたい。

「いつも一緒だけど、いっしょにいるけど私は、素磨子は、私と素磨子のことよ、でも、特別なの。約束よ。素磨子。ずっと私とあなたはいっしょに、いるのよ。今までも、これから、ずっと。勝手だけど、これはもう、決めちゃったことなの。奈世さんとも言い合ったわ。ちよつとけんかになったわ。でも私は、かなり勝手にやるのよ。分かり切ったことだと、奈世さんはそう言ったけど、それは分かってるけど、でも私は、そう言いたかったのよ。素磨子。約束よ。素磨子。」

急いで磨き終わってうがいして水吐く、もいっつかいうがいして水吐く、すすぎ、歯磨き終わり、歯ブラシ洗って、そして今、コップ（汐見の！）洗いながら私は汐見に言った、

「奈世さんとケンカしたの！？汐見っ♪」

ああ、もう、私は超うれしい！やった♪

「素磨子、約束は？」、あ、汐見。ごめん。

ごめん汐見。

ミスった。

汐見が私のこと、信じられない、みたいにしている。

すごい泣きそうになってる、無表情で、泣きそう。

ごめん。

ごめん汐見。…ごめん。

「素磨子さん、汐見さんちよつと、うざいです。あんな抱きしめてです、ひとばん、プールで泳いで…、泳ぐのは少なかったけどベッドで、さんにん！、抱きしめ合って、ずっと、セックス、しといて！、一晚中ですよ！？、まだ！、汐見さん素磨子さん、に！、まだ言ってるんですかまだまだ、あ、そう、ごはんですあさごはん、できましたよ♪、御二人さん♪。」ドアを開けてすぐ奈世さんは言った。洗面所兼バスルーム（長方形）のドア。ばた

ン。すらすらすら。すっきりした朝もやの弓矢みたいな、しゅっとした飛ぶようなほんのりのことばで、ぐさぐさ突き刺すかんじに、言った。「あ、それと、」と、奈世さんはまた言い出した。「約束とか、あのときはどうでもいいと思います。だってあの時は私が言われていたのに、汐見さんがずーっとしてもらってることを、わざわざ、私に対して言うのは、すごくむかつくし、やめろ、と言いたかったですね。今言いましたが、でも、後悔はしていません♪。あの時は、私のお時間でしたよ。」「汐見、約束。今もずっとずっとだし、変わらないし、もっと良く、していくから。というか、セックスとかもずっと良かった。良かったから、良くなっていると思うの。どう？汐見。」「ええ。」「ちよっと、素磨子さん！？」汐見はすぐ頷いてから、ぼーっとして、またたきして、それから5秒？くらいして（ぼーっと）ぼんやりしたほほのいろで、言った。（奈世さんはガーン、となってたけど（多分）、無視した。）

「ええ、そう思う。幸せよ、素磨子。凄く、超幸せ。」

そうね汐見。（と、奈世さん。）私も、すごくそう、思うの。

END

